

# 大門西遺跡・大平遺跡

(第二東名 No.130・139 地点)

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

浜松市 - 1

2008

中日本高速道路株式会社 横浜支社

財團法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

# 大門西遺跡・大平遺跡

(第二東名 No.130・139 地点)

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

浜松市 - 1

2008

中日本高速道路株式会社 横浜支社

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所



堅穴住居 S-B 1002 出土土器

## 巻頭図版 2



浜松工区遠景（東から）

# 序

本書は、第二東名高速道路建設に伴って実施した、浜松市内の埋蔵文化財調査の記録および、大門西遺跡・大平遺跡の発掘調査報告書である。

浜松市北部の丘陵沿いには、古くから多くの古墳が分布する地域として知られている。その一方で、平地部については、これまで調査の機会が少なかったこともあり、遺跡の存否も含めて未解明な部分が多い。今回の発掘調査によって、平地部で新たに7つの遺跡が発見された、その意義は大きい。

平成8年度からおよそ10年間にわたり実施された発掘調査では、貴重な発見に至った遺跡も多い。とりわけ、100基以上の縄文時代の炉穴が密集して発見された中通遺跡や、静岡県西部地域では初の本格調査となった白鳳時代の瓦窯である篠場瓦窯、中世の祭祀遺構から呪符木簡とともに黒漆塗螺鈿鞍が出土した中屋遺跡などは、全国的にみても重要な成果が得られた遺跡としてあげができる。

今回報告する大門西遺跡では、竪穴住居と掘立柱建物を中心とする、古墳時代末から奈良時代にかけての集落が発見された。この遺跡では、建物の移り変わりや窓における祭祀行為などから、古代における人々の営みを知ることができる。集落遺跡の調査例が乏しいこの地域においては、貴重な資料となることであろう。

また、中世に集落が展開することが確認されたのも大きな成果といえる。隣接する中屋遺跡では、溝によって方形に区画された大規模な施設が検出されている。両遺跡の関係性が注目される。今後の調査・研究の進展によって、中世のこの地域の様相がより明確になっていくものと期待する。

発掘調査ならびに本書の作成にあたっては、中日本高速道路株式会社横浜支社、浜松市教育委員会、静岡県教育委員会等の関係機関各位、地元住民の方々から多大な御理解と御協力をいただいた。この場を借りて、心より御礼申し上げる。また、現地調査、資料整理に関わった調査員・作業員諸氏の労苦に対しても謝意を表す次第である。

平成20年3月

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所  
所長 斎藤 忠

## 例　言

1. 本書は、浜松市域（以下、浜松地区）における第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の總論と、下にあげた静岡県浜松市内の各遺跡の発掘調査報告書である。
  - 大門西遺跡（第二東名No.130地点）：浜松市浜北区根堅
  - 大平遺跡（第二東名No.139地点）：浜松市北区郡田町
2. 第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書の作成は、地区（市町村）単位にて実施している。浜松地区では本書が1冊目であるため、「第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書浜松市-1」とした。
3. 調査は、第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査として、中日本高速道路株式会社横浜支社（平成17年度途中まで日本道路公団静岡建設局）の委託を受けて、静岡県教育委員会文化課の指導のもと、財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施した。
4. 各遺跡の確認調査・本調査および資料整理の期間は、以下のとおりである。

大門西遺跡	確認調査	平成13年9月～平成14年1月
本調査		平成15年8月～平成16年2月（1区）
		平成15年7月～平成16年1月（2区）
		平成16年11月～12月（3区）
		平成17年4月～6月（4区）
		平成17年10月～3月（5区）
大平遺跡	確認調査	平成10年8月、平成12年4月～6月
本調査		平成12年9月～11月
資料整理・報告書作成		平成18年10月～平成20年3月
5. 調査体制は第1章に別記した。なお、本書に報告した遺跡の調査担当者は下記のとおりである。

大門西遺跡	確認調査	水野功太郎、佐野和道
本調査		佐野和道、筒井京（1区）
		水野功太郎、高見健司（2区）
		武田寛生（3区）
		高見健司、伊藤嘉孝（4・5区）
大平遺跡	確認調査	西田光男、梶葉良久、小川和彦
本調査		西田光男、梶葉良久
資料整理・報告書作成		武田寛生、足立順司、佐々木和也、藤井光広
6. 執筆は第1章第1節-1を及川司、第2章第3節-3（7）を足立順司、他を武田寛生が行った。
7. 各調査で実施した委託事項および委託先は、各章文中に記した。
8. 現地の写真撮影は各調査担当者が実施した。航空写真的撮影は委託したものである。遺物の写真撮影は、当研究所写真室が実施した。
9. 金属製遺物のクリーニング・保存処理は、当研究所保存処理室が実施した。
10. 本書の編集は、財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所があつた。
11. 浜松地区は、平成17年に局辺市町村と浜松市が合併し、平成19年には政令指定都市となって、7つの行政区が置かれている。本書では、第1章第1節-1を除き、平成20年3月現在の市区町名で記している。

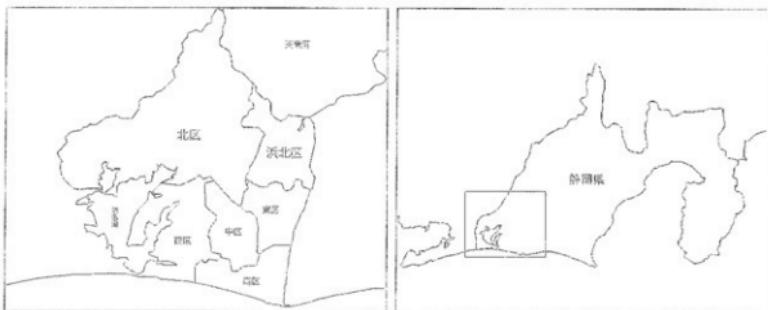
- 引用・参考文献については、各章の文本に記した。
- 周辺の地形図については、「国土地理院 二万五千分の一地形図（平成19年発行）」および、「浜松市 二千五百分の一地形図（平成3年発行）」を複写・加筆して使用した。
- 各調査の概要是、当研究所・他の刊行になる出版物で一部公表されているが、内容において本書と相違がある場合は本報告をもって訂正する。
- 発掘調査の資料は、すべて静岡県教育委員会が保管している。

## 凡　例

本書の記述については、以下の基準に従っている。

- 座標は平面直角座標標柵系を用いた国土座標・日本測地系（改正前）を使用している。
- グリッド（方眼）は、1の座標を用いて設定している。グリッドの一辺は10mとし、アルファベット（A～）と算用数字（1～）を用いて、その位置を表示している。東西方向が西から1・2…、南北方向が北からA・B…と設定している。
- 方位は1の座標による方位（座標北）を基準として表示している。
- 本書で使用した遺構種類の表示は次のとおりである。
 

S B : 穴住居	S D : 溝	S E : 井戸	S F : 土坑
S H : 捨立柱建物	S P・P : 柱穴・小穴	S X : その他の遺構	
- 遺構番号は、遺構種類ごとの番号としている。ただし、大門西遺跡については、現地調査の際に調査区ごとに1番から遺構番号が付与されていたため、本報告書では上一桁に調査区名を記した4桁の番号で表示している。
- 遺物番号は、挿図に掲載したものについて、種類・出土遺構・挿図の別に問わらず、遺跡ごとの通し番号を付している。
- 本書の図中に用いたスクリーントーン等の使い分けについては、必要なものを各図の中で表記している。



浜松市（浜北区・北区）の位置

# 目 次

## 卷頭図版 / 序 / 例言 / 凡例

## 第1章 総 論

第1節 調査に至る経過 .....	9	第3節 調査の成果 .....	45
1. 第二東名建設に伴う 埋蔵文化財の取り扱いの経緯 .....	9	1. 全体の概要 .....	45
2. 現地調査の体制 .....	11	2. 古代の遺構と遺物 .....	49
第2節 位置と環境 .....	12	3. 中・近世の遺構と遺物 .....	95
1. 地理的環境 .....	12	4. その他の遺構と遺物 .....	132
2. 歴史的環境 .....	14	第4節 まとめ .....	146
第3節 確認調査 .....	17	第3章 大平遺跡	
1. 確認調査の対象地点 .....	17	第1節 位置と環境 .....	153
2. 確認調査の方法と経過 .....	18	1. 位置と地理的環境 .....	153
3. 各地点の概要 .....	20	2. 歴史的環境と調査歴 .....	153
第4節 本調査 .....	34	第2節 調査の方法と経過 .....	154
1. 本調査の方法と経過 .....	34	1. 発掘調査の方法 .....	154
2. 本調査の概要 .....	35	2. 発掘調査の経過 .....	154
3. 資料整理の体制 .....	37	3. 資料整理の方法と経過 .....	154
第5節 資料整理 .....	37	第3節 調査の成果 .....	155
1. 資料整理の方法と経過 .....	38	1. 全体の概要 .....	155
2. 資料整理の方法と経過 .....	38	2. 遺構と遺物 .....	156
3. 確認調査出土遺物 .....	38	3. 確認調査出土遺物 .....	158
第2章 大門西遺跡		第4節 まとめ .....	166
第1節 位置と環境 .....	41	写真図版	
1. 位置と地理的環境 .....	41	抄録	
2. 歴史的環境と調査歴 .....	41		
第2節 調査の方法と経過 .....	42		
1. 発掘調査の方法 .....	42		
2. 発掘調査の経過 .....	43		
3. 資料整理の方法と経過 .....	44		

## 挿図目次

総論			
第1図 浜北区周辺の地質	13	第38図 SH1002 実測図	67
第2図 浜松地区周辺の遺跡	16	第39図 SH1003 実測図・出土遺物	69
第3図 №129・130 地点巨角 調査対象範囲	22	第40図 SH1004 灰洞図・出土遺物	70
第4図 №130 地点東側 調査対象範囲	22	第41図 SH1005 灰洞図	71
第5図 №131・132 地点 調査対象範囲	25	第42図 SH1007 実測図	72
第6図 №133・134 地点 調査対象範囲	27	第43図 SH1008 実測図	73
第7図 S X 01 実測図	28	第44図 SH1009 実測図	74
第8図 S X 02 実測図	29	第45図 古代の道構配図（2区）	75
第9図 №134 地点出土遺物	29	第46図 SH12005 実測図・出土遺物	76
第10図 №135 地点 調査対象範囲	30	第47図 SH2006 実測図・出土遺物	77
第11図 №136・137 地点 調査対象範囲	31	第48図 SH5010 灰洞図	78
第12図 №139 地点 調査対象範囲	32	第49図 小穴出土遺物	79
第13図 浜松工区 各地点位置図	33	第50図 SF1001 実測図・出土遺物	80
大門西遺跡		第51図 SF1002 出土遺物	81
第14図 大門西遺跡と周辺の遺跡	41	第52図 SF1002 実測図	81
第15図 道構配図（調査区西側）	46	第53図 SF1003・1004 灰洞図	81
第16図 連構配図（調査区東側）	47	第54図 古代土坑火薙洞（1区）	83
第17図 商古区地形図・区割り図	48	第55図 SF1020 実測図	84
第18図 古代の煮喰配図（1区）	49	第56図 SF1020 出土遺物	85
第19図 SB1001 実測図・出土遺物	50	第57図 SF2020 実測図・出土遺物	86
第20図 SB1002 実測図	51	第58図 古代土坑火薙洞（2区）	87
第21図 SB1002 遺物出土状況（カマド附近）	52	第59図 古代土坑火薙洞（4区）	87
第22図 SB1002 烤穴・床面出土遺物（カマド附近）	53	第60図 SE1001 実測図・出土遺物	88
第23図 SB1002 遺物出土状況図（北西部）	54	第61図 SD2005 実測図・出土遺物	89
第24図 SE1002 床面出土遺物（北西部）	54	第62図 上層集中範囲図（SX1001）	90
第25図 SB1002 墓土出土遺物	55	第63図 SX1001 出土遺物	91
第26図 SB1002 硝認調査出土遺物	56	第64図 SX3001 実測図・出土遺物	92
第27図 SB1003 実測図	57	第65図 包含層出土遺物	93
第28図 SB1004 実測図	58	第66図 横乱出土遺物	94
第29図 SB1003・1004・SP1307 出土遺物	59	第67図 中・近世の道構配図（1区）	95
第30図 SB1005 実測図	59	第68図 SH1006 実測図・出土遺物	96
第31図 SB2001 灰洞図	60	第69図 SH1010 実測図	97
第32図 SB2001 出土遺物	61	第70図 中・近世の道構配図（4区）	98
第33図 SB2002 実測図	62	第71図 SI4002 実測図	99
第34図 SB2002 遺物出土状況図	63	第72図 SH5001 実測図・出土遺物	100
第35図 SB2002 床面出土遺物	64	第73図 中・近世の道構配図（5区）	101
第36図 SB2002 墓土出土遺物	65	第74図 SH5002 実測図・出土遺物	102
第37図 SH1001 灰洞図	66	第75図 SH5004 灰洞図	103

第 79 図	SE5009 出土遺物	108
第 80 図	小穴出土遺物（中・近世）	108
第 81 図	SF1007 実測図・出土遺物	109
第 82 図	SF1015 実測図・出土遺物	110
第 83 図	SF4005 実測図・出土遺物	111
第 84 図	SF4007 実測図・出土遺物	111
第 85 図	SF5001 実測図	112
第 86 図	SF5003 実測図・出土遺物	112
第 87 図	SF5006, 5010 実測図・出土遺物	113
第 88 図	中・近世十坑実測図	114
第 89 図	SF5016 実測図・出土遺物	115
第 90 図	SF5017 実測図・出土遺物	116
第 91 図	SF5021 実測図・出土遺物	117
第 92 図	SE2001 実測図・出土遺物	118
第 93 図	SE4001 出土遺物	119
第 94 図	SE4001, 5001 実測図・出土遺物	120
第 95 図	SE5002 実測図・出土遺物	121
第 96 図	中・近世の遺構配置図（2区）	122
第 97 図	SD2002 出土遺物	122
第 98 図	SD4001, 4004 出土遺物	123
第 99 図	SX2014 実測図・出土遺物	124
第 100 図	SX2014 出土錢貨拓影	125
第 101 図	包含層出土遺物（中・近世1）	126
第 102 図	包含層出土遺物（中・近世2）	127
第 103 図	擾乱出土遺物（中・近世1）	128
第 104 図	擾乱出土遺物（中・近世2）	129
第 105 図	擾乱出土遺物（中・近世3）	130
第 106 図	擾乱出土遺物（中・近世4）	131
第 107 図	石磬実測図	132
第 108 図	SH2001 実測図	133
第 109 図	遺構配置図（2区）	134
第 110 図	遺構配置図（5区）	134
第 111 図	SH2002 実測図	135
第 112 図	SH2003 実測図	136
第 113 図	SE2004 実測図	137
第 114 図	SE4001 実測図	138
第 115 図	SH5005 実測図	139
第 116 図	SH5006 実測図	140
第 117 図	SH5011 実測図	141
第 118 図	孤立柱跡物の主軸方位	146
第 119 図	カマド内の遺物出土状況例	147
第 120 図	大門西遺跡遺構配置図（古代）	148
第 121 図	大西遺跡遺構配置図（中古）	149

## 挿表目次

第 1 表	確認調査・本調査の体制	11
第 2 表	確認調査実施周回	19
第 3 表	本調査実施期間	34
第 4 表	資料整理の作製	37
第 5 表	SX2014 出土錢貨一覧表	125
第 6 表	遺物一覧表（1）	142
第 7 表	遺物一覧表（2）	143
第 8 表	遺物一覧表（3）	144
第 9 表	遺物一覧表（4）	145
第 10 表	カマド内からの遺物出土上例	147
第 11 表	出土錢貨・土器一覧表	165

## 挿写真目次

写真 1	中通遺跡	35
写真 2	鑿湯瓦窯	35
写真 3	中屋遺跡	36
写真 4	現地調査・資料整理作業	38
写真 5	現地調査	42
写真 6	現地説明会	42
写真 7	整理作業	44
写真 8	現地調査	155

# 第1章 総論

## 第1節 調査に至る経過

### 1. 第二東名建設に伴う埋蔵文化財の取り扱いの経緯

混雑化する東名・名神高速道路の抜本的な対策として、昭和62年の道路審議会において第二東名・第二名神の建設が建議された。その後、第四次全国総合開発計画の閣議決定、国土開発幹線自動車道建設法の一部改正等を経て、平成元年1月に閣議された第28回国土開発幹線自動車道建設審議会において、飛島村～神戸市間の第二名神とともに、横浜から東京市に至る延長約270kmの第二東名高速道路の基本計画が策定された。静岡県内においては、東西に貫く形となり、その延長は約170kmである。この基本計画策定を受けて静岡県は、平成元年12月、第二東名建設推進庁内連絡会議を設置したが、教育委員会文化課もメンバーとして協議に参加した。

その後、第二東名の基本計画については、文化財を含む環境影響調査等が行われ、他の公共事業や地域開発計画との調整を図った上、平成3年9月24日には静岡県内長泉町～引佐町間の都市計画決定告示がなされた。

こうした環境影響調査と並行する形で、埋蔵文化財の分布状況の把握作業もなされている。第二東名建設に関する調査の指示を受けた日本道路公団は、平成4年2月17日付で文化庁へ通知を行うとともに、平成4年5月11日付で、日本道路公団東京第一建設局長から静岡県教育委員会教育長あてに、長泉町～引佐町間の埋蔵文化財分布調査、その手続きの依頼を行った。また、平成4年8月27日付で日本道路公団東京第一建設局長から静岡県教育委員会教育長あてに、「第二東海自動車道の埋蔵文化財包括地の所在の有無について」の照会がなされている。これを受けた県教育委員会は、平成4年9月29日に関係市町村教育委員会を集めて、第二東名路線内の埋蔵文化財調査連絡会を開催するとともに、第二東名路線内における埋蔵文化財の所在についての照会を行った。踏査結果については、各市町村教育委員会からの回答を基に協議を行い、県教育委員会が取りまとめたものを平成5年3月18日付で、静岡県教育委員会教育長から日本道路公団東京第一建設局静岡調査専務所長あてに回答がなされている。この時点での調査対象箇所は136箇所、調査対象面積が1,453,518m<sup>2</sup>となっている。

その後、長泉町～引佐町間については、平成5年11月19日付で日本道路公団に施行命令が出された。これに伴い、日本道路公団東京第一建設局および静岡県土木部高速道路建設課、静岡県教育委員会文化課で、埋蔵文化財調査の進め方について協議が行われた。調査対象範囲の確定、個々の遺跡の取り扱い等について協議されるとともに、発掘調査の実施については日本道路公団が財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所へ委託を行うことが確認されている。しかしながら、第二東名建設に伴う埋蔵文化財調査については、短期間に膨大な調査量が想定され、そのための調査体制をどのように確保していくかが、大きな課題となつた。

さらに平成6年には、県教育委員会文化課職員が上記の調査対象箇所について、具体的な調査を進めるための状況調査を行うとともに、前年示されたパーキングエリア・サービスエリア予定地についての踏査を当該市町村教育委員会に依頼、年度末にはその報告・取りまとめがなされている。こうした状況調査やあらたな踏査結果を基に見直しがなされた結果、この段階での調査対象地点は133箇所、調査対象面積は1,286,756m<sup>2</sup>となっている。

平成7年度後半には、路線の一部では幅杭の打設が開始されており、埋蔵文化財の調査の開始についてもかなり見通しができてきた。こうした状況の中で、第二東名建設に係る埋蔵文化財の取り扱いを協議する場として、日本道路公団静岡建設所（平成6年2月設置）と県教育委員会文化課による「第二東名

関連埋蔵文化財調査調整会議」が設置され、第1回の協議が平成7年12月13日に行われている。これ以降、細かい埋蔵文化財の取り扱いについては、この会議において協議していくこととなった。なお、日本道路公团静岡建設所は平成8年7月1日をもって、日本道路公团静岡建設局に改組している。

平成8年度には、第二東名建設に係る埋蔵文化財の調査の実施が具体化し、日本道路公团静岡建設局と静岡県教育委員会は、平成8年9月24日付で第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財の取り扱いについての確認書を締結した。さらに調査実施機関である財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所を入れた三者は、平成8年9月25日付で第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査実施方法等について定めた協定書を締結し、平成8年度内に一部埋蔵文化財の調査に着手していくこととなった。年度後半には、掛川市真木のNo.94地点、浜北市大平のNo.136地点、同市四大地のNo.137地点の確認調査が実施されている。その後、平成9年度からは、発掘調査も本格化し、県内各地において確認調査から順次着手していった。

一方、長泉町～御殿場市間についても日本道路公团に対し、平成9年1月31日付で建設に係る調査開始指示が出され、さらに平成9年12月25日付で施行命令が出されている。この区間については、建設省の依頼により、平成6年度後半に踏査が行われ、調査対象地点のリストアップが行われていたが、調査開始指示を受けて、再度平成10年9月2日日本道路公团静岡建設局長より静岡県教育委員会教育長あてに「埋蔵文化財包蔵地の所在の有無について」の照会がなされている。これを受けて、県教育委員会文化課は関係する市町村教育委員会に平成10年9月25日付で再踏査の依頼をするとともに、10月2日には踏査の実施に関する打ち合わせ会を行った。11月上旬には、長泉町・裾野市・御殿場市教育委員会から踏査結果についての報告がなされたが、県教育委員会文化課はそれを取りまとめ、平成10年12月17日付で県教育長から日本道路公团静岡建設局長あての回答を行った。この区間で埋蔵文化財調査の対象となった箇所は21地点、調査対象面積は108,734 m<sup>2</sup>であった。関係者協議の結果、これらの調査対象地点についても、財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が調査を実施することとし、平成11年3月5日付で協定変更を行っている。

なお、第二東名に係る埋蔵文化財の調査は、関係者協議の結果、基本的には本線及びサービスエリア・パークリングエリア、排水処理場について財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が調査を実施、工事用道路及び取付道路部分については、当該市町村教育委員会が対応することとしたが、調査の進展に伴う調査量の増大に財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所の調査体制が追いつかず、本線部分の一部について、沼津市や静岡市、浜北市、富士宮市、裾野市、富士市の教育委員会に対応してもらうとともに、特に東部地域を中心に、民間の発掘調査支援機関の導入を図った。

こうした経過の中で、浜松市における第二東名建設に伴う埋蔵文化財調査について、最終的には後述する12地点を対象にした。発掘調査の実施については、財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所があたることとし、用地買収が進み、一部調査実施が可能となった平成8年度に、No.136地点、No.137地点の確認調査から開始した。

## 2. 現地調査の体制

浜松市域の確認調査および本調査（以下、現地調査）は、平成8～17年度に実施した。その体制は、第1表のとおりである。

第二東名建設に伴う埋蔵文化財調査（以下、本事業）においては、平成11～13年度では本事業担当の課を設けて対応した。さらに、日本道路公団静岡建設局各工事事務所の範囲に合わせて工区を設定し、数多くの調査に工区単位で対応した。なお、浜松市域は浜松工区に相当する。

浜松工区の担当は、平成10年度までは森町一宮に設置した森現地事務所を拠点に、平成11年度からは浜松市浜北区尾野に設置した浜北現地事務所を拠点として、各現地調査を実施した。なお、各遺跡の調査担当者については、各報告書の例言にあげることとする。

また、現地調査を優先するという方針から、資料整理は多くの現地調査が終了した段階で実施することとなった。ただし、基礎的な整理作業（各種台帳作成、写真の整理・収納、図面の修正・整理・収納、出土遺物の注記・接合・復元・収納、遺構所見・遺跡概要の整理）については、浜北現地事務所にて、現地調査と並行して実施した（以下、基礎整理）。

各現地調査・基礎整理には、第1表以外にも多くの者が参加した。

第1表 確認調査・本調査の体制

	平成8年度	平成10年度	平成11年度	平成12年度	平成13年度	平成14年度	平成15年度	平成16年度	平成17年度
所長	斎藤 忠	斎藤 忠	斎藤 忠	斎藤 忠	斎藤 忠	斎藤 忠	斎藤 忠	斎藤 忠	斎藤 忠
副所長	池谷和三		山下 駿	山下 駿	山下 駿	飯田英夫	飯田英夫	飯田英夫	
常務理事 委嘱幹部員	三田村昌昭	伊藤友哉	伊藤友哉	伊藤友哉	森山惣幸	森田裕幸	森田裕幸	平松公夫	平松公夫
次長							鶴田英巳	鶴田英巳	鶴木大二郎
総務課長	加藤野英治	杉本敏雄	杉本敏雄	杉本敏雄	杉本敏雄	本村昭一	鶴田英巳	鶴木大二郎	
紀述専門員	鈴木保幸	鈴木保幸	鈴木保幸	鈴木保幸	鈴木保幸	鈴木保幸	鈴木保幸	鈴木保幸	鈴木保幸
総務係長		田中雅代							
会計係長		鈴川 哲							
商主任	鈴田 哲			鈴木秀幸	鈴木秀幸			中野京子	中野京子
主事			鈴木秀幸			鈴木秋博	鈴木秋博		
部長	石垣英夫	石原英夫	佐藤透夫	佐藤透夫	山本昇平	山本昇平	山本昇平	石川泰久	
次長	栗野克巳	佐野五十三	及川 司	桑野京巳	栗野克巳	栗野克巳	桑野克巳	栗野克巳	
次長心得					及川 司	中崎部夫	中崎部夫	中崎部夫	中崎部夫
担当課長	渡辺 治	遠藤喜和	及川 司	及川 司	足立順司	足立順司	中崎部夫	中崎部夫	
工区主任			西田光男	加藤謙文					
主任調査研究員		平野 雄			小川徹也				
調査研究員	遠藤喜和 丸杉俊一郎	渡辺喜久 木村道陽	西田光男 徳澤直久 佐藤 浩	小川徹也 水野功太郎 水野功太郎 佐野和道 徳澤直久 武川寛生	水野功太郎 水野功太郎 水野功太郎 佐野和道 徳澤直久 武川寛生	水野功太郎 水野功太郎 水野功太郎 佐野和道 徳澤直久 武川寛生	高見健司 佐野和道 水野功太郎 佐野和道 徳澤直久 武川寛生	高見健司 白鳥誠樹 水野功太郎 中村智之 中谷哲也 井上 京 伊藤延子	高見健司 白鳥誠樹 水野功太郎 佐野和道 徳澤直久 武川寛生 井上 京 伊藤延子

## 第2節 位置と環境

### 1. 地理的環境

浜松市は静岡県西部に位置し、東は天竜川を挟んで磐田市と、西は浜名湖西岸の新居町・湖西市と接している。平成17年の合併により、浜松市・浜北市・天竜市の3市と、水窪町・佐久間町・春野町・引佐町・細江町・三ヶ日町・雄踏町・舞阪町の8町、龍山村の1村が一つとなり、現在は浜松市となっている。平成19年には政令指定都市となり、現在では7つの行政区（中区・東区・西区・南区・北区・浜北区・天竜区）が置かれている。浜松市は、総面積は1511.17 km<sup>2</sup>で、東西52 km、南北73 kmもの広大な範囲に及ぶ。その中で、第二東名高速の発掘調査対象地は、浜北区及び北区の丘陵沿いに集中する。したがって、ここでは、浜北区から北区にかけての丘陵沿いの地域を中心に、地理的環境をみていくことにする。

地形としては、山地および丘陵と、三方原台地、河岸段丘、沖積平野に大別される（第1図）。

北部は、赤石山脈の南端にある標高200～300 m程の山地となっている。山地の南側には、標高100～200 m程の丘陵が連なる。丘陵では、開拓が進行しており、掌状に伸びる小尾根がいくつも形成されている。山地は、約2億5千万年前の古生代にできた、砂岩やチャート、石灰岩などからなる。丘陵の一部は、約5～15万年前の砂礫やシルトからなっており、浜北区の根堅周辺の地域には石灰岩地帯も確認される。主に山林として利用されている。

浜北区の西部から北区にかけては、三方原台地が広がる。三方原台地は、かつては、天竜川を挟んで東側の磐田原台地となっていたが、地殻変動によって隆起した後、天竜川による浸食によって2つに分離された。形成されたのは、約10万年前のリス・ヴェルム層水期とみられる。台地上は標高100 m程の平坦面が広がり、全体は南西方向に傾斜している。天竜川によって運ばれた漂質を中心とする第四紀層が厚く堆積しており、その上に赤褐色～橙褐色の土壤が覆っている。台地の南部は、市街地となっている。北部では、都田テクノポリスなど開発も進んでいるが、多くは果樹園として利用されてきた。

河岸段丘は天竜川によって三方原台地の東方に形成された段丘で、上位と中位、下位の段丘とに分けられる。

上位段丘は富岡段丘と呼ばれ、約3万年前に形成されたとみられている。標高50～60 m程で、砂礫層からなり、その上を赤褐色～橙褐色の細粒土質が覆っている。浜北区平口付近から、三方原台地に沿って南へ広がっており、一部根堅にも確認される。茶畠や果樹園に利用されている。

中位段丘は姥ヶ谷段丘と呼ばれ、約2万3千年前に堆積したとされる。標高は50 m程で、砂礫層からなり、表層は赤褐色～黄褐色の土層に覆われている。下位段丘とは、10～30 m程の比高差があり、その間には段丘崖もみられる。上位段丘と同様に、根堅に一部見られる他、宮口から内野付近にかけての地域に、三方原台地に沿って広がっている。多くが果樹園や茶畠として利用されている。

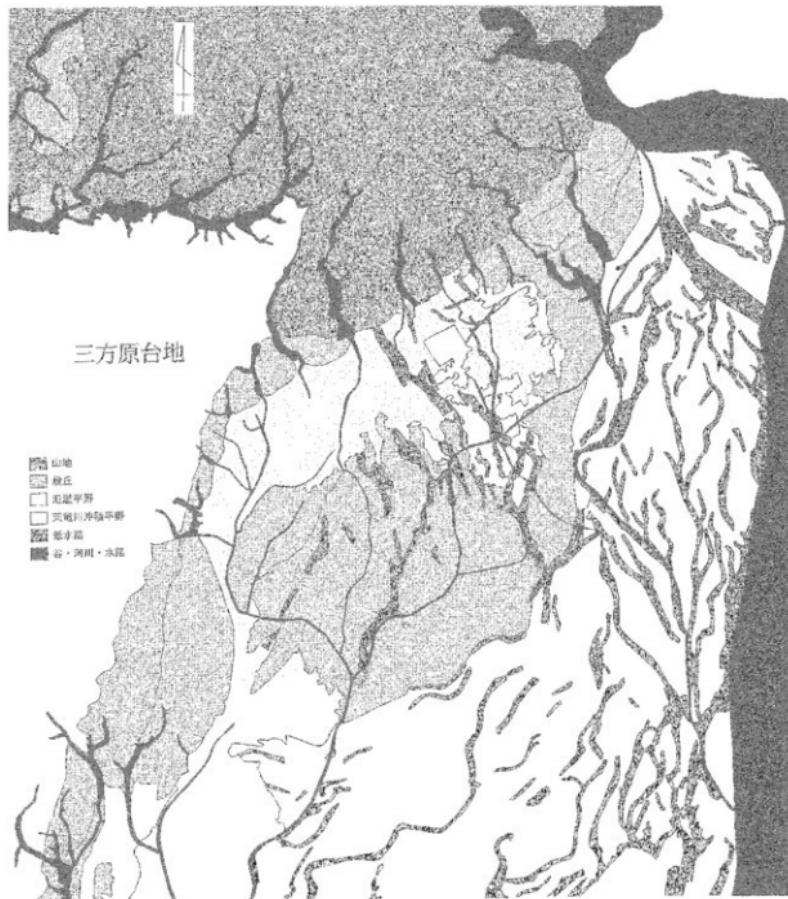
下位段丘は浜北段丘と呼ばれ、腹島付近から平口にかけて広範囲にみられる。約1万2千年前に堆積したとされる。標高は15～45 mで、南京方向に緩やかに傾斜している。沖積平野とは、大きいところで数メートルの比高差があり、段丘崖もみられる。砂礫層からなり、その上を黒色土や赤褐色土、粘土などが覆っている。特に「黒ボク」と呼ばれる黒色土は、浜北段丘の大部分で最上層に認められる。果樹園や畠地として利用されており、近年では宅地化が進んでいる。

下位段丘の東側には、天竜川によって形成された沖積平野が広がっている。天竜川が運搬した砂や礫によって形成されており、その範囲は上島から中瀬、貴布祢、小松など、市街地の大部分に及んでいる。平野には、網目状に広がる低水路（旧河道）が認められ、かつて小河川が入り組むように流れていた様

子がうかがえる。緩やかな傾斜の平坦地で、主に畠地や宅地として利用されている。

また、根堅から内野にかけては、氾濫平野も確認される。北部の山地や三方原台地から流れ出た小河川によって形成された低湿地で、大部分がシルトや粘土からなる。排水が悪い地域で、主に水田として利用されている。

浜北区北部の段丘上には、丘陵に沿って東西に国道362号線が、浜北段丘の縁辺には南北に国道152号線が通り、根堅で合流して天竜川を渡る。この地域は、天竜川西岸における南北・東西交通の要所の一つとなっている。



第1図 浜松地区周辺の地質

## 2. 歴史的環境

ここでは、浜北区から北区にかけての北部地域を中心に概観する（第2図）。

### 旧石器時代

旧石器時代の遺跡は、大堀川東岸の磐田原台地に比べて少ない。浜北区板堅の丘陵地に所在する根堅遺跡（27）では、人骨や動物化石が発見されている。昭和35年に石灰採石場で多くの動物化石が発見され、昭和37年と38年には東京大学によって調査が実施されている。遺跡は石灰岩の割れ目にできた洞窟で、堆積層がI層からIV層に分けられている。人骨が発見されたのはII層とIII層で、II層のものを上層人、III層のものを下層人として報告されている。動物化石としては、II層で哺乳類5種と鳥類1種が、III層で哺乳類5種と両生類1種、は虫類1種、鳥類1種が発見されている。石器などの遺物は、採集されていない。近年、放射性炭素年代の測定が行われ、上層人骨が約13900 BP～14200 BP、下層人骨が約17900 BPという結果が得られている。梶池遺跡（55）では、ナイフ形石器や紅石刃、石核などが発見されている。浜北区宮口の段丘上に位置しており、平成9年に浜北市教育委員会によって発掘調査が行われている。ただし、遺跡の中心は縄文時代中期であり、旧石器時代の遺物は少量出土した程度である。

### 縄文時代

遺跡のはほとんどは中期以降であり、前期までの様子については不明な点が多い。早期と推測される繩文土器が、大屋敷遺跡で採集されているのみである。中期以降の主な遺跡としては、富岡大谷遺跡（62）や梶池遺跡（55）、染ぬき石遺跡、大屋敷遺跡（53）、北谷遺跡（25）などがあげられる。いずれも、三方原台地上か中位段丘上に立地している。梶池遺跡（55）では、竪穴住居が1軒検出され、中期初頭の土器が出土している。大屋敷遺跡（53）では、遺構は明瞭ではないものの、中期初頭から後・晚期の土器が出土している。北谷遺跡（25）では、中期中葉から後・晚期の土器が出土している。遺構は明確ではないが、未製品を含め多量の石器が採集されていることから、石器製作遺跡であった可能性が指摘されている。富岡大谷遺跡（62）では、竪穴住居が5軒、染ぬき石遺跡では竪穴住居が1軒検出されており、いずれも中期後半の土器が出土している。

### 弥生時代

前期については、北谷遺跡（25）や芝本遺跡（31）などで土器片が出土しているのみであり、明確でない。中期から後期にかけては、低位段丘の東側の芝本遺跡（31）や東原遺跡（32）で集落が営まれる。芝本遺跡（31）は、昭和39年から数次にわたって、発掘調査が行われている。竪穴住居が11軒検出されている他、方形周溝墓や土器棺墓なども発見されている。主に中期から後期にかけての土器が出土している。東原遺跡（32）は、芝本遺跡の南に隣接する。昭和40年から、32次にわたって発掘調査が行われている。合計140軒以上の竪穴住居、方形周溝墓や土器棺墓も発見されている。遺物としては、後期中葉から後葉のものが主体を占めている。芝本遺跡を含めて、約140000 m<sup>2</sup>にもおよぶ、弥生後期の大集落が存在すると推測されている。

### 古墳時代

古墳時代には、丘陵や三方原台地に多くの古墳が築造される。前期に古墳がつくられるのは、赤門上古墳や権現平山7号など、三方原台地の縁辺部である。中期には、古墳の数が増加し、三方原台地縁辺では、権現平山古墳群や神明社上古墳群、観音ツブラ古墳群、辻田平古墳群など多くの古墳が築造され、

古墳群を形成する。さらに、雲岩寺B I号墳（30）や御馬ヶ池2号墳（21）など、北部の丘陵や段丘上にも古墳が認められるようになる。後期になると、北部の丘陵や段丘で、築造される古墳の数が急増する。その大半が、主体部に横穴式石室をもつ小型の円墳で、一帯には向山古墳群（17・20）や勝栗山古墳群（22・24）、泉古墳群（26・28）、雲岩寺古墳群（8・29・30）、高根山古墳群（9・35・36）、大黒藪古墳群（37～39）など、数多くの古墳群が形成される。

このように、多くの古墳が確認されるにもかかわらず、それ以外の遺跡については、調査例も少なく、不明な点が多い。集落は、低位段丘上に立地する東原遺跡（32）で認められる程度である。東原遺跡では、堅穴住居が4軒、掘立柱建物が2棟発見されている。いずれも、古墳時代後期の遺構とみられている。

## 古代

律令制下において、浜北区北部地域は遠江国龜玉郡、北区北部は引佐郡に属すると推定される。昭和31年に他町村と合併する以前、浜北区根塗周辺には赤佐村が存在した。字名としては失われているが、自治会名や学校名などに、現在でも「赤佐」の名称が用いられている。これらのことから、根塗周辺の流域は、『倭名類従抄』にみられる龜玉郡4郷のうちの、「赤狹」郷にあたると推測される。北区北部の三方原台地上は、「都田」の町名がみられることから、『倭名類従抄』に記載される引佐郡の「京田」郷に比定される。

遺跡としては、北部の丘陵や台地・段丘の縁辺に、多くの窯業遺跡が確認されている。吉名古窯跡群（45）では、現在までに9基の窯跡の存在が確認されており、3基について発掘調査が実施されている。9～10世紀に操業した灰釉陶器の窯跡で、鏡や瓦なども生産されている。大屋敷古窯跡群（40）では、6基の窯跡の存在が確認されている。このうち2基については、発掘調査が実施されており、10～11世紀に操業した灰釉陶器の窯跡であることが明らかとなっている。これらの他にも、平安時代の窯跡が4ヶ所で確認されており、窯業生産が盛んに行われた地域であることを示している。

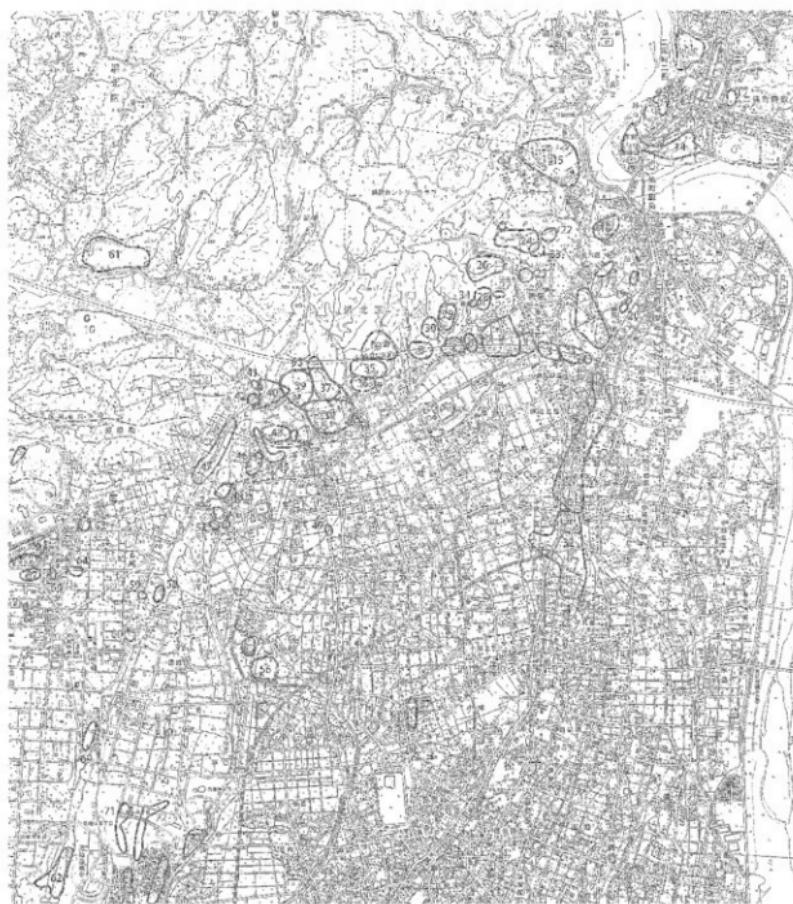
集落遺跡については調査例が少なく、低位段丘上の向山I遺跡（18）や東原遺跡（32）で、いくつかの遺構が確認されている程度である。向山I遺跡（18）では、奈良時代の堅穴住居が3軒と平安時代の溝が1条発見されている。東原遺跡（32）では、奈良時代前半から中葉までの堅穴住居10軒や土坑、溝などが検出されている。その他、古代の遺物が出土している遺跡はあるものの、明確な遺構は認められていない。

## 中世以降

中世には、根塗から宮口にかけての丘陵に、多くの中世墳墓群が築かれる。中でも勝栗山墳墓群（33）は、江戸時代からその存在が知られており、久安二（1146）年銘の陶製五輪塔形経筒外容器が出土したと伝えられている。昭和30から40年代にかけて開墾が行われた際には、多数の石塔や磁骨器、蓬莱鏡などが発見されている。採取された遺物などから、12世紀から17世紀にかけて造営されたと推測されている。泉墳墓群（34）では、刷毛が方形に区画された集石墓が発見されている。大屋敷墳墓群（54）でも、同様の集石墓が発見されている。中心部に主体部をもち、上部に石塔が建てられている。

浜北区大平の丘陵には、大平城址（61）が所在する。文獻では、南朝方であった井伊氏の支城であったとされる。しかし、現況では戰国期の城の姿しかうかがうことはできない。中世前期には山岳寺院が存在し、南北朝期には、それをそのまま城として利用していたとする見解も示されている。

集落としては、根塗の北谷遺跡（25）で、中～近世の小穴や土器などが発見されている。他には、東原遺跡（32）で中～近世の遺構や遺物が検出されている程度であり、中世以降においても、集落についてはほとんど明らかになっていない状況にある。



1 大円西遺跡	12 二俣城	25 北谷遺跡	37 大星城A古墳群	49 野上南遺跡	61 大平城跡
2 中原遺跡	14 鳥羽山城	26 京A古墳群	38 大尾城B古墳群	50 十取II遺跡	62 鹿西大谷遺跡
3 上海十遺跡	15 百々宮遺跡	27 桐原遺跡	39 大星城C古墳群	51 上原I遺跡	63 沢上A古墳群
4 笠塚瓦窯	16 向野塗跡	28 京B古墳群	40 大屋敷古窯跡群	52 十取遺跡	64 沢上B古墳群
5 泰佐中学校内遺跡	17 向山A古墳群	29 善寺A古墳群	41 北星城A古墳群	53 大庭赤道跡	65 沢上Ⅲ遺跡
6 寺海上遺跡	18 向山I遺跡	30 善寺B古墳群	42 北星城B古墳群	54 人形埴輪墓群	66 沢上I遺跡
7 千通遺跡	19 向山II遺跡	31 芝本遺跡	43 新星遺跡	55 指池遺跡	67 沢上II遺跡
8 善寺寺C古墳群	20 向山B古墳群	32 水原遺跡	44 新星古墳群	56 男池遺跡	68 白附I遺跡
9 高根山A古墳群	21 御馬ヶ池古墳群	33 勝原山植墓群	45 吉名古窯跡群	57 新原古墳群	69 銀ヶ谷古墳群
10 大平遺跡	22 蒜栗山A古墳群	34 皋暮墓群	46 鶴来I遺跡	58 佐施古墳群	70 山林遺跡
11 鮎原寺	23 勝栗山I遺跡	35 高根山B古墳群	47 鶴来古窯跡群	59 志野古墳群	71 二本ヶ谷古墳群
12 見沙門遺跡	24 勝栗山II古墳群	36 高根山C古墳群	48 鶴来II遺跡	60 志野遺跡	72 二本ヶ谷積石塚

第2図 浜松地区周辺の遺跡（1:50,000）

## 第3節 確認調査

### 1. 確認調査の対象地点

#### (1) 位置と現況

第二東名の路線は、浜松市浜北区の北部をほぼ東西に横断する。浜松市域での路線は9.1kmを測り、インターチェンジ、サービスエリアがそれぞれ1ヶ所建設される予定である。

東側は、天竜川が形成した沖積平野であり、平坦な地形が続く。沖積平野の西側は、段丘となっており、段丘上には平原地が広がっている。平野部との比高差は5mあり、段丘の縁辺には段丘崖がみられる。北側は標高200mほどの丘陵で、熊手状にいくつもの小尾根が延伸している。路線は、平野や段丘、丘陵地を横断して、三方原台地へ至る。三方原台地を抜けると、山地に入していくことになる。

平野部や段丘上は、水田や畑地などの他、宅地や工場も建設されている。水田や畑地については、若干の削平は想定されたが、ほぼ本来の地形が保たれているものと推測された。宅地については、多少の造成は行われているものの、地形を大きく損なうものではないとみられたが、大規模な工場については、地盤の改良や地下深くへの基礎の打ち込み等が行われ、土地が大幅に変更されていることが予想された。

丘陵地や山地の多くは、山林となっている。山林については、段々畠が確認される程度で、大規模な開発はみられなかった。ただし、石灰岩の採掘が行われた場所や送電線の鉄塔など、一部については大規模な開発が行われていた場所も存在した。また、丘陵間の谷部については、多くの場所が池となっており、大幅な土地の変容が認められた。

三方原台地上は、畑地や果樹園に利用されているところが多い。元米、砂礫層のやせた土地であるため、土の入れ替えや攪拌等、大規模な土地の造成が行われた可能性が高いとみられた。

#### (2) 対象地点の選定

第二東名路線建設予定地を中心とする工事範囲において、確認調査を必要とする対象地点とその範囲が選定された。この作業は、静岡県教育委員会の指導のもと、浜松市教育委員会及び、浜北市教育委員会が行った。その後、路線範囲の変更、側道やサービスエリアなどの本線以外の工事範囲の確定、さらに遺跡所在の再確認によって、対象地点範囲の変更や新たな対象地点の追加が行われた。最終的に、浜松市域では、本線およびサービスエリア建設範囲内で10箇所、工事用道路建設範囲内で2箇所の対象地点が選定された。

第2表に浜松市域内の対象地点を示した。この内、周辺の発掘調査や分布調査などによって、周知の遺跡となっていたのは、5地点である。その他の7地点については、周知の遺跡を含まないが、踏査や周辺環境等の検討の結果、遺跡の存否を含めて確認調査を行う必要があるとされた場所である。

前節で述べたように、浜北区では、丘陵地には古墳や窓跡、中世墳墓など、多くの遺跡の存在が知られ、段丘上では大規模な集落遺跡が発見されている。よって、周知の遺跡となっていない場所についても、丘陵や段丘上の場合は確認調査の対象地点とした。

## 2. 確認調査の方法と経過

### (1) 調査の方法

現地確認調査の開始にあたり、まず作業上の安全を確保するため、草刈りや採石の設置等の作業を行った。続いて、駐車場や作業員棟を設けた。作業員棟は現地の状況に合わせて、プレハブやコンテナハウス、テントのいずれかを設置した。次に、調査対象範囲をもとに確認調査区の設定を行った。その際、痕跡の有無はもちろんのこと、その範囲を把握するために、可能な限り調査対象範囲の全域をカバーできるような設定に心がけた。ただし、丘陵地の急斜面部は古墳や遺跡の存在が想定されない限り、危険回避のため確認調査区の設定を見送った。また、遺跡の実態の把握が困難な場合には、確認調査区の範囲を拡大し、その把握に努めた。

確認調査の実施にあたっては、丘陵上に古墳群の存在が確認されていること、得られる情報量が多いことなどから、トレーナーを掘削して調査することを基本とした。トレーナーの掘削は、表土から人力で掘削する方法と、表土や耕作土等は重機で掘削し、その後は人力で掘削する方法を、状況に応じて使い分けた。丘陵上は、急峻な地形であることから重機の進入を許さない場所が多く、さらに、その行為によって古墳が破壊されてしまう可能性も否定できないため、表土から人力で掘削する方法を選択した。一方、平坦地については、重機の進入が容易なことから、表土や耕作土等は重機で掘削する方法を用いた。また、この場合においても、遺物包含層の掘削や遺構を精査する作業については、人力によってその把握に努めた。

調査区のトレーナーを掘削する際には、主として土層の確認と遺構の発見に力を注いだ。土層については、各トレーナー四方の壁の土層断面を検討し、その高さや土色、土質などを記録した。遺物や遺構が発見された箇所においては、遺物包含層や遺構面の確定に努めた。丘陵上については、表土や崩落土層直下が遺構面となることが多いことから、遺構の有無の確認に重点を置いて調査を行った。遺構が発見された場合、その平面形や埋土などについて記録した。しかし、遺構が否か（横の痕跡や沈積、自然地形など）判断に迷った場合には、実際に遺構と思われる部分の頂上を振り下げたり、部分的にトレーナーを拡張するなどして判断した。

出土遺物は、出土した層位と位置を確認し、記録した上で取り上げることを基本とした。しかし、まとまって出土した場合や、遺構の性格を示している遺物が出土した場合などについては、本調査を実施することを前提に、出土位置に残すこととした。

以上のように、痕跡の性格や時代、層位などについて確認した。そして、遺跡の有無の確定と、遺跡の存在が確認された場合には、その範囲についての確定を行った。

なお、現地での記録画面は、調査区全体図（トレーナー配置図）が1/200、土層断面図や柱状図については1/10を基本として作成した。その際の測量基準点は、三角点や第二東名の工事関係用基準杭を使用した。記録写真には、作業工程撮影用と併行して35mm判カラーネガを用いた。

調査区ならびにトレーナーの埋め戻しは、重機の進入を許さなかったり、その進入により遺構の破壊が予想されたりする地点では人力によってを行い、進入の容易な平坦地については重機を用いて行った。

## (2) 調査の経過

各地点の確認調査は、実施可能な条件が整った上で、委託者からの要請があった順序で実施した。従つて、地点Noは調査の順番を表していない。また、一つの地点を数度に分割して確認調査を行った場合があり、その場合には「No 130 地点その1、その2・・・」といった表現を用いている。

各地点の調査期間は第2表のとおりである。表の示す期間内で、前述の方法を用いて遺跡の存否確認等の調査を行った。

第2表 確認調査実施期間

地点	平成14年度				平成15年度				平成16年度				平成17年度			
	10	11	12	13	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
129地点																
その1																
他の確認調査																
130地点																
その2																
その3																
131地点																
その1																
その2																
CR33																
132地点																
133地点																
その1																
その2																
CR34																
134地点																
その1																
その2																
135地点																
その1																
その2																
136地点																
137地点																
138地点																
その1																
その2																

### 3. 各地点の概要

#### (1) No.129 地点

##### 位置・立地と現況

本地点は、浜松市浜北区根堅に位置する（第3図）。丘陵より派生した小河川である荒巻川が西に、大門川が東に、それぞれ本地点より約150m離れた地点を南へと流れる。

本地点より北へ約600mの地点には、1万4千年前の人骨が発見された根堅遺跡が所在する。周辺の丘陵には、雲岩寺古墳群や泉古墳群をはじめとする、多くの古墳群が存在する。北に位置する北谷遺跡では、中世から近世にかけての小穴や遺物が発見されている。

現況では、ほぼ全域が畠地として利用されている。その一郭に南北2m、東西4mの範囲で、5cmほどの高まりがみられた。その西側には、縦80cm、横40cm、高さ20cmほどの石が置かれ、全体に十数本の低木（高さ40cm程度）が植えられていた。

##### 調査方法と確認状況

聞き取り調査において、移動させることを禁ずる伝承が残る石の存在が確認されていた。周辺に高まりもみられ、墳墓等の可能性が想定されたため、石や高まりの周辺を中心トレントによる調査を行った。

耕作土を50cm～60cmほど除去した結果、その下層で黄褐色粘土質土が確認された。一部のトレントでは、黄褐色土層をさらに60cmほど深掘りを行ったが、上層の変化や遺物・遺構については、一切確認されなかった。

遺構は、全トレントにおいて確認された。柱穴や溝、中世以降のものと思われる土坑墓が1基確認された。ただし、土坑墓が確認された場所は、伝承の残る石の周辺ではなかった。墓石などが後世に動かされた可能性もあるが、遺構の上では石と土坑墓との直接的な関連性を見出すことはできない。遺物については、トレント精査時に土師質土器や銅鏡が出土している。また、須恵器壺の一部と山茶碗片なども表土中から採集された。

##### 結果

遺構と遺物の検出状況から、対象範囲のはば全域にわたって遺跡が存在していることを確認することができた。本調査が実施され、現在中層遺跡として周知されている。

#### (2) No.130 地点

##### 位置・立地と現況

本地点は、浜松市浜北区於呂から根堅にかけて、東西1.4kmの範囲となる（第3・4図）。天童川が形成した段丘の平坦面で、範囲内には丘陵の谷筋より流れ出る小河川がいくつもみられる。範囲の西側は、赤石山系から続く丘陵の裾にあたり、丘陵上の雲岩寺C古墳群と隣接する。東側は段丘の端にあたり、比高差7mの段丘崖が形成されている。北方の丘陵沿いには東西に国道362号線が通り、西側には段丘の端に沿って南北に国道152号線が通る。

国道362号線の西側は、一部畠地もみられるが、その大部分は宅地となっている。宅地部分には、高さ1mを越える擁壁も設置されており、大規模な盛土造成が行われているものとみられた。国道より東側、天童浜名湖鉄道岩水守駅周辺までは、大部分が水田や畠地として利用されており、大きく地形を変

えるような土地変更はみられなかった。天童浜名湖鉄道岩水寺駅より東は、低地や崖面を除き、ほとんどが宅地として利用されている。宅地部分については、多少の土地造成はみられるものの、地形を損なうほどの土地の変更は認められない。ただし、工場や社宅、中学校跡地など、比較的大きな建造物もあり、その範囲については、地盤整備や深部への基礎の打ち込みなど、大規模な土地の変更が推測された。

#### 調査方法と確認状況

No 130 地点は、分布調査や現地踏査などの状況から、丘陵間にあたる、浜北区根堅字中通から東側が対象範囲とされた。しかし、根堅字守海土より東側については、宅地となっていたことなどから、対象範囲の確定が困難とされた。そのため、水田や畠地として利用され、遺物の散布が確認される根堅字中通から寺海土付近までを当面の対象範囲とすることとなった。その後、No 129 地点の調査結果などから、遺跡が根堅字中通周辺へ広がることが想定された。そのため、東側へ対象範囲を広げ、平成 12 年度に、国道 362 号線から字中屋の市道岩水寺駅前線までの範囲について、確認調査を行うこととなった（確認調査・その 1）。

平成 13 年に No 130 地点の本調査 I 期が行われると、遺跡の範囲が東側へ広がることが確定となった。さらに、根堅字篠場の宅地の跡地において、古代の布目瓦や重弧文軒平瓦が採集されたことから、段丘の東縁にあたる根堅字篠場までについて、遺跡の分布範囲を確認するための調査が行われることとなった（範囲確認調査）。その後も、平成 14 年度に字篠場の東側部分（確認調査・その 2）、平成 15 年度には残りの範囲（確認調査・その 3）について確認調査を行った。最終的な対象範囲は、浜北区根堅字中通から篠場までの東西 1.4km の範囲で、総面積は 100,290 m<sup>2</sup> となった。

**1 区 調査区の西側で、現地踏査によって一石五輪塔が確認されていたため、その周囲を中心にトレチによる調査を行った。**また東側についても、遺跡の広がりが想定されたため、現況道路部分等を避け、ほぼ全面を対象にトレチによる調査を実施した。調査区東端では、地表下 1.5m 以上まで盛土が確認された。その下層には黒褐色の堆積層が確認されたものの、湧水が激しく、遺構や遺物は一切出土しなかった。調査区中央と西側緩斜面部のほぼ全域では、盛り土や表土の下層に黄褐色の基盤層が検出された。ほとんどのトレチにおいて、遺構や遺物が確認された。調査区西側の斜面地では、地表下数 cm で岩盤が露頭し、遺構や遺物は発見されなかつた。

**2 区 当時用地が未収去であった範囲を除き、ほぼ全域についてトレチによる調査を実施した。**厚さ 30 cm の表土と耕作土を除去したところ、南側には青灰色の粘土層、北側には黄褐色の粘質土層が検出された。多くのトレチで、古代～中世の遺物や遺構が確認された。

**3 区 現況で道路となっている部分を除き、全域についてトレチ調査を行った。**最大で厚さ 20 cm 程度の表土層の直下に、黄褐色の基盤層が検出された。ほとんどが畑地であり、ほぼ原況を保っていると推測されたが、近現代の擾乱も多く、遺構や遺物が確認されたのは南京隣の範囲だけであった。

**4 区 西側は全域についてトレチ調査を行った。**東側は、当時未収去であった宅地の範囲を除き、遺跡の存在が確認されていた 129 地点の周囲を中心にトレチによる調査を実施した。西側では、最大 60 cm 程度の表土・耕作土層を除去すると、黄褐色の基盤層に達した。東側でもほぼ同様で、厚さ 50 ～ 60 cm ほどの表土・耕作土の下層に、黄褐色の基盤層が検出された。ほぼ全てのトレチから遺構・遺物が検出され、129 地点で確認された遺跡が全面に広がることが確認された。



第3図 No.129・130地点西側 調査対象範囲 (1:5,000)



第4図 No.130地点東側 調査対象範囲 (1:5,000)

5区 現況で道路や河川の部分、住居への進入路などを除く範囲について、トレンチ調査を行った。トレンチは、No.130地点の本調査Ⅰ期で検出された溝の延長を把握するため、延長線上の場所を中心配した。西側の工場跡では、厚さ1m程の整地層の下に、黄褐色の基盤層が検出された。工場の基礎によって破壊されている部分も多いが、破壊を免れた部分には、溝の統きに加えてその他の遺構も検出された。東側の低地部では、表土・耕作土・河川堆積層の下に、灰白色の基盤層が検出された。北側のトレンチには溝の統きが、南側のトレンチには中央に河川跡が検出された。

6区 現況で道路の部分や水路などを除き、ほぼ全域についてトレンチ調査を実施した。畑地では、厚さ30cm程の表土や耕作土・盛土の下層に黄褐色の基盤層が検出された。宅地においては、厚さ1mをこえる、比較的大規模な盛土造成が行われていたが、盛土直下に黄褐色の基盤層が確認された。ほとんどのトレンチにおいて、遺構や遺物が確認されたが、東側のトレンチでは宅地の造成により基盤層が大きく損なわれ、遺構や遺物が確認されなかった。また、調査区西端の堤状の高まりについては、トレンチによる断ち割り調査を行った。構築土中より陶器が数片出土したものの、いずれも近現代のものであった。

7区 現況で道路の部分や住居への進入路を除き、ほぼ全域についてトレンチ調査を行った。表土や耕作土・盛土を除去すると、黄褐色の基盤層が検出された。西側では、西へ向かって低くなる地形の変化が検出されたが、遺構や遺物は確認されなかった。その他のトレンチでは、遺物の出土は少ないものの、広範囲に遺構の存在が認められた。

8区 古代の瓦の散布が集中的に認められる土手状の高まりと、その東側の斜面部を中心に、ほぼ全域についてトレンチ調査を行った。高まりの周辺では、わずか数cmの表土直下に、褐色の粘質土層が検出され、その上面で瓦が集中して出土し、溝状の遺構も検出された。また、高まりの東側のトレンチでは、焼土や窯壁が検出された。高まりの西側では、厚さ50cmの整地層の直下で灰白色的粘質土層が確認された。明確な遺構は検出されなかつたが、多くのトレンチで整地層中から、瓦の出土が認められた。東側の斜面地には、大量の廐棄物が堆積していたため、斜面中腹の一部をトレンチ調査するにとどめた。トレンチでは、瓦が多量に出土し、焼土も確認された。

9区 現況で道路と河川の範囲を除き、トレンチ調査を実施した。北側では、厚さ150cmの暗褐色土層の下に黒褐色土層が検出され、その上面に瓦の集中が認められた。瓦の出土状況から、No.130地点の本調査Ⅱ期で発見された瓦窯の灰原である可能性が高いと推測されたため、トレンチを拡張し、面的な調査を実施した。南側の斜面部についても、当初トレンチを設定して調査を行った。しかし、小規模な瓦窯が存在する可能性も想定されたため、面的な調査に切り替えた。ほぼ全域について面的な調査を行い、広範囲に瓦の分布が認められた。

10区 ほぼ全滅についてトレンチ調査を行った。西側では、厚さ20cmほどの整地層の直下に、黄褐色の基盤層が検出された。ほとんどのトレンチで、建造物の基礎や地盤改良によって、基盤層が損なわれていたが、西側では部分的に基盤層が残っており、遺構と遺物が検出された。中央部分では、深い谷地形が検出された。現在の地表面から約5mの深さまで掘り下げたが、遺構や遺物は一切確認されなかつた。東側の平坦部では、厚さ20~30cm程度の表土直下に、黄褐色の膠層や粘土層が検出された。斜面部では、厚い盛土が確認された。平坦地と斜面地のいずれからも、遺構や遺物は確認されなかつた。10

区は、昭和 38 年まで存在した赤佐中学校の用地に相当する。昭和 22 年の校舎建設の際に行われた大規模な土地改変によって、旧地形が大きく損なわれているものと推測される。

### 結果

1 区は、西側の丘陵斜面と東側の谷部を除いた、全ての範囲から遺構や遺物が検出された。遺構としては、小穴や焼土を伴う土坑などで、当初存在が想定された中世の墳墓は検出されなかった。遺物としては、縄文土器や中世～近世の土器・陶磁器などが出土した。現在は、中通遺跡となっている。

2 区では、全ての範囲から遺構・遺物が確認された。小穴や溝状造構などの遺構が検出され、古代～中世の土器などの遺物が出土した。現在は、寺海土遺跡となっている。

3 区の北側と東側では、遺構や遺物は一切確認されなかった。南東部分についてのみ、遺構・遺物が確認された。4 区と 5 区については、全範囲において、遺構や遺物の存在が確認された。検出された遺構は、小穴や溝状造構、旧河道などであり、遺物は主に中世～近世の土器・陶磁器である。3～5 区は、現在中通遺跡となっている。

6 区では、東側の一部を除き、ほぼ全ての範囲から遺構・遺物が確認された。竪穴住居が検出され、主に古代の土器が出土している。現在は、大門西遺跡となっている。

7 区では、西側の一部を除き、遺構や遺物が検出された。確認された遺構は小穴などで、古代～中世の土器が出土している。現在は、上海土遺跡となっている。

8 区は、全ての範囲において、遺構・遺物の存在が確認された。検出された主な遺構は、瓦窯と溝であり、多量の瓦が出土した。9 区では、北側において、瓦窯の灰原が確認された。10 区は、中学校や社宅などの建設に伴う大規模な土塁造成により、ほとんどの部分が削平を受けていた。遺構の存在が確認されたのは、北西部分のみである。溝が検出され、瓦も出土している。8～10 区は、現在猿場瓦窯となっている。

### (3) №131 地点、CR33 地点

#### 位置・立地と現況

本地点は、浜松市浜北区尾野の「人形山」と呼ばれる丘陵上及び、斜面に立地する（第 5 図）。周辺は、標高 90 m～100 m の丘陵が連なっており、それらは「浜北北嶺丘陵」と呼称されている。この丘陵地は、赤石山系から派生する山脈の先端にあたる。南側に広がる平野に向かって、熊手状にいくつもの小尾根が延伸している。

調査対象地は、馬知の遺跡である雲岩寺古墳群の範囲にあたる。雲岩寺古墳群は、尾根によって A～C の古墳群に分けられており、北側に B 古墳群、東側には A 古墳群が位置する。この内、B 1 号墳（人形山 1 号墳）と B 5 号墳（人形山 3 号墳）が、昭和 37 年に浜名高校史学部によって調査されている。現況では森林部分が多くを占めるが、果樹園や段々畠等もつくられている。また、斜面の所々には岩盤が露頭し、丘陵の西側は石灰岩の採掘によって斜面が大きく削り取られている。

#### 調査方法と確認状況

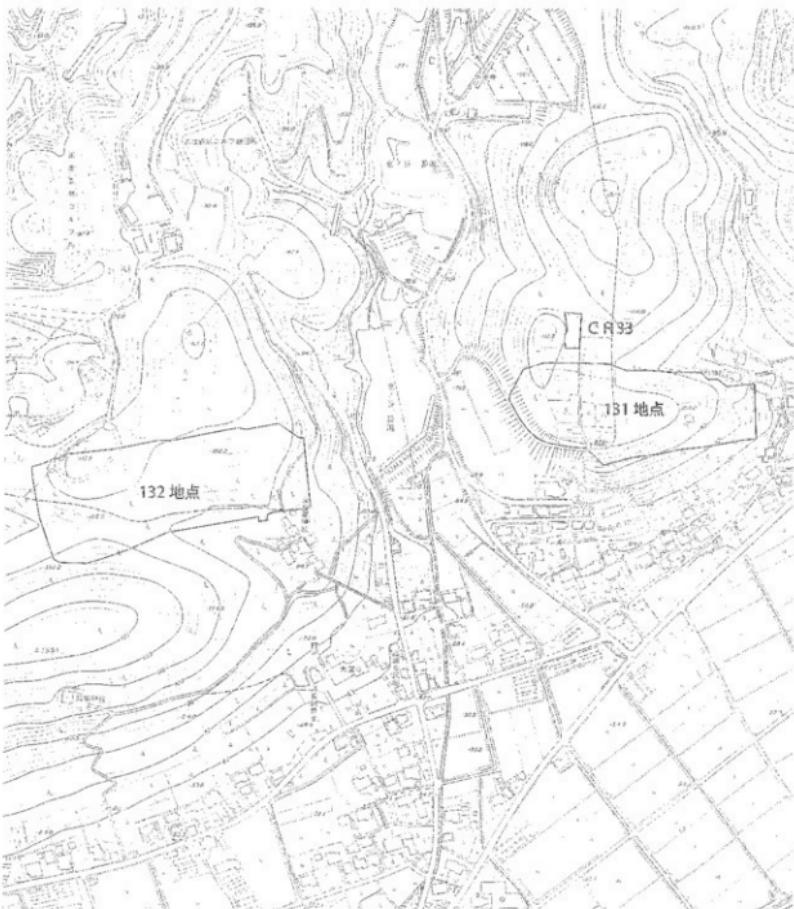
丘陵尾根上及び、調査可能な傾斜の斜面部について、トレンチによる調査を行った。№131 地点では、厚さ 10～20 cm の表土を除去すると、ほぼ全域において、基盤層に相当する礫を含む赤褐色・黄褐色の粘質土層が検出された。遺構としては、南斜面において、9 基の横穴式石室が確認された。また、主体

部は確認されなかつたが、周溝と思われる溝も検出された。尾根上では炭窯や溝状遺構などが検出された。遺物としては、須恵器や山茶碗片などが出土した。

CR 33 地点においても、トレンチを設定して調査を行つた。厚さ 10~20 cm 程度の表土の直下に、標を含む赤褐色・黄褐色の粘土層が検出された。しかし、遺構や遺物は検出されなかつた。

### 結果

No 131 地点では、丘陵上と南側斜面のほぼ全域から、遺構や遺物が確認された。丘陵の上方にあたる CR 33 については、遺構や遺物は一切確認されず、遺跡の広がりを指し示す根拠は得られなかつた。



第5図 No.131・132地点 調査対象範囲 (1:5,000)

#### (4) №132 地点

##### 位置・立地と現況

本地点は、浜松市浜北区尾野に所在する、高根山の北側丘陵上に位置する（第5図）。一部の斜面地を除き、対象範囲の大部分は、なだらかな緩斜面となっている。

対象地は、周知の遺跡である高根山A古墳群の範囲に含まれている。高根山古墳群は、A～C古墳群に分けられており、A古墳群の西側には、山頂付近のB古墳群と南西斜面のC古墳群が所在する。A古墳群については、平成6年に浜北市教育委員会によって、本地点の北側に隣接する範囲の発掘調査が行われており、7基の円墳の存在が確認されている。周辺のみ確認された1基の古墳を除いて、主体部はいずれも横穴式石室であり、須恵器や鉄錠、玉類、鉄地銀張製金具などの副葬品も発見されている。

現況は、ほとんどが森林や草地であった。一部では、墳丘状の高まりや、盗掘坑とみられる穴も確認された。また、かつては茶畠やアスレチック、ゴーカート場などにも利用されており、大規模な土地の改変が行われている可能性も予想された。

##### 調査方法と確認状況

調査対象範囲のほぼ全域にわたって、トレンチによる調査を行った。トレンチは、小規模な古墳が存在することも想定されたため、可能な限り密に設定することを心掛けた。

ほぼ全域において、厚さ5～20cmの表土の直下で、基盤層に相当する疊を含む赤褐色の粘質土層が確認された。遺構や遺物は、南側と西側、東側の急斜面地を除いて、ほぼ全域で確認された。古墳については、特に北東部分で集中して検出された。古墳以外の遺構としては、拳大程度の円碟による集石遺構も確認された。

##### 結果

調査区南側と東側、西側の急斜面地においては、遺構や遺物が一切確認されず、遺跡の広がりを示す根拠は得られなかった。

緩斜面地には、ほぼ全面に遺構が広がっていることが確認された。古墳は北東側で集中して検出されたが、一部西側にも広がっていることが確認された。また、時期についての確認は得られなかつたが、中央部付近で集石遺構が確認されたことから、古墳以外の遺構の存在も認められた。

現在は、高根山A古墳群と高根山墳墓群になっている。

#### (5) №133、C R 34 地点

##### 位置・立地と現況

№133 地点と C R 34 地点は、浜松市浜北区尾野字西ノ谷池上に位置する（第6図）。西ノ谷池西側の丘陵北側斜面及び裾部にある。本地点から北へ約300mの地点には、西ノ谷古窯跡が存在する。西ノ谷古窯跡は、正式な調査が行われていないため、その正確な位置や詳細については明らかでないが、かつて山茶碗や窯盤が採取されていることから、山茶碗の窯跡が存在すると推測されている。

現況では、西側の斜面部が山林となっており、東側の池に隣接した部分は湿地となっている。

### 調査方法と確認状況

2次に分けて確認調査を実施している。斜面部については、崩落している部分を除き、トレンチによる調査を行った。湿地については、テストピットによる調査を行った。

ほぼ全域で、厚さ10~30cmの表土直下から、基盤層に相当する礫を含む黄褐色の粘質土層が検出された。丘陵の裾部においては、湿地となっていることもあり、地表下10~20cmで湧水が認められた。

遺物は、CR34地点から、山茶殻片などが数点出土したのみである。遺構については、一切確認されなかった。

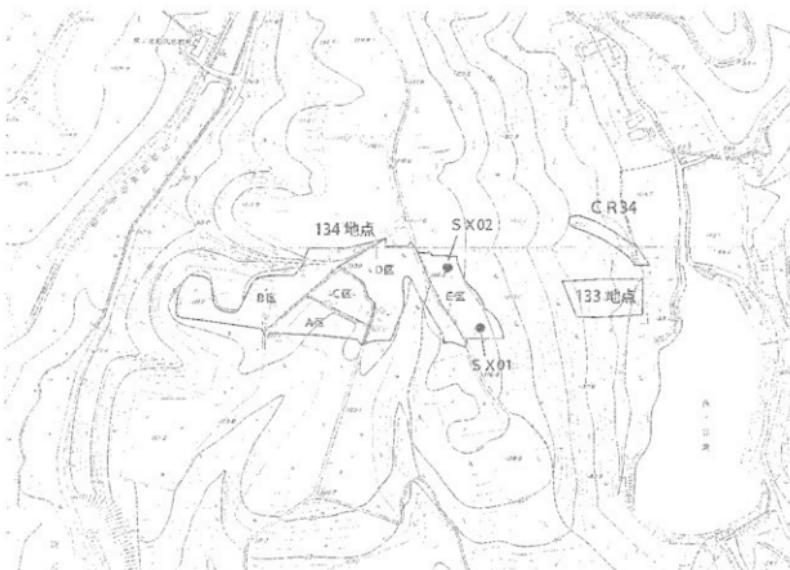
### 結果

明確な遺構は一切確認されなかった。また、数点の土器片が出土しているが、出土状況から流れ込みであると判断される。当初は、窯跡が存在する可能性も想定されたが、湧水点が地表下わずか10cm程度であることは、否定的な要素であるといえる。両地点においては、遺構と遺物のいずれにおいても、遺跡の存在を示す明確な根拠は得られなかった。

### (6) No.134地点

#### 位置・立地と現況

No.134地点は、浜松市浜北区宮口字本通りに所在する丘陵上に位置する（第6図）。南に向かって熊



第6図 No.133・134地点 調査対象範囲 (1:5,000)

手状にいくつもの小尾根が延伸しており、対象範囲内にもいくつかの谷が入り込んでいる。

本地点は、周知の遺跡である大屋敷A古墳群とC古墳群の範囲に含まれる。大屋敷古墳群はA～Cに分けられており、本地点の南京斜面にはA古墳群が、南の段丘面にはB古墳群が存在する。A古墳群とC古墳群については、平成15年から当研究所によって発掘調査が行われており、C古墳群で51基、A古墳群で40基以上の横穴式石室が確認されている。現況では、山林となっており、墳丘状の高まりなどは確認できなかった。

#### 調査方法と確認状況（第6図）

既存の道などを境に、調査対象地をA～Eの5つの調査区に分け、トレンチを設定して調査を行った。調査は2次に分けて実施した。ほぼ全域で厚さ10cmほどの表土の直下に、基盤層に相当する縁を含む褐色または赤褐色の粘質土層が検出された。

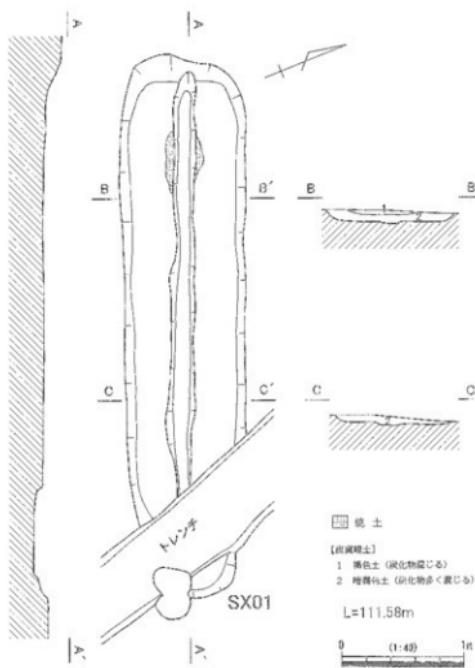
古墳に関連する遺構は、一切確認されなかった。古墳以外の遺構としては、E区においては、炭焼き窯1基と焼上部を有する土坑1基が検出された。これらについては、全容を把握するためにトレンチを拡張して、調査を行った。

#### SX01（第7図）

調査区南京部分で検出された。上方が大きく削平されており、確認されたのは基底部のみである。

焼成部は、幅1m、長さ4.4mの隅丸長方形で、深さは現存で10cm。東西方向に焼造されており、東側に焚き口が設けられている。床面は、基盤層に相当する赤褐色土であり、粘土等が貼られた痕跡は確認されない。床面から窯壁にかけては、所々に自然による赤化が認められる。

窯体には、焚き口の前面へ向かって、ほぼ窯体の中軸線に沿うかたちで細い溝が設けられている。溝は、幅20cm、深さ2cm程度の小規模なもので、溝の周囲が特に赤化していることから、通気溝の機能を有したものと推測



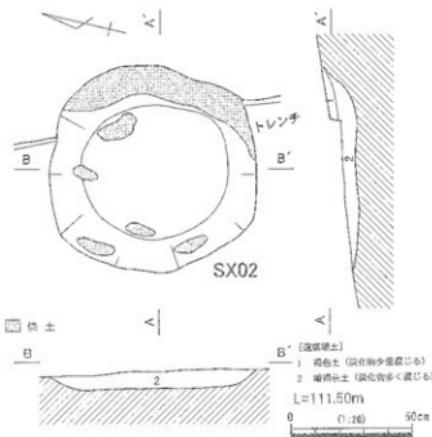
第7図 SX01実測図

される。

窯体内に、形状を把握し得るほどの木炭は現存しなかつたが、廻土中から炭化物の小片が多數確認された。土器など、年代を示すような遺物は出土していない。確認された遺構の形状等から、炭焼き窯であると推定される。

SX02 (第8図)

SX02は、調査区の北東部分で検出された。SX01より北へ約70mの位置にある。直径85cmの円形の土坑で、深さは現存で10cm程度。底部はほぼ平らで、斜め上方へ緩やかに立ち上がる。土坑の側面から底部にかけて、被熱による赤面が確認された。廻土中からは、炭化物の小片も出土している。土器などの、年代を示す遺物は出土していない。



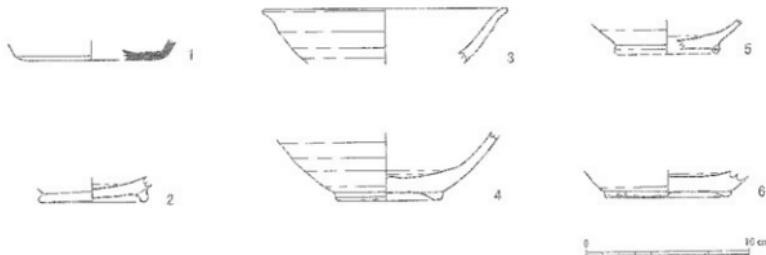
第8図 SX02実測図

遺物 (第9図)

遺物は、いずれも表土中からの出土である。1は須恵器の坏身である。D区から出土している。2と5は灰釉陶器の碗である。2はE区から、5はB区から出土している。2の底部内面には、重ね焼きの痕跡がみられる。3、4、6は山茶碗である。3と4はE区、6はD区から出土している。遺物としては、これらの他に、D区から須恵器4点と、E区から山茶碗4点が出土しているが、いずれも固化できないほどの小片である。

### 結果

調査区東側において、炭焼き窯1基と焼土面を有する土坑1基が確認されたのみであった。遺物の分布が散漫で、点数もごく少量であることから、これ以上の遺跡の広がりを示す根拠は得られなかった。



第9図 No.134地点出土遺物

### (7) No.135 地点

#### 位置・立地と現況

本地点は、浜松市浜北区西大寺字原に位置する（第10図）。三方原台地の最北端にあたり、標高100mほどの平坦地である。調査区の北側と西側は灰ノ木川へと落ちる急峻な斜面地になっている。

北京へ約800mの灰ノ木川を挟んだ丘陵上には、南北朝期の山城として周知されている大平城址が存在する。

現況では、一部が山林であった他は、調査対象範囲のほとんどが果樹園であった。また、調査区の西側部分には温室が建てられており、大規模な土地の改変が予想された。

#### 調査方法と確認状況

調査対象範囲全域にわたりトレンチ調査を行った。調査区の南西部にあたる山林では、厚さ10～20cmほどの表土直下に、基盤層にあたる疊混じりの明赤褐色の粘質土層が検出された。果樹園となっている範囲については、表土下1m以上まで土地改変によって搅乱を受けていた。遺構や遺物については、一切確認されなかった。

#### 結果

対象範囲のほとんどは、大規模な土地改変を受けていた。また、土地改変されていない部分においても遺構や遺物が一切確認されないなど、本地点において遺跡の存在を示す根拠は得られなかった。



第10図 No.135 地点 調査対象範囲 (1:5,000)

## (8) No.136地点

## 位置・立地と現況

本地点は浜松市浜北区四大地字三堂山に位置している（第11図）。赤石山系の南部分に当たる山間地で、標高77mほどの「三堂山」と呼称される丘陵上の平坦地である。対象地の東側は、丘陵地からつながる尾根状の地形を呈しているが、北・南・西側は、都田川や小規模な谷によって浸食され、急峻な斜面地を形成している。

本地点から南へ1.2kmの地点には、縄文～弥生時代の集落跡として周知されている川山遺跡が所在する。現況は、ほぼ全域が山林となっている。

## 調査方法と確認状況

調査対象範囲全域を対象に、トレンチによる調査を行った。

表土を10～15cmほど除去すると、調査対象範囲のほぼ全域で、基盤層に相当する礫を含む赤褐色の結質土層が検出された。しかし、遺構や遺物については、一切確認されなかった。

## 結果

本地点対象範囲において、遺跡の存在を指し示す根拠は得られなかった。

## (9) No.137地点

## 位置・立地と現況

本地点は、浜松市浜北区大平字三堂山に位置している（第11図）。南北に流れる都田川が形成した、段丘上にあたる。本地点から南へ1.2km、都田川東岸には縄文、弥生時代の集落跡として確認されている川山遺跡が存在し、また、南西へ1.4kmの地点には横穴式石室をもつ円墳群、須部B古墳群が確認されている。また、東へ2.4kmの地点には南北朝期の城として周知されている大平城が存在する。

現況は、ほぼ全域が山林となっており、人為的に積み上げられたものと考えられる石積みが、いくつか確認される。

## 調査方法と確認状況

調査対象範囲内に認められる石積みについて、その分布状況や規模等を調



第11図 No.136・137地点 調査対象範囲 (1:5,000)

査した後、3基について解体調査を実施した。また、周辺にもトレンチを設定し、調査を実施した。

解体調査では、各基の半分の石積みを取り除き、内部構造等の確認を行った。2基の石積みの内部からは、ポリエチレン製の紐やビニールなどの現代の廃棄物が発見された。また、周辺住民への聞き取り調査によって、昭和20年頃には石積みの構築物は無く、昭和53年に柿林を行った際には存在していたという証言を得ている。その他、周辺に設定したトレンチにおいても、遺構・遺物は一切確認されなかった。

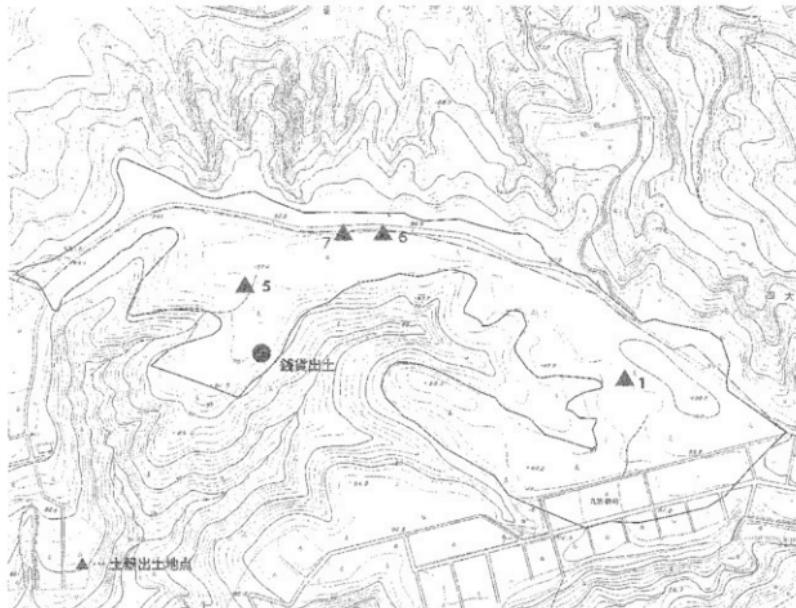
### 結果

遺構と遺物のいずれにおいても、遺跡の存在を示す明確な根拠は得られなかった。なお、本地点で確認されていた石積みについては、内部から出土した廃棄物や聞き取り調査などから、戦後積み上げられた石であると判断される。

### (10) №139 地点

#### 位置・立地と現況

本地点は、浜松市北区都田町字都田山に位置する（第12図）。三方原台地の最北端にあたる、標高100mあまりの台地上の平坦地である。調査対象地の北側と西側は、急峻な斜面地になっている。また、南側には、いくつもの谷が入り込んでいる。本地点から900m北の、谷を挟んだ丘陵中には南北朝期



第12図 №139 地点 調査対象範囲 (1:5,000)

の山城として周知されている大平城址が存在する。

現況は、ほぼ全域が山林であるが、南東部の一部は畠地となっている。

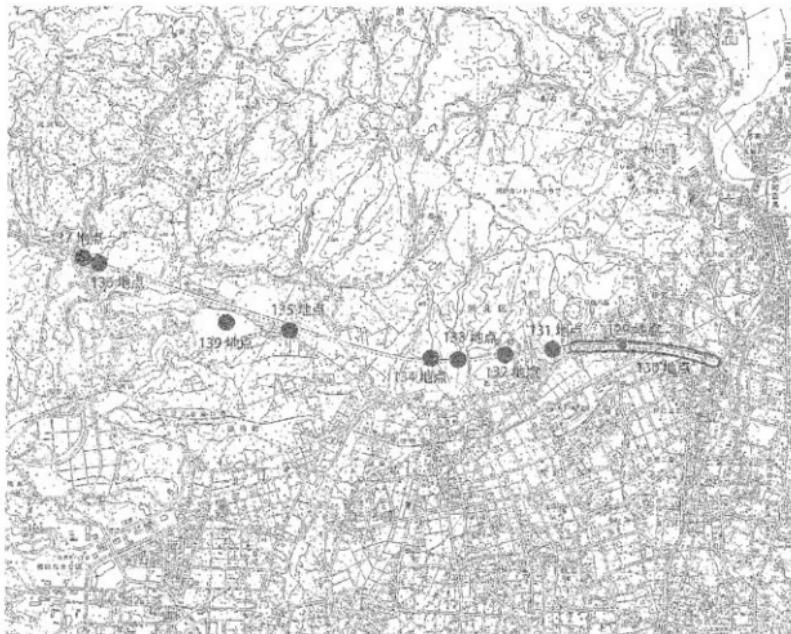
#### 調査方法と確認状況

現況道路部分等を除き、対象範囲の全域についてトレンチ調査を行った。ほぼ全域で厚さ20cmほど  
の表土直下において、基盤層に相当する躍を含む黄褐色や赤褐色の粘土層が確認された。

遺構としては、調査区西側のトレンチから、小穴が4基確認されたのみである。遺物は、須恵器や土  
師器、灰釉陶器、山茶碗、常滑産堺などの破片と、銅鏡（寛永通宝）が出土している。土師器の細片2  
点が小穴から出土しているが、他の遺物については、いずれも表土中からの出土である。

#### 結果

遺構としては、南西側で4基の小穴が確認された。遺物は土器が40点程度出土したが、11万m<sup>2</sup>を越  
える対象面積からすると、全体的に遺物の分布は極めて希薄であるといえる。遺構と遺物が共に確認さ  
れたのは、南西側にある谷頭の一部分のみである。非常に狭い範囲ではあるが、この周辺については、  
一応遺跡の存在を確認することができた。現在、ここは大平遺跡となっている。



第13図 浜松工区 各地点位置図 (1:50,000)



## 2. 本調査の概要

各遺跡の調査結果の概要は、以下のとおりである。詳細は各遺跡の報告で述べるが、ここでは時代ごとに発見された遺構・遺物を概観してみたい。

### 縄文時代

中通遺跡（No.130 地点）で、縄文時代草創期末から早期にかけてのが穴や集石炉が発見されている。縄文時代早期に遡る遺跡としては、この地域では初めての本格的な調査となる。発掘調査の結果、合計241基の炉穴と37基の集石炉が、約3000m<sup>2</sup>の範囲に密集した状態で検出されている。九州と関東を除く地域において、その密集度は際立っており、炉穴の機能や伝播のあり方を知る上でも注目すべき遺跡といえる。

### 古墳時代

雲岩寺C古墳群（No.131 地点）と高根山A古墳群（No.132 地点）において、古墳時代後期の群集墳が調査されている。

雲岩寺C古墳群では、合計17基の古墳が発見されている。この内、周溝のみが検出された1基を除いて、他は全て横穴式石室を主体部とする。石室のほとんどは、平面形態が胴張り形で、玄門部に立柱石が設けられる「擬似両袖式」石室である。ただし、玄室平面が長方形の「無袖式」と「右片袖式」の石室も、それぞれ1基ずつ発見されている。副葬品としては、須恵器や土師器の他に、鉄鏃や大刀、馬具などの鉄製品、勾玉や管玉、ガラス小玉などの玉類が出土している。

高根山A古墳群では、合計34基の古墳が発見されている。盗掘により、石室の石材が抜き去られた古墳も多く確認された。確認された石室は、いずれも平面形態が胴張り形で、玄門部に立柱石をもつ「擬似両袖式」石室であった。石室の直上に、新たに小石室が築かれた古墳も発見された。副葬品としては、須恵器や土師器、鉄鏃、短刀、耳環、玉類などが出土している。

### 古代

篠場瓦窯（No.130 地点）で、白鳳時代（7世紀末葉～8世紀初頭）の瓦窯が調査されている。瓦窯は3基発見されており、灰原から多量の瓦が出土している。出土した瓦は、平瓦や丸瓦、軒丸瓦、軒平瓦、鬼瓦、鶴尾などである。融着した須恵器も出土しており、瓦以外に須恵器も焼成していたことがわかる。



写真1 中通遺跡



写真2 篠場瓦窯

瓦の供給先は現在のところ不明であるが、周辺に未発見の寺院跡が存在する可能性がある。遼江における白鳳時代の瓦窯としては、初めての本格的な調査である。初期の瓦生産の実態を示す、数少ない遺跡として注目される。

大門西遺跡（No.130 地点）では、集落が調査されている。堅穴住居や掘立柱建物などが検出されており、堅穴住居内から須恵器や土師器なども出土している。調査範囲は集落域の南端部分にあたり、集落の中心は北側に展開しているものと推測される。

中屋遺跡（No.130 地点）では、堅穴住居や土坑などが発見されている。堅穴住居は、一辺 3m 程度の方形で、5軒検出されている。大門西遺跡の堅穴住居と比べて小型であり、カマドが設けられていないのが特徴である。埋土からは、須恵器や土師器なども出土している。土坑は円形で小型のもの他に、長径 3m 程度の不定形な大型土坑も検出されている。大型土坑の埋土からは、細片となった土器が多数出土した。大型の土坑は、寺海上遺跡（No.130 地点）でも検出されており、須恵器や土師器なども出土している。

### 中・近世

平地部分では、ほとんど全ての遺跡で、中世以降の遺構や遺物が発見されている。

中屋遺跡（No.130 地点）では、堀や土塁、河川とその護岸施設、掘立柱建物など、多くの遺構が検出されている。特に堀は、大規模なもので、現存で 2m 以上の深さがあり、東西に 160 m にもおよぶ。調査を行ったのは四周のうち、南辺にあたる部分のみである。土塁は堀の内側に築かれており、大幅に削平を受けているが、幅 5m、高さ 1m 程度の規模で残存している。これらの遺構については、出土遺物などから、鎌倉時代に築造されたものと推測されている。また、河川に築かれた護岸施設からは、築造の際に埋納された、木製鞍や呪符木簡などが出土している。木製鞍は黒漆塗りで、20ヶ所以上に文様が施されている。文様の細部の状況から、文様には螺鈿が嵌め込まれていたものと推測される。螺鈿鞍の完全な状態での出土は、全国的にも例が無く、特筆すべき遺物といえる。

中通遺跡（No.130 地点）では、掘立柱建物や井戸、土坑、中世墓などが発見されている。一部には、ほぼ同規模の掘立柱建物が、棟の方向を揃えて配置されている様子もうかがえる。中世から近現代の遺物まで出土しており、遺構密度も高いことから、中世以降継続して営まれた集落であると推測される。

寺海上遺跡（No.130 地点）では、掘立柱建物や井戸、溝、河川跡などが発見されている。さらに、土器や果実の種子、木の枝などが埋納された土坑も検出されており、祭祀に関連する遺構として注目される。西側に隣接する中通遺跡とともに、集落の一角を成していたものと推測される。

上海土遺跡と大門西遺跡（No.130 地点）でも、掘立柱建物や土坑などが検出されている。

丘陵上の高根山墳墓群（No.132 地点）では、100基をこえる中世墓が発見されている。中世墓のほとんどは、平面が長方形または隅丸長方形の土坑墓である。一部の土坑墓では、上層に円礫が確認されており、上部に集石が存在した可能性も考えられる。また、1基だけであるが、配石墓も確認されている。配石墓は、土坑墓からやや離れた位置で検出された。四方が角礫によって区画され、内部には円礫が詰め込まれていた。



写真 3 中屋遺跡

## 第5節 資料整理

### 1. 資料整理の体制

本事業では、第1節のとおり現地調査を優先したため、基礎整理は継続的に実施してきたものの、本格的な資料整理・報告書作成の作業はしばらく実施することができなかつた。

現地調査・基礎整理を工区ごとに実施してきたこと、現地調査を優先したことから多くの資料整理が必要になってきたこと、その多くの遺跡の資料整理を各現地担当者が同時に実施することが物理的に不可能なことなどから、資料整理および報告書の作成は、現地調査の実施と同様に工区ごとのまとまりの中で、順次遺跡ごとに実施することとなった。

浜松工区の資料整理は、平成18年度から開始している。現在(平成20年3月)、浜松工区の資料整理は、袋井整理事務所で実施している。なお、遺物の写真撮影は当研究所写真室、木製遺物の実測や金属製造物のクリーニング及び、これらの遺物の保存処理については、当研究所保存処理室での実施を基本としている。

浜松工区の資料整理体制については、現在も資料整理継続中のために、現地調査の体制のように一括掲載することはできない。よって、各報告書にてそれに関わる資料整理の体制を示すこととする。なお、本書に関わる資料整理の体制は、下の第4表のとおりである。

第4表 資料整理の体制

平成18年度		平成19年度		
	所長	所長	所長	
総務部	常務理事 兼企画部長	斎藤 忠 平松公夫	常務理事 兼事務局長	
	次長	鈴木大二郎	大場正夫	
	総務課長	鈴木大二郎	佐野五十三	
	部長	石川素久	及川 司	
	担当次長	及川 司	福井保幸	
	担当課長	及川 司	総務課長	
	保存処理室長	西尾太加二	大場正夫	
	係長	富樫孝志	調査課長	
	調査研究員	武田寛生 佐々木和也 足立順司	保存処理室長	
	副主任	中鉢京子	西部調査係長	
調査研究部	調査研究員	武田寛生 藤井光弘 足立順司	富樫孝志	
			調査研究員	
			保存処理	
	副主任		大森信宏	
	副主任		中鉢京子	

## 2. 資料整理の方法と経過

例言にも記したが、現地調査・資料整理とも工区・地区ごとに実施していくことから、報告書も地区ごとに作成することになった。また各地区的最初には、工区・地区単位で実施してきた調査の経過や概要等を地区ごとにまとめたもの（総論）を掲載することになった。

以上により、浜松市における第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書は、本書を「浜松市－1」として、総論と2ヶ所の遺跡の報告を掲載し、続く「浜松市－2」以降の報告書に、残る遺跡の調査報告を掲載することとした。

各現地調査の結果に基づいて、静岡県教育委員会及び浜松市教育委員会により、周知の埋蔵文化財包蔵地の内容が変更になる部分がある。また、追加登録される埋蔵文化財包蔵地もある。以後は、変更後の遺跡名・遺跡範囲等に基づいて報告することとする。本調査を実施した各遺跡名等は第3表のとおりであるが、詳細は各遺跡の報告の中でも触れることとする。

なお、現地調査終了時から周知内容の変更が行われるまでに多少の時間が経過している。そのため、変更以前に調査成果の一部を公表した場合が生じたが、その場合は変更前の遺跡内容で公表している。これまでに公表しているものと本書および各遺跡の報告書とで相違がある場合は、本書および各遺跡の報告書をもって訂正することとする。

資料整理の作業については、現在資料整理継続中のために浜松工区について一括掲載することはできない。したがって、各遺跡に関わる資料整理の方法と経過は各遺跡の報告中に記すこととする。

本章（総論）に関しては、調査日誌等の調査資料（書類）の整理、挿図表の作成、報告の執筆・編集といった資料整理および報告書作成作業を行った。本書掲載の各遺跡の資料整理とあわせて、平成18年度以降断続的に実施した。



写真4 現地調査・資料整理作業

## 第2章 大門西遺跡

---

第二東名No.130 地点

## 第1節 位置と環境

### 1. 位置と地理的環境

大門西遺跡は、静岡県浜松市浜北区根堅、天竜浜名湖鉄道岩水寺駅から北東へ約200mの地点に位置する。天竜川によって形成された低位段丘上の、南に向かって緩やかな勾配をもつ平坦地に立地する。調査区の北西部が最も高く、南東に向かって傾斜するが、その比高差は2m程度しかない。

段丘の北方には赤石山系より続く山地が連なっており、開拓によってできた谷からはいくつもの小河川が派生している。遺跡の西側60mには大門川が流れ、段丘を分断している。東へ350mの地点には、落差5m以上にもなる段丘崖が形成されており、下方には段丘に沿って八幡川が流れている。遺跡から北へ350mの場所には、丘陵に沿って東西に国道362号線が通っている。さらに、東へ250mの場所には国道152号線が南北に通っており、現在でも天竜川西岸における交通の要衝の一つとなっている。

### 2. 歴史的環境と調査歴

大門西遺跡については、今回がはじめての調査である。西側には中屋遺跡が隣接し、東側には上海土遺跡が位置する。北側及び南側については、調査区外に続く遺構が検出されているため、遺跡がさらに広がっているものと推測される。

本遺跡の周辺では、古代の遺跡の調査例が少ない。集落としては、向山I遺跡で竪穴住居が3軒と溝などが発見されている他、東原遺跡で竪穴住居10軒や土坑、溝などが発見されている程度である。

中世の遺跡は、本遺跡の北方の丘陵に所在する、勝栗山墳墓群や泉墳墓群などの墳墓群が古くから知られている。また、第二東名開通の調査によって、数多くの中世の遺跡が発見されている。本遺跡の西側に位置する中屋遺跡では、方形に区画する大規模な溝や流路、掘立柱建物などが発見されている。さらに西側に位置する中通遺跡と、本遺跡の東側に位置する上海土遺跡でも、中世の集落が発見されており、本遺跡を含めて相互の関連性が注目される。



第14図 大門西遺跡と周辺の遺跡

## 第2節 調査の方法と経過

### 1. 発掘調査の方法

本調査は、東西120m、南北80mを範囲とする。西側には、境界を接して中層遺跡が隣接する。東側についても確認調査が行われているが、遺跡の存在は認められなかった。北側と南側は、対象範囲外であったため確認調査等は行っていないが、調査区外へと延びる遺構もあることから、遺跡の範囲はさらに広がるものと推測される。

本調査が5次に分けて実施されているため、それぞれの調査区域を1～5区として扱うこととする。発掘調査は、区ごとに開始時期や工程が多少異なるものの、基本的な調査の方法については変わらない。

発掘調査は、まず調査区の設定を行った。そして、休憩用テント・簡易トイレなどの設置とともに、重機による表土除去を開始した。その後、重機による表土除去が完了した範囲から、人力による遺構検出面までの掘削作業を開始した。一部、盛土等がなされていて、現地表面から深く掘り下がる部分については、安全確保のための土留め施設を設置した。調査区のほとんどの部分で、表土・盛土除去後、まもなく遺構検出面に達した。なお、表土除去以降の作業を円滑に進めるため、一部重機と人力による作業は並行して行っている。次に遺構検出面に達した場所から、随時、遺構の検出作業を行った。検出された遺構については、まず遺構の半分を掘削し、土層断面によって埋土の状態を観察した上で、全体の掘削を行った。ただし、柱穴とみられる遺構については、上層を数cm掘り下げて柱痕跡の有無について確認を行い、記録した後に遺構の半分を掘り下げた。

調査に際しては、基準点測量およびグリッド杭の設置を委託して行った。発見された遺構には、すべて調査中に遺構番号を付した。ただし、各区ごとに1番から番号を付した結果、遺構番号が一部重複することとなつたため、本報告に際して、全ての遺構について区の名称を付した4けたの遺構番号に改めている。遺物については、出土地点の三次元座標を計測した上で、取り上げた。ただし、重機掘削時に採取された遺物や包含層出土の遺物などについては、一括化・簡略化している場合もある。

現地の記録図面としては、空中写真測量によって、設定したグリッドに沿って、100分の1縮尺の地形測量図と20分の1縮尺の遺構図を作成した。また、特に細部の記録が必要なものについては、10分の1縮尺の記録図面を作成した。遺構についての現地記録写真の撮影は、6×7判（モノクロ）と35mm判（カラーリバーサル）を用い、遺構や作業工程の撮影には35mm（カラーネガ）を使用した。空中写真撮影および空中写真測量については、委託にて実施した。



写真5 現地調査



写真6 現地説明会

## 2. 発掘調査の経過

発掘調査は、工事の工程や道路の付け替えが必要であるなどの事情により、1～5区の5つの調査区に分けて行うことになった（第17図）。開始年次・時期がそれぞれ異なるため、発掘調査の経過については、各区ごとに記すことにする。なお、基準点測量・グリッド杭の打設および、空中写真撮影・空中写真測量については、株式会社フジヤマに委託して実施した。

### 1区（調査期間：平成15年8月6日～平成16年2月27日）

平成15年8月6日に、発掘調査を開始した。まず調査区を設定し、安全フェンスの設置などの準備を行った。現地作業員棟については、2区のものを共同で使用した。26日には、重機による表土除去を開始した。9月3日から、人力による作業を開始した。その後、遺構の検出・掘削作業、遺物の取り上げ、記録作業を随時行っていた。9月16日には、基準点測量およびグリッド杭の設置を行っている。調査区全域の遺構掘削作業の終了後、12月17日に空中写真撮影および、空中写真測量を実施した。

その後、堅穴住居等の遺構についての解体作業や、実測・測量作業を実施した。翌年1月16日には、2区とともに地元住民を対象にした現地説明会を実施した。調査区全域の調査が終了した後、2月18日から資材や現地作業員棟などの撤去作業を行い、2月27日に現地での作業を終了している。

### 2区（調査期間：平成15年7月24日～平成16年1月30日）

平成15年7月24日に、発掘調査を開始した。まず調査区を設定し、現地作業員棟や休憩用仮設テントの設営、安全フェンスの設置などの準備を行った。30日には、東側から重機による表土除去を開始した。8月5日からは、表土除去の完了した範囲から順次人力による作業を開始した。その後、遺構の検出・掘削作業、遺物の取り上げ、記録作業を随時行っていた。8月25日には、基準点測量およびグリッド杭の設置を行っている。10月24日には、調査区東側の遺構掘削作業が終了したため、当該範囲についての空中写真撮影および、空中写真測量を実施した。

残りの範囲については、継続して作業を行った。遺構掘削作業の終了後、12月17日には空中写真撮影および、空中写真測量を実施した。その後、堅穴住居等の遺構についての解体作業や、実測・測量作業を実施した。翌年1月16日には、1区とともに地元住民を対象にした現地説明会を実施した。28日よりテントや資材等の撤収作業を行い、30日に現地での調査を終了している。

### 3区（調査期間：平成16年11月1日～12月15日）

平成16年11月1日に発掘調査を開始した。まず調査区を設定し、資材の運搬等の準備を行った。現地作業員棟は、隣接して調査を行っていた中屋遺跡のものを共同で使用した。2日には、重機による表土除去を開始した。土留め施設が必要な場所については、表土除去に並行して土留め設置工事を実施した。4日から人力による作業を開始した。その後、遺構の検出・掘削作業、遺物の取り上げ、記録作業を随時行っていた。11月25日には、基準点測量およびグリッド杭の設置を行っている。調査区全域の遺構掘削作業の終了後、12月14日に空中写真撮影および、空中写真測量を実施した。全調査区の作業が終了した後に撤去作業を行い、12月15日に現地の調査を終了した。

### 4区（調査期間：平成17年4月5日～6月7日）

平成17年4月5日に、発掘調査を開始した。まず調査区を設定し、資材の運搬や安全フェンスの設

置などの準備を行った。現地作業員棟については、前年度中屋遺跡の調査で設置したのものを使用した。14日には、重機による表土除去と、人力による作業を開始した。その後、遺構の検出・掘削作業、遺物の取り上げ、記録作業を随時行っていた。4月19日には、基準点測量およびグリッド杭の設置を行っている。調査区全域の遺構掘削作業が終了した後、5月25日に空中写真撮影および、空中写真測量を実施した。その後、実測・測量作業を行うとともに資材等の撤収作業を行い、6月7日に現地での作業を終了している。

### 5区（調査期間：平成17年10月14日～3月13日）

平成17年10月14日に、発掘調査を開始した。まず調査区を設定し、資材の運搬や安全フェンスの設置などの準備を行った。18日には、重機による表土除去を開始した。土留め施設が必要な場所については、土留め設置工事も並行して行った。24日から、人力による作業を開始した。その後、遺構の検出・掘削作業、遺物の取り上げ、記録作業を随時行っていた。10月24日および11月24日には、基準点測量およびグリッド杭の設置を行っている。調査区全域の遺構掘削作業が終了した後、1月12日に空中写真撮影および、空中写真測量を実施した。その後、断続的に実測・測量作業を行った。3月上旬から資材等の撤収作業を開始し、3月13日に現地での作業を終了した。

### 3. 資料整理の方法と経過

本遺跡に関する資料整理および報告書作成作業は、平成18年9月に開始した。ただし、出土遺物の洗浄・注記や台帳作成等の基礎整理作業については、現地調査終了後に、随時行われていた。

作業としては、土器の分類・仕分け、接合、拓本、実測作業や、遺構図面の修正・編集、各図の版組・トレース作業、遺物の写真撮影、原稿執筆などを行った。さらに、これらを編集して報告書を作成した。

なお、金属製品のクリーニングおよび保存処理は、当研究所保存処理室が実施した。

遺物の写真撮影は、4×5判（モノクロネガ・カラーリバーサル）、6×7判（モノクロネガ・カラーリバーサル）を用いて、当研究所写真室で実施した。



写真7 整理作業

## 第3節 調査の成果

### 1. 全体の概要

#### (1) 土層および地形

調査以前の土地利用としては、畑地と道路及び宅地であった範囲に分けられる。おおよそ、1区の北側と2区東側、5区の北側が、畑地として利用されていた範囲に相当する。一部で暗褐色土の包含層が認められたが、大半の部分では厚さ20~30cm程度の表土・耕作土を取り除くと、遺構検出面となる黄褐色土層上面があらわれた。宅地及び道路となっていた部分では、1~2mの盛土がなされており、黄褐色土を掘り込むような地盤改良が行われている部分も多く確認された。さらに、水道管や排水溝に加え、調査区を横断する大規模な用水路も埋設されていた。

このように、部分的に大規模な土地改変が行われているため、旧地形を復元するのが困難な側面もあるが、全体としては北西から南東へ向かって緩やかに傾斜する地形である。また、遺跡の西側には、中屋遺跡の調査によって、北から南へと流れる河川跡が発見されている。さらに、東側でも確認調査の際に谷状の地形が検出されていることから、北方の丘陵から流れ出た小河川に挟まれた、比較的平坦な土地であったものと推測される。

#### (2) 遺構・遺物の概要

発見された遺構・遺物は、大きくは古代のものと中・近世のものとに分けられる。

古代の遺構としては、堅穴住居や掘立柱建物、土坑、井戸などが発見されている。検出された遺構は1区の北側と、2区の中央部に集中している。堅穴住居は、1区で5軒、2区では2軒検出されている。掘立柱建物は、明確なものだけで合計11棟検出されている。1区と2区の堅穴住居周辺に集中しているが、やや離れた5区でも1棟発見されている。土坑は合計17基検出されており、やはり1区と2区の堅穴住居の周辺で集中して発見されている。この他に、1区では井戸が1基発見されている。1区と2区の間にあたる3区では、大型の堅穴状遺構(S X 3001)が検出されている。

中・近世の遺構としては、掘立柱建物や井戸、土坑、土坑墓、溝などがある。遺構は全体に広がっているが、分布の中心は西側の4区と5区にある。掘立柱建物は、5区で5棟と4区で1棟発見されている。そしてやや離れた1区では、ほぼ同規模の建物が東西に並んで2棟検出されている。井戸は5区で2基、4区で1基、2区で1基発見されている。土坑についても、4・5区に集中しているが、1区においても3基検出されている。土坑墓(S X 2014)は2区で発見されている。

古代の遺物は、主に須恵器と土師器で、堅穴住居や土坑などから比較的多く出土している。遺構に伴うもの以外に、包含層や搅乱からもほぼ全域から古代の遺物が出土している。ただし、数量的には1区出土の遺物が、その大半を占めている。

中・近世の遺物は、土坑や井戸から、土器や陶器・陶磁器が出土している。SH 5002の柱穴(S P 5175)からは、西日本の縄塚以外から出土することの少ない、中国製の壺形合子の蓋も出土している。土坑墓(S X 2014)には、土師質土器の皿と銭貨が納められていた。包含層や搅乱出土遺物もほぼ全域で確認されるが、4・5区からの出土が際だっている。特に近世の陶磁器は、4区の搅乱から多数出土している。包含層と搅乱からではあるが、龍泉窯系の青磁も4点出土している。



第15図 退耕地圖 (駒至区西側)

39

40

41

42

43

44

X=128680

X=128890

X=128900

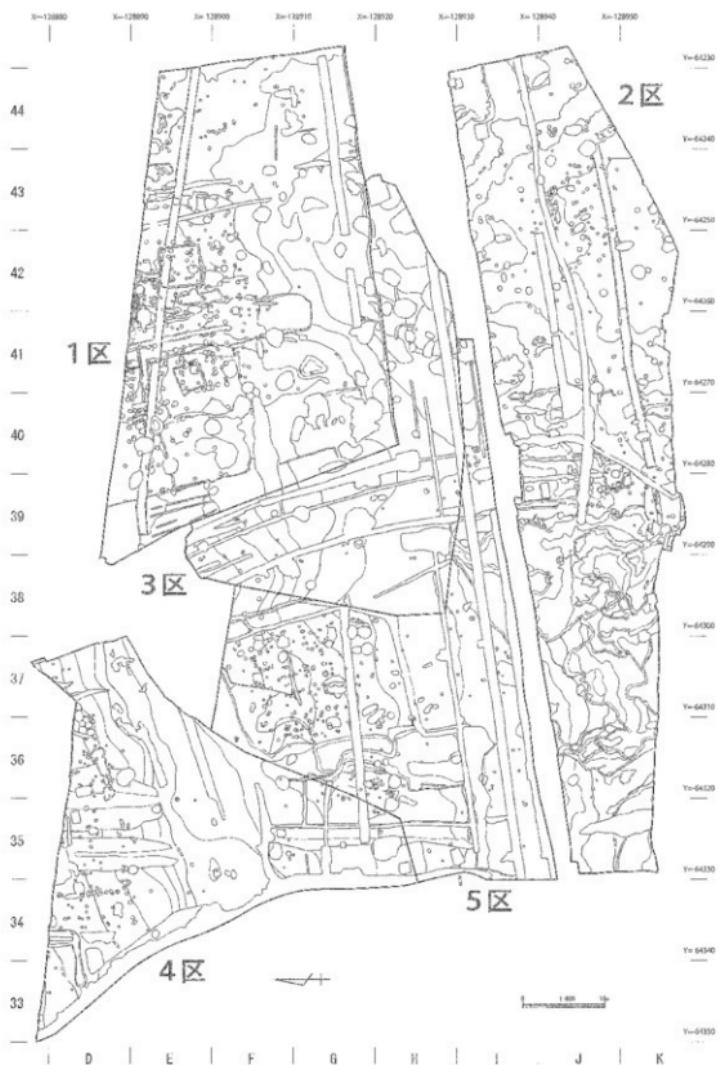
X=128920

X=128930

X=128950



第16図 遺構配置図(調査区東側)



第17図 調査区地形図・区割図

## 2. 古代の遺構と遺物

### (1) 壁穴住居

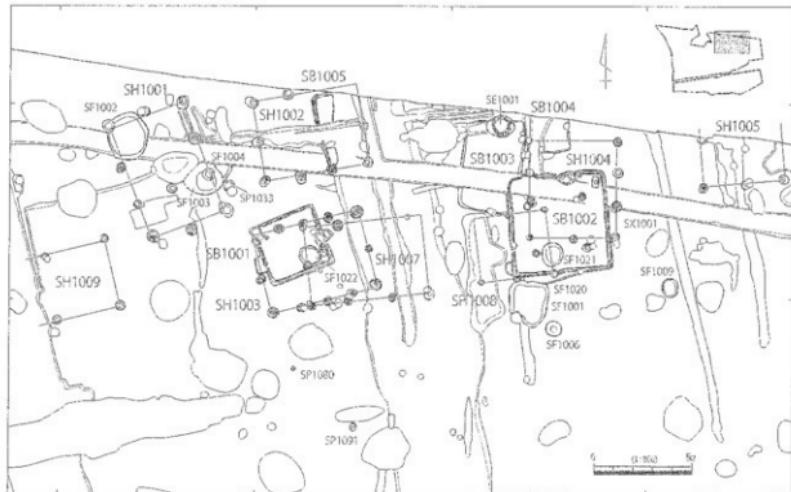
#### SB 1001 (第19図、図版4・14)

平面は $3.3 \times 3.5\text{ m}$ の方形を呈し、主軸は北側で東に約 $69^\circ$ 振れる。現存で検出面から床面までは約 $20\text{ cm}$ の深さで、焼土粒や炭化物を含む暗褐色土が堆積する。壁面に沿って、約 $10\text{ cm}$ の深さの周壁溝が巡らされている。床面には、黄褐色粘質土のブロックを含む暗褐色土が貼られている。いくつか床面で検出された小穴もあるが、支柱穴として捉えられるものは確認されていない。

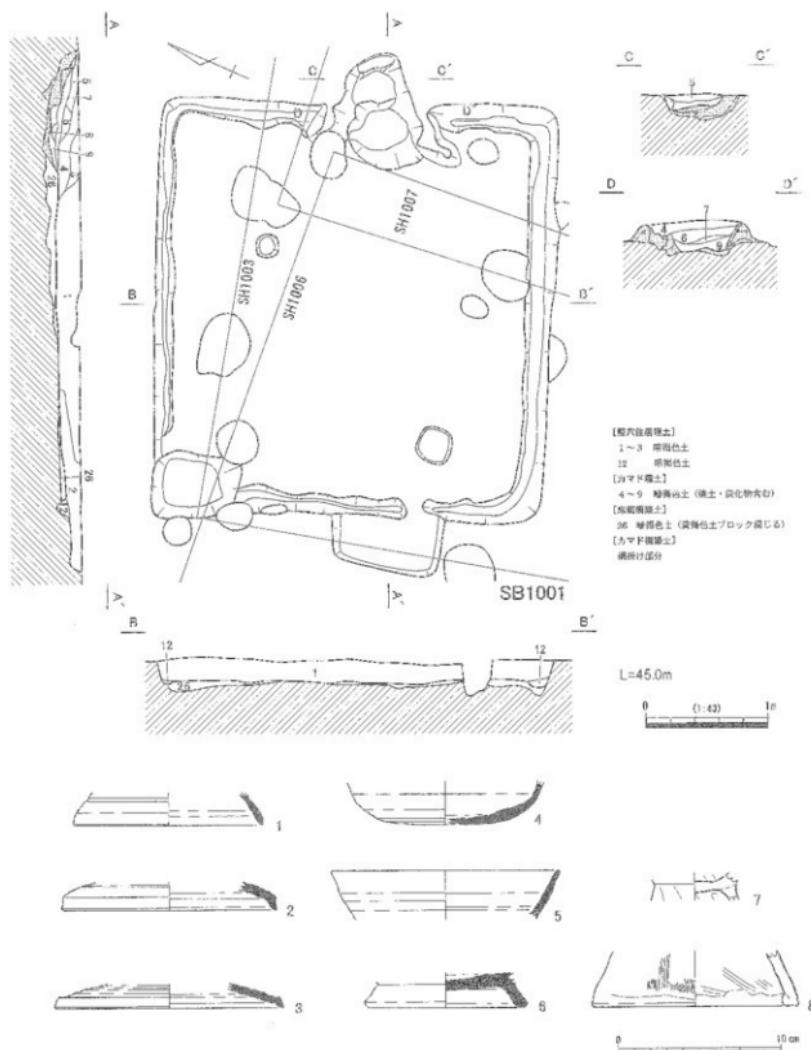
北東隅のほぼ中央には、カマドが設けられている。カマドの規模は、焚き口が幅 $50\text{ cm}$ 、焚き口部から煙道部までの長さが $80\text{ cm}$ である。天井部が確認されていないことから、住居跡の上面は大きく削平されていることが分かる。火床部は円形に約 $10\text{ cm}$ ほど窪み、煙道部はなだらかに立ち上がる。主に暗褐色の粘質土によって構築されており、火床部や煙道部にも貼られていることが確認されている。カマド内部には、被熱による赤化面がほぼ全面に確認された。

住居内の北西隅では、長径 $60\text{ cm}$ ・短径 $45\text{ cm}$ の隅丸方形の土坑が検出された。住居との切り合いは確認されておらず、この部分については床が貼られていないことなどから、住居に伴う施設とみられる。底部から原位置を保つような遺物は発見されていないが、貯蔵穴である可能性も考えられる。また、西側の壁面には、 $40\text{ cm}$ ほど住居の外に向かって突出する形で掘られた、長方形の遺構が検出された。土層を確認する限り住居跡と同時に埋没しており、住居に付随する施設として捉えることができる。カマドの反対側にあたることから、入り口の施設と推測される。

住居内から出土した遺物は、大半が片端のため、固化し得る遺物は少ない(第19図)。1~3は、須

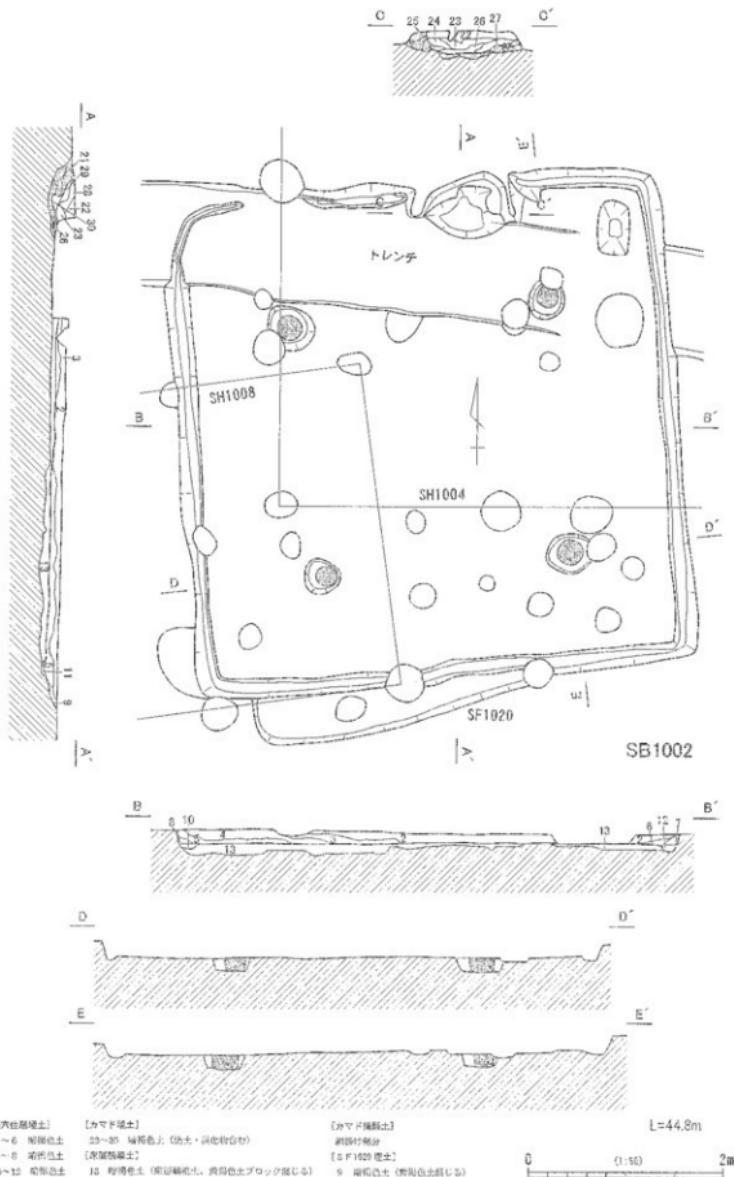


第18図 古代の遺構配置図(1区)

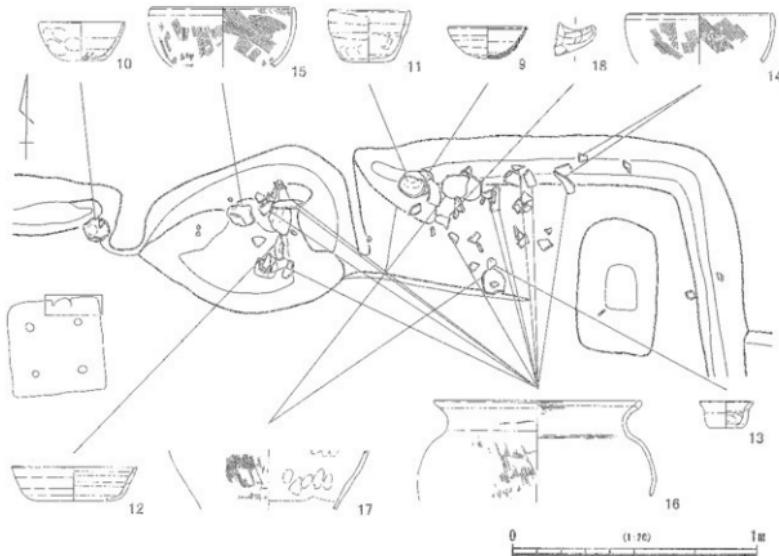


第19図 SB 1001 烟測図・出土遺物

恵器の壊蓋である。4・5は須恵器の壊身で、4は底部、5は口縁部の破片である。6は須恵器の縦・縦頸の高台部。7・8は土師器の台付き壺である。いずれも埋土中からの出土である。土器の年代に幅はあるものの、2・3・5などの遺物から、住居が廃棄された時期の上限は8世紀前半に位置付けられる。



第20図 S B 1002 實測図



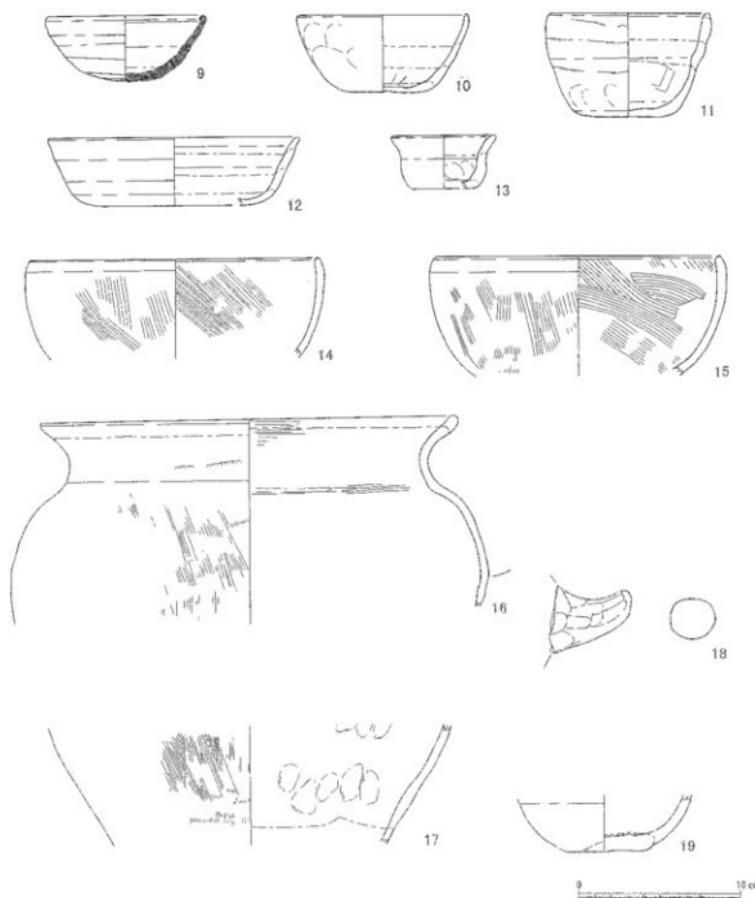
第21図 SB 1002 遺物出土状況（カマド周辺）

## SB 1002 (第 20 ~ 26 図、図版 4・12・13)

SB 1001 の約 9 m 西側に位置する。一辺 5.2 m の正方形で、南北の主軸は北側で西に約 4° 振れる。上面が大きく削平を受けており、深さは現存で床面まで約 10 cm 程度しかない。埋土は、炭化物や焼土粒を含む暗褐色土が堆積する。壁面沿いには、幅 20 cm・深さ 5 cm 程度の浅い馬蹄溝が巡る。黄褐色粘質土のブロックを含む暗褐色土により、床面が構築されている。4 本の支柱穴が検出されている。支柱穴の柱間は 2.5 m で、ほぼ正方形に並ぶ。掘方規模は 35 ~ 50 cm で、深さは 12 cm。柱痕跡も確認されており、その規模は直径 20 ~ 25 cm である。北西の支柱穴は、SH 1004 の柱穴に切られている。

北壁には、中央やや東よりの位置にカマドが設けられている。焚き口部が確認調査のトレントによって掘削されてしまっているが、現存の規模は焚き口付近で幅 90 cm、煙道部まで含めた長さは 70 cm である。壁面及び床面は、暗褐色の粘質土によって構築されており、被熱によって赤化した範囲が部分的に確認された。カマドの東側約 90 cm、住居の北東隅にあたる位置には、短辺 30 cm・長辺 55 cm の隅丸長方形の土坑が検出されている。深さは床面から 30 cm ほどで、断面は楔形を呈する。この土坑の底部に原位置を保つような遺物は出土していないが、貯蔵穴である可能性も考えられる。

遺物は、カマド付近と北西の支柱穴付近から、ある程度まとまった状態で出土している。カマド付近の遺物 (第 21・22 図) は、大きくカマドの脇から出土したものと、カマド内から出土したものに分かれる。カマドの脇からは、西側で土師器の壺 (11) がほぼ完形の状態で 1 点出土している。東側からは、須恵器の壺身 (9) が 1 点と、土師器の壺 (11)、鉢 (14)、把手付き壺 (16)、甕 (17)、把手 (18)、小壺 (13) が出土している。9 と 11 はほぼ完形で、9 の上に 11 が重ねられていた。西側の土師器壺 (10) とほぼ対称的な位置に置かれており、祭祀的な行為に伴うものである可能性も考えられる。16 は



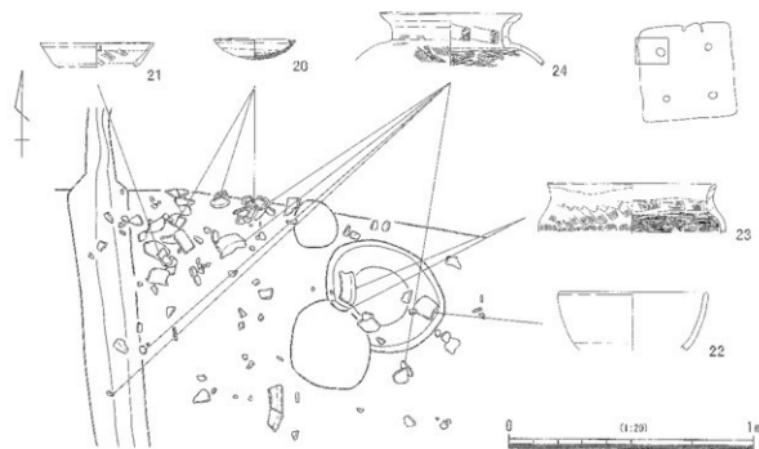
第22図 S B 1002柱穴・床面出土遺物（カマド周辺）

把手が剥離しており、18と同一個体である可能性が高い。また、16については、カマド内からも破片が出土している。大きく分けて、口縁部から窓部までの破片はカマド内から、窓部から体部はカマド脇から発見されている。いずれも床面直上から出土しており、住居の廃絶時期を示す遺物である。

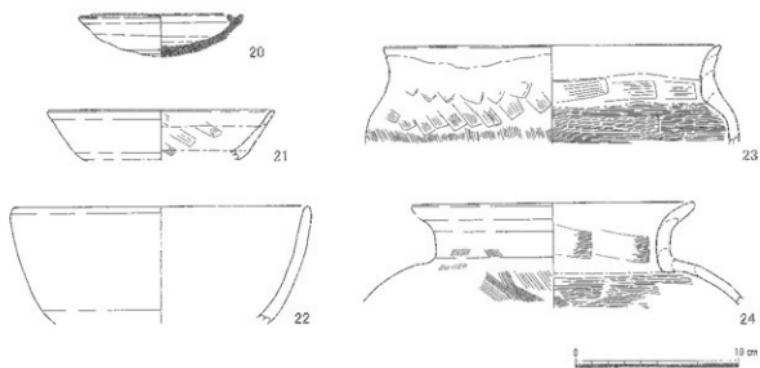
カマド内からは、土師器の环(12)、鉢(15)と先述の把手付き鉢(16)が出土している。12は、表面の摩滅が著しいが、内外面の全面に赤彩が確認される。15は、カマドの脇から出土している14と形状や技法ともにはほぼ同一である。15が全周の約4分の1程度、14がその半分程度の破片である。接合面が存在しなかったために別個体としたが、同一個体である可能性も考えられる。

南東の支柱穴からは、土師器の坏（19）が出土している。建物の構築年代の下限を示す遺物の可能性もあるが、柱痕跡と掘方の墨土のどちらから出土したのかについての記録がないため、不明とせざるを得ない。

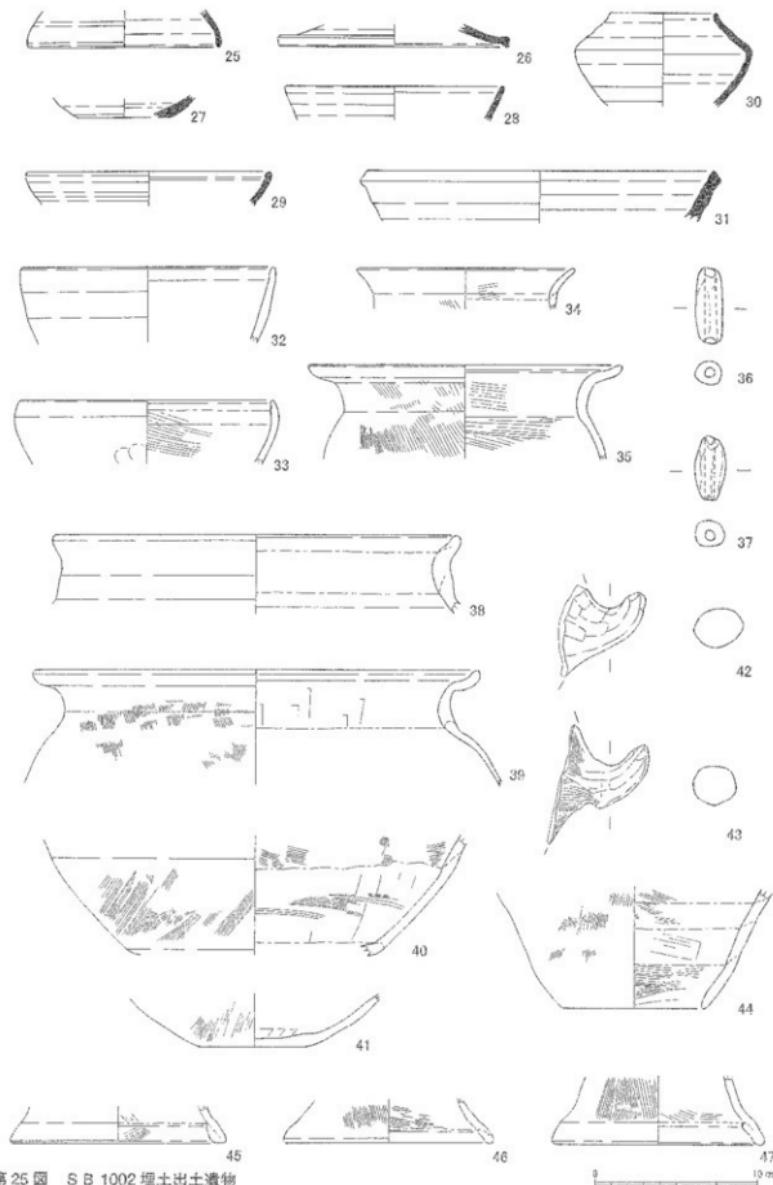
北西の支柱穴付近（第23・24図）からは、須恵器の坏身（20）と、土師器の坏（21）、鉢（22）、壺（23）、壺（24）が出土している。20は一部欠損しているものの、ほぼ完形。21は、全局の5分の1程度の破片。24は口縁部から肩部にかけての破片であるが、比較的広範囲に散らばる状態で出土している。22と23は、支柱穴の掘方上面から出土している。いずれも、床面直上からの出土である。



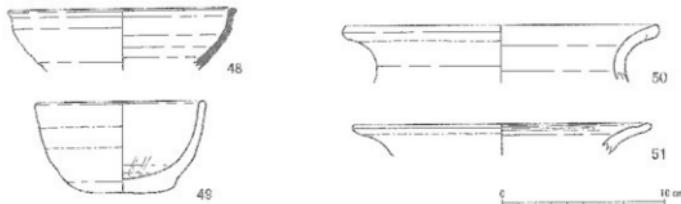
第23図 SB 1002 遺物出土状況図（北西部）



第24図 SB 1002 床面出土遺物（北西部）



第25圖 SB 1002 埋土出土遺物



第26図 SB 1002確認調査出土遺物

埋土内からも、比較的多くの遺物が出土している(第25図)。25~31は須恵器である。25・26は壺蓋で、口縁部の破片。27~29は壺身。31は壺または甕の口縁部で、口縁の復元径は21cm。30は短甕壺である。32~47は土師器。32・33は鉢で、いずれも口縁部の破片。32は摩滅が著しく調査が確認できないが、32の内面にはハケ目調整が確認される。30・37は土錘。34は小型の甕の口縁部。38は甕で、口縁部はあまり外反せず、内外面ともにナデ調整が施されている。35は口縁部が大きく外反する中腹の甕。内外面ともにハケ目調整され、腹部より上方はナデ調整によって仕上げられている。39は大型の甕で、直立する頸部から大きく外に開き、口縁端部は内湾する。40・41は甕の底部。42・43は甕または瓶の把手である。45~47は台付き甕の脚部で、いずれも下端を折り返して成形している。44は瓶である。

また、これらの他に、確認調査の際に出土した遺物もある(第26図)。48は須恵器の高壺。底部から急に立ち上がり、口縁部でわずかに外反する。49は土師器の壺である。50~51は土師器の甕で、口縁部の破片。出土状況は明らかではないが、トレンチがちょうどカマドの前面にあたっていることから、49はカマドの脇に置かれていた遺物である可能性も考えられる。

これらの遺物から、SB 1002は7世紀末葉に廃棄され、8世紀前半頃までにはそのほとんどが埋没していたものと推測される。

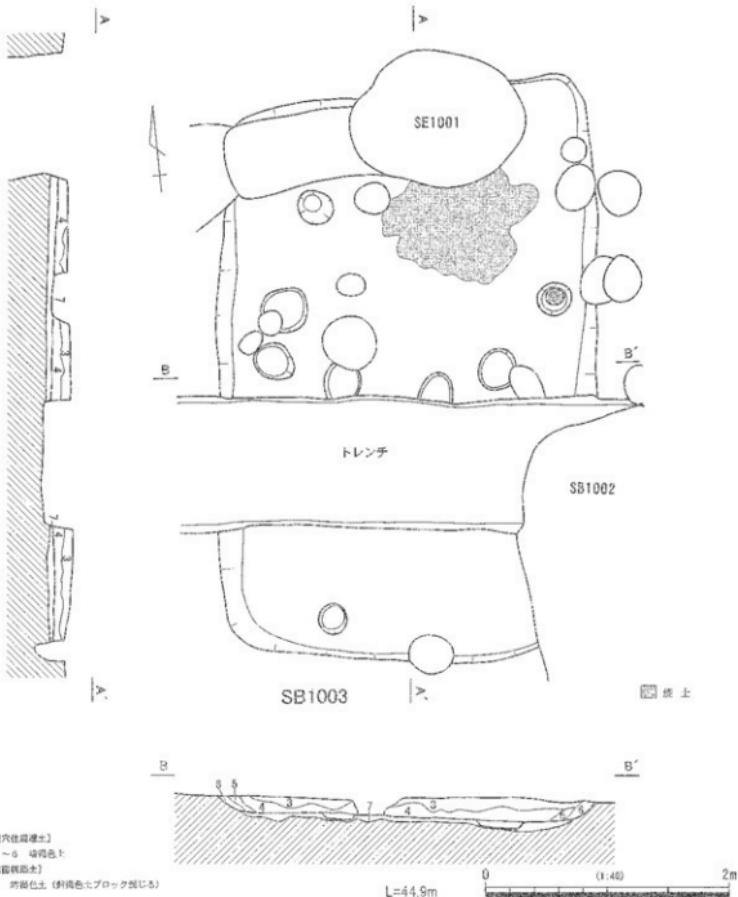
#### SB 1003(第27・29図、図版5・14・15)

SB 1002の北東に位置する。平面形状は、東西3.1m・南北4.8mの長方形を呈する。南北方向を主軸とすると、その方向は北偏で約8°東側に振れる。床面までの深さは検出面から約15cmで、焼土粒を含む暗褐色土が堆積していた。床面は掘方の凹凸を埋めるように、黄褐色粘質土(地山)をブロック状に含む暗褐色土によって構築されている。

中央のやや南寄りの部分には、東西方向に確認調査の際のトレンチが掘られ、北辺のほぼ中央部分はSE 1001により失われている。南京隅の部分がSB 1002に切られており、SB 1002に先行する住居であることが確認されている。床面にはいくつかの小穴が検出されているものの、その配置に規則性は見られず、支柱穴として明確に認識できるものはない。

カマドは検出されていないが、SE 1001の南側に焼土粒の集中範囲が検出されており、SE 1001によって失われている部分にカマドが存在した可能性が高い。

遺物は少なく、埋土中から土師器の破片が数点出土している程度である。そのほとんどは小片で、図化できるものは、土師器の甕1点のみである(第29図-52)。口縁部の破片で、表面の摩滅が著しいが、内外面ともにナデ調整によって仕上げられているのが確認される。口縁部は斜め上方へと開き、端部が



第27図 SB 1003 実測図

僅かに摘み上げられている。

形状の認識できる遺物が1点のみであり、なおかつ床面に伴う遺物でないため、住居の年代については明確でない。ただし、SB 1002と切り合い関係が存在することから、少なくともSB 1002が建てられる以前には既に廃絶し埋没していたとみて間違いない。SB 1002および、後述するSB 1004との切り合い関係から、SB 1003の年代は7世紀後半と推測される。

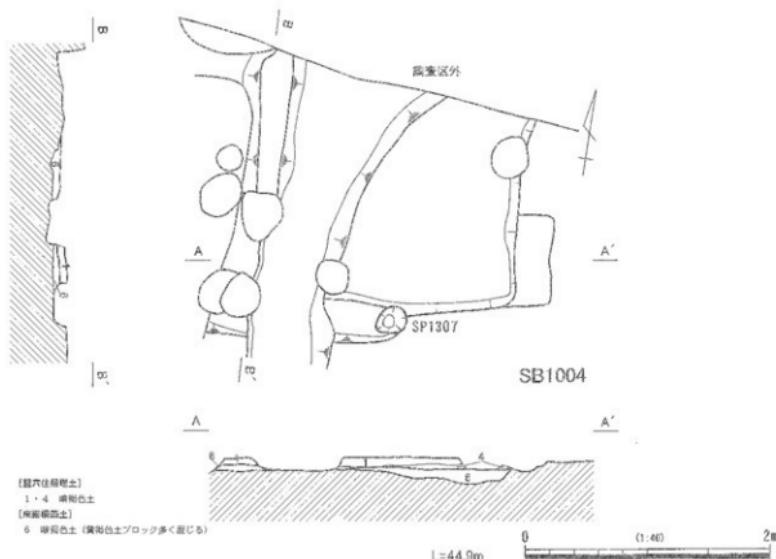
## SB 1004 (第 28・29 図、図版 5・14)

SB 1003 の北東側に位置する。北側は調査区外へと続く。西側の大半が擾乱によって失われているため、規模については不明。東南隅の部分が直角に近い形で屈曲していることから、平面形は方形ないしは長方形であると推測される。床面までの深さは、検出面から約 10 cm と浅い。埋土は暗褐色土で、焼土紋を含んでいる。床面は黄褐色粘質土（疊山）を含む暗褐色土によって構築されている。周壁溝や支柱穴と判断できる遺構は検出されていない。西側の大半が擾乱で失われているため、切り合ひ関係でやや不明瞭な点もあるが、擾乱の影響を受けていない部分において、SB 1003 が SB 1004 の床面を切っている様子が確認されている。

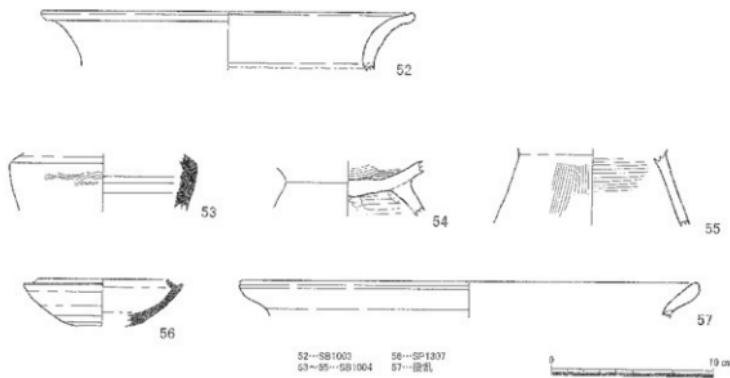
遺物は、埋土中から数点出土している。小片が多く、國化できるのは 3 点のみである（第 29 図）。53 は、須恵器のはう。肩部の破片で、波状文が確認される。54・55 は土師器の台付き壺。54 は底部と脚部の内面にハケ目がみられる。外面は摩滅が著しく観察できない。55 は脚部の破片で、内面に横方向、外面に縱方向のハケ目がみられる。この他に、SB 1004 の遺物かどうか明らかではないが、擾乱からは土師器の壺（57）も採取されている。

また、SB 1004 と切り合ひ関係を持つ遺構としては、小穴 SP 1307 がある。SP 1307 は、SB 1004 を切って掘られており、埋土中から須恵器の壺身（56）が出土している。口縁の後元径は 8 cm と小型で、口縁部の立ち上がりも低い。年代としては、7 世紀後半に位置付けられる。

SB 1004 の年代については、参考となる出土遺物は乏しいが、後出する SP 1307 の年代から、少なくとも 7 世紀の後半には、既にそのほとんどが埋没していたものとみてよいであろう。



第 28 図 SB 1004 対測図



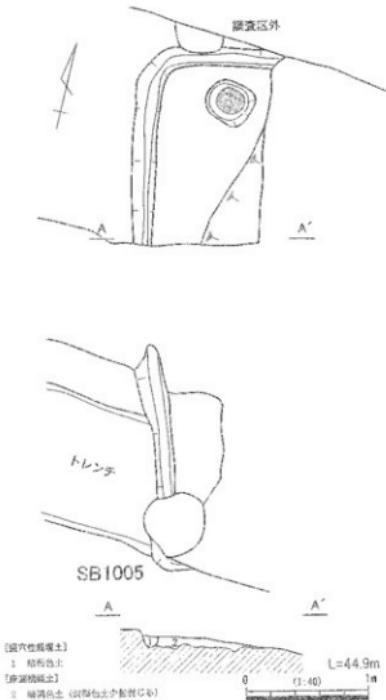
第29図 SB 1003、1004、SP 1307出土遺物

## SB 1005（第30図、図版6）

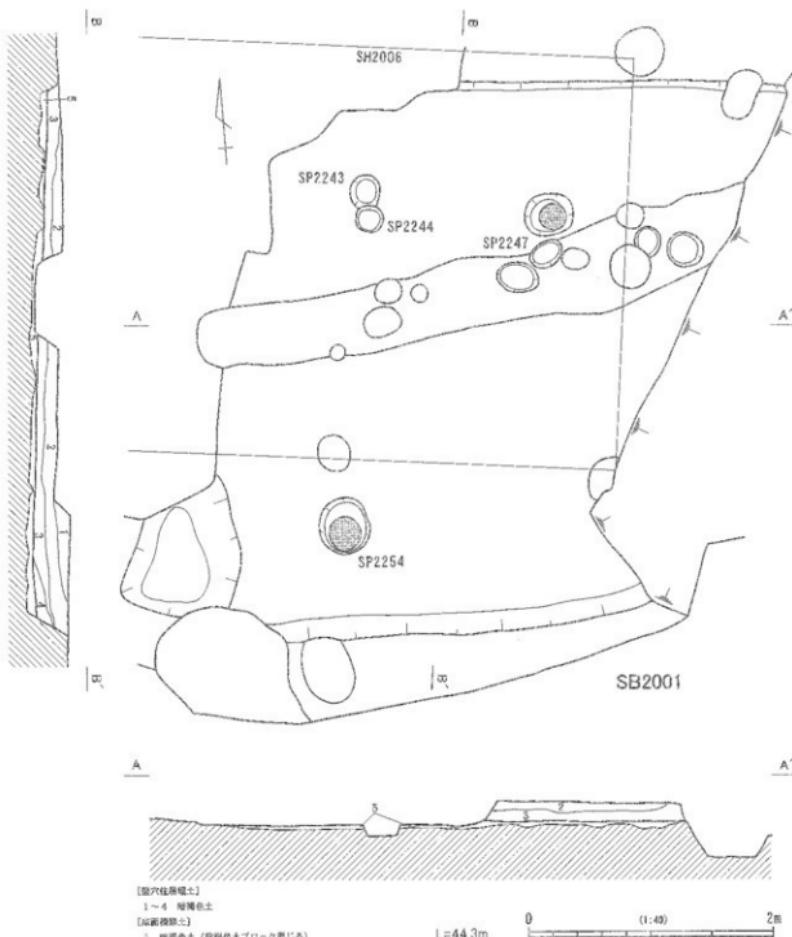
SB 1001の北側に位置する。大半が大規模な搅乱で失われており、残存されたのは西壁沿いの部分のみである。北側と南側で東に屈曲する部分がみられることから、平面形は方形または長方形であると推測される。

南北の規模は6.8m、東西の規模は不明である。搅乱直下で床面が検出されており、床面も搅乱によって東へ向かって斜めに削られている。壁沿いには、幅12cm・深さ8cmの周壁溝がみられる。北東部で小穴が検出されているが、支柱穴であるかどうかは明らかでない。

遺物が出土していないため、年代については明らかでないが、8世紀後半の掘立柱建物SH 1002の柱穴が、南西隅の部分を切っていることから、これに先行する遺構であることは確実である。



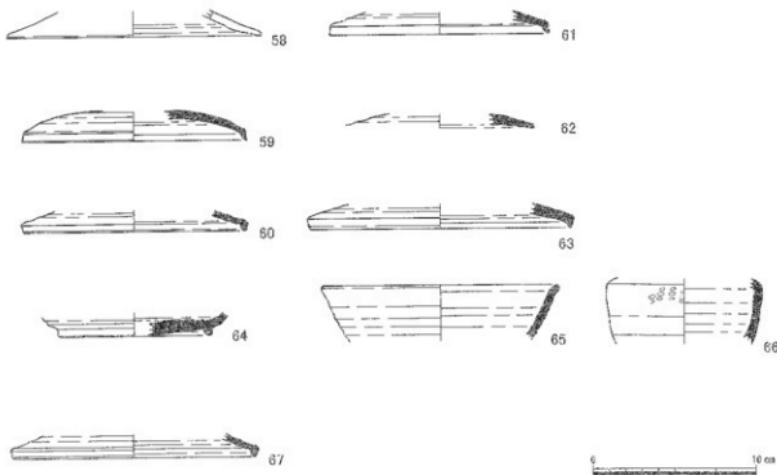
第30図 SB 1005実測図



第31図 SB 2001 窟測図

## SB 2001 (第31・32図、図版7・14)

2区のほぼ中央部分で検出されている。東側と西側は、搅乱によって失われている。南北の規模は4.2mである。検出面から床面までの深さは約15cmで、小標を含む暗褐色土が堆積していた。床面は、黄褐色粘土(地山)をブロック状に含む暗褐色土によって構築されている。周壁溝は、検出されていない。床面では、いくつかの小穴が確認されている。明確な支柱穴は見出せないが、SP 2254と2243または2244などは支柱穴である可能性も考えられる。カマドは検出されていない。



第32図 SB 2001 出土遺物

遺物は、須恵器と土師器が出土している（第32図）。58は土師器の蓋で、摩滅によってほとんどが失われてはいるが、内外面に赤影が確認される。59～63は須恵器の壺蓋。59・61はやや外向きに、60・63はやや内向きに、口縁部を下方へ折り曲げている。64・65は須恵器の壺である。64は底部の中央がやや張り出す有台壺。65は小さな平底または丸底の無台壺。66は須恵器のはう。肩部から体部にかけての破片で、体部上方には刺突文が施されている。以上はいずれも、埋土中からの出土である。

67は須恵器の壺蓋で、住居内で検出されたS P 2243から出土している。S P 2243は柱痕跡が確認されておらず、恐らくは柱の抜き取り穴であろう。柱の抜き取り時、またはその後に混入した遺物であると推測される。

これらの遺物から、SB 2001は8世紀の前半には、ほぼ埋没していたものと推測される。

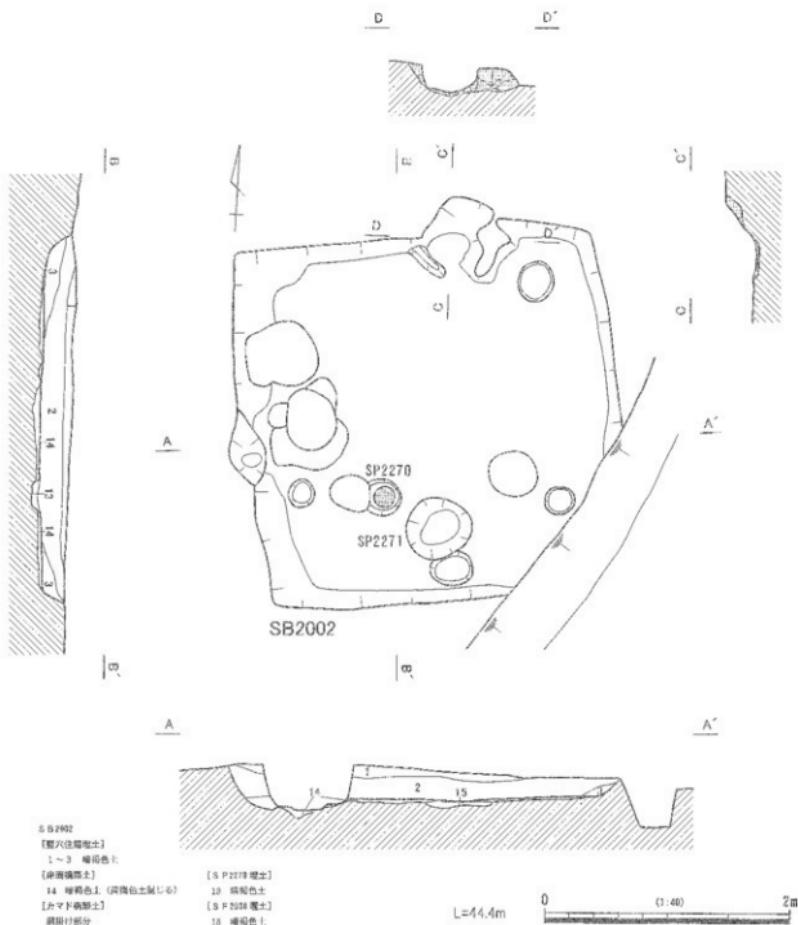
#### SB 2002（第33～36図、図版8・13）

SB 2001の北京側に位置する。南東隅は、搅乱によって失われている。

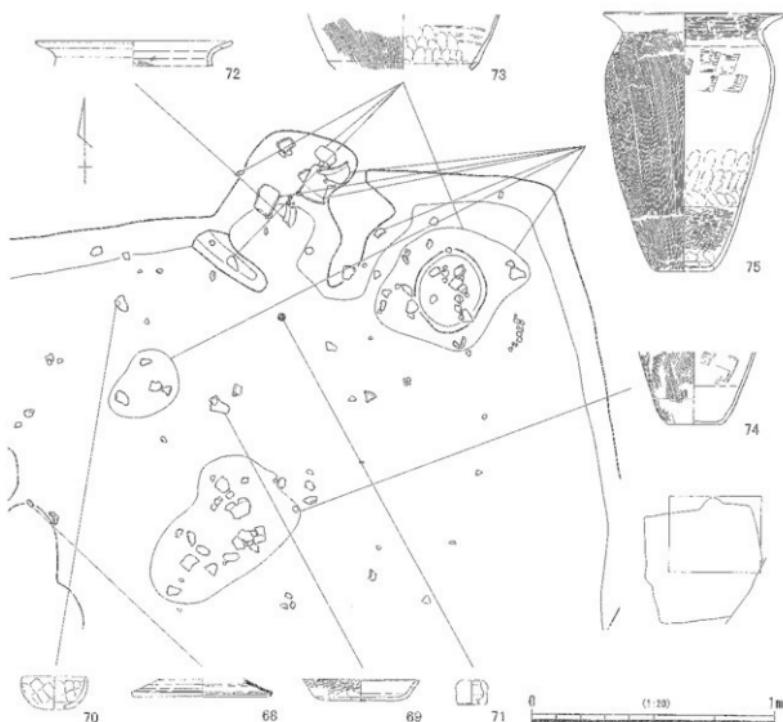
一辺3.0mの正方形で、南北軸は北側で約8°西に振れる。床面までの深さは検出面から25cmで、炭化物を含む暗褐色土が堆積していた。

北壁の中央やや東よりの位置に、カマドが設けられている。カマドは、暗褐色の粘質土を積み上げて構築されている。火床及び煙道部のほぼ全面が、被熱によって赤化していた。カマドの脇には、径30cm程の土坑が検出されており、貯蔵穴の可能性が考えられる。床面にはいくつかの小穴が検出されているが、配置が不規則であり明確な支柱穴は認められない。周壁溝は検出されていない。

床面の下層からは、住居の建造以前に掘られた土坑S F 2038が検出されている。



第33図 SB 2002実測図

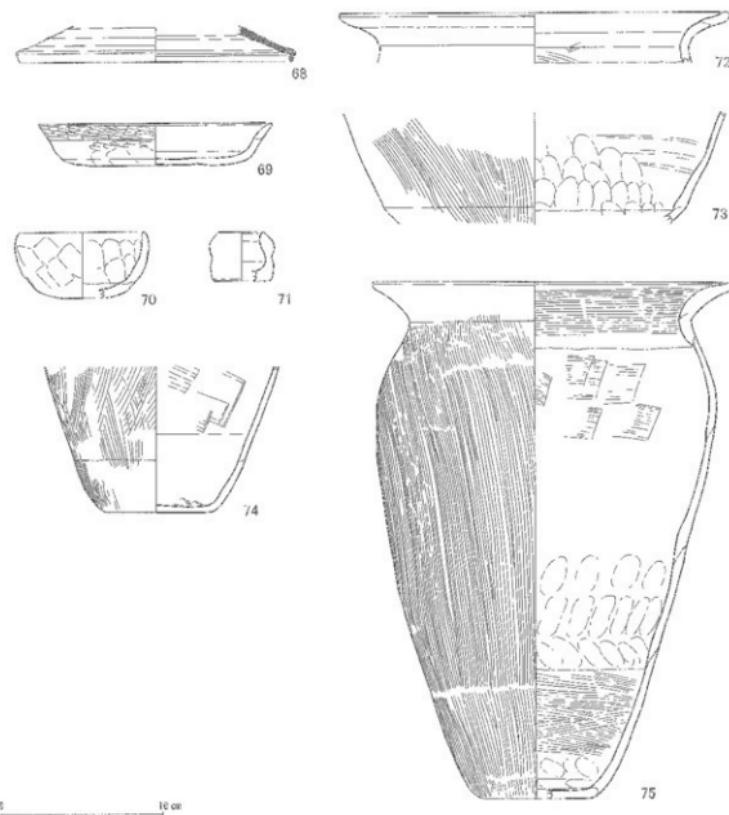


第34図 S-B 2002 遺物出土状況図

遺物としては、床面直上の遺物が、カマド付近である程度まとまって出土している(第34・35図)。

カマド内からは、土師器の壺(72・73・75)が出土している。72は口縁部の破片である。口縁部は斜め上方へ開き、内外面はナデ調整によって仕上げられる。頸部の内面には横方向のハケ目が確認される。73は体部下半の破片である。外面はハケ目調整が施されており、ハケ目調整の後に指で押されている。カマドの脇からも破片が出土している。75は全体が復元できる。底部からやや斜め上方へ立ち上がり、肩部で少し広くなった後、頸部へ向かってすぼまる。口縁部は斜め上方へ開く。口縁部から頸部は外面がナデ調整、内面は横方向のハケ目調整。体部の内面の上半は板ナデ、下半はハケ目調整。口縁部から肩部にかけての部分がカマド内から、体部から底部にかけてはカマドの脇から出土している。

カマドの周囲からは、他に須恵器(68)と土師器(69~71・74)が出土している。68は須恵器の壺蓋で、カマドの南東1.2mの場所から出土している。69は土師器の壺。内外面の全面に、赤彩が施されている。70は土師器の小型の壺。カマドの西側の脇から出土している。71はミニチュア土器。カマドの正面から出土している。74は土師器の壺。カマドから約1cm南の場所で、破片がまとめて出土し

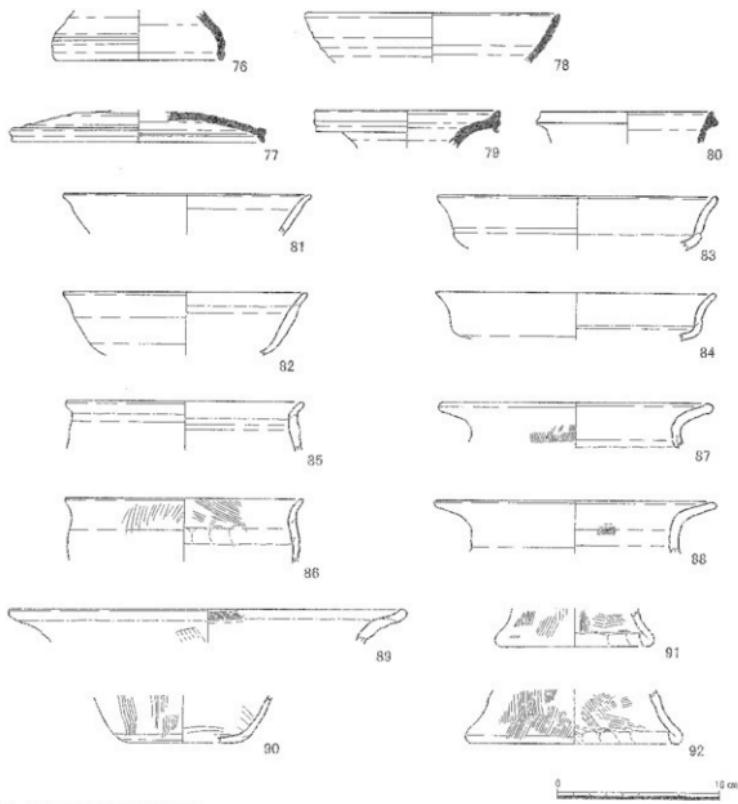


第35図 S B 2002床面出土遺物

ている。体部下半から底部にかけての破片であり、上半部分は出土していない。

他に、埋土中からも比較的多くの遺物が出土している（第36図）。76～80は須恵器、81～92は土師器である。76・77は壺蓋。78は壺で、小さな平底または丸底となる無台壺。79・80は壺の口縁部の破片。81・82は壺で、内外面に赤彩が施されている。83・84は皿。口径に比べて浅く、底部から口縁部に向かって大きく外反する。内外面ともに赤彩が確認される。85・86は小型の甕。口縁部があまり聞かない。いずれも細片であるが、形態や色調が近似しており、同一個体の可能性もある。87・88は中型の甕。口縁部が斜め上方へ大きく開く。89は大型の甕。口縁部が斜めに開き、内面にはハケ目調整が確認される。90は甕の底部。91・92は台付き甕の脚部。下端を内側に折り曲げて成形されている。

年代としては、床面直上から出土している遺物は、8世紀前半に位置付けられる。埋土から出土している遺物は、多少古いものも含まれてはいるが、8世紀の前半から中頃にかけてのものが大半である。



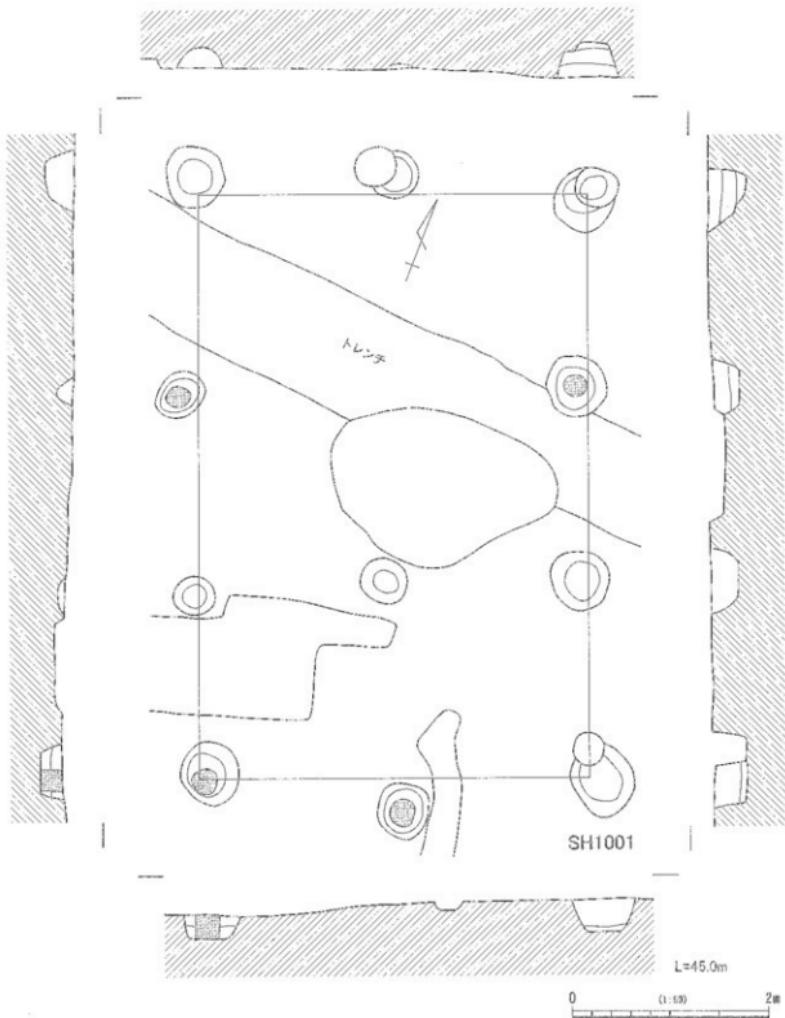
第36図 SB 2002 埋土出土遺物

よって、SB 2002は8世紀前半に廃棄され、中頃には埋没していたものと考えられる。

## (2) 掘立柱建物

### S H 1001 (第37図、図版6)

1区の北東部に位置する。2×3間の総柱建物。南北棟で、南北方向の軸は北側で21°西に振る。建物規模は3.96 m×6.0 m。柱間は梁間が1.98 m、桁行が2.0 mの等間。多くは柱の抜き取り穴であるが、4つの柱穴で柱痕跡が検出されている。柱痕跡の規模は、直徑22~28 cm。塀方規模は、上面で直徑44~62 cm、深さ22~25 cmである。北西隅の柱穴がS F 1002を、西側柱列の北から3番目の柱抜き取り穴がS F 1003を切っている。

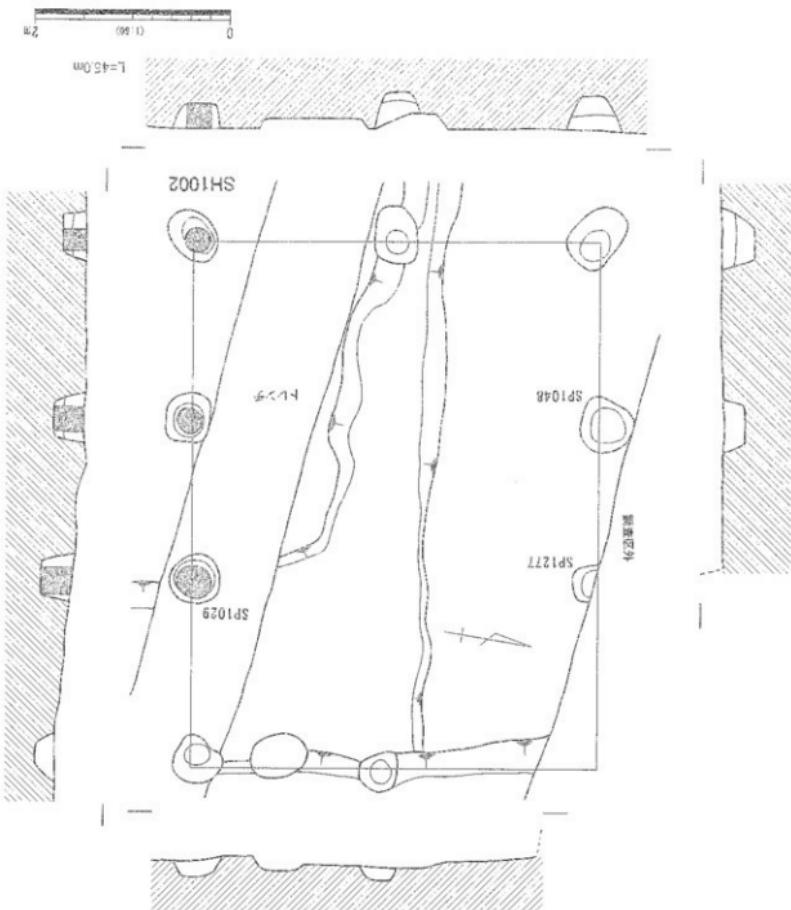


第37図 SH 1001 実測図

遺物としては、いくつかの抜き取り穴から土師器の壺が出土している。いずれも固化できないほどの細片であるため、年代は明確ではないが、少なくとも古代の範疇では捉えることができる。

後述するように、先行する S F 1002 は 7 世紀末葉～8 世紀前半、S F 1003 が 8 世紀代に位置付けられる。よって、SH 1001 の築造年代の上限は、8 世紀に位置付けられる。

第38圖 SH 1002號測圖



SH 1002 (第38圖、圖版6) S H 1002號測圖  
S H 1001 の東側に位置する。2×3層の頁岩帶。中央部分が泥岩化して火成岩化した火成岩帶。周辺部は泥岩化した火成岩帶。北東の開拓地調査区外に存在。南北方向の範囲は、北側で東西約10°、南側で南北約5.4mで非常に狭い。柱状体の厚さは2.0~3.7m。柱状体の平面形状は20.7m、幅行は18.0mである。周辺部は泥岩化した火成岩帶。東西約4.14mで非常に狭い。柱状体の厚さは2.0~3.7m。柱状体の平面形状は24~37cm。柱状体の直径は5.5~6.0cm。柱状体の高さは25~32cm。他の柱状体、火成岩化した火成岩帶。周辺部は泥岩化した火成岩帶。南北約6.0mで非常に狭い。南北方向の範囲は、南北約10.5m、東西約2.5~3.2m。他の柱状体、火成岩化した火成岩帶。

遺物は、図化できないほどの細片であるが、5点の遺物が出土している。南側の柱穴S P 1029の掘方からは、土師器の壺と甕が出土している。壺の内外面には赤彩が施される。他に、柱の抜き取り穴S P 1048とS P 1277の埋土からは、土師器の甕が出土している。

S P 1029出土の土師器の壺が積築年代を示しているとすれば、その上限は8世紀の前半頃までの年代で押さえることができよう。

#### S H 1003（第39図）

S H 1002の南側に位置する。側柱建物で、 $2 \times 4$ 間の東西棟。南北方向の軸は、北側で約14°西に振れる。建物規模は、梁間が4.12mで桁行が5.2m。北西隅の柱が検出されていないが、おそらくは調査時の見落としある。柱間には多少ばらつきがみられる。北側柱列は、西から1.4m + 1.26m + 1.34m + 1.6m。南側柱列は、西から1.4m + 1.6m + 1.2m + 1.4m。西側柱列は、北から2.3m + 1.82mに復元される。東側は2.06mの等間。ほぼ同じ位置に後世の小穴が重なるS P 1108を除き、他の全ての柱穴で柱痕跡が確認されている。柱痕跡の直径は18~30cm。掘方の形状は円形。掘方規模は、上面の直径43~62cmで、隅柱が他に比べ一回り大きい。搅乱で上面が削平されているものもあるが、柱穴の深さは平均20cm~50cm。

他の遺構との切り合いとしては、北側柱列のP 1がS H 1007の柱穴P 2に切られている。このことから、S H 1007に先行する建物であることは明らかである。また、柱穴P 1とP 3がS B 1001の床面で検出されており、調査時には上面で切り合い関係が確認されていない。ただし、埋土が共に暗褐色土のために切り合いの検出が困難であるため、検出時に見落とされた可能性が高い。S B 1001の床面を掘り抜いていることから、むしろS B 1001の埋没後の建物と考え方が妥当であろう。

遺物としては、須恵器や土師器の小破片がいくつか出土しているが、図化できるものは第39図-93のみである。93は土師器の甕で、口縁部の破片である。P 3から出土している。外面は横方向のナデ調整。内面については摩滅が著しく調整等は不明である。他に柱穴S P 1005、1024、1026、1108、P 1から、土師器の甕の小破片が出土している。須恵器は、S P 1005から壺蓋とみられる破片が出土しているのみである。年代については、おおよそ8世紀代であろう。

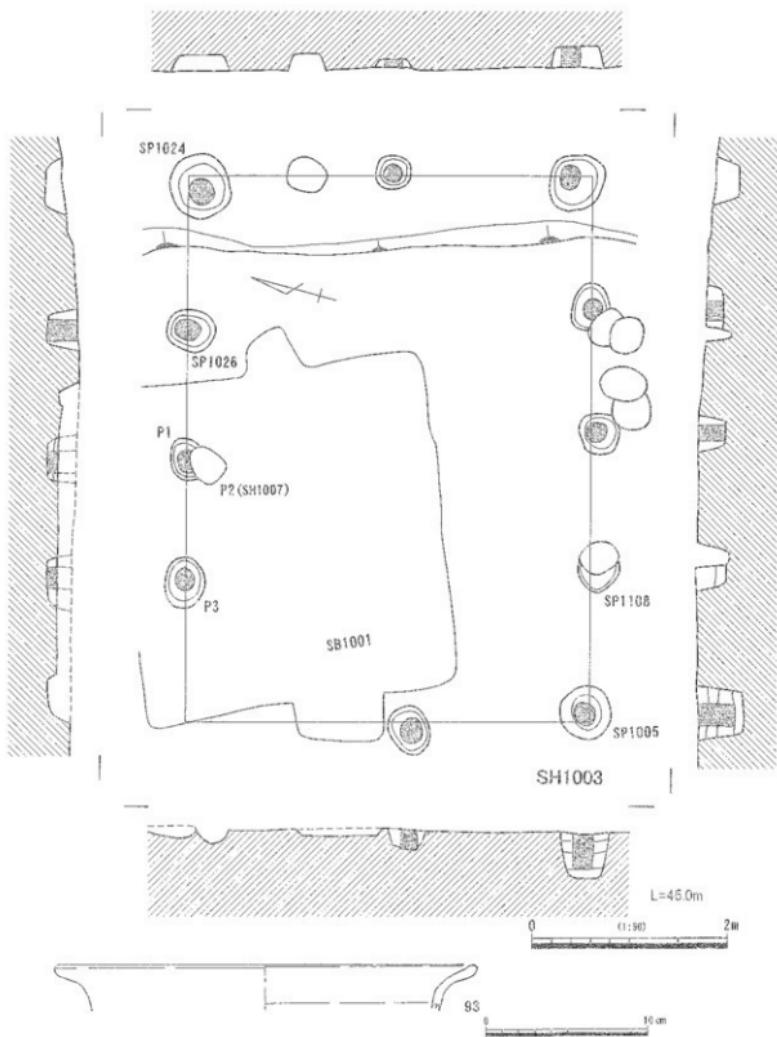
先行するS B 1001の埋没年代が8世紀前半を上限とすることから、S H 1003はそれ以降に建造された建物と推測される。

#### S H 1004（第40図）

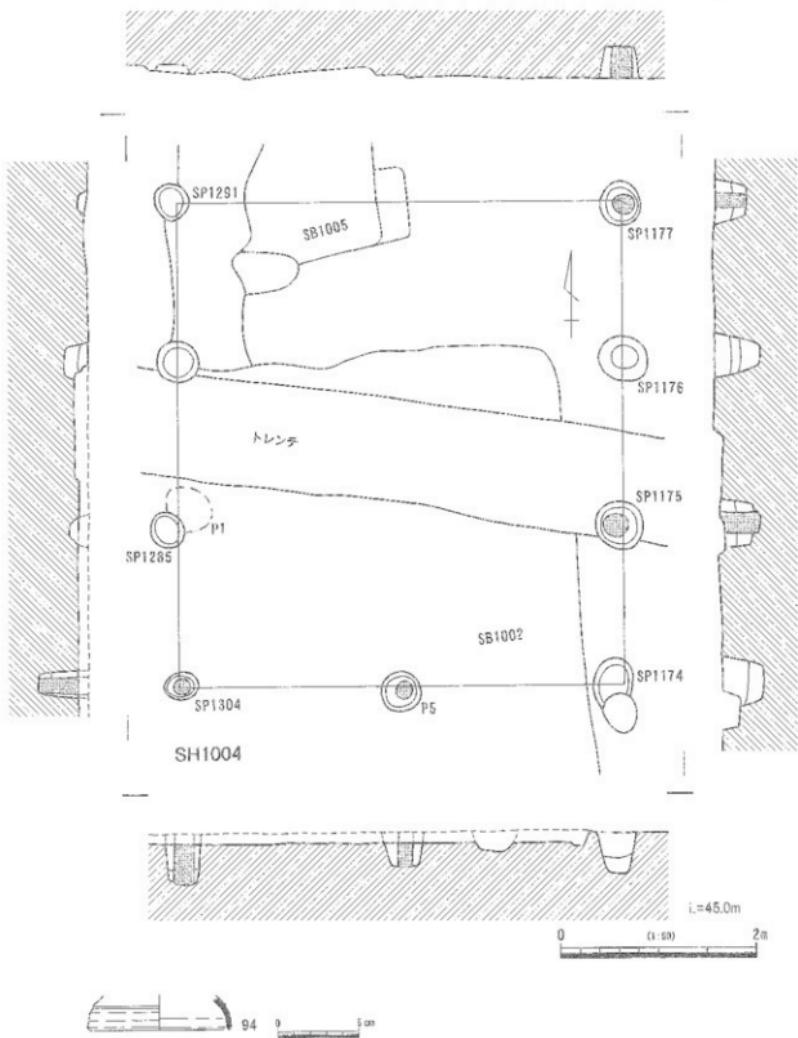
S H 1003の東側、S B 1002とやや重複した場所に位置する。側柱建物で、 $2 \times 3$ 間の南北棟。建物規模は梁間が4.4m、桁行4.98m。南北方向の軸はほぼ真北。柱間は、西側柱列でややばらつきがみられ、北から1.66m + 1.48m + 1.84m。東側は1.66mの等間。梁間は、南北柱列ともに2.2mの等間である。柱穴S P 1304とP 5、S P 1175、1177で柱痕跡が確認されている。柱規模は、直径19~26cm。掘方はほぼ円形。掘方規模は、上面での直径35~50cm、深さが25~43cm。他は全て柱の抜き取り穴である。

S B 1002と重複する部分の柱穴は、S B 1002の床面で検出されている。しかし、S H 1004の柱穴S P 1285が、S B 1002の支柱穴P 1を切っていることから、S H 1004の方が後とする建物であることは間違いない。S H 1003と同様に、上面での検出時に見落とした結果とみてよいであろう。

遺物は、土師器の細片が比較的多く出土しているが、ほとんどが甕の体部の小片であり、図化できたのは須恵器の1点のみである（第40図）。94は須恵器の壺蓋である。S P 1285から出土している。口縁部の破片で、口縁部の復元径が8.4cmと小型。また、須恵器としては、図化できない小片ではあるが、もう1点壺の底部が、S P 1177から出土している。柱痕跡と掘方のどちらから出土したかについては、

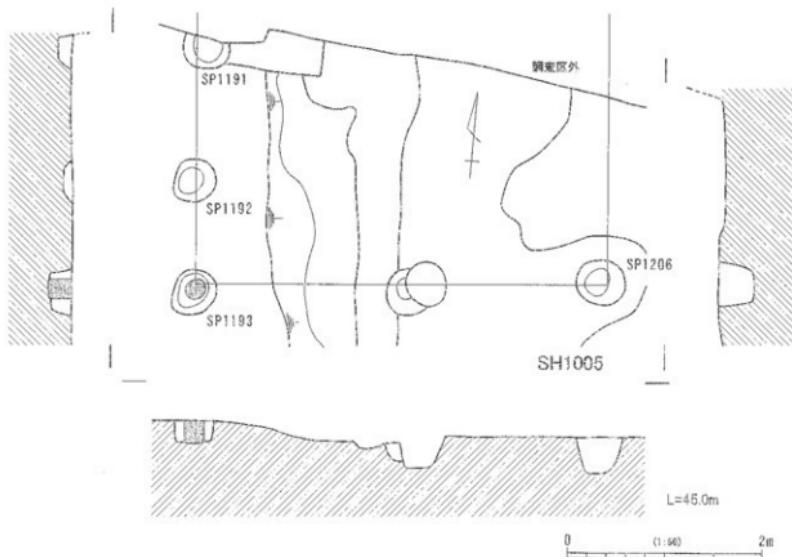


第39図 SH1003実測図・出土遺物



第40図 SH 1004 実測図・出土遺物

記録が無いため不明。高台部の下端が欠損しているが、低い高台が付くものと推測される。94は7世紀末茶、壺の破片はおおむね8世紀代に位置付けられる。



第41図 SH 1005 実測図

先述のように、SH 1004 に先行する SB 1002 の埋没年代は、8世紀の前半に位置付けられる。よって、SH 1004 の築造年代は、8世紀前半以降とみてよい。この年代を遡る須恵器の坏壊（94）は、おそらく柱穴に混入した SB 1002 に伴う遺物であろう。

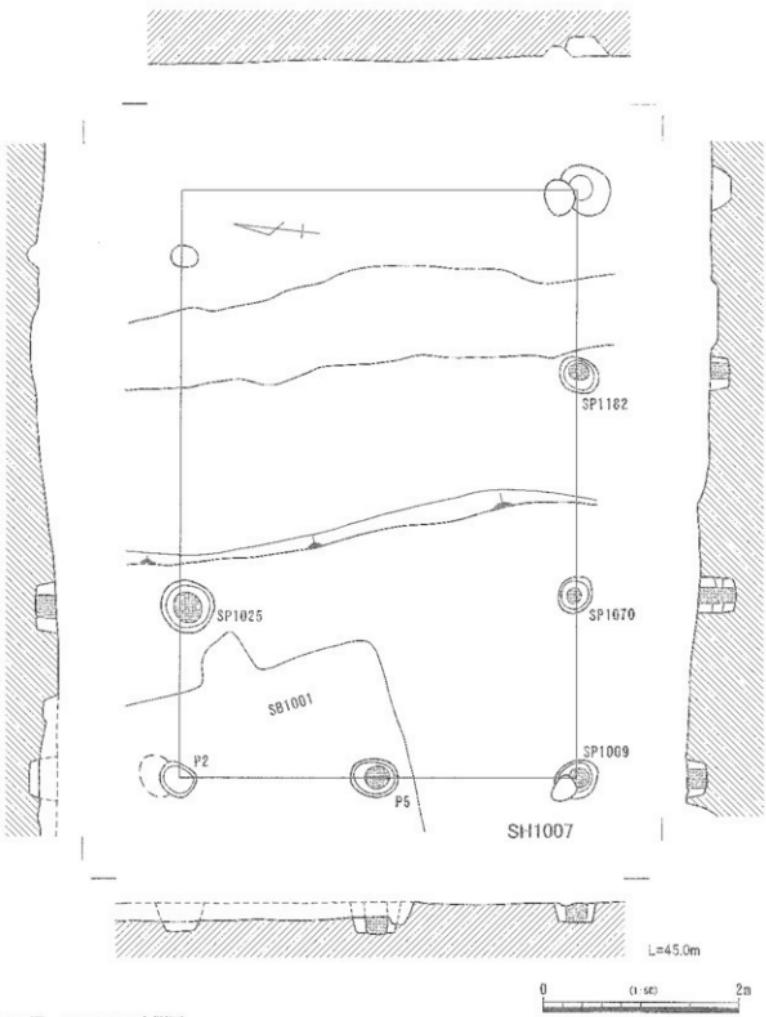
#### SH 1005（第41図）

SH 1004 の東に位置する。側柱建物で、北側は調査区外へと続く。東西に2間、南北には1間検出されている。南北軸は北側で西に45°振れる。西側柱の柱間は2.4mで、南側柱は2.1mの等間である。SP 1193において、柱痕跡が検出されている。柱痕跡の大きさは直径22cm。掘方はやや楕円形で、上面の長径が50cm、深さは22cm。

遺物は、柱穴SP 1193の掘方と、柱抜き取り穴SP 1206から土師器の小片が、各1点出土しているのみである。いずれも壺の体部で、固化できないほどの細片である。SH 1005については、詳細な年代を知り得ないが、少なくとも古代の範疇に収まる遺構であることは間違いないであろう。

#### SH 1007（第42図）

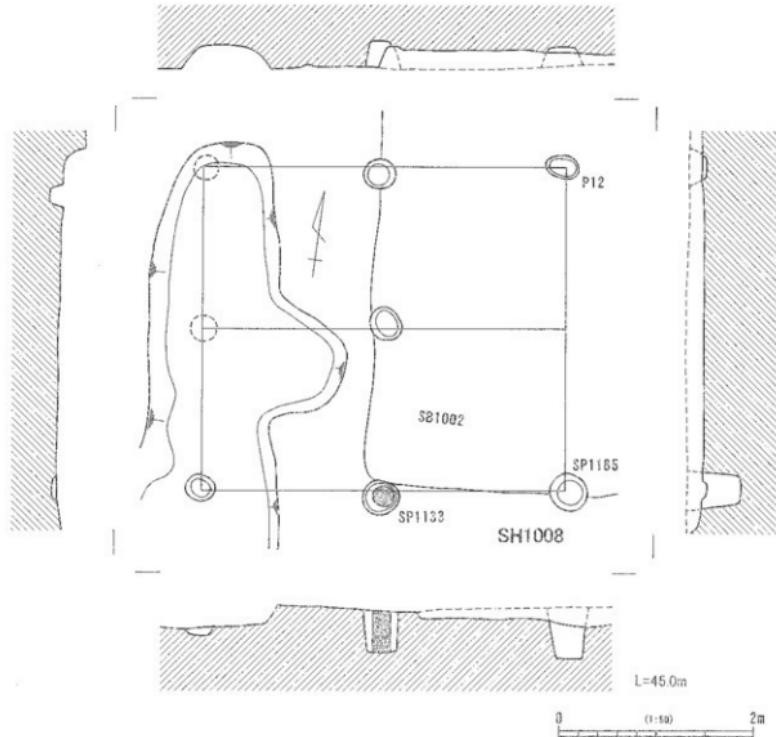
SH 1003の東側に位置する。側柱建物で、2×3間の南北軸。北東部の柱穴は、搅乱によって失われている。建物規模は、梁間が4.04m、桁行は6.04m。南北軸は、北側で65°西へ振る。柱間は、梁間が2.02mと等間であるが、桁行は1.86m+2.32m+1.86mと両脇の柱間がやや狭い。柱穴SP 1009と1025、1070、1182、P 5において、柱痕跡が検出されている。柱痕跡の規模は、直径16~32cm。掘方の形状は、円形または楕円形である。掘方規模は、上面で長径40~52cm。搅乱によって上方が削



第42図 SH 1007 実測図

平されている柱穴もあるが、深さは 18 ~ 39 cm。柱抜き取り穴 P 2 が、SH 1003 の柱穴 P 1 を切っていることから、SH 1003 より新しい建物であることが分かる。

遺物としては、いずれも細片で図化できるものはない。SP 1070 の掘方からは、須恵器が出土している。有台坏の底部の小片と推測される。他には、P 5 と SP 1009, 1182 から、土師器の小片が 1 ~



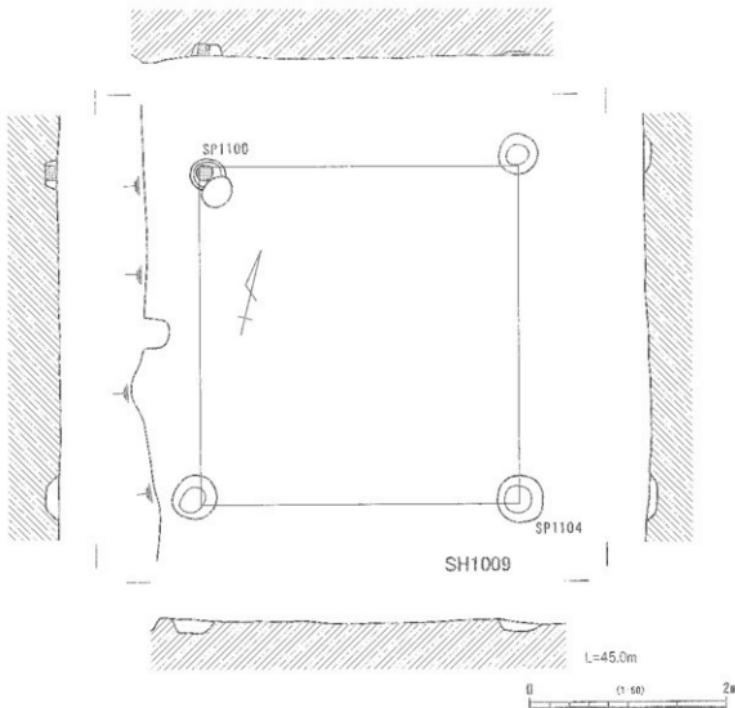
第43図 SH 1008 実測図

2点出土している程度である。先行する掘立柱建物SH 1003が8世紀前半以降の建造であることから、SH 1007はそれよりさらに年代の降る建物といえる。

#### SH 1008(第43図)

SH 1007の東側に位置する。2×2間の縦柱建物で、東西方向にやや長い。南北軸は北側で75°西に振る。建物規模は、梁間が3.32mで、桁行が3.7m。柱間は梁間が1.66m、桁行が1.85mの等間。ほとんどが柱抜き取り穴であるが、SP 1133で柱痕跡が確認されている。柱痕跡は直径22cm。掘方は円形で、上面で直径36cm、深さは44cm。SP 1185とP 12がSB 1002を切っており、さらにSP 1133がSF 1001を切っている。SP 1185はSF 1020とも重複した位置にあるが、切り合い関係については明確でない。

遺物については、SP 1133と1185、P 12から、土器器が出土している。壺の体部の破片とみられるが、いずれも細片で復元できるものはない。時期としては、古代という範疇でしか捉えることができない。先述のように、SB 1002は8世紀の前半には、そのほとんどが埋没している。後述するように、



第44図 SH 1009 実測図

S F 1001は、7世紀の後半から末葉の時期に位置付けられる。S H 1008は、これらより後出する遺構であることから、8世紀前半以降の年代に位置付けることができる。

#### S H 1009（第44図）

S H 1001の南西側で検出されている。さらに西側へ延びる可能性もあるが、すぐ西側が壇乱によって広範囲に失われており認識できないため、 $1 \times 1$ 間の南北棟として捉えておく。南北軸は、北側で $13.5^\circ$ 西に振る。柱間は梁間 $3.24\text{ m}$ 、桁行 $3.46\text{ m}$ と広い。検出された柱穴が、いずれも深さ $10\text{ cm}$ 程度と浅いことから、削平によって間に位置する柱穴が失われている可能性も考えられる。S P 1100で柱痕跡が確認されている。柱痕跡は直径 $17\text{ cm}$ 。掘方はほぼ円形で、規模は上面で直径 $35\text{ cm}$ 、深さ $12\text{ cm}$ 。

遺物としては、S P 1100と1104から、土器器の壺が各1点出土しているが、いずれも風化できない細片である。年代については、決め手となる資料は乏しいものの、古代の範疇で捉えてよいものと推測される。

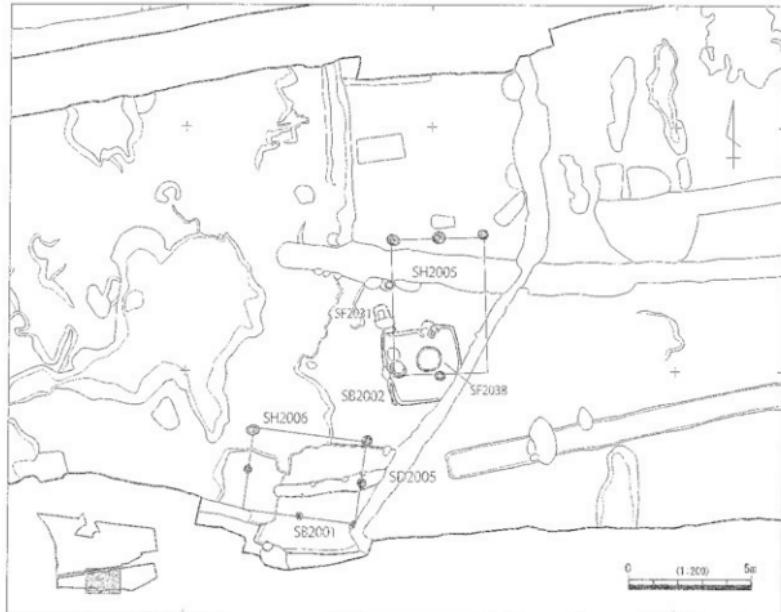
## SH 2005 (第46図)

S B 2002 の北側に位置する。東側の柱穴の多くは、搅乱によって失われている。複数柱建物で、2×3間の南北棟。南北軸は、北側で 15° 西に振る。建物規模は梁間 3.8 m、桁行 5.55 m。柱間は梁間が 1.9 m、桁行が 1.85 m の等間。S P 2218 と 2215, 2238, 2260 で柱痕跡が確認されている。柱痕跡の大きさは、直径 22~25 cm。掘方の形状は、ほぼ円形。掘方規模は、上面で直径 40~53 cm。後世の遺構などで上面が失われているものもあるが、深さは 11~30 cm。

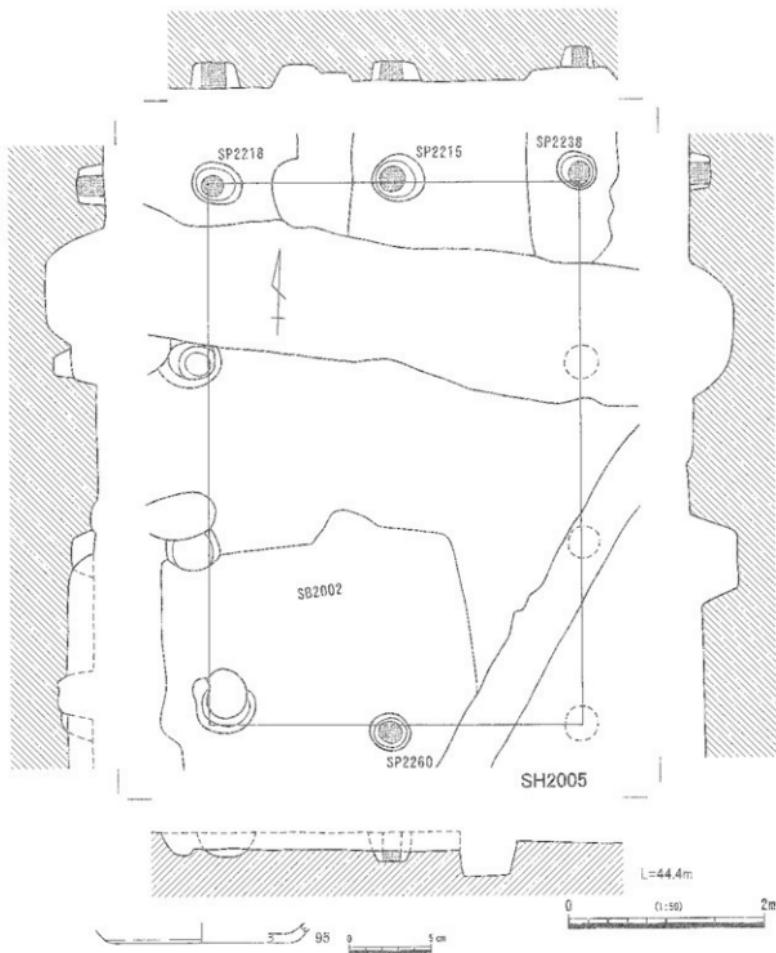
調査時には、S B 2002 の床面で柱穴が検出されている。埋土が双方共に暗褐色土のために識別が困難であることや、床面の土層を掘り抜いていることなどから、S B 2002 検出時の見落としの可能性が高い。おそらくは、S B 2002 よりも新しい遺構であろう。

遺物としては、S P 2218 と 2238 から土師器の小片が出土している。大半が壺の体部の細片で、図化できたのは、S P 2218 から出土した壺 1 点のみである。95 の壺は、平底の底部から斜め上方へと立ち上がり、内外面の全面に赤彩が確認される。年代としては、およそ 8 世紀の前半に位置付けられる。

S B 2002 が 8 世紀の前半でも中頃に近い時期に埋設していることから、S H 2005 はそれ以降の時期であるといえる。土師器の壺の年代を重視すれば、S H 2005 の建造は 8 世紀の中頃あたりに位置付けられよう。



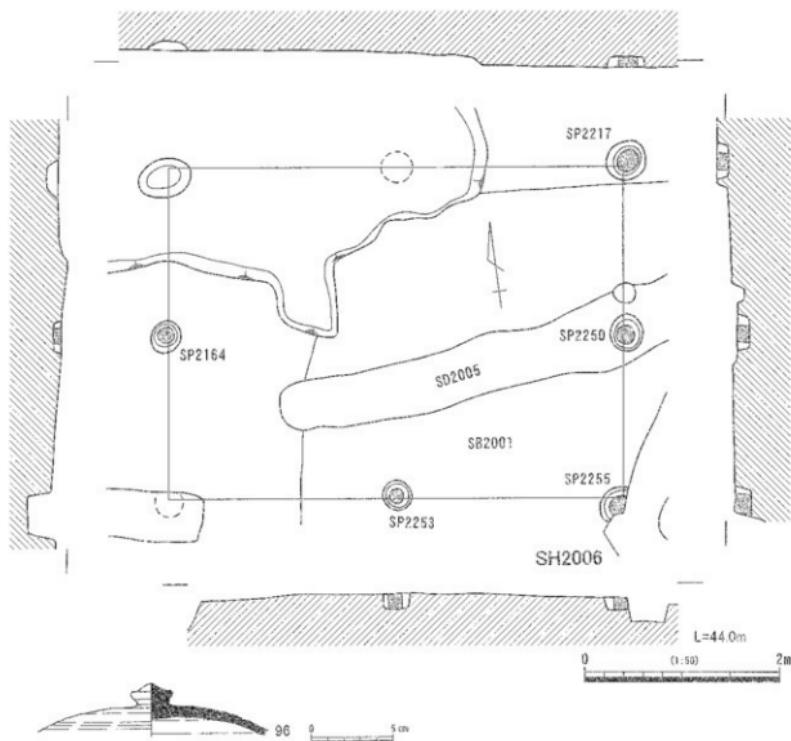
第46図 古代の遺構配置図（2図）



第46図 SH 2005 実測図・出土遺物

## SH 2006 (第47図、図版15)

SH 2005の南西側に位置する。一部、擾乱によって柱穴が失われている。側柱建物で、 $2 \times 2$ 間の東西棟。南北軸は、北側で $7^{\circ}$ 東に振る。建物規模は梁間が $3.4$ m、桁行が $4.64$ m。柱間は梁間が $1.7$ m、桁行が $2.32$ mの等間。SP 2164と2217、2250、2253、2255で柱痕跡が確認されている。柱痕跡の大きさは、直径 $14 \sim 23$ cm。掘方はほぼ円形。掘方規模は、上面で直径 $25 \sim 43$ cm、深さは擾乱によって上面が失われているものもあるが、 $8 \sim 25$ cmである。



第47図 SH 2006 実測図・出土遺物

調査時にはSB 2001の床面で検出されているが、SH 2005と同様の理由から、検出時の見落としの可能性が高いと推測される。おそらくは、SB 2001よりも後出する建物であろう。

遺物としては、SP 2250から須恵器や土師器が出土しているが、図化できたのは1点のみである。96は、須恵器の坏蓋である。頂部に小さめのつまみが付き、口縁部へ向かって少しづくらみながら下がる。8世紀の中頃から後半にかけてのものである。

前述のように、SB 2001が8世紀の前半には埋没していることから、SH 2006はそれ以降の建物である。記録がないため詳細が分からぬが、96の須恵器の坏蓋が掘方から出土しているとすれば、建物建造年代の上限は、8世紀中頃から後半にかけての時期に位置付けることが可能である。

## SH 5010 (第48図)

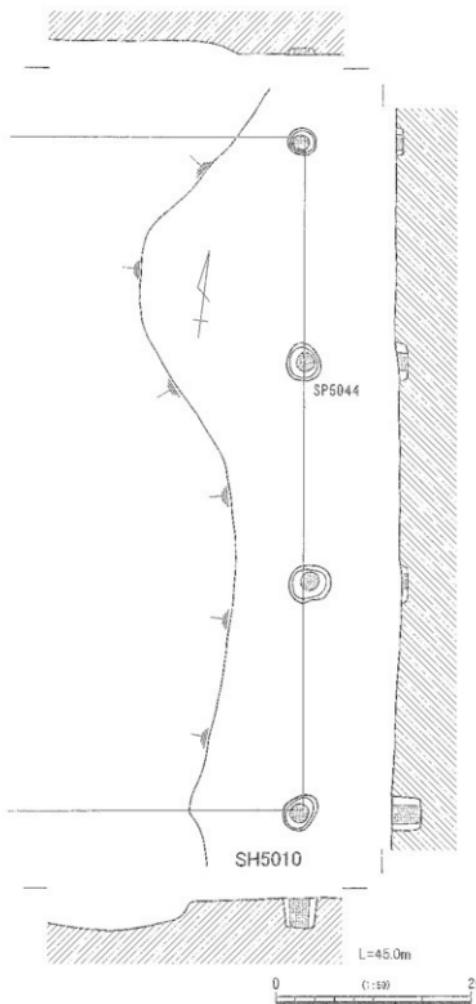
調査区西側の中央部に位置する。南北方向に柱列が確認されている。

東側にこの対になる柱列が検出されていないことから、擾乱によって大きく削平されているために柱穴は確認されていないが、西側に建物が展開していたものと推測される。

南北軸は、北側で7.5°西に振っている。概幅は6.9mで、柱間は2.3mの等間。全ての柱穴で柱痕跡が確認されている。柱痕跡の大きさは、16~19cm。掘方は、円形または梢円形。掘方規模は、上面で長径28~42cm、深さは6~30cm。

遺物としては、SP 5044の柱痕跡埋土から、固化できないほど細片ではあるが、土師器の壺の破片が1点出土している。古代の遺物として捉えられる。

柱痕跡の埴土から出土した遺物であるため、建物の直接的な年代を示すものとは限らないが、一応この遺物を重視して、SH 5010については古代の建物として考えておきたい。



第48図 SH 5010 実測図

## (3) 小穴

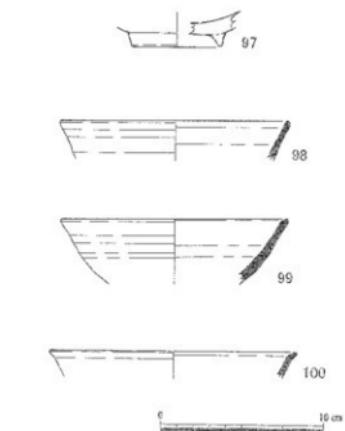
明確に建物としては認識できないが、出土遺物から古代のものと判断できる小穴が存在する。

## S P 1033・1080・1091（第18・49図）

S P 1033は、古代の掘立柱建物 S H 1001の東側に位置する。埴土中から、灰釉陶器の壺(97)が1点出土している。浜北・宮口窯系の灰釉陶器とみられ、年代としては11世紀代に位置付けられる。

S P 1080は、掘立柱建物 S H 1003の南に位置する。埴土中から、須恵器の壺(98)が出土している。口縁部の破片で、年代は明確でないが8～9世紀のものであろう。

S P 1091は、掘立柱建物 S H 1007の南に位置する。埴土中から、須恵器が2点出土している。99は丸底になる壺の口縁部で、100は高壺の口縁部。いずれも7世紀末から8世紀にかけてのものである。



第49図 小穴出土遺物

## (4) 土坑

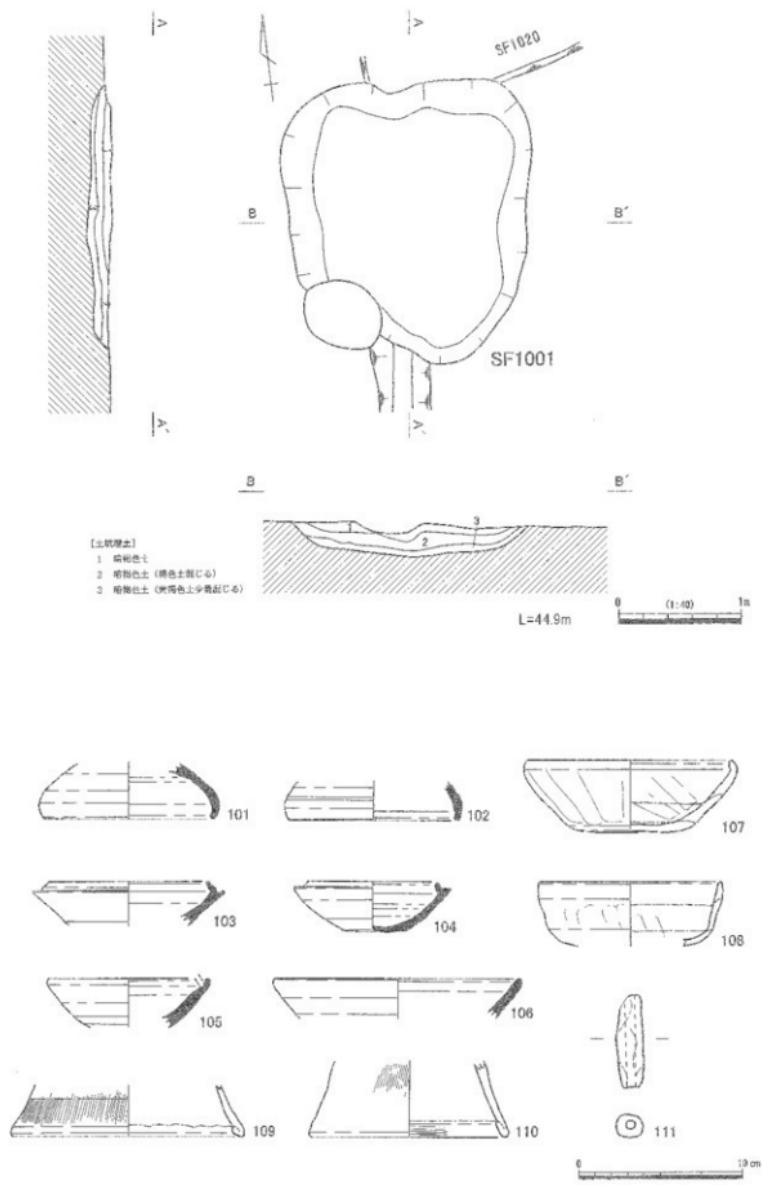
## S F 1001（第50図、図版9・15）

1区の中央部、堅穴住居 S B 1002の南西側に位置する。

不定形の大壘土坑で、長径が2.3m、短径は1.95m、深さは、現存で約20cm。ほぼ平坦な底部から上方へ緩やかに立ち上がる。中央部の理土上層と南西部は、擾乱によって失われている。暗褐色土を主体とする埴土が堆積しており、3層に分けられる。北側でS F 1020と切り合っており、S F 1020に切られていることが確認されている。

埴土からは、比較的多くの遺物が出土している（第50図）。遺物は、上層（第1層）の遺物と、下層（第2・3層）の遺物とに分けられる。101・102は須恵器の壺蓋。101は下層、102は上層から出土している。103～105は須恵器の壺身で、口縁部に立ち上がりをもつ。103・105は下層、104は上層からの出土。106は須恵器の無台壺。上層から出土している。107・108は土師器の壺。107は平底の底部から斜め上方へ立ち上がり、口縁部が少し内湾する。内外面は板ナテ調整。下層から出土している。108は、107に比べて口縁部が直立する。下半部に、指押さえの痕跡がみられる。上層から出土している。109・110は台付き壺の脚部。下端部を内側に折り返して成形している。共に下層からの出土。111は土縫で、上層から出土している。

下層の遺物の年代は、いずれも7世紀後半に位置付けられる。上層の遺物は、多少新しい様相もみられるが、年代としてはさほど差はない。よって、S F 1001の年代は7世紀後半に位置付けられる。



第50図 SF 1001 実測図・出土遺物

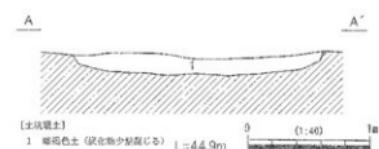
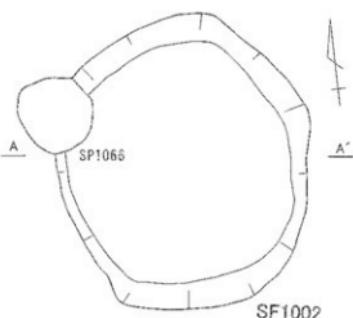
## S F 1002 (第 51・52 図)

1 区の北西部に位置する。長径 2.4 m、短径 2.0 m の楕円形。深さは 15 cm と浅い。底部はほぼ平坦で、斜めに立ち上がる。少量の炭化物を含む暗褐色土が堆積していた。北西部で、S H 1001 の隅柱にあたる S P 1066 と切り合っており、S P 1066 が S F 1002 を切っていることが確認されている。

遺物は、埋土中から土師器の甕が十数点出土しているが、ほとんど細片で図化できたのは 1 点のみである（第 51 図）。II12 は、頸部から口縁部にかけての破片。口縁部はあまり開かず、端部が少し内湾する。外面はナデ調整で、内面は横方向のハケ目調整の後ナデ調整が施されている。7 世紀末葉～8 世紀前半頃の年代に位置付けられる。



第 51 図 SF 1002 出土遺物



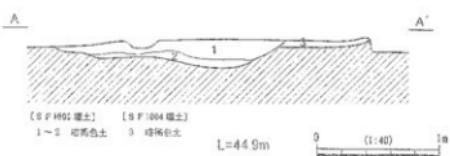
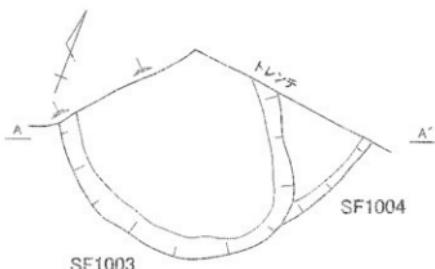
第 52 図 SF 1002 実測図

## S F 1003・1004 (第 53 図)

S F 1002 の南東に位置する。北側部分は、搅乱や確認調査のトレンチによって失われている。S F 1003 が、1004 を切って掘られていることが確認されている。

S F 1003 は、残存部分から径 1.6 ～ 1.8 m 程度の楕円形と推測される。深さは、最も深いところで 24 cm。底部には凹凸がみられる。埋土は暗褐色土を主体とし、上下 2 層に分けられる。

遺物としては、上層（第 1 層）から須恵器や土師器の破片が出土しているが、いずれも細片で図化できるものはない。須恵器は、無台杯の底部と推測される破片が 1 点出土しているのみで



第 53 図 SF 1003、1004 実測図

ある。土師器は、30点ほど出土しているが、ほとんどが壺の体部の小片である。1点だけではあるが、赤彩された壺とみられる破片も出土している。

S F 1004 は、トレンチと S F 1003 によってほとんどの部分が失われているため、形状については不明である。非常に浅く、深さは5cm程度しかない。底部はほぼ平らである。内部には、暗褐色土が堆積していた。遺物は、土師器の壺と土錐が1点ずつ出土しているのみで、いずれも図化できないほどの細片である。

年代の決め手となる遺物がほとんどないが、S F 1003 については、須恵器の無台壺や赤彩された土師器の壺が出土していることから、おそらく8世紀代と推測される。S F 1004 については、S F 1003 以前という程度しか分からぬ。

#### S F 1006 (第54図)

S F 1001 の南東に位置する。直径80cmの円形で、深さは28cm。底部が小さく、掘り鉢状の形態を呈している。内部には、暗褐色土が堆積していた。

遺物としては、土師器が2点出土しているのみである。いずれも図化できない壺の小破片である。詳細な年代については不明であるが、古代の範疇には収まるであろう。

#### S F 1009 (第54図)

S F 1001 の東側に位置する。長径96cm、短径80cmの楕円形。深さは、検出面から20cm。底部はほぼ平らで、斜め上方へ立ち上がる。埴十は、暗褐色土を主体とし、2層に分けられている。上層(第1層)には、黄褐色土(漁山)がブロック状に入っているため、人為的に埋められた可能性もある。

遺物としては、上層(第1層)から須恵器1点と土師器2点が、下層(第2層)からは土師器が1点出土している。しかし、いずれも図化できないほどの細片である。詳細な年代は不明であるが、古代の遺構とみてよいであろう。

#### S F 1010 (第54図)

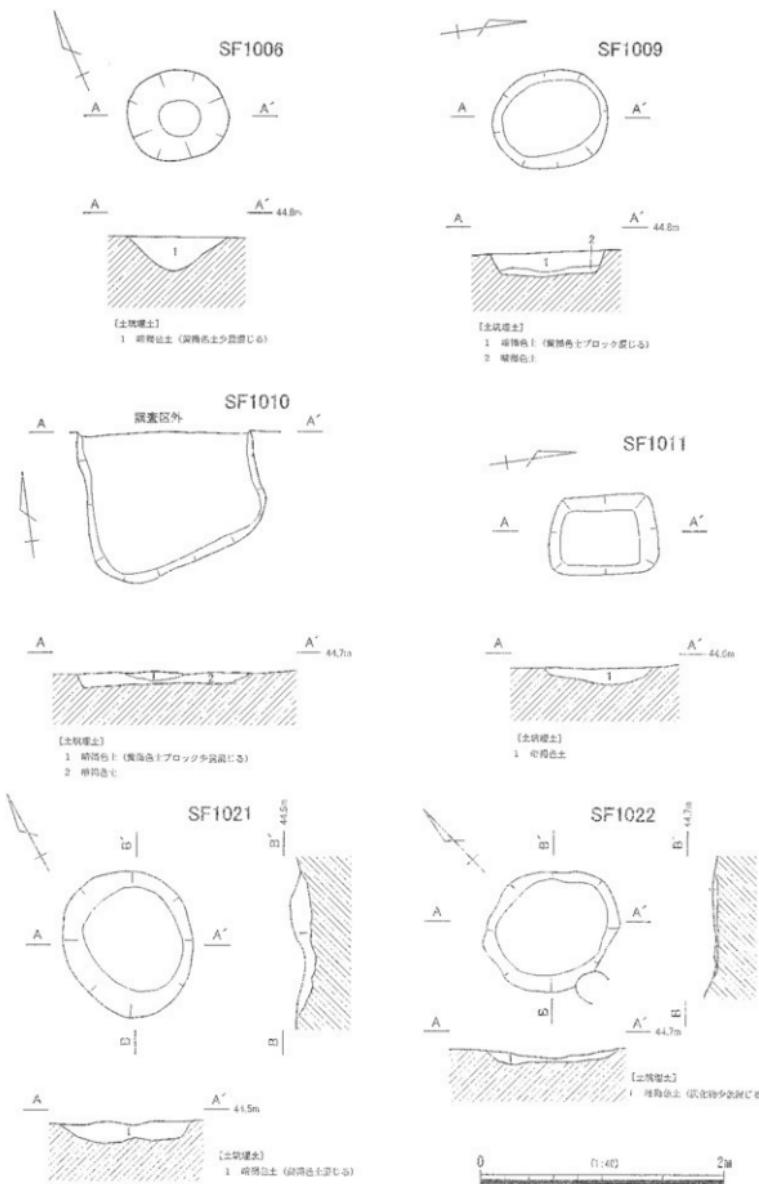
S H 1005 の東側に位置する。北側は調査区外となる。東西方向の幅は1.5mで、方形又は長方形に近い形態であると推測される。深さは、検出面から10cm程度と浅い。埋土は暗褐色土を主体とし、2層に分けられている。

遺物としては、検出面で土師器の破片が出土している。多くは壺の体部の破片で、細片のため、図化できるものはない。詳細な年代については不明であるが、古代の遺構とみてよいであろう。

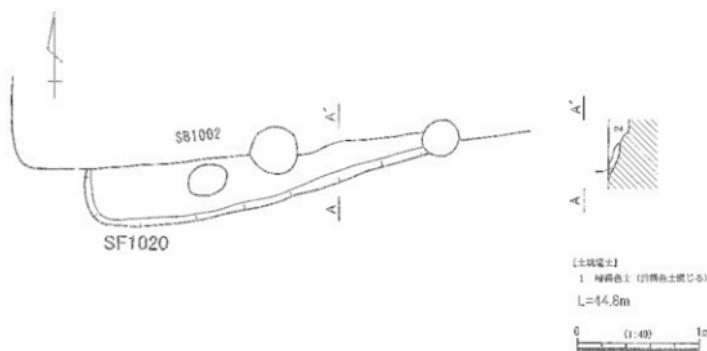
#### S F 1011 (第54図)

S B 1001 から、南に13mほど離れた場所に位置する。平面形状は、長さ90cm・幅65cmの長方形。深さは、検出面から15cmと深い。内部には、暗褐色土が堆積している。底部はほぼ平らであるが、多少の凹凸はみられる。

遺物としては、埴上から須恵器と土師器の破片が各1点出土している。いずれも図化できないほどの細片である。須恵器は、壺・瓶類の底部で、底部はやや丸底となっている。おそらく、8世紀前半頃までの遺物と推測される。S F 1011 についても、ほぼ同じ頃の遺構と考えてよいであろう。



第54図 古代土坑窯跡図（1区）



第55図 SF 1020 実測図

## SF 1020 (第55・56図、図版15)

S B 1002 の南側で確認されている。深さは約10cmと、S B 1002より浅い。調査時に記録された土層断面を見る限り、S B 1002に切られていると判断できる。

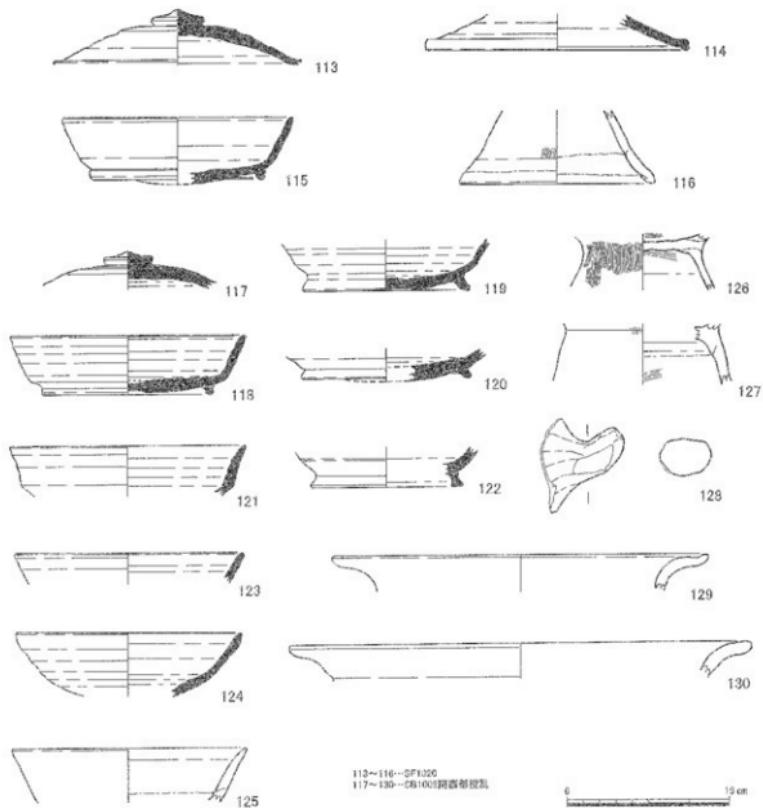
遺物は須恵器と土師器が出土している(第56図)。113・114は、須恵器の坏蓋である。頂部につまみが付き、口縁部は下方に折り曲げている。115は須恵器の坏で、底部が高台より下方に突き出る。116は土師器の台付き壺。腹部の破片で、壺部を内側に折り返して成形されている。年代としては、概ね8世紀前半の範疇で捉えることができ、7世紀末葉に廃棄したと推測されるS B 1002との間で、切り合ひ関係と矛盾が生じる結果となっていることから、土層の識別に誤りのあった可能性が高い。

さらに、検出時の記録によると、S B 1002の南西部分には「搅乱」が検出されているが、この「搅乱」はS F 2020と接しており、一体の遺構である可能性も否定される。採取されている遺物は、須恵器と土師器である(第56図)。117～124は須恵器である。117は坏蓋で、頂部につまみが付けられている。118～122は坏で、底部に高台が設けられる。123は坏の口縁部の破片。124は楕円形の坏身で、底部から斜め上方へと立ち上がる。125～130は土師器である。125は坏身であり、表面の摩滅が著しいが、内外面には赤彩が確認される。126・127は、台付き壺の底部から脚部の破片。128は壺または壺の把手である。129・130は壺の口縁部で、内外面ともにナデ調整が施されている。これらの遺物の年代は、概ね8世紀の前半であり、S F 1020とほぼ同じ年代を示している。「搅乱」とされた遺構は、S F 1020と同一の遺構とみて間違いないであろう。

以上のことから、S B 1002がほぼ埋没した8世紀の前半頃、「搅乱」とされた部分を含む土坑S F 1020が掘られた可能性が高いと考えられる。

## SF 1021 (第54図)

整穴住居S B 1002の内部において、床面解体後に検出されている遺構である。S B 1002の床面を構築する土層によって、上面が覆われていることから、S B 1002に先行する遺構であるのは間違いない。平面形状は、長径1.2m・短径1.0mの楕円形。深さは、検出面(S B 1002の掘方)から15cm程度。底部はほぼ平らであるが、多少凹凸がみられる。埋土は、黄褐色粘質土(地山)を含む暗褐色土。床



第56図 SF 1020出土遺物

面を構築する土層と近似していることから、S B 1002を構築する際に埋められた可能性も考えられる。遺物は出土していないが、S B 1002が7世紀末葉に廃棄されていることから、少なくともそれ以前の遺構であるとみて間違いないであろう。

## S F 1022(第54図)

堅穴住居S B 1001の南東隅で、床面の解体後に検出されている。S F 1021と同様の理由から、S B 1001に先行する遺構と考えられる。平面形状は、長径1.2m・短径1.0mの楕円形。深さは、検出面(S B 1001の掘方)から約10cm。底部はほぼ平坦である。埋土は暗褐色土で、黄褐色粘質土(地山)がブロック状に多く混じる。S B 1001の床面を構築する際に、埋められた可能性も考えられる。遺物は出土していない。S B 1001が8世紀の前半以降に廃棄されているため、S F 1022はそれ以前の年代に位置付けられる。

## S F 2020 (第57図、図版16)

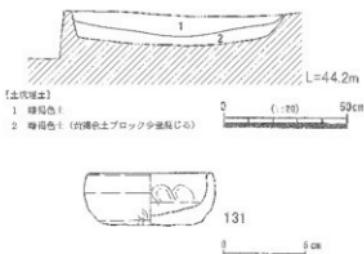
2区の中央やや東よりの場所に位置する。一边80cmの隅丸正方形で、深さは検出面から12cm。底部はほぼ平らで、斜めに立ち上がる。埋土は暗褐色土を主体とし、2層に分けられる。

遺物としては、須恵器1点と土師器6点が出土している。ほとんどが細片であり、固化できたのは土師器1点のみである(第57図)。131は坏で、口径7.6cmと非常に小窓である。調整は指押さえで、口縁部のみナデ調整が施されている。1点出土している須恵器は、小破片ではあるが、頂部に接みを持ち口縁部を下方に折り曲げる坏蓋の破片と推測される。年代としては、おおよそ8世紀代と考えられる。

## S F 2031 (第58図)

S B 2002の北東に位置する。長さ80cm・幅60cmの長方形で、深さは35cm。南側が、S P 2233によって失われている。底部は狭く、拂り鉢状の断面となっている。埋土は暗褐色土を主体とし、3層に分けられている。

遺物は、土師器の細片が出土しているのみである。詳細な年代は不明であるが、中世以降の遺物が含まれていないことから、古代の遺構とみてよいであろう。



第57図 SF 2020 実測図・出土遺物

## S F 2038 (第58図)

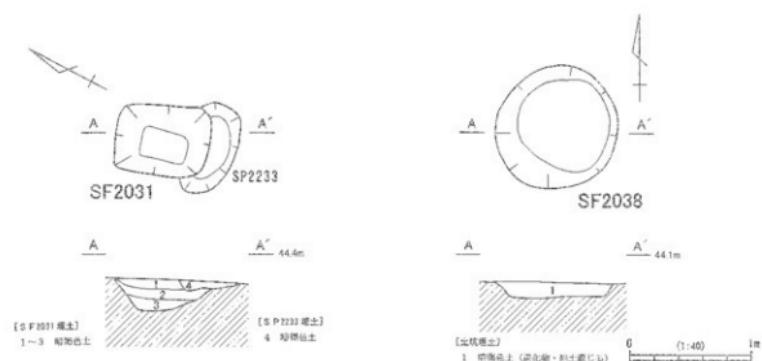
S B 2002の中央部に位置する。S B 2002の床面解体時に、その下面で検出されている。平面形状は、直径1mの円形で、深さは12cm。底部はほぼ平らである。埋土は暗褐色土。

遺物としては、土師器が5点出土している。いずれも固化できない程の細片であるが、内外面が赤彩された坏の破片が1点確認される。S B 2002が8世紀の前半に廃棄されていることから、S F 2038はそれ以前の遺構に位置付けられる。

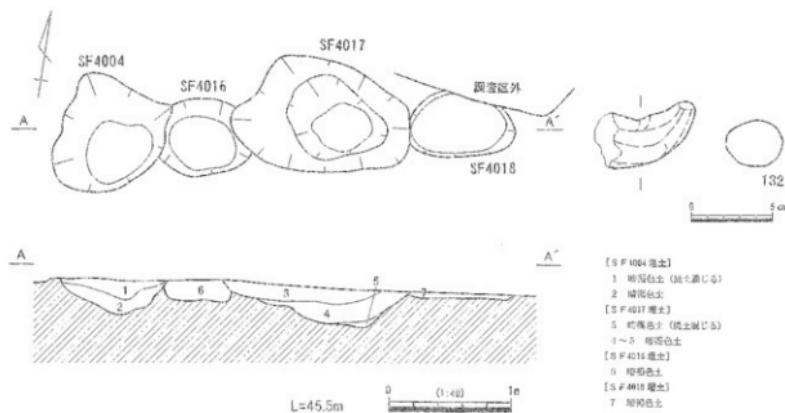
## S F 4016・4017・4018 (第59図)

4区の東京部分に位置する。3つの土坑が、東西に隣接して検出されている。切り合い関係としては、S F 4017が残る2つの土坑を切っていることが確認されている。さらに西側には、S F 4004が接しているが、S F 4004は後述するように中世の土坑である。

S F 4017の平面形は不定形で、東西径1.45m・南北径0.9m。底部は凹凸が激しく、中心部分が1段深くなっている。埋土は暗褐色土を主体とし、3層に分けられている。第1層には、焼土粒が多く含



第58図 古代土坑実測図（2区）



第59図 古代土坑実測図（4区）

まれている。遺物としては、土師器の壺の把手（132）が1点出土している。

S F 4016は、東西がS F 4004と4017によって失われているが、長径90cm程度の楕円形と推測される。深さは検出面から20cmで、底部は平坦。埋土は、暗褐色土の単層。遺物は、土師器の壺の小片が3点出土しているが、いずれも縦片で固化できるものはない。

S F 4018は、西側がS F 4017によって失われており、北側の一部は調査区外となる。平面形は、長径90cm程度の楕円形と推測される。非常に浅く、深さは検出面から5cm程しかない。埋土は暗褐色土。遺物は出土していない。

切り合ひ関係において、S F 4017が最も新しい遺構と判断できる。S F 4017より土師器の壺の把手が出土していることから、詳細な時期については不明であるが、3つの土坑はいずれも古代の遺構として捉えられる。

## (4) 井戸

S E 1001 (第60図、図版10)

S B 1003の北側に位置する。掘方は、上面で長径140cm・短径110cmの梢円形。深さは、検出面から180cm。木組みの井戸枠などは発見されていない。

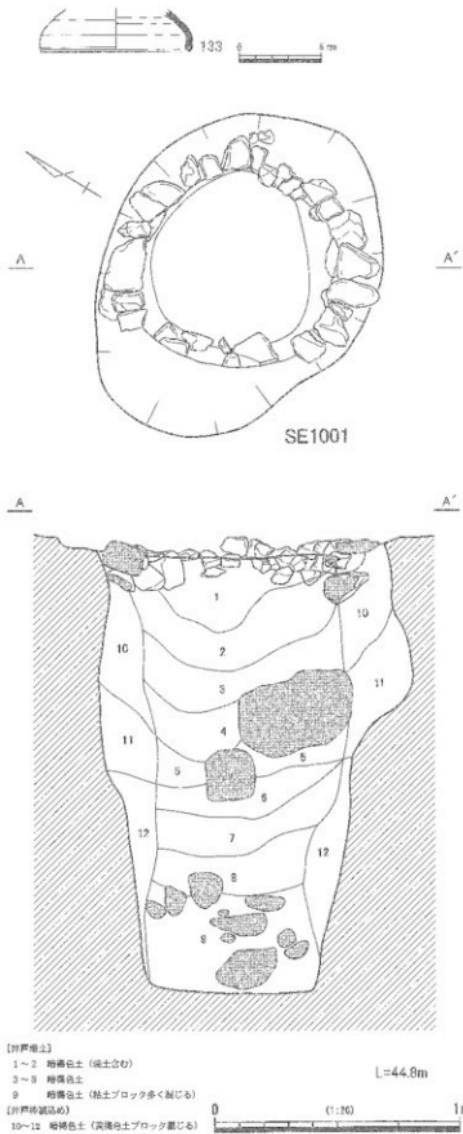
掘方の内側には、上部のみに2段程度の円形の石組みが検出されている。石組みは、長さ10~20cm程度の角砾を小口積みにして構築されている。

土層は、大きく石組みの内側と外側とに分けられる。いずれも暗褐色土を主体とするが、外側にはブロック状に黄褐色粘質土(地山)が多く含まれている。掘方と井戸枠の間に埋められた土に相当するものと推測される。

内側の土層の最下層からは、長さ10~30cm程度の角砾が多数出土している。また、底部から1m程上の高さからは、長さが約50cmの大形の石も出土している。底部に、水溜めや石敷きなどの施設は検出されていない。

遺物は少なく、須恵器と土師器が各1点出土しているのみである。土師器は壺で、固化できないほどの小片である。133は須恵器の壺蓋である。口縁部の破片で、口径は9cmと小型。底面から約130cm上方の埋土中から出土している。年代としては、7世紀後半に位置付けられる。

この遺物から、S E 1001の廃棄年代の上限は7世紀後半に位置付けられる。



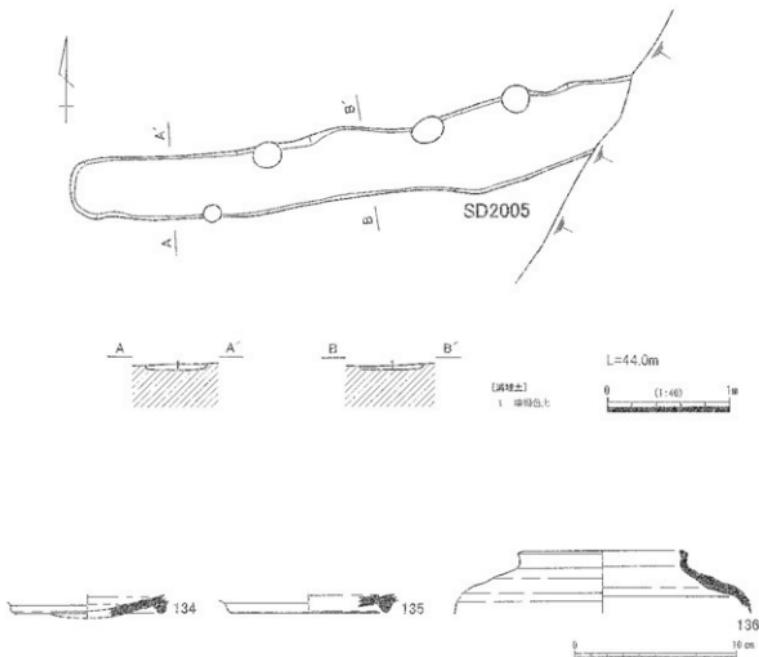
第60図 S E 1001 実測図・出土遺物

## (5) 溝

## SD 2005 (第61図)

2区の中央部南端に位置する。堅穴住居S B 2001のほぼ中央を、東西に横切っている。また、S H 2006の柱穴S P 2250を切っていることが確認されている。幅は上面で平均90cm、深さは検出面から15cm程度である。長さ4.6m程検出されており、東西の両側は削平によって失われている。埋土は暗褐色土の單層。

遺物は、埋土中から土師器と須恵器が出土している(第61図)。134・135は須恵器の壊。底部に高台が貼り付けられている。134は底部の中心が下方へ張り出す。135の高台は断面が三角形状のものである。136は須恵器の短頸壺。頸部は短く、直立気味に立ち上がる。肩部は上方で大きく張る。口縁部から肩部の外側には、自然釉が認められる。年代としては、いずれも8世紀後半に位置付けられる。土師器も出土しているが、図化できないほどの細片である。134～136が底部から浮いた状態で出土していることから、SD 2005は、8世紀後半にはすでに埋没しつつあったとみることができる。



第61図 SD 2005 寅測図・出土遺物

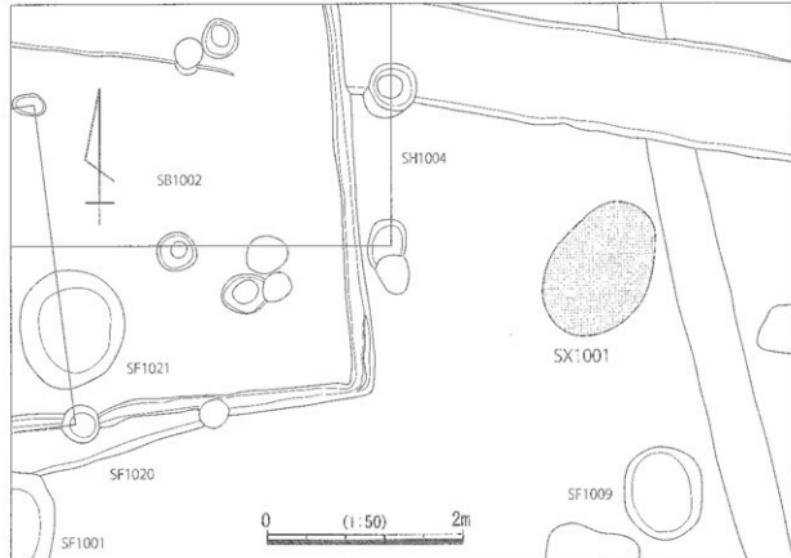
## (6) 不明遺構

SX 1001 (第 62・63 図、図版 16)

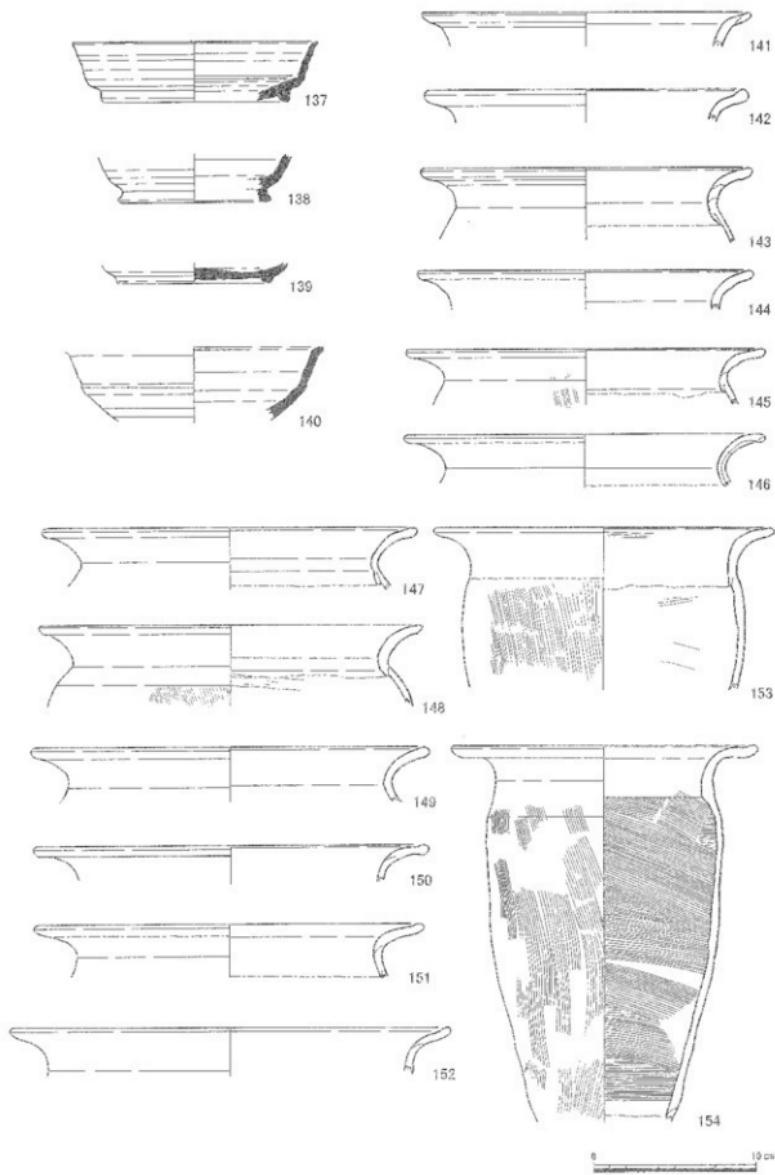
S B 1002 の東に位置する。明確な掘り込みは検出されていないが、1 × 2 m程度の範囲から土器が集中して出土している。

出土した遺物は、須恵器と土師器である(第 63 図)。137～139 は須恵器の坏身である。137 は底部が中央に向かって下がり、底部外縁の少し内側に高台が貼り付けられる。口縁部へは、外反気味に斜め上方へ立ち上がる。138 は底部から明確に屈曲せず、口縁部に向かって斜め上方へ立ち上がる。高台は少し外側へ開く。139 は底部外縁の少し内側に、低い高台が貼り付けられている。140 は須恵器の高坏。口縁端部がわずかに欠損している。口縁部は外に大きく開く、底部外面にはヘラケズリが施される。141～154 は土師器の甕である。141～152 は口縁部の破片。口縁部はくの字状に斜め上方に開くものと、横に大きく開くものがある。153 は口縁部から体部の破片。肩部の張りは小さく、頸部を経て口縁部は横に大きく開く。外面は口縁部がナデ調整で、体部はハケ目調整。内面はナデ調整で、一部口縁部にはハケ目も確認される。154 は底部が欠損する。肩部の張りは小さく、口縁部は水平に大きく開く。口縁端部は上方につまみ上げられる。内外面ともに、口縁部はナデ調整で、体部はハケ目調整。年代としては、やや幅はあるが、7世紀末から8世紀前半にかけての遺物が主体を占める。

明確な掘り込みを持つ遺構が検出されていないため、正確な規模や性格については不明である。ただし、他の土坑などに比べて出土した遺物の量が多いことから、検出面にあたる黄褐色粘質土の基壠層を掘り込まない、浅い窓棄土坑などの遺構が存在した可能性が高いと考えられる。



第 62 図 土器集中範囲図 (SX 1001)

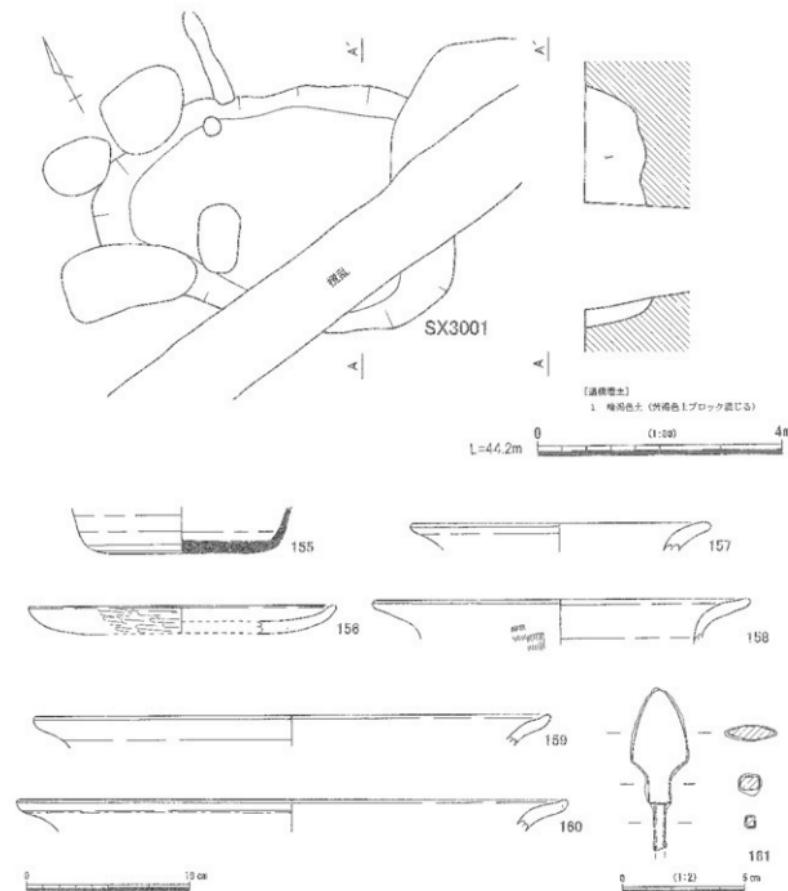


第63図 SX 1001出土遺物

## SX 3001 (第64図、図版16)

調査区のほぼ中央に位置する。平面形状は猪円形で、長径6m・短径4mを測る大型の遺構。深さは95cmで、底部は平坦ではなく凹凸がみられる。内部には、暗褐色土が堆積していた。

埋土から、須恵器と土師器が出土している(第64図)。155は須恵器の环身。平底の底部から、斜め上方へ立ち上がる、底部はハラケズリ調整である。156は土師器の皿。内外面の全面に、赤彩が施されている。外面は横方向のミガキ調整。赤彩された土師器は小片ではあるが、この他にも数点出土している。157～160は土師器の臺で、いずれも口縁部の破片。161は鉄鏃で、刃部先端から関節までの長さが4.8cmの平根鏃。出土した土器の年代は、概ね8世紀前半に位置付けられる。

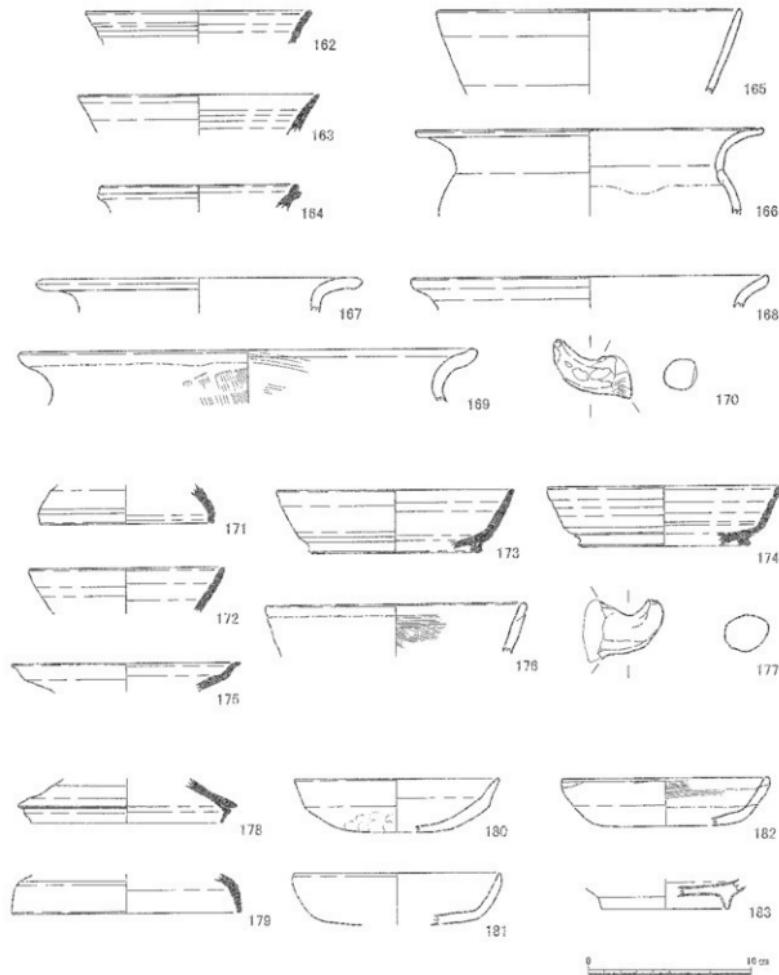


第64図 SX 3001 實測図・出土遺物

## (7) その他の遺物

包含層出土遺物（第 65 図、図版 16・20）

162～170 が 1 区、171～177 が 2 区、178～183 が 5 区から出土している。162・163 は須恵器の杯



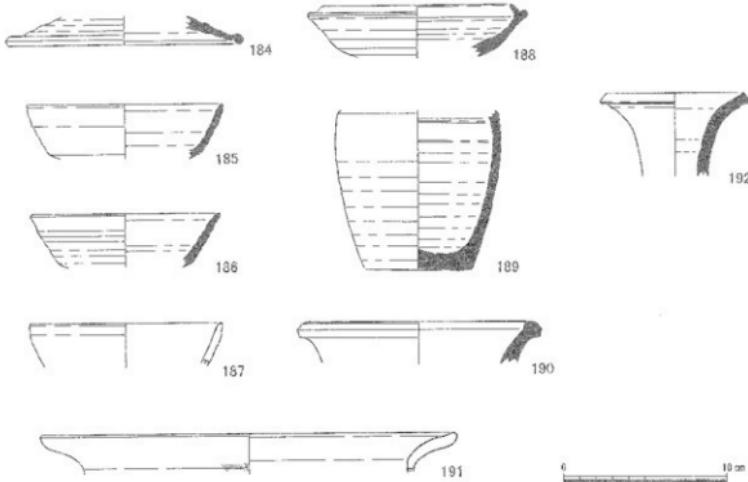
第 65 図 包含層出土遺物

身。いずれも口縁部の破片。高台壺の口縁部であろう。164は須恵器の壺・瓶類の口縁部。165は土師器の壺。口縁部の復元径が18.6cmと大型。内外面の全面に赤彩が施されている。166～169は土師器の壺。170は土師器の蓋または瓶の把手。171は須恵器の外壺。口縁部の復元径が10.5cmと小型。172～174は須恵器の壺身。172は山縁部の破片。173・174は高台壺。底部から肩曲して斜め上方へ立ち上がる。175は須恵器の壺身。口縁部のみの破片。176は土師器の壺。口縁部の復元径が15.6cmと大型で、内面には横方向のハケ目調整がみられる。177は土師器の蓋または瓶の把手。178は須恵器の蓋で、口縁部に返りがある。179は須恵器の壺身。外面に1条の沈線が巡る。180～182は土師器の壺。180は底部からなだらかに斜め上方へ立ち上がった後、口縁部で屈曲して反対気味に立ち上がる。181・182は平底で、肩曲して斜め上方へ立ち上がる。182の内面には、ハケ目調整が確認される。183は縦輪陶器の碗。釉薬は厚く、ガラス質である。内外面の全面に施釉されている。胎土は軟質で、二次焼成による赤化が認められる。全調査区で、出土した縦輪陶器はこの1点のみである。

#### 擾乱出土遺物（第66図、図版20）

大門西遺跡は、畑地の間に宅地や道路として利用されていたこともあり、多くの擾乱が検出されている。その要因は、宅地や建屋の基礎をはじめ、排水溝、水道管、用水路など様々であるが、これらを埋設した際や解体後に埋め戻された土から、古代の遺物も出土している。

184～187は2区、188～191は1区、192は4区の擾乱から出土している。184は須恵器の壺蓋で、口縁部の破片。185・186は須恵器の壺。187は土師器の壺。表面の摩滅が著しいが、内外面に赤彩が確認される。188は須恵器の壺身。189は須恵器の壺で、いわゆる「壺G」と呼称される長頸壺。肩部から底部にかけての破片で、底部は糸切りの未調整。190は須恵器の壺・瓶類の口縁部。191は土師器の蓋。口縁部がくの字状に開き、端部を上方につまみ上げている。192は、須恵器の壺・瓶類の頸部から口縁部にかけての破片である。



第66図 搪乱出土遺物

## 3. 中・近世の遺構と遺物

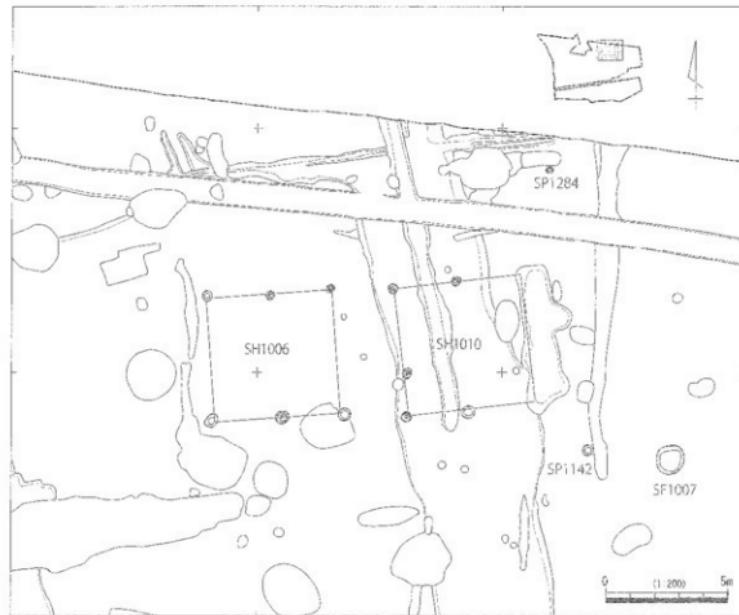
## (1) 掘立柱建物

## SH 1006 (第 68 図)

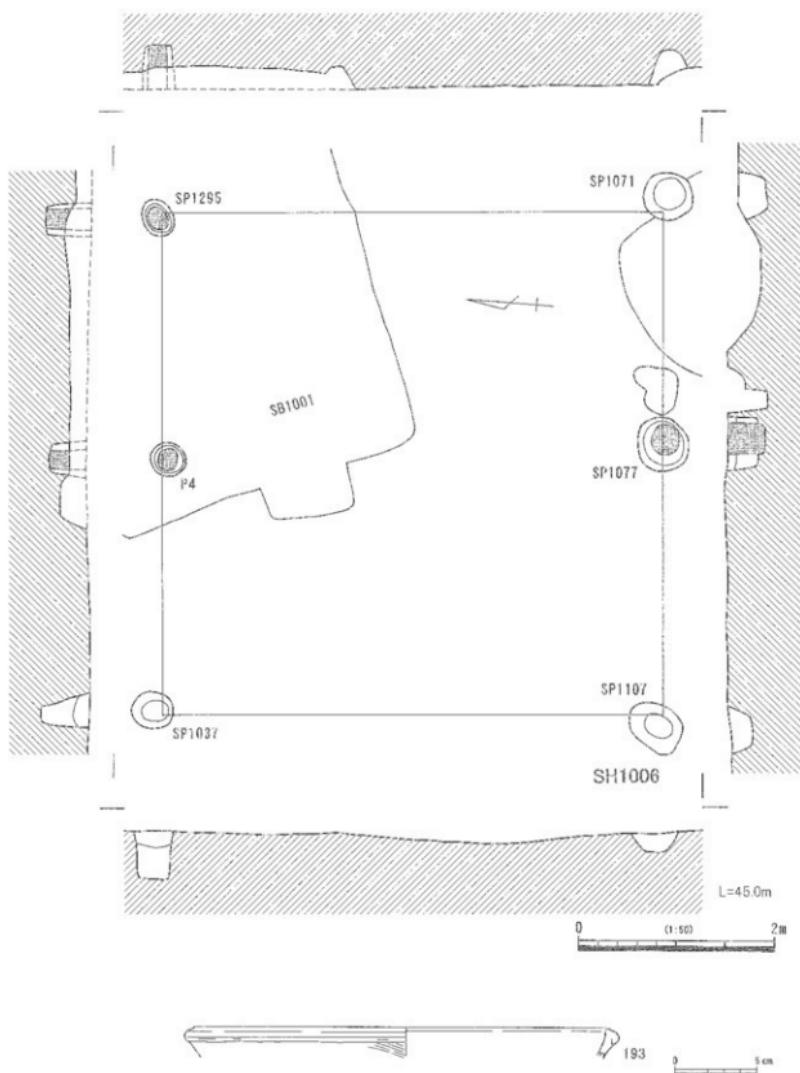
1 区の北西部に位置する。1 × 2 間のほぼ正方形の建物。建物規模は、南北 5.1 m・東西 5.16 m。柱間は、北側は 2.58 m の等間であるが、南側は西から 2.82 m + 2.34 m と 2 本目の柱がやや東側に寄っている。南北軸は、北側で 45° 西に振れる。柱穴 SP 1077 と 1295、P 4 で柱痕跡が確認されている。柱痕跡の大きさは、直径 21 ~ 31 cm。SP 1077 の柱痕跡は、掘方底面より下に 7 cm ほど沈み込んでいることが確認されている。掘方の平面形状は、ほぼ円形。掘方規模は、上面で直径 35 ~ 57 cm、深さ 21 ~ 38 cm。調査時には、古代の竪穴住居 SB 1001 の床面で検出されているが、上面で検出した際に見落とされたものと推測される。

遺物としては、柱抜き取り穴 SP 1071、1037、1107 から、内耳鍋や土師質土器の皿、渥美産の亮などが出土している。いずれも絵片であり、図化できたのは 1 点だけである (第 68 図)。193 は内耳鍋の口縁部で、SP 1107 の埋土中から出土している。口縁部は外反し、体部に横方向の粗いハケ目調整がみられる。

193 の遺物が柱抜き取り穴より出土していることから、15 世紀中葉から 16 世紀にかけての時期を、SH 1006 の廃絶年代の上限として捉えることができる。



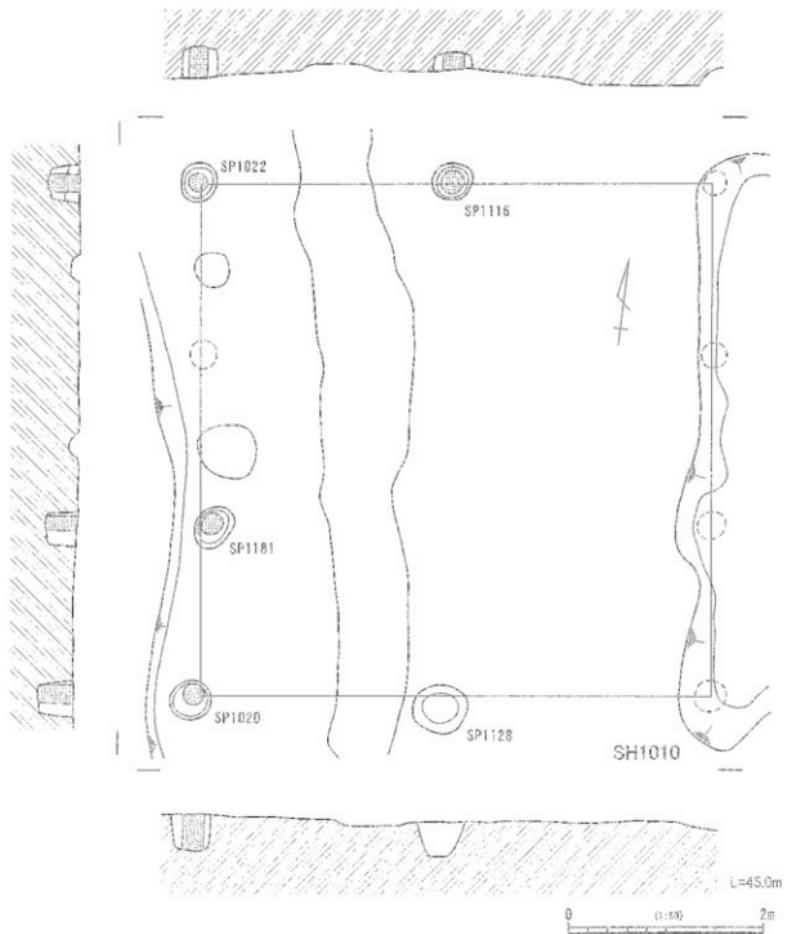
第 67 図 中・近世の遺構配置図 (1 区)



第68図 SH 1006 実測図・出土遺物

## S H 1010 (第 69 図)

S H 1006 の東側に位置する。東側が搅乱で失われているため推定ではあるが、 $2 \times 3$  間のほぼ正方形の建物に復元される。建物規模は、南北は 5.25 m で、東西は柱間が等間と仮定すると 5.2 m の規模になる。西側柱列は、S P 1181 と 1020 の柱間が 1.75 m で、S P 1022 と 1181 の柱間はちょうどその 2 倍の 3.5 m。S P 1022 と 1181 の間に柱穴は検出されていないが、調査時の見落としかかるいは、浅い穴であったために削平によって失われている可能性がある。南北軸は、北側で  $7^{\circ}$  西へ傾く。柱穴 S P 1020 と 1022, 1116, 1181 で柱痕跡が確認されている。柱痕跡の大きさは、直径 18 ~ 24 cm。掘方の底



第 69 図 S H 1010 實測図

面よりも少し沈むものが多い。掘方の平面形状は、円形または橢円形。掘方規模は、上面で長径35～46cm、深さは20～37cm。

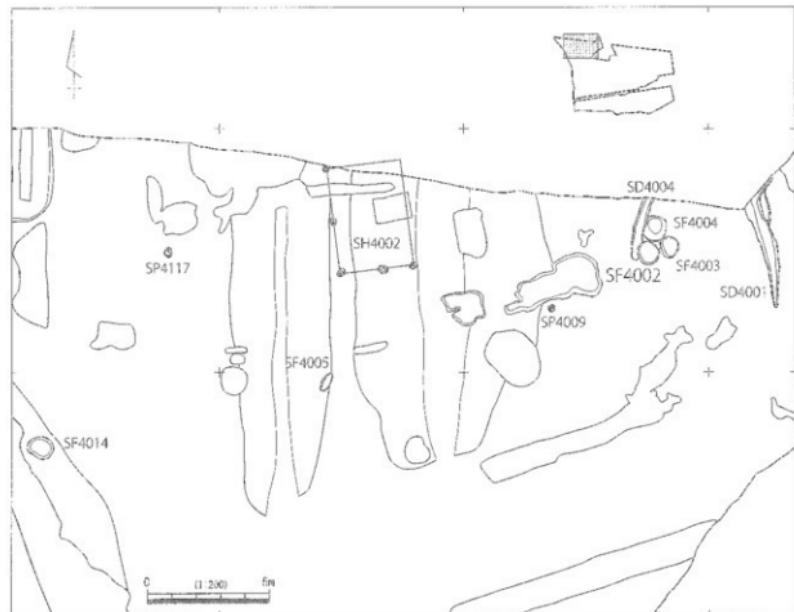
遺物としては、柱穴SP 1116の柱痕跡埋土から土師質土器の皿1点と、柱抜き取り穴SP 1128の埋土から擂鉢1点が出土しているのみである。いずれも図化できないほどの小片である。詳細な時期については不明であるが、おそらく中世後期の遺物であろう。

SH 1010は、SH 1006とほぼ同じ規模の建物で、東西に柱筋を備えるように建てられていることから、SH 1006と同時期の建物である可能性が高いと推測される。

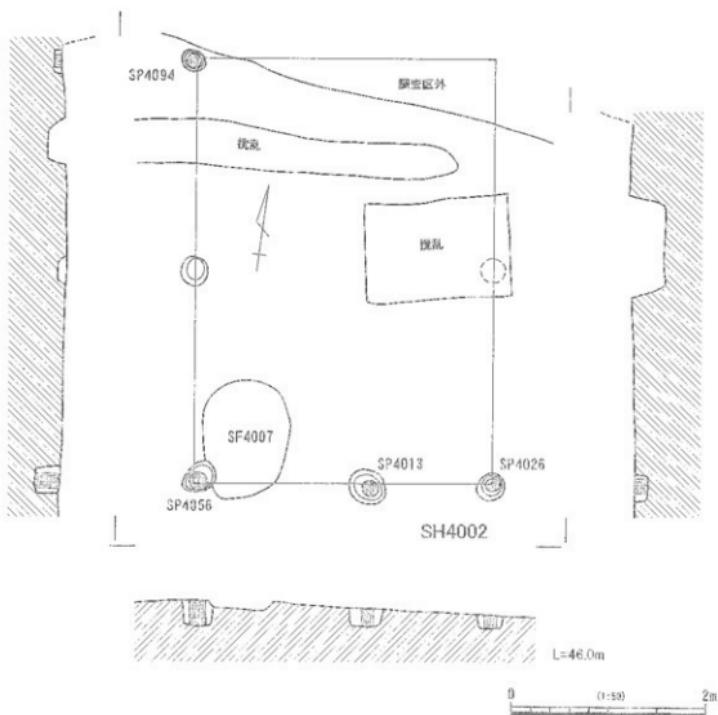
#### SH 4002（第71図）

調査区の北西部に位置し、北側は調査区外となる。梁間2間、桁行2間以上の南北棟。建物規模は、梁間が3.04m、桁行は4.36m以上である。柱間は桁行が2.81mの等間で、梁間は1.8m+1.24mと妻柱がやや東側に寄る。南北軸は、北側で7°西に振れる。柱穴SP 4013と4026、4056、4094で柱痕跡が確認されている。柱痕跡の大きさは、14～18cm。掘方は円形または橢円形。掘方規模は、上面で25～39cm、深さは8～26cm。他の遺構との切り合い関係としては、南西の隅柱にあたるSP 4056が、土坑SF 4007に切られていることが確認されている。

遺物は、1点も出土していない。後述するように、SF 4007は中世後期の遺構である。SF 4007に先行することから、SH 4002は中世後期以前の遺構として捉えることができる。古代にまで遡る可能性もあるが、SF 4007に近い時期の中世の建物として捉えておきたい。



第70図 中・近世の遺構配図図（4区）

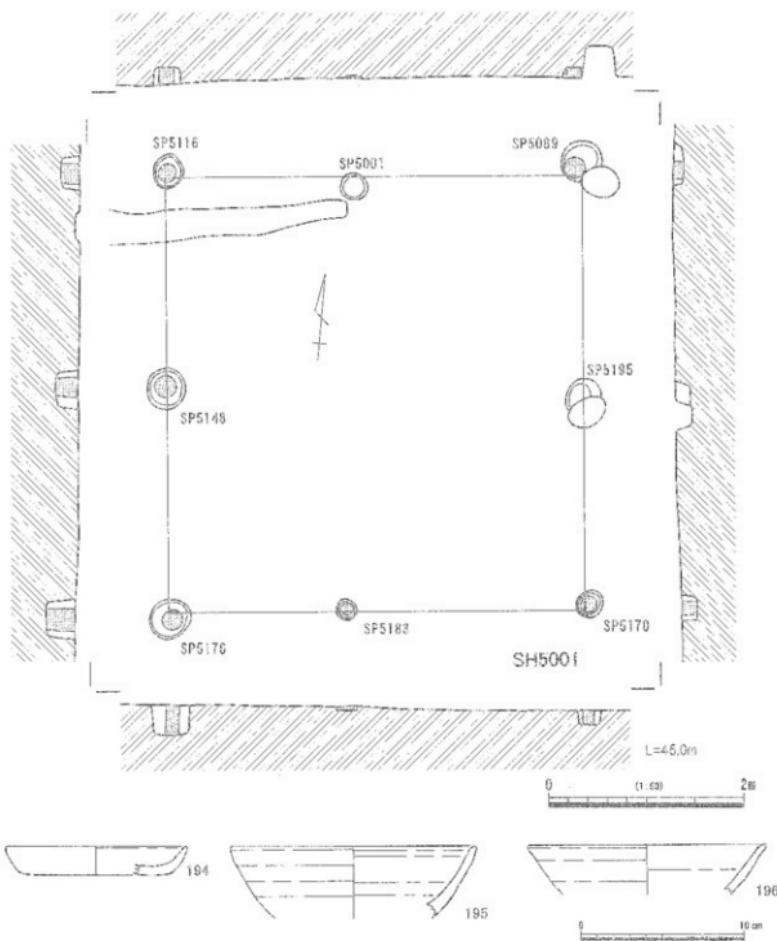


第71図 SH 4002実測図

## SH 5001（第72図）

5区のほぼ中央に位置する。鋼柱建物で、 $2 \times 2$ 間の南北軸。建物規模は、梁間 4.24 m・桁行 4.44 m。柱間は、桁行が 2.22 m の等間であるが、梁間は西から 1.84 + 2.4 m と西側が狭くなる。南北軸は、北側で 5.5° 西に振る。

柱痕跡は、S P 5089 と 5116, 5148, 5171, 5176, 5183 で確認されている。柱痕跡の大きさは、S P 5183 は直径 12 cm と極端に大きいが、その他は直径 16 ~ 20 cm である。掘方の平面形状は円形。掘方の規模についても、S P 5183 は、上面の直径が 22 cm、深さが 5 cm と極端に小さく浅い。他の柱穴の掘方規模は、上面で直径 28 ~ 42 cm、深さ 10 ~ 31 cm。このように、S P 5183 は他の柱穴と比べて、柱が細く掘方も浅い。また、反対側の位置にあたる S P 5001 も、柱抜き取り穴ではあるが、同様に小さく浅い。よって、S P 5183 と 5001 については、他の柱とは役割の異なる柱であった可能性が高い。SH 5001 は、 $1 \times 2$  間の建物として捉えた方がよいかもしれない。



第72図 SH 5001 実測図・出土遺物

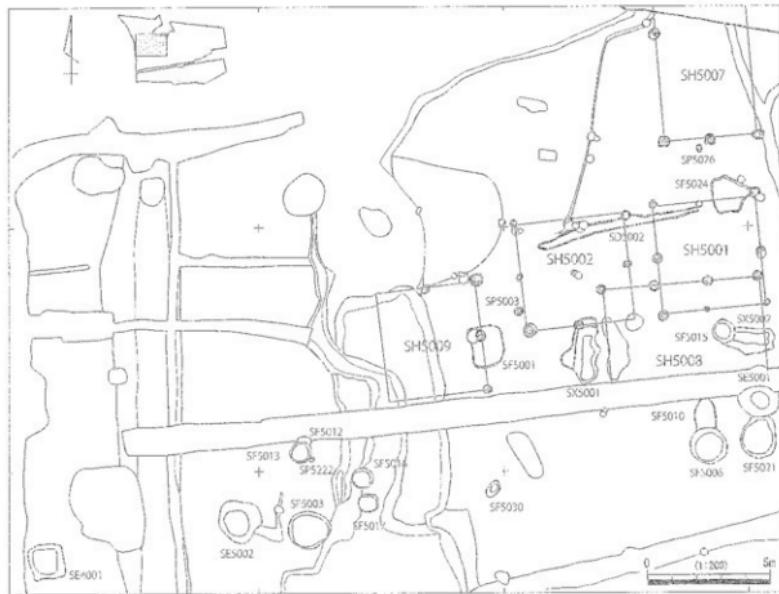
遺物としては、山茶碗や土師質土器などが出土している。絆片が多いため、図化できたのは3点のみである(第72図)。194・195は、柱穴S P 5176の掘方埴土から出土している。194は土師質土器の皿。195・196は瀬美・湖西産の山茶碗。196は柱抜き取り穴S P 5195の廻土から出土している。瀬美・湖西産の山茶碗で、口縁部が少し外反する。これらの遺物から、SH 5001の延築年代の上限は、13世紀の中頃から後半に位置付けられる。

## SH 5002 (第74図、図版17)

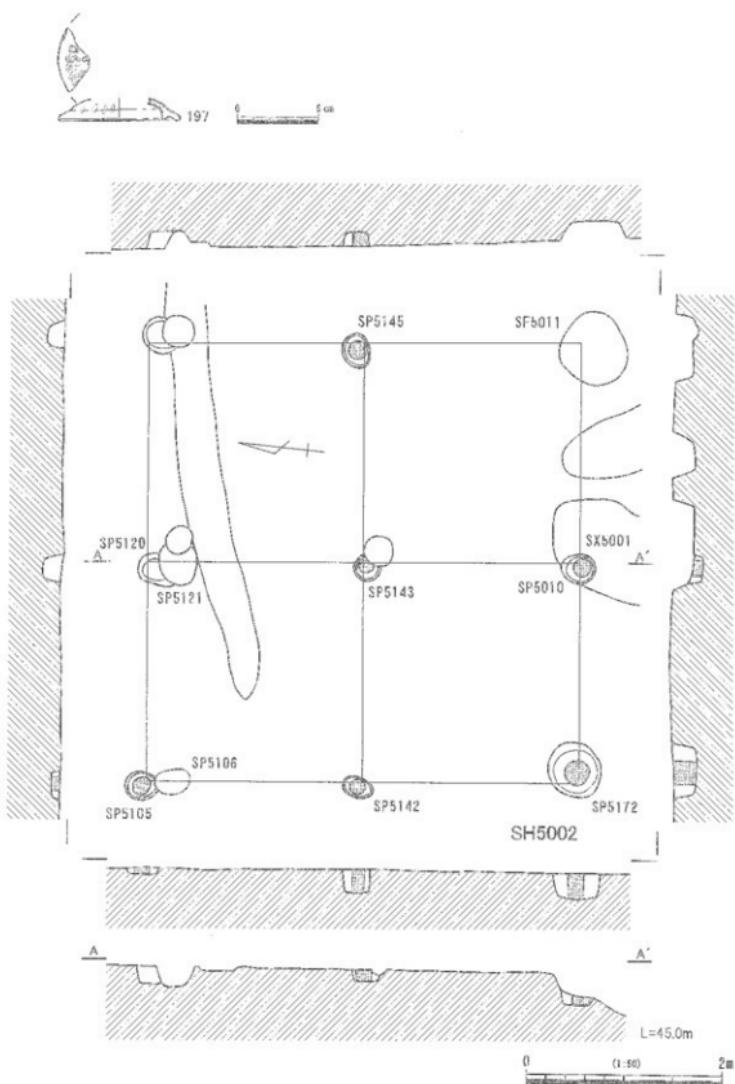
SH 5001の西側に位置する。2×2間の総柱建物で、平面形状はほぼ正方形。南東の隅柱は、後出する土坑SF 5011によって失われている。建物規模は、南北に4.4m、東西に4.48mと、僅かではあるが東西方向に長い。柱間は、2.2mと2.24mで等間。南北軸は、北側で65°西に振る。柱痕跡は、SP 5010と5105、5142、5143、5145、5172で確認されている。柱痕跡の大きさは、15~24cm。掘方の平面形状は、円形または楕円形。掘方規模は、上面で長径26~58cm、深さ8~26cm。

柱穴SP 5105と5120が、SH 5004の柱穴SP 5016と5121に切られていることから、SH 5004より先行する建物であることが明らかとなっている。また、SP 5010がSX 5001に切られていることも確認されている。

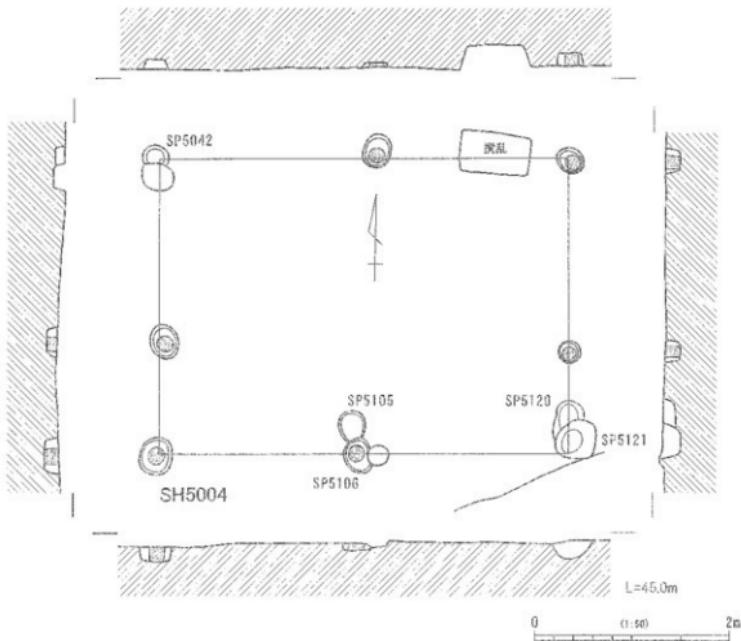
遺物としては、柱穴SP 5175の掘方埋土から、青磁が1点出土している(第74図)。197は、青磁の壺形合子の壺である。口縁部から大井部にかけての破片で、天井部外面には、細い蓮弁文が施されている。西日本の経塼以外で出土することは珍しい。年代としては、12世紀後半の遺物である。この他にも、SP 5010と5172の掘方から、山茶碗や土師質土器が数点出土しているが、風化できないほどの頸片である。出土遺物は乏しいが、SH 5002の建築年代の上限は、12世紀後半に位置付けられよう。



第73図 中・近世の造構配置図(5区)



第74図 SH 5002実測図・出土遺物



第75図 SH 5004 実測図

## SH 5004 (第75図)

SH 5002 の北側に位置する。2×2間の東西棟で、妻柱が南に寄った位置に設けられている。他の造構との切り合い関係としては、柱穴 S P 5106 と 5105 が、SH 5002 の柱穴 S P 5105 と 5020 を切っていることが確認されている。

建物規模は、梁間 3.02 m・桁行 4.16 m である。桁行の柱間は、北側が西から 2.2 m + 1.96 m、南側は西から 2.0 m + 2.16 m と、南北の桁行で多少柱間の間隔が異なる。梁間の柱間についても、西側が北から 1.9 m + 1.12 m であるのに対し、東側は北から 2.0 m + 1.02 m と少し間隔が異なっている。建物の南北軸はほぼ真北で、北側でわずかに 1.5° 西に振る。

柱痕跡は、S P 5042 と 5021 以外の全ての柱穴で検出されている。柱痕跡の大きさは、直徑 12 ~ 16 cm。掘方の平面形状は、円形または橢円形。掘方の規模は、上面で長径 22 ~ 38 cm、深さは 6 ~ 17 cm である。遺物は出土していないが、切り合い関係から SH 5002 より後出する建物であることは明らかである。よって、SH 5004 は 12世紀後半以降の建物として捉えることができる。

## SH 5007 (第76図)

SH 5001の北側に位置する。東西に1.9mの等間に並ぶ3本の柱列が検出されており、西側の柱から北へ4.5m離れた位置に柱穴が確認されている。北側が調査区外となるため、南北の規模は不明である。SP 5027と5070との柱間は4.5mと広く、間に柱が存在した可能性が高い。この想定を基にすると、SH 5007は2×2間以上の南北棟に復元できる。南北軸は、北側で5°西に振れる。

柱痕跡は、全ての柱穴で確認されている。柱痕跡の大きさは、直徑22~26cm。掘方の平面形状は、隅丸方形または梢円形。掘方規模は、上面で長径45~49cm、深さ17~39cm。土坑SF 5008を切って、柱穴SP 5081が掘られていることが確認されている。

遺物は、SP 5070とSP 5081から出土している(第76図)。198は源美・西条の山茶碗で、SP 5070の柱痕跡埋土から出土している。年代としては、13世紀後半に位置付けられる。SP 5081の柱痕跡埋土からは、擂鉢(199)が出土している。口縁部は折り返しがみられず、端部を丸く收める。口縁部の内面は、屈曲して上方へ立ち上げる。全面に鉄輪が施されている。年代としては、17世紀前半に位置付けられる。この他に、同じ柱痕跡の壇上から、土師質土器の皿や須恵器の甕が出土しているが、いずれも固化できないほどの小片である。

出土している遺物は、いずれも柱痕跡埋土からの出土であり、建物の建築年代を直接的に示す遺物とはいえない。また、須恵器から17世紀の擂鉢までと、遺物の年代の幅も広い。SH 5007の施設年代は、出土した遺物の中で最も新しい擂鉢の年代から、17世紀前半を上限とする時期に位置付けるのが妥当であろう。

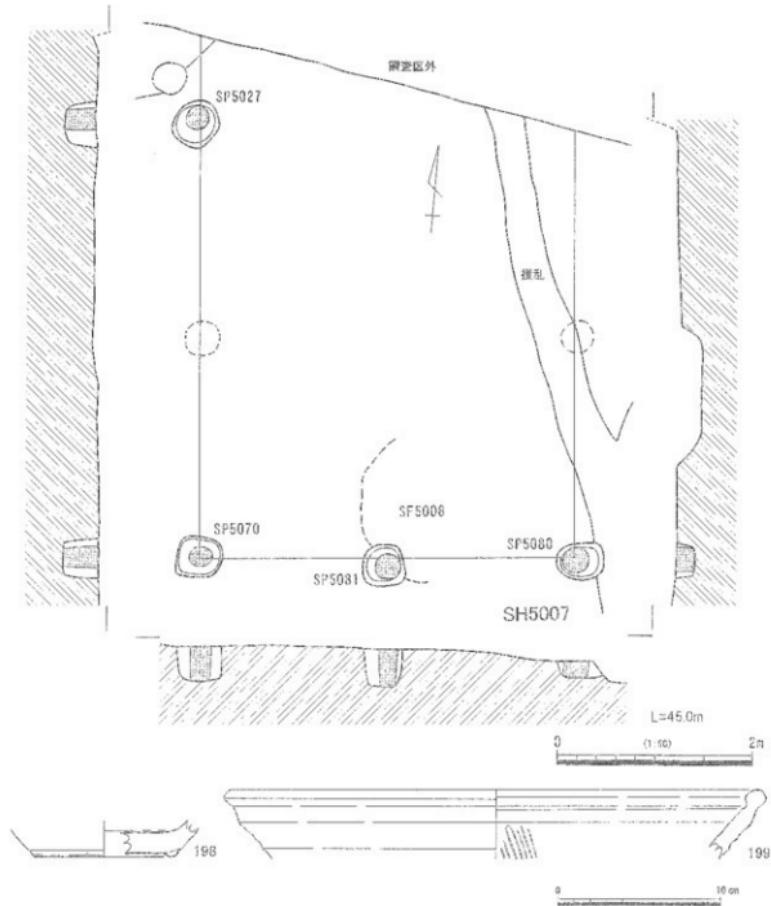
## SH 5008 (第77図)

SH 5001の南側に位置する。南側の大部分が搅乱等によって失われているが、3×3間の東西棟であると推測される。建物規模は、桁行が6.36m、梁間は柱間が等間と仮定すると3.9m。桁行の柱間は、2.14mの等間。南北軸は、北側で5°西に振れる。

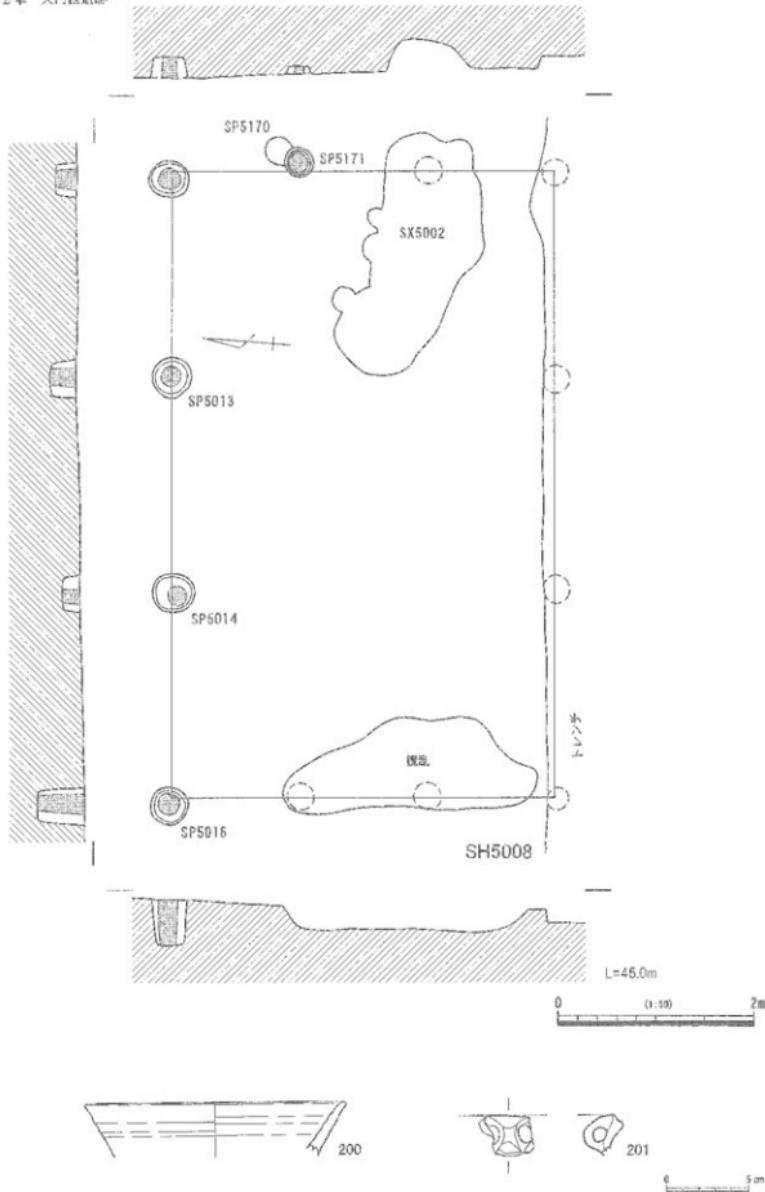
全ての柱穴で、柱痕跡が検出されている。柱痕跡の大きさは、直徑20~22cm。掘方の平面形状は円形。掘方の規模は、上面で直徑28~40cm、深さは8~49cm。他の遺構との切り合いとしては、柱穴SP 5171が、SH 5001の柱穴SP 5170を切っていることが確認されている。

遺物としては、山茶碗と内耳鍋が出土している(第77図)。200は山茶碗の口縁部。SP 5014の検出面から出土している。201は内耳鍋の口縁部。口縁部はくの字形に開き、端部を外側に折り返して成形している。内面には、上端が口縁端部に接する位置に内耳が貼り付けられている。SP 5014の柱痕跡埋土から出土している。年代としては、山茶碗(200)が13世紀、内耳鍋(201)は16世紀に位置付けられる。固化できたものはこの2点だけであるが、他にSP 5013と5016から、土師質土器の皿の絆片が出土している。

切り合い関係から、SH 5008については、SH 5001より新しい建物であることが確かめられている。先述のように、SH 5001の建築年代の上限が、13世紀の中頃から後半に位置付けられることから、SH 5008がそれ以降の建物であることは間違いない。出土遺物は少ないが、柱痕跡から出土している201の内耳鍋と、さほど時期的に差がないとすれば、SH 5008は16世紀頃の建物として捉えることができる。



第76図 SH 5007実測図・出土遺物



第77図 SH5008実測図・出土遺物

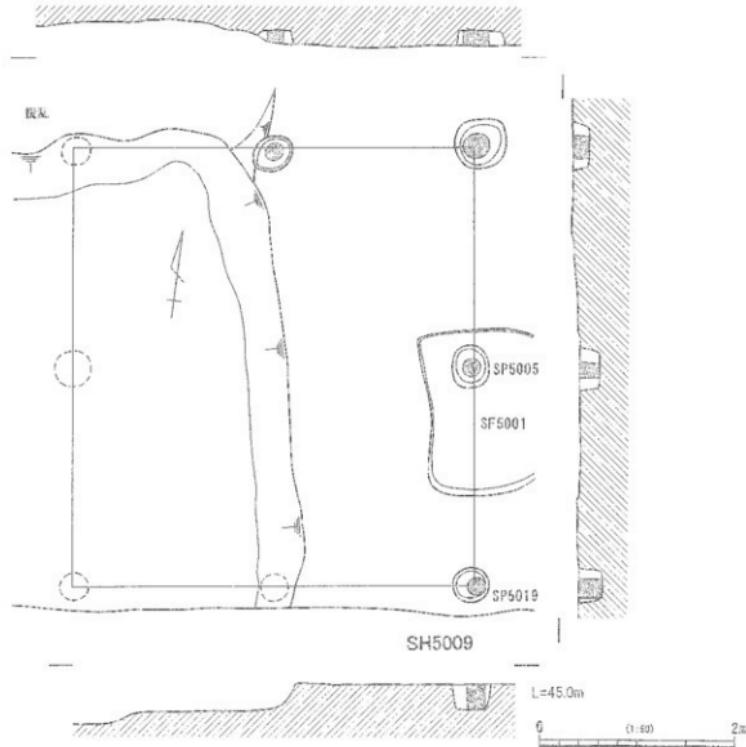
## S H 5009 (第 78・79 図)

S H 5002 の西側に位置する。西側が搅乱によって失われているため、確認されたのは建物の東側部分のみである。柱間が等間であった場合、3 間目にあたる場所に柱穴が存在しないことから、 $2 \times 2$  間の南北棟と推測される。建物規模は、桁行が 4.48 m で、梁間は柱間が等間と仮定すると 4.08 m。桁行の柱間は、2.24 m の等間。南北軸は、北側で 7° 西に振れる。

全ての柱穴で、柱痕跡が検出されている。柱痕跡の大きさは、直径 18 ~ 28 cm。掘方の形状は、円形または梢円形。掘方の規模は、上面で長径 36 ~ 56 cm、深さ 15 ~ 26 cm。柱穴 S P 5005 が、土坑 S F 5001 に切られていることが確認されている。

遺物としては、S P 5019 から山茶碗と土師質土器の皿が出土している(第 79 図)。202 は山茶碗の口縁部の破片である。口縁部が少し外反するが、全体的に直線的なつくりである。203 は土師質土器の皿。口縁部の小片である。年代としては、13 世紀に位置付けられる。

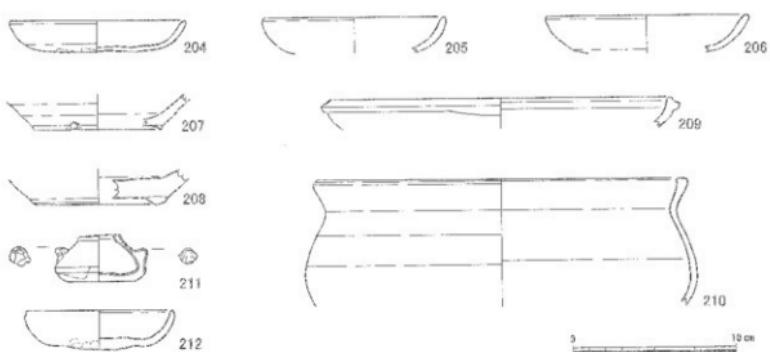
遺物が、柱穴の掘方と柱痕跡のどちらから出土したものか明らかでないが、建物の年代とさほど差がないとすれば、S H 5009 は 13 世紀頃の年代に位置付けられる。



第 78 図 S H 5009 実測図



第79図 SH 5009出土遺物



第80図 小穴出土遺物（中・近世）

## (2) 小穴

明確に建物としては認識できないが、出土遺物から中・近世のものと判断できる小穴が存在する。

S P 1142・1284 (第67・80図、図版17)

S P 1142は、古代の土坑 S F 1001の南側に位置する。柱痕跡埋土から、土師質土器の皿 (204～206) が出土している。いずれも破片で、明確な接合関係がみられないため3点図示したが、同一個体である可能性もある。非ロクロ成形で、底部には指頭圧痕がみられる。15世紀後半から16世紀にかけてのものであろう。S P 1284は、古代の井戸 S E 1001の南側に位置する。埋土中から山茶碗 (207) の破片が1点出土している。渥美・湖西窯産で、13世紀後半のものである。

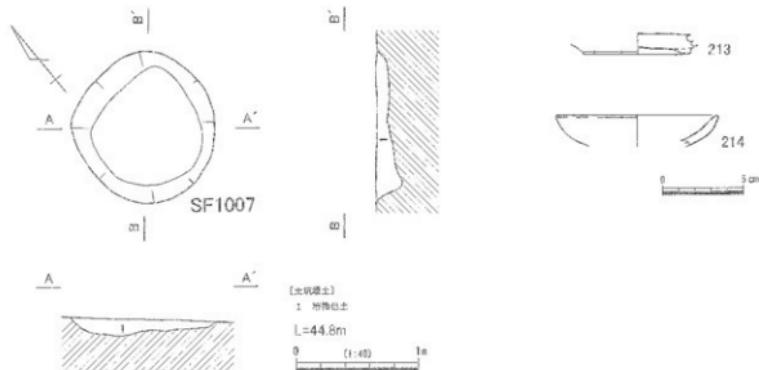
S P 4009・4117 (第70・80図)

S P 4009は、中・近世の土坑 S F 4002の南西に位置する。埋土中から、内耳縁 (209) の破片が出土している。くの字形内耳縁で、口縁部は外側に折り返して成形されている。15世紀後半のものである。S P 4117は、掘立柱建物 S H 4002の西側に位置する。埋土中から、山茶碗 (208) が1点出土している。渥美・湖西窯産の山茶碗で、13世紀後半のものである。

S P 5003・5076・5222 (第73・80図、図版17)

S P 5003は、掘立柱建物 S H 5002の西側に位置する。柱痕跡の埋土中から、内耳縁 (210) が出土している。口縁部はやや直立気味に開き、口縁部は外側に折り返して成形されている。口縁端部は、ナデ調整によって平らに仕上げられている。16世紀代のものであろう。S P 5076は、掘立柱建物 S H 5007の南側に位置する。底部から、瓶口・美濃産の水滴 (211) が出土している。文房具である水滴は、男子誕生に伴う胎衣埋納に関連する遺物であろうか。年代としては、17世紀後半に位置付けられる。S P 5222は、中・近世の土坑 S F 5013の南東に位置する。柱痕跡の埋土中から、土師質土器の皿 (212) が出土している。非ロクロ成形で、口径9cmの小型品。17世紀代のものであろう。

## (3) 土坑



第81図 SF 1007 実測図・出土遺物

## SF 1007 (第81図)

獨立柱埴物 S H 1010 の南側に位置する。長径 125 cm、短径 115 cm の楕円形。深さは、最深部で検出面から 22 cm。底部は平坦ではなく、やや凹凸がみられる。埋土は晴褐色土で、黄褐色粘質土（地山）がブロック状に含まれていた。

遺物は、山茶碗と土師器が出土している（第81図）。213は深美・瀬西産の山茶碗。底部の破片で、低い高台が付く。214は土師質土器の皿で、口縁部に横ナデ調査が施される。年代としては、山茶碗が13世紀の後半に位置付けられる。他に、固化できない小片であるが、土師器の壺と土師質土器の皿が出土している。

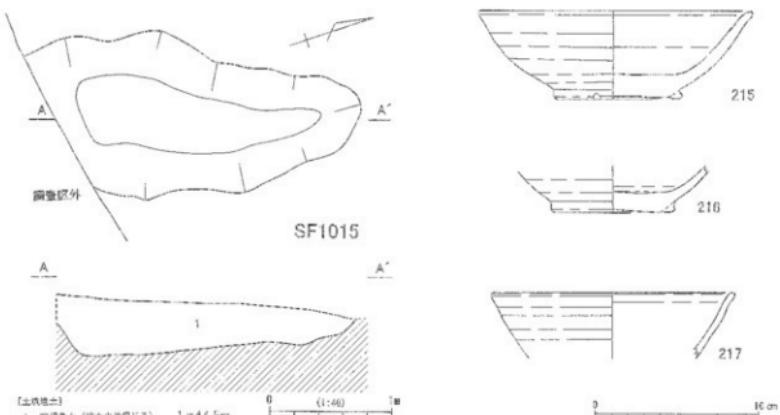
出土した遺物の年代にばらつきがみられるが、213の山茶碗の年代から、SF 1007の年代の上限は13世紀後半に置くことができよう。

## SF 1014 (第88図)

1区の中央部南端に位置する。両側の部分は調査区外へと続く。平面形状は、ややいびつな隅丸長方形。大きさは幅 1.3 m、長さ 1.6 m 以上で、深さは 24 cm。底部はほぼ平坦である。埋土は晴褐色土の単層。遺物は、擂鉢の小破片が 1 点出土しているのみである。内外面に鉄輪が施されている。詳細な年代は不明であるが、少なくとも 15世紀以降の遺物であるとみて間違いないであろう。

## SF 4002 (第88図)

4区の北東部に位置する。平面形状は、直径 90 cm の円形。深さは検出面から 12 cm 程度で、底部はほぼ平ら。埋土は晴褐色土を主体とし、上下 2 層に分けられている。SD 4004 を切っていることが確認されている。遺物としては、上層（第1層）から、土師質土器の皿の細片が 2 点出土しているのみである。後述するように、SD 4004 の埋没年代が 15世紀後半に位置付けられることから、SF 4002 はそれ以後に埋られた土坑とみて間違いないであろう。



第82図 SF 1015 実測図・出土遺物

## SF 1015 (第82図、図版17)

S F 1014 の西側に位置する。平面形状は不定形で、南側は一部が調査区外へ続く。深さは最深部で、検出面から 48 cm。底部はほぼ平坦であるが、南側がやや深くなる。埋土は暗褐色土で、焼土粒が少量混入していた。埋土中から、山茶碗が出土している(第82図)。215は全体の 3 分の 2 程度残存する。底部からやや彎曲して斜め上方へと立ち上がり、口縁部で少し外反する。底部には、低くややいびつな高台が貼り付けられる。216は底部の破片で、底部に 215 と同様の低い高台が付く。217は口縁部の破片。年代としては、いずれも 13世紀の前半に位置付けられる。埋土の上層からの出土であるが、遺構の年代を示す遺物とみてよいであろう。

## S F 4003 (第88図)

S F 4002 の東側に位置する。平面形状は、直径 80 cm の円形。深さは検出面から 15 cm 程度で、底部は平坦。埋土は暗褐色土の単層で、焼土粒が少量混じっていた。遺物は、埋土中から土師質土器の皿と内耳鍋が数片出土している。いずれも、図化できないほどの細片である。詳細な年代については特定できないが、中世後期以降とみてよいであろう。

## S F 4004 (第59図)

S F 4003 の北側に位置する。平面形状は不定形。大きさは、南北 1 m・東西 80 cm 程度。深さは、最深部で検出面から 30 cm。底部は狭く、断面は椀形を呈する。埋土は暗褐色土を主体とし、混入物の差で上下 2 層に分けられている。上層(第1層)には、焼土粒が多く含まれている。切り合い関係としては、S D 4004 と S F 4061 を切っていることが確認されている。遺物としては、埋土から内耳鍋が 9 点出土している。いずれも体部の破片で、図化できないほどの小片である。遺物から詳細な年代は把握できないが、S D 4004 との切り合い関係から、S F 4002 と同様に 15世紀後半以降の遺構であると推測される。

## S F 4005 (第 83 図)

S H 4002 の南側に位置する。

平面形状は、長径 80 cm・短径 35 cm の楕円形。深さは、検出面から 15 cm で、底部は平坦。埋土は暗褐色土が主体で、上下 2 層に分けられている。

遺物は、埋土中から土師質土器の皿が 1 点出土しているのみである。218 は非クロコ成形の土師質土器の皿で、器壁は薄く浅いつくり。年代としては、16 ~ 17 世紀頃に位置付けられよう。出土遺物は 1 点のみであるが、遺構の年代もほぼ同じ頃に置いて差し支えないであろう。

## S F 4007 (第 84 図、図版 17)

S H 4002 の南西部に位置する。平面形状は、長径 125 cm・短径 85 cm の楕円形。深さは、検出面から 12 cm で、底部はほぼ平ら。側面は緩やかに立ち上がる。埋土は暗褐色土の単層で、炭化物が少量含まれていた。掘立柱建物 S H 4002 の柱穴 S P 4056 を切っていることが確認されている。

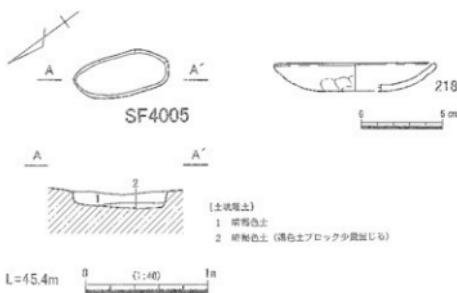
遺物としては、埋土から内耳鍋

2 点と砾石 1 点が出土している。

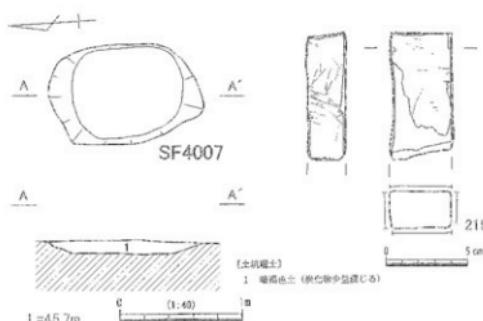
砾石 (219) は、長さ 7 cm、端部の幅 3.7 cm の長方形。長側面の片側は、中央が磨り減って大きく窪んでいる。短側面の片側は、斜めになっており、部分的に破断面が確認される。破損して短くなっているものと推測される。ただし、磨り減って平滑になっている部分もみられるため、破損した後もしばらく使用されたのであろう。内耳鍋は体部の破片で、1 点にはケズリ調整がみられる。2 点とも図化できない小片である。遺物から、詳細な時期は判断できないが、15 世紀以降であることは間違いないであろう。

## S F 4014 (第 88 図)

4 区の西端に位置する。平面形状は、長径 105 cm・短径 85 cm の楕円形。深さは、検出面から 5 cm 程度しかない。埋土は暗褐色土の単層で、炭化物が多く混入していた。遺物は、土師質土器の皿が 1 点出土しているのみで、図化できないほどの細片である。厚さは 1.5 mm と薄いつくりとなっている。詳細な年代は不明であるが、少なくとも中世後期以降の遺物とみてよいであろう。



第 83 図 SF 4005 実測図・出土遺物



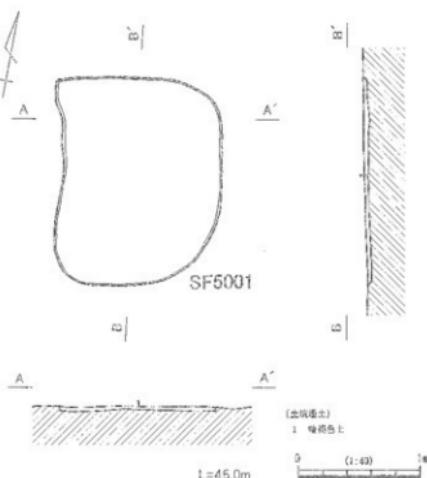
第 84 図 SF 4007 実測図・出土遺物

## S F 5001 (第85図)

S H 5009の西側に位置する。平面形状は、短辺1.3m・長辺1.7mの濃丸長方形。深さは検出面から3cmと浅く、底部はほぼ平坦。埋土は、暗褐色土の単層である。

他の遺構との切り合ひ関係としては、獨立柱埴物 S H 5009の柱穴 S P 5005を、切っていることが確認されている。

遺物は出土していないため詳細な年代については不明である。ただし、先述のように、S H 5009が13世紀代に位置付けられることから、それを降る年代の遺構として捉えることができる。

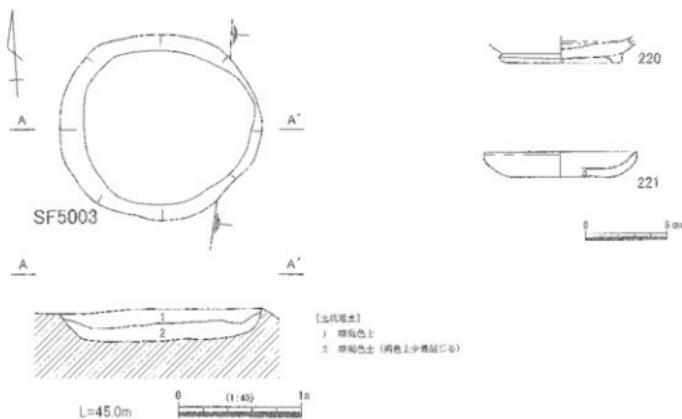


第85図 SF 5001 実測図

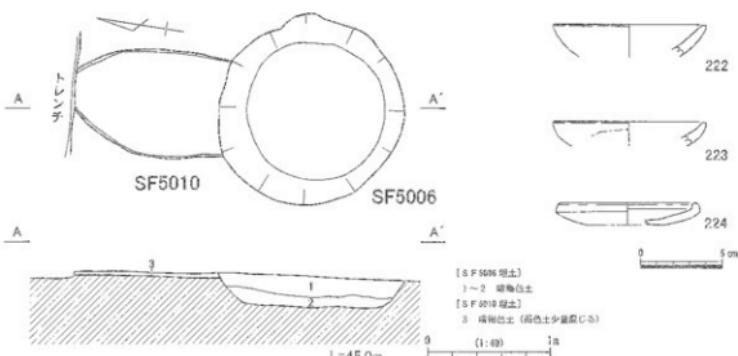
## S F 5003 (第86図)

S F 5001の南西に位置する。平面形状は、直径1.6mの円形である。深さは検出面から25cmで、底部は平坦。埋土は暗褐色土を主体とし、上下2層に分けられている。

遺物としては、埴土上層（第1層）から、山茶碗（220）と土師質上器の皿（221）が出土している。220は瀬美・瀬西産の山茶碗で、底部はほぼ完形。底部に低い高台が貼り付けられている。221は胎土が橙白色の色調を呈し、口縁部には横ナデ調整が施されている。年代としては、13世紀後半に位置付けられる。



第86図 SF 5003 実測図・出土遺物



第87図 S F 5006、5010 實測図・出土遺物

## S F 5006・5010（第87図、図版17）

S H 5001の南側に位置する。南北に接しており、S F 5006が5010を切っていることが確認されている。S F 5006は直径1.5mの円形で、検出面からの深さは25cm。底部は平坦で、側面が斜めに立ち上がる。埋土は暗褐色土を主体とし、上下2層に分けられている。

遺物としては、下層（第2層）から、土師質土器の皿が出土している（第87図）。222・223とともに、口縁部の破片。表面の摩滅が著しいが、222の口縁部には横ナデ調整が確認される。この他に、上層（第1層）からは山茶碗の破片が出土している。

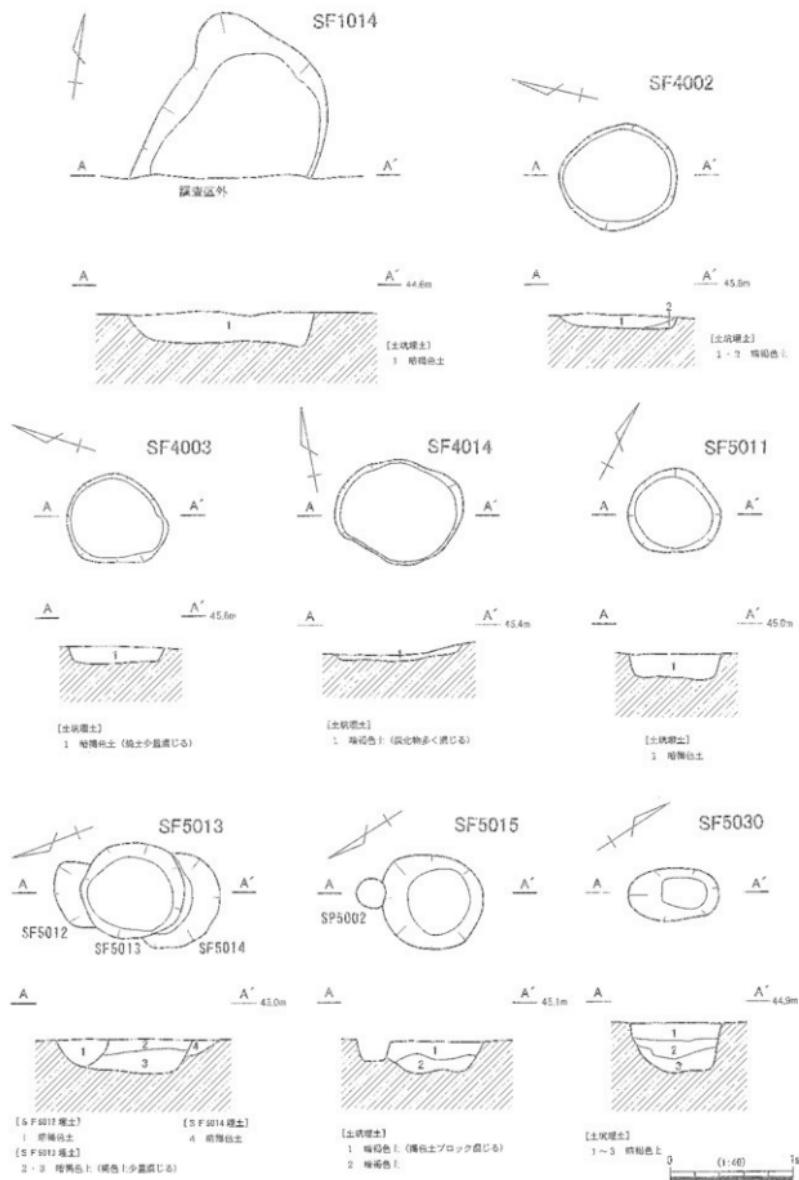
S F 5010は、短径90cm・長径120cm以上の稍円形を呈する。深さは検出面から3cm弱と浅い。埋土は、暗褐色土の単層で、褐色土がブロック状に含まれていた。遺物は、土師質土器の皿（224）が出土している。口径が8.3cmと小型。底部は丸底で、口縁部を内側に折り曲げる、いわゆる「コースター形」の皿である。時期としては、13世紀代に位置付けられる。

S F 5006でも山茶碗が出土していることから、S F 5006と5010は両者ともに13世紀代の造構とみてよいであろう。

## S F 5011（第88図）

S H 5002の南東隅に位置する。平面形状は、直径70cmの円形。深さは検出面から20cmで、底部はほぼ平坦。埋土は暗褐色土の単層。S F 5011によって、礎立柱礎物S H 5002の南東隅柱が失われている。

遺物は、土師質土器の皿とみられる網片が3点出土しているのみである。遺物から明確な年代を知ることはできないが、先述のようにS H 5002の年代の上限が12世紀後半に位置付けられることから、S H 5011は少なくともそれ以前に掘られた遺構であることは間違いない。



第88図 中・近世土坑災測図

## S F 5012・5013 (第 88 図)

S F 5003 の北側に位置する。南北に一部重複して掘られており、S F 5012 が 5013 を切っていることが確認されている。

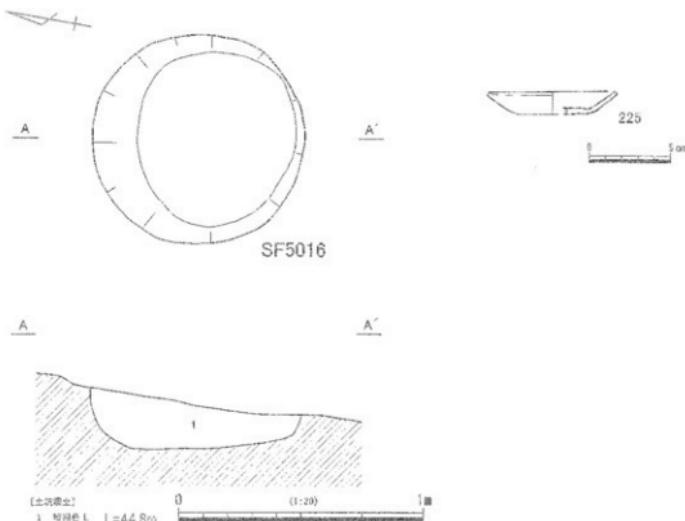
S F 5013 は直径 80 cm 程度の円形で、深さは検出面から 30 cm。埋土は、暗褐色土を主体として、上下 2 層に分けられている。遺物は、上層（第 1 層）から、土師質土器の 1 cm 以下の粗片が 3 点出土しているのみである。S F 5012 は直径 40 cm 程度のややいびつな円形で、深さは最深部で約 20 cm。埋土は暗褐色土の单層。調査時には土坑として認識されているが、大きさ等から、柱抜き取り穴である可能性も考えられる。遺物は出土していない。

詳細な年代は不明であるが、先行する S F 5013 から土師質土器の破片が出土していることから、いずれも中世以降の遺構であると推測される。

## S F 5015 (第 88 図)

S H 5001 の南側に位置する。S X 5002 を切っていることが確認されている。平面形状は、直径 80 cm の円形。深さは、最深部で検出面から 25 cm。底部にはやや凹凸がみられる。埋土は暗褐色土を主体とし、上下 2 層に分けられている。

遺物は、上層（第 1 層）から、土師質土器の皿と思われる小片が 1 点出土しているのみである。後述するように、S X 5002 は 16 世紀以降の年代に位置付けられることから、これを切る S F 5015 はそれよりもさらに遡った年代の遺構とみることができる。



第 89 図 S F 5016 実測図・出土遺物

## S F 5016 (第89図、図版17)

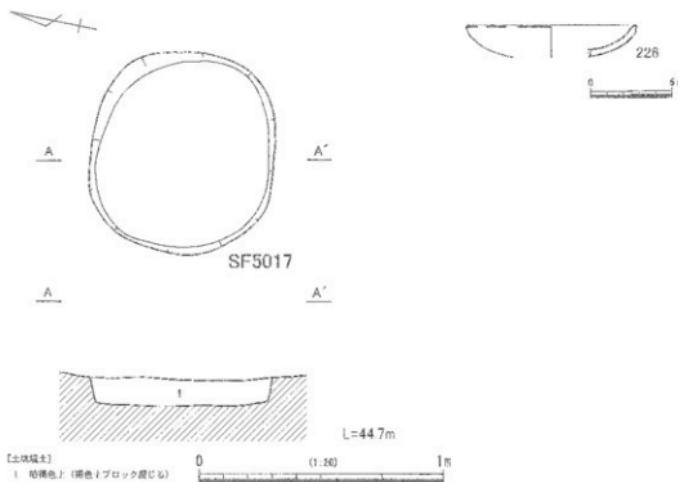
S F 5014の南東に位置する。平面形状は直径90cmの円形。上部は擾乱によって削平されている。深さは最も残りの良い部分で検出面から22cmで、底部はほぼ平坦。埋土は褐色土の単層で、褐色土がブロック状に含まれていた。

遺物は埋土から、土師質土器の皿(225)が1点出土しているのみである。ロクロ成形されており、器壁は薄い。年代としては、16~17世紀に位置付けられる。

## S F 5017 (第90図)

S F 5016の南側に位置する。平面形状は、直径80cmの円形。全体的に擾乱によって削平されている。深さは検出面から11cm。底部は平坦で、裏面は直立気味に立ち上がる。裏土は、褐色土をブロック状に含む暗褐色土の単層。

遺物は埋土から、土師質土器の皿(226)が1点出土している。手づくねによって成形されており、全体的に薄いつくりである。胎土は、澄白色の色調を呈する。16~17世紀のものとみられる。S F 5017は、S F 5016と隣接した位置にあり、規模や埋土も近似している。両者は16世紀から17世紀にかけての、近接した時期の遺構とみてよいであろう。



第90図 S F 5017 実測図・出土遺物

## SF 5021 (第91図)

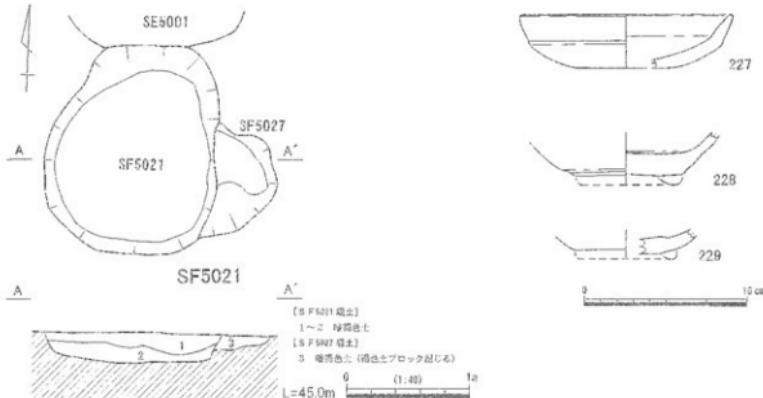
S F 5006の東側に位置する。平面形状は、長径1.7m・短径1.4mの椭円形。深さは検出面から24cmで、底部はほぼ平坦。埴土は暗褐色土を主体とし、上下2層に分けられる。他の遺構との切り合いは、S E 5001とS F 5027をS F 5021が切っていることが確認されている。

遺物としては、土師質土器の皿と山茶碗が出土している(第91図)。227~229は、いずれも埴土の上層(第1層)からの出土である。227は土師質土器の皿である。口縁部はやや外反し、横ナデ調整が施される。228・229は渥美・瀬戸産の山茶碗。底部に低い高台が付けられている。13世紀後半のものである。上層(第1層)からは、他に渥美産の甕の体部や土師質土器の破片が出土している。遺構の年代としては、13世紀後半頃とみてよいであろう。

## SF 5030 (第88図)

S H 5009の南側に位置する。平面形状は、長径70cm・短径45cmの椭円形。深さは検出面から40cmで、底面は狭く、南側の立ち上がりがやや緩い。埴土は暗褐色土を主体として、含有物の違いから3層に分けられている。

遺物は、山茶碗と土師質土器の小片が各1点出土しているのみである。いずれも上層(第1層)からの出土である。詳細な年代は不明であるが、出土遺物から中世の遺構と推測される。



第91図 SF 5021 実測図・出土遺物

## (4) 井戸

## S E 2001 (第 92 図)

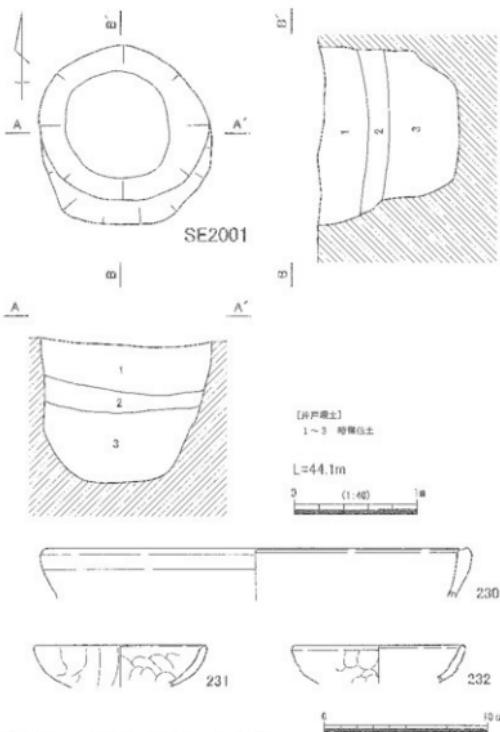
2 区の中央部に位置する。平面形状は、直径 1.4 m の円形。深さは 1.1 m で、側面は直立気味に立ち上がる。井戸材は検出されていない。埋土は暗褐色を主体とし、3 層に分けられている。上層から拳大程度の礫と、底部からやや浮いた状態で 20 cm 程度の石が発見されているが、石組みや敷石は検出されていない。埋土が全体に堆積していることから、素掘りの井戸であったか、あるいは井戸の廃棄時に井戸枠が抜き取られている可能性が高いと推測される。

埋土中からは、須恵器や土師質土器、常滑窯の壺などが出土している。小片が多く、図化できたのは 3 点のみである (第 92 図)。230 は内耳皿で、口縁部の破片。内済する口縁をもつ、内湾形内耳皿である。231・232 は土師質土器の皿。手づくねで成形されており、指痕压痕が明確に残る。全体的に薄いつくりである。いずれも、16 ~ 17 世紀前半に位置付けられる。S E 2001 の廃棄年代の上限を示す造物として捉えることができる。

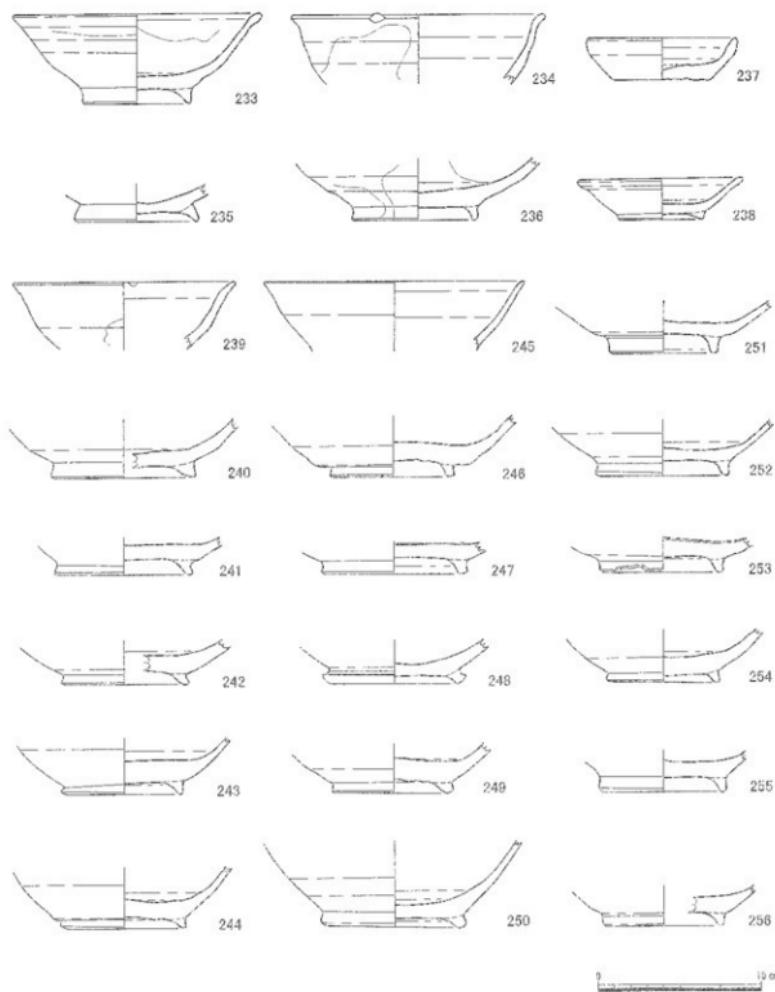
## S E 4001 (第 93・94 図、図版 10・18)

4 区の西端に位置する。平面形状は、一辺 1.3 m の方形。深さは、検出面から 2.3 m。側面は、底部から直立して立ち上がり、上部でやや外に開く。底部の石敷き、水溜めなどの施設は検出されていない。埋土は暗褐色土を主体とし、色調や含有物の違いなどから、5 層に分けられている。各層はほぼ水平に堆積している。中層 (第 3・4 層) では、多くの拳大程度の礫が発見されている。井戸枠等の木材は出土していない。

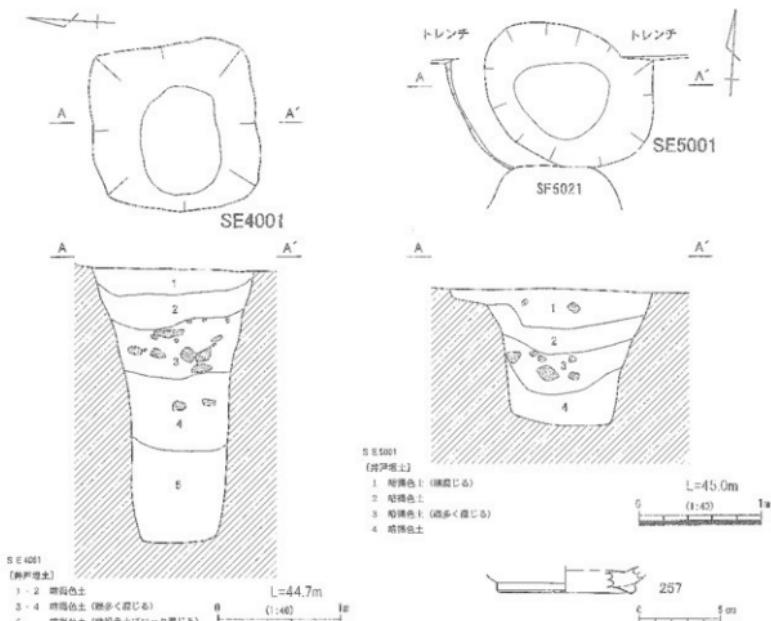
遺物は比較的多く、埴上中から須恵器や山茶碗、土師質土器の皿などが出土している (第 93 図)。233 ~ 235 は灰釉陶器の碗。口縁部に灰釉が剥け掛けされている。11 世紀の宮口窯産であろう。237 は土師質土器の皿。ロクロ成形で、底部には糸切り痕が確認される。口縁部はやや内湾気味に直立する。236・239 ~ 256 は、涅美・潤西窯の山茶碗。236・239 には、



第 92 図 S E 2001 実測図・出土遺物



第93図 S E 4001出土遺物



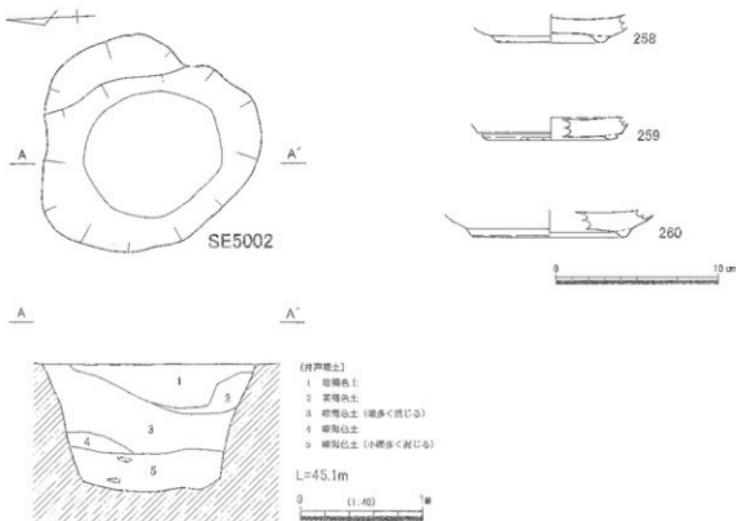
第94図 S E 4001、5001 実測図・出土遺物

漬け掛けによって灰釉が施されている。248 の内面にはほぼ全面に炭化物の付着がみられる。高台は比較的高く、断面が三角形状のものと四角形状のものとがある。12世紀後半～13世紀前半のものが大半を占める。238 は灰釉陶器の小鉢で、底部に低い高台が付く。底部から斜めに立ち上がり、口縁部はやや外反する。11世紀のものである。

出土遺物は、上層（第1層）から下層（第5層）まで出土しているが、特に中層（第3・4層）からの出土が多い。灰釉陶器と山茶碗などの層からも出土しており、出土遺物において各層位間の年代差は見出せない。井戸を廃棄する際に、一度に埋められているとみてよいであろう。埋土が掘方まで達していることから、井戸枠はその際に抜き取られた可能性が高い。出土遺物から、S E 4001 の廃棄年代は13世紀の前半に位置付けられる。

#### S E 5001 (第94図)

S E 5001 の北側に位置する。北側が削平されているが、現存で長径 1.6 m・短径 1.3 m。西側にはテラス状に浅い平坦面が設けられている。深い掘り込み部分の平面形状は、直径 1.4 m 程度の円形に復元することができる。深さは検出面から 1.1 m で、底部は平ら。底部に敷石や水溜めなどの施設は検出されていない。埋土は暗褐色土を主体として、4 層に分けられている。第1層と第3層からは、拳大ほどの大きさの礫が発見されている。井戸枠等の木材は出土していない。土坑 S F 5021 に切られているこ



第95図 SE 5002 実測図・出土遺物

とが確認されている。

遺物は、埋土の上層から山茶碗1点と、土師質土器の皿が3点出土しているのみである。土師質土器はいずれも小片であり、図化できたのは山茶碗(257)のみである。山茶碗は底部の破片で、低い臺台が付く。高台の下端には紺圧痕がみられる。13世紀中頃から後半にかけてのものである。

先述のように、SE 5001 を切る土坑SF 5021 の年代は、13世紀後半に位置付けられる。出土した山茶碗の年代と矛盾ではなく、SE 5001 の廃棄年代は13世紀中頃～後半とみてよいであろう。

#### SE 5002 (第95図)

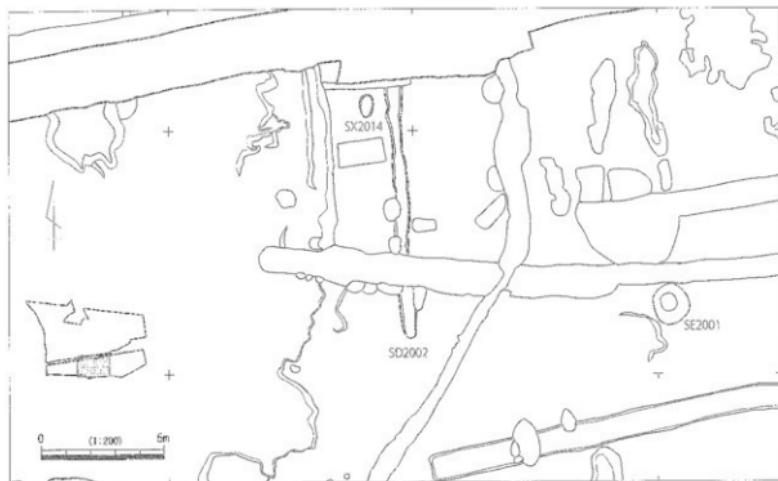
S F 5003 の西側に位置する。崩落によって西側が少し広がっているが、上面の平面形状は梢円形で、長径1.9m・短径1.4mに復元できる。底部は平坦で、直径1m程度の円形。敷石や水溜めなどの施設は検出されていない。暗褐色土を主体とする埋土で、5層に分けられている。井戸枠などの木材は出土していない。

遺物は、上層から山茶碗3点と、土師質土器の皿が3点出土しているのみである。土師質土器の皿は、いずれも図化できないほどの細片である。258～260は、渥美・瀬戸産の山茶碗で、底部に低いびつな高台が付く。高台部下端には紺圧痕がみられる。13世紀後半のものである。埋土上層から出土した遺物であるが、SE 5002 の廃棄年代の上限を示す遺物として捉えることができる。

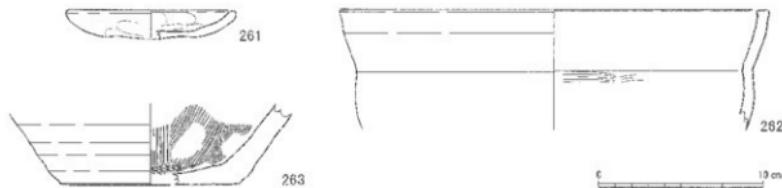
## (5) 溝

## SD 2002 (第96・97図)

2区の中央に位置する南北溝。2区の北端から10.4mの長さで検出されている。幅は60cmで、深さは平均5cmと浅い。埋土は暗褐色土の草炭である。南側で、竪穴住居S-B-2002を切っていることが確認されている。遺物は埋土から、土師質土器の皿や内耳鏡、擂鉢が出土している(第97図)。261は土師質土器の皿。手づくね成形で、指彫痕が明瞭に確認できる。形はいびつで、全体的に薄いづくりである。16世紀から17世紀前半にかけてのものである。262は内耳鏡で、口縁部から体部にかけての破片。内湾形内耳鏡で、口縁部は長く、受け口状となる。大半が指オサエまたはナデ調整であるが、体部内面上方にのみハケ目調整が確認される。263は志戸呂焼の擂鉢。内外面全面に鉄粒が施されている。261・263は17世紀前半のものである。他に須恵器も出土しているが、竪穴住居からの混入品であろう。これら遺物から、SD 2002は17世紀前半の溝として捉えることができる。



第96図 中・近世の遺構配置図(2区)



第97図 SD 2002 出土遺物

## SD 4001・4004 (第70・98図)

4区の北端に位置する。いずれも南北溝で、北側が調査区外へと続く。

SD 4001の検出されている長さは5m程であり、南へ向かって徐々に浅くなる。幅は最大1mで、深さは最深部でも10cmと浅い。上方が大きく削平されているものと推測される。埋土は暗褐色土を主体とし、上下2層に分けられている。遺物は山茶碗と土師質土器の小片が出土している。265は渥美・湖西産の山茶碗で、溝の底部から出土している。底面には低い高台が付き、口縁部へ斜め上方に直線的に立ち上がる。13世紀後半のもので、溝の年代を示す遺物として捉えられる。

SD 4004は、調査区北端から2.6m程の長さで検出されており、南へ向かって徐々に浅くなる。幅は40cmで、深さは北側の最深部でも3cm程しかない。埋土は暗褐色土の单層。土坑S F 4002と4004に切られていることが確認されている。遺物としては、埋土中より内耳鉢(264)が1点出土しているのみである。口縁部が外に開く、くの字形内耳鉢で、口縁端部は粘土を外に折り返して成形している。15世紀後半のものである。溝の埋没年代を示す遺物と考えてよいであろう。

## (6) その他の遺構

## SX 2014 (第99・100図、図版9・19)

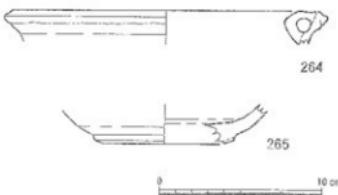
S D 2002の西側に位置する土坑墓。平面形状は、長径95cm・短径62cmの南北に長い楕円形。深さは検出面から36cm。底部は平坦で、側面が斜めに立ち上がる。暗褐色土を主体とする埋土で、上下2層に分けられている。下層(第2層)には、炭化物が含まれていた。

底部の中央やや北よりの位置で、歯と人骨の小片が検出されている。人骨は遺存状態が悪く、粉状になっている状態であった。歯は、合計18本出土している。内訳は、切歯5本、犬歯3本、臼歯6本、大臼歯3本、切歯と思われる小破片1点である。多少散らばった状態で検出されているものの、全体としては墓坑の北側に偏って出土しており、頭位が北向きであったことをうかがわせる。

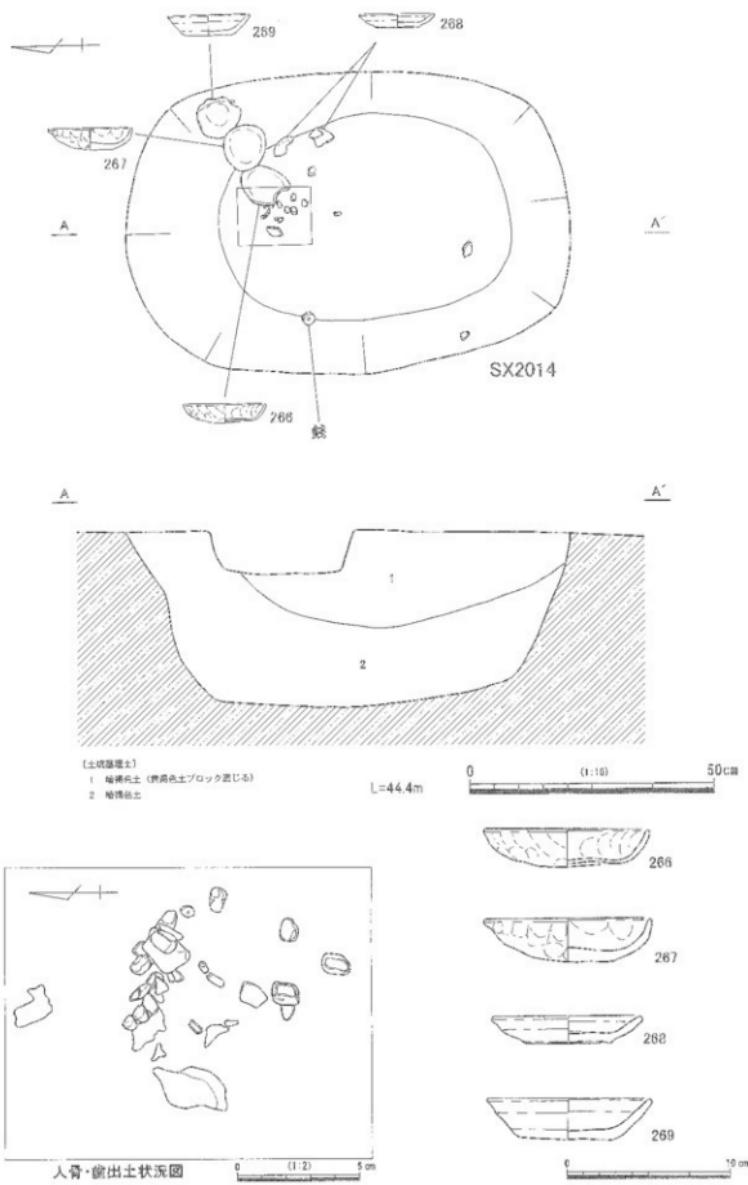
歯や骨が出土した場所の壁には、土師質土器の皿が4点副葬されている(第99図)。266・267は薄いつくりで、外面には指痕痕が明瞭に残る。268・269はロクロ成形で、底部には糸切り痕がみられる。268は269に比べて浅いつくりである。266・267・269はほぼ完形の状態で出土しているが、268は破片が散った状態で出土している。いずれも、16世紀後半から17世紀前半のものである。

また反対側にあたる土坑の東側からは、銅錢が出土している(第100図)。270～275は、鏽着した状態で発見されている。273は景徳元宝(1004年初鋤)。270は祥符元宝(1008年初鋤)。271は聖宋元宝(1101年初鋤)。274は天禧通宝(1017年初鋤)。271と274は直径が2.2cmと小さく、模鏡鑄とみられる。273と274は互いに裏面で鏽着している。272は成淳元宝(1265年初鋤)。275は破片のため、「寶」の字が確認されるのみである。出土状況から、これらの銭貨は六道錢として埋納されたものとみてよいであろう。

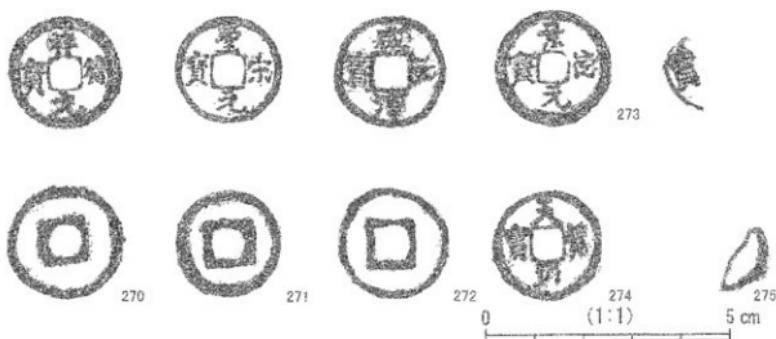
人骨や歯が出土していることに加え、副葬品とみられる土師質土器や六道錢が出土していることから、SX 2014は土坑墓とみてよい。その年代としては、出土している土器などから、16世紀後半から17世紀前半であると推測される。



第98図 SD 4001、4004出土遺物



第99図 SX 2014 実測図・出土遺物



第100図 SX 2014出土銭貨拓影

第5表 SX 2014出土銭貨 一覽表

No	錢名	国名	初鑄年	錢径 (mm)	内徑 (mm)	孔 (mm)	重量 (g)	備考
270	祥符元寶	北宋	1008	2.3	1.8	0.6	1.43	
271	聖宋元寶	北宋	1101	2.2	1.9	0.6	1.62	
272	咸淳元寶	南宋	1265	2.35	1.9	0.65	2.71	
273	景德元寶	北宋	1004	2.4	1.8	0.55	5.84 (4と合計)	274と錯着
274	天禧通寶	北宋	1017	2.2	1.85	0.55	5.84 (1と合計)	273と錯着
275	□□□寶						0.28	1/5 残存

## SX 5001 (第73図)

S H 5002の南側に位置する。掘立柱建物 S H 5002の柱穴 S P 5010を切って掘られていることが確認されている。南北に長い不定形な造構で、規模は南北2.7m・東西最大1.5m。深さは、最深部で検出面から35cm。斜面にはいくつかの段がみられ、底部にも凹凸が多い。埋土は暗褐色土を主体とし、3層に分けられている。上層(第1層)と中層(第2層)には、褐色土のブロックが混入している。遺物は出土していない。先述のように、S H 5002の建築年代の上限は、12世紀後半に位置付けられる。切り合い関係から、SX 5001はそれ以降の年代とみることができる。

## SX 5002 (第73図)

S H 5001の南側に位置する。東西に長い不定形な造構で、西側はS F 5015に切られ、東側ではS H 5008の柱穴を削平している。規模は、残存部で東西2.2m・南北1.1m。深さは最深部で40cm。断面が椀形を呈している。埋土は暗褐色土を主体としており、3層に分けられている。遺物は出土していない。S H 5008が16世紀頃の建物と考えられることから、これを切るSX 5002はそれを降る年代の造構として捉えることができる。

## (7) その他の遺物

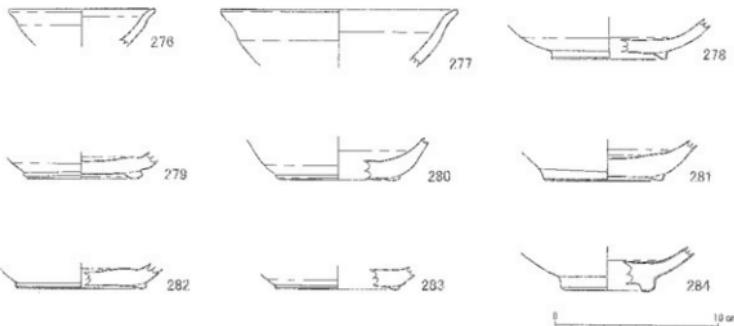
## 包含層出土遺物（第101・102図、図版19・20）

292・295～298は2区から、276～278・281・282・288・293は5区からの出土であり、その他は4区から出土している。285～291は土師質土器の皿で、手づくね成形。292は内面を横方向のミガキ彫整による、黒色処理した源元炎焼成の土器である。畿内からの搬入品であろう。293は羽笠である。次にふれる内耳鍋に比べ、遼江では出土数が少ない。294～297は内湾形内耳鍋である。296は器壁が薄く、口縁部は直立気味となる。293とともに、16世紀後半のタイプである。297は器壁が厚く、口縁部が受け口状となっている。17世紀前半のものである。298は半球形内耳鍋である。体部外面の上半はハケ目調整で、下半はヘラケズリ調整。器高は深い。299の壺鉢と300の外は、いずれも志戸呂焼である。301は内底面中央に粘をつける。276～283は渥美・湖西産の山茶碗と小皿である。276の小皿が12世紀前半（源美・湖西編年Ⅰ期）、それ以外は13世紀（Ⅱ期）である。284は外面に蓮弁文をもつ龍泉窯系青磁碗I～5類である。龍泉窯系青磁碗I～5類は、東笠子27地点遺跡など他の出土例でも、渥美・湖西編年Ⅲ期に伴っている。

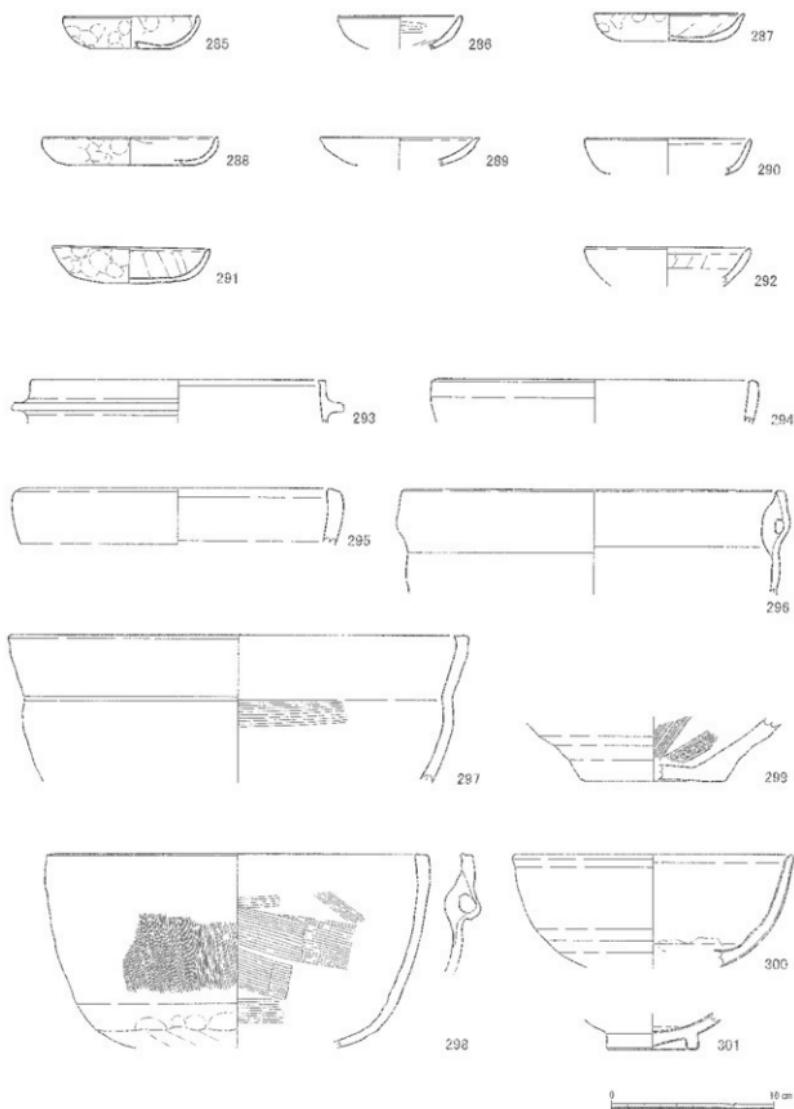
## 撹乱出土遺物（第103～106図、図版19・20）

310・322が1区、306・307・323が2区、302・309・311・314・315・317・321が5区、その他は全て4区の撹乱から出土している。

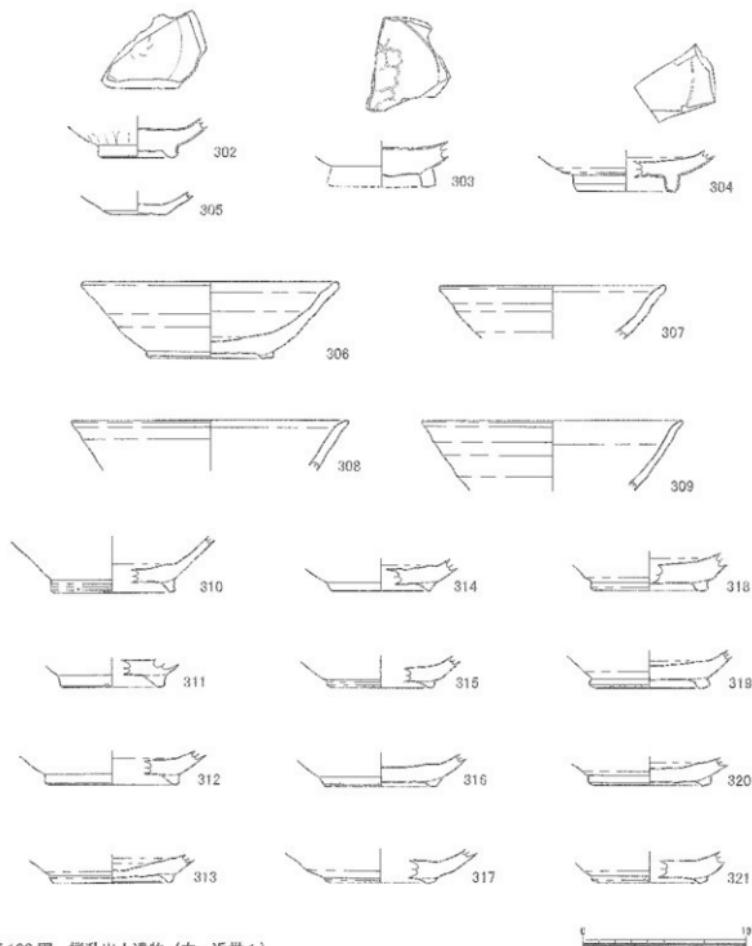
302～304の中国製陶磁器は、龍泉窯系青磁碗である。底部の器壁が厚く、外面に蓮弁文をもつI～5類と考えられるが、残念ながら底部のみで決定できない。見込みに草花文を押している。304は高台内に薄く釉薬を塗るところから、Ⅱ類であろうか。全体の釉薬は薄く掛けられている。305は山茶碗の小皿。306～321は山茶碗。知多産である310以外は、すべて渥美・湖西産である。322～327は土師質土器の皿である。手づくね成形のものである。328は半球形内耳鍋で、329・330は内湾形内耳鍋である。土師質土器の皿と内耳鍋は、いずれも戦国時代から江戸時代初・前期のものである。333～336の壺・甕類は、渥美・湖西産である。蓮弁文の壺（331・332）と大きく外反する広口甕（333・334）が認められる。蓮弁文壺は軽塙壺や火葬骨用の藏骨器に使用され、集落遺跡で出土することは極めて少ない。甕は口縁部内側にわずかに段をもつものが古いとされるが、段をもたないものもある。本遺跡では両方のタイプのものが出土している。337～340は彌月・美濃産の天目茶碗である。いずれも17世



第101図 包含層出土遺物（中・近世1）

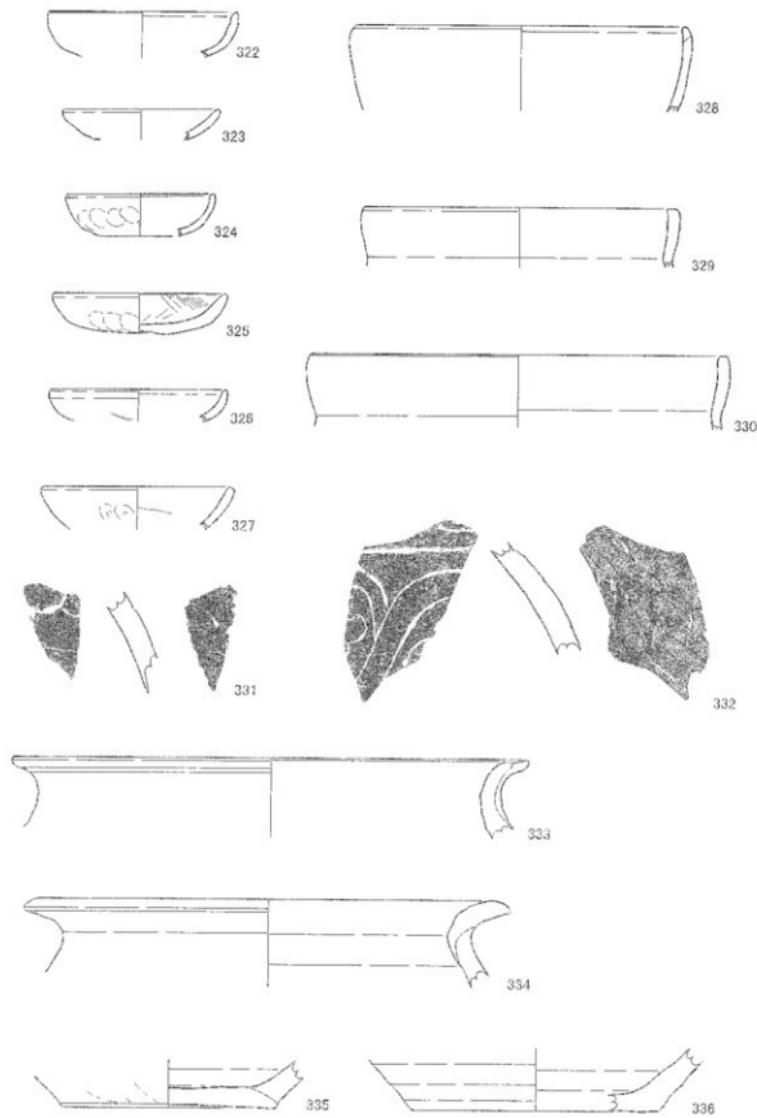


第102図 包含層出土遺物（中・近世2）



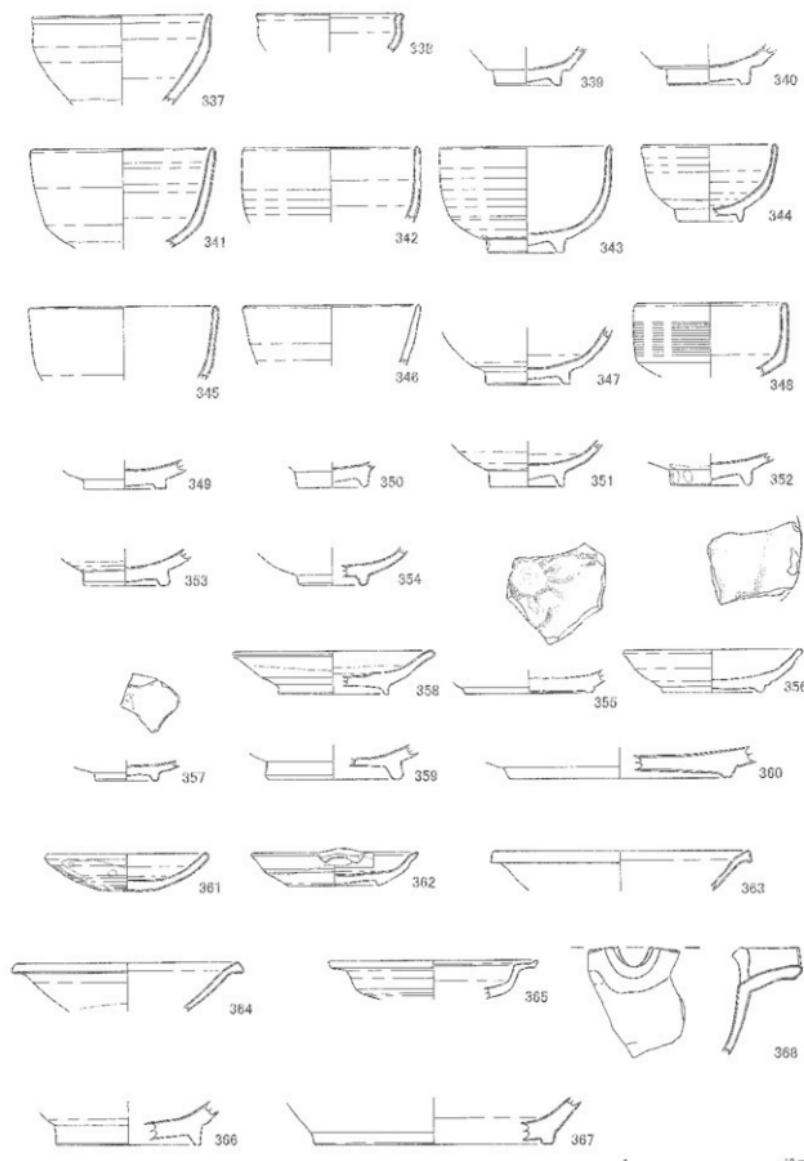
第103図 搾乱出土遺物（中・近世1）

紀前半から中葉のもの。337は鉄袖と柿釉の二重掛けである。341～347は筒茶碗もしくは丸碗である。多くは、17世紀中葉から18世紀初頭のものである。341は鉄軋掛けで、表面に細かいヒビがある。大窯後期の可能性もあるが、薄手で登窯期の特徴もある。残存部が少ないため、時期については明瞭でないが、17世紀末あたりのものであろうか。いずれにせよ、大振りな造りで茶陶として使用されたものであろう。348は腰鎬茶碗であるが、体部下位の屈曲部を直立気味に造る。349～354は丸碗もしくは碗である。瀬戸・美濃製品（349～351・354）とともに、志戸呂焼の碗類（352・353）がある。355～365は皿類である。17世紀前半から中頃の呉須絵皿（355）と鉄絵皿（356）があるが、いずれも志野小

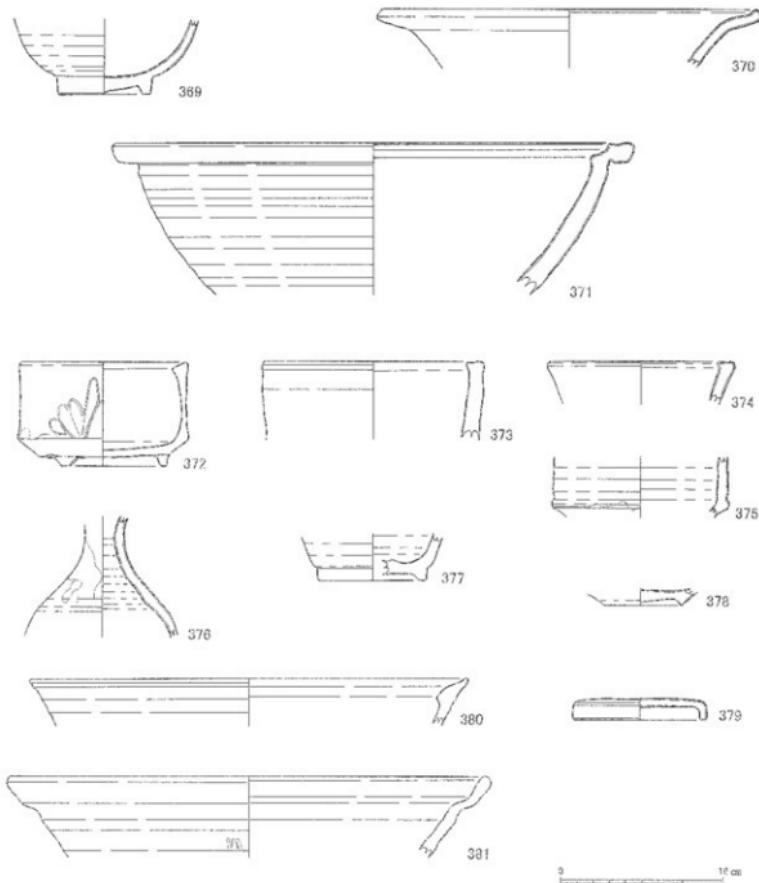


第104図 櫻乱出土遺物（中・近世2）

10 cm



第105図 挿混出土遺物(中・近世3)



第106図 捜査出土遺物（中・近世4）

皿の範疇である。18世紀以降の皿類は、いずれも一般的な量産品である。366～370は瀬戸・美濃産の鉢である。18世紀代のものが多い。371は古瀬戸の折縁深皿である。15世紀代のものであろう。372・374・375は瀬戸・美濃産の香炉。17世紀末から18世紀のものである。373は常滑焼の土管であろうか。376・377は瀬戸・美濃産の徳利。378は瀬戸・美濃産の皿であろう。379は合子の蓋である。18世紀後半の瀬戸・美濃製品である。380・381は、志戸呂窑（380）と瀬戸・美濃産（381）の擂鉢である。鉢類・香炉・徳利・擂鉢には特別に目新しい製品は認められず、ごく普通の消費地遺跡の陶磁器である。いずれにせよ、陶磁器の構成においては瀬戸・美濃製品が優位であって、遠江の志戸呂焼製品は補完的なあり方を示している。

#### 4. その他の遺構と遺物

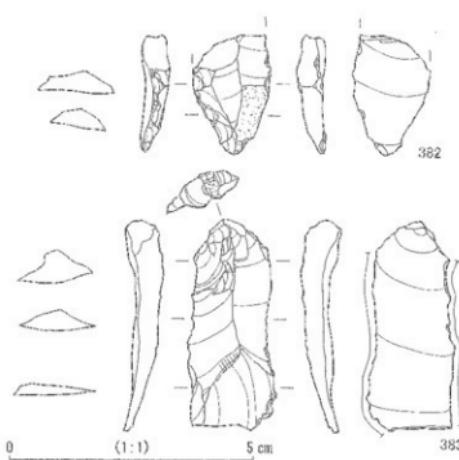
##### (1) 旧石器時代の遺物

遺跡としての広がりは確認されなかったが、旧石器時代の遺物が2点採取されている（第107図）。

382はナイフ形石器である。2区の擾乱土中から出土している。チャート製で、図の上方は折れて欠損している。

383は綫長の剥片で、使用痕が認められる。シルト岩製。確認調査の際に4区から出土している。

出土状況は明らかでないが、黄褐色の砂質土から出土したとされる。礫が混入する層位であったとの記録もあるため、流路等から出土している可能性もある。



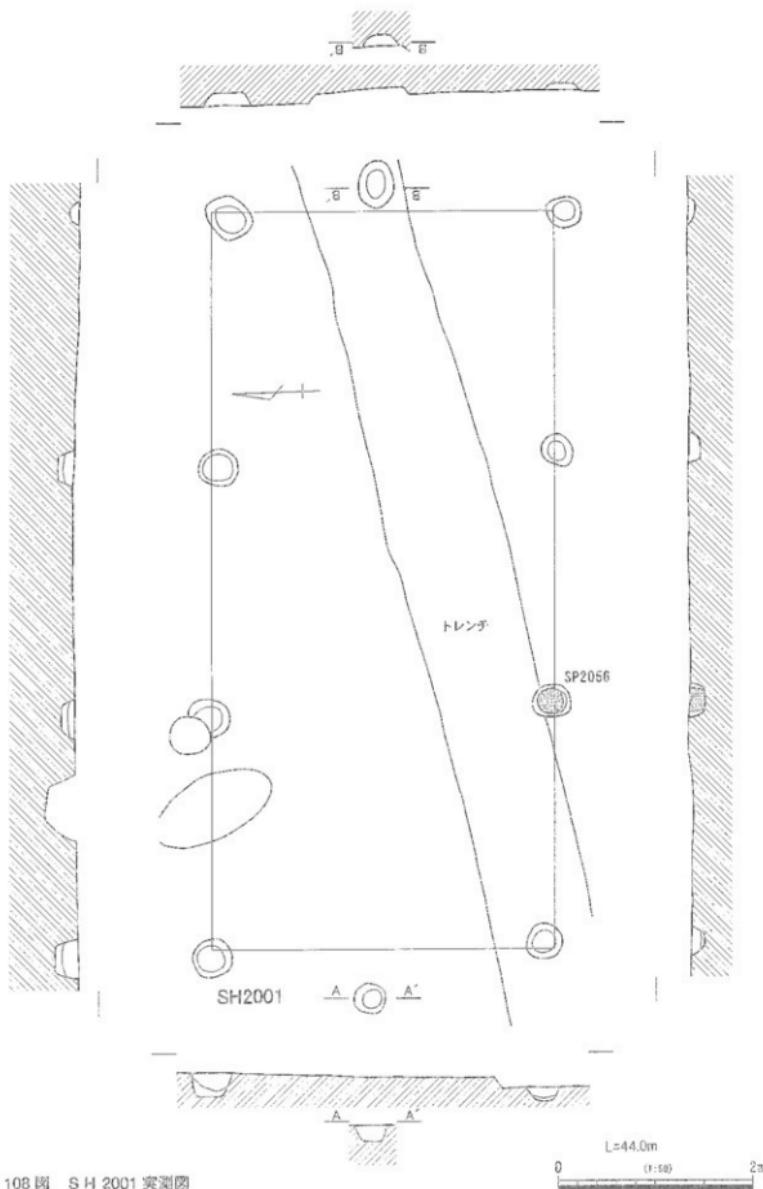
第107図 石器実測図

##### (2) 掘立柱建物

大門西遺跡では、上層が耕作等で攪拌されていたこともあって、基盤層である黄褐色土において遺構が検出されている。そのため、同一面に古代の遺構と中・近世の遺構とが混在した状態で発見されている。また、遺構の埋土も全て暗褐色土を基調としており、埋土の色調等から時期を区別することも難しい。結果として、出土遺物や他の遺構との切り合いがないものについては、時期の認定が極めて困難であるといえる。ここでは、掘立柱建物として認識できるものの、遺構・遺物から時期が判断できないものについて述べることにする。

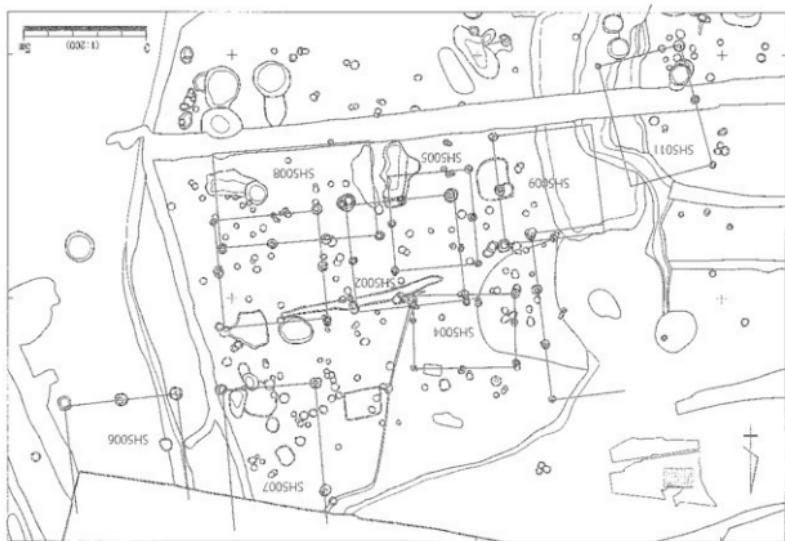
##### S H 2001（第108図）

2区の東側に位置する。2×3間の東西棟。妻柱は、柱筋から30～50cm程度外に出た位置に検出されている。建物規模は、梁間3.48m・桁行7.56m。南北軸は、北側で3°東に振る。柱痕跡は、S P 2056で確認されているのみで、その他の穴はいずれも柱の抜取り穴である。柱間が等間であると仮定すると、柱間は梁間が1.74m、桁行が2.52mとなる。S P 2056の柱痕跡の大きさは、直径24cmである。掘方は直徑38cmの円形で、深さは検出面から16cm。柱抜取り穴の平面形状は、円形または楕円形。大きさは、上面で長径30～50cm。上層が削平されているものもあるが、深さは検出面から平均20～30cm程度。遺物が出土していないため、建物の年代については明らかでない。



第108図 SH 2001 実測図

第110圖 遺傳配圖(5區)



第119圖 遺傳配圖(2區)

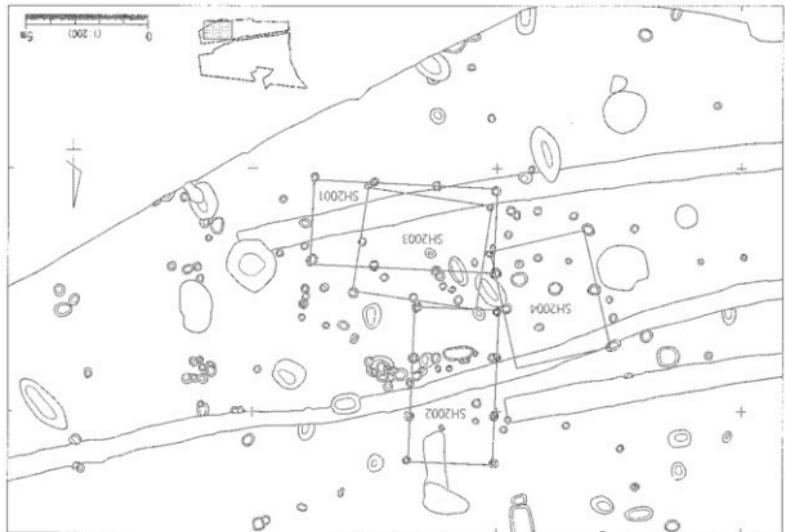
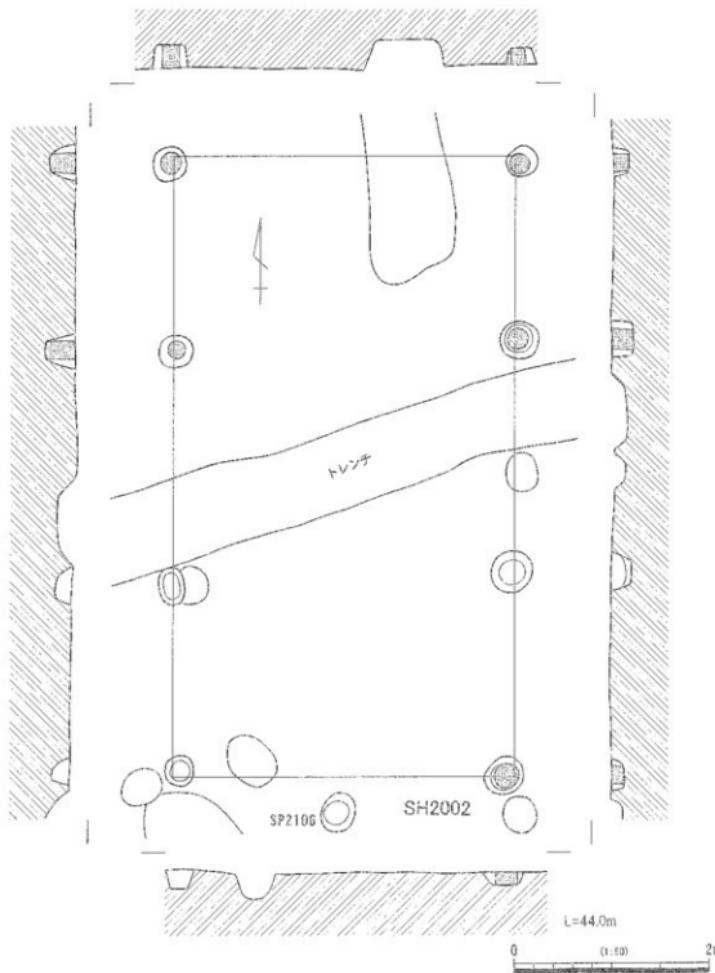


圖2表 大町遺傳學

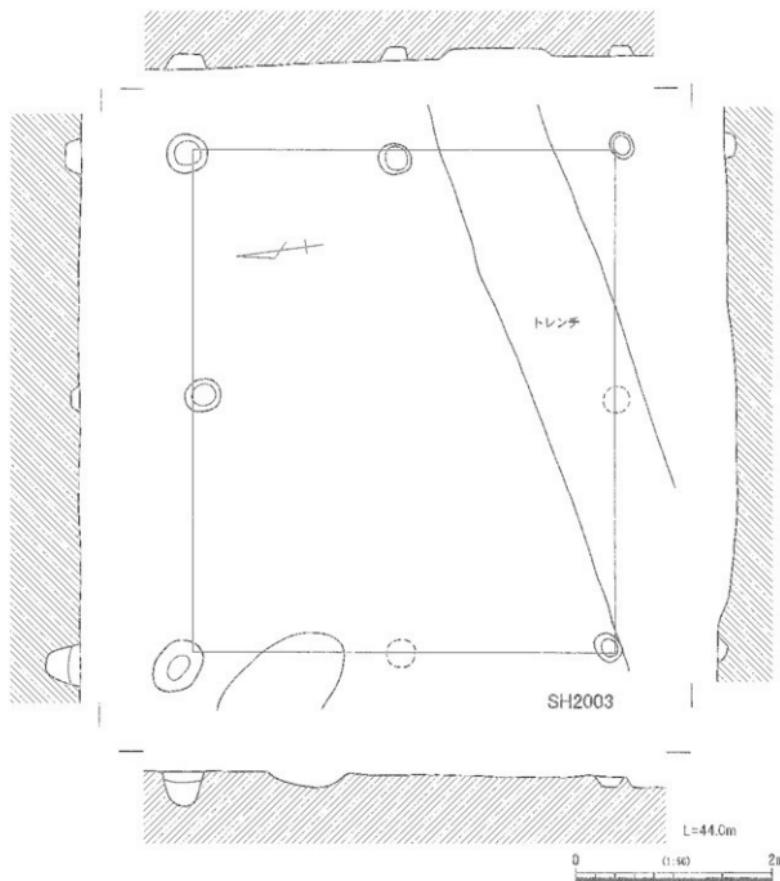


第111図 SH 2002 実測図

## SH 2002 (第111図)

SH 2001の北側に位置する。 $2 \times 3$ 間の南北棟。表柱は南側で検出されているのみであるが、SH 2001と同様に、柱筋より30cm程外に出た位置に検出されている。建物規模は、梁間3.48m・桁行6.36m。南北軸は、北側で $2^{\circ}$ 東に振る。柱痕跡は、柱穴SP 2202と2204、2206、2261、P 3で確認されている。梁間方向の柱間は、北側が3.48m、南側は1.74mの等間。桁行方向の柱間は、東西とともに北から1.94

m + 2.30 m + 2.12 mと、やや間隔が不揃いとなっている。柱痕跡の大きさは18~24cm。掘方の平面形状は、円形または橢円形。掘方規模は、上面で長径32~41cm、深さが13~30cm。出土遺物がないため時期は明確でないが、SH 2001との位置関係において、西側の柱筋が偏っており、建物軸もほぼ同じであることが注目される。さらに、両者は建物構造においても、妻柱が外に出るという同じ特徴を有している。このような点から、SH 2002はSH 2001と同時期の建物である可能性が高いと推測される。



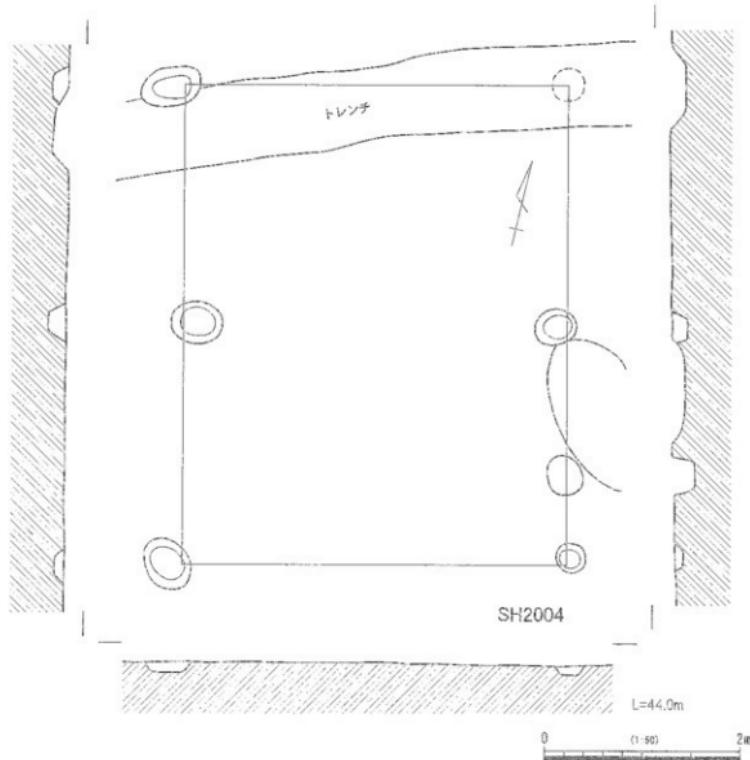
第112図 SH 2003 実測図

## SH 2003 (第112図)

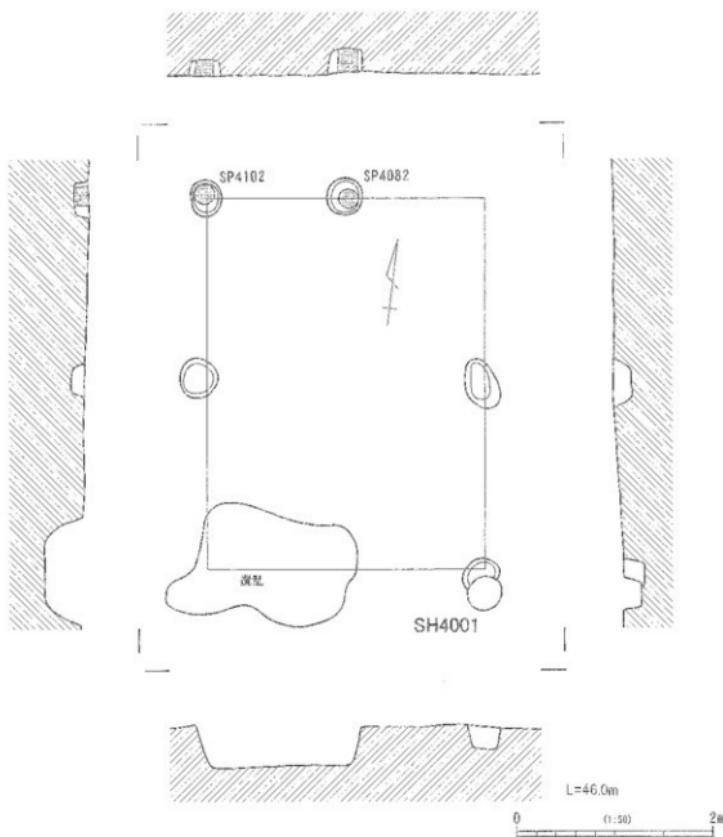
SH 2002の南側に位置する。2×2間の東西棟。建物規模は、梁間4.32m・桁行5.16m。南北軸は、北側で8.5°東に振る。柱痕跡は確認されておらず、検出された穴はすべて柱抜取り穴である。柱抜取り穴の平面形状は、円形または梢円形。大きさは上面で長径24~54cmであり、深さは10~26cm。遺物が出土していないため、時期については不明であるが、SH 2001及び2002とは重複した位置に存在するため、両者とは異なる時期の建物であるとみてよい。

## SH 2004 (第113図)

SH 2003の西側に位置する。1×2間の南北棟。建物規模は、梁間3.92m・桁行4.9m。南北軸は北側で13°西に振る。北東の隅柱は、既平されて失われている。柱痕跡は確認されておらず、検出された穴は、すべて柱抜取り穴である。柱抜取り穴の平面形状は、円形または梢円形。大きさは上面で長径28~54cm。深さは10~18cm。遺物が一切出土していないため、時期については不明である。



第113図 SH 2004 実測図



第114図 SH 4001 実測図

## SH 4001（第114図）

4区の北西部に位置する。2×2間の南北棟。建物規模は、梁間2.84m・桁行3.8m。建物の南北軸は、北偏で6.5°西へ振る。南西の隅柱は、擾乱によって失われている。

柱穴SP 4102と4082で、柱痕跡が確認されている。両者の柱間は1.42mである。柱痕跡の大きさは、直径18~20cm。掘方の平面形状はSP 4102が橢円形、SP 4082は円形である。大きさは上面で34~36cm、深さは16~26cm。柱抜取り穴は橢円形またはややいびつな円形で、SP 4102・4082より一回り大きい。

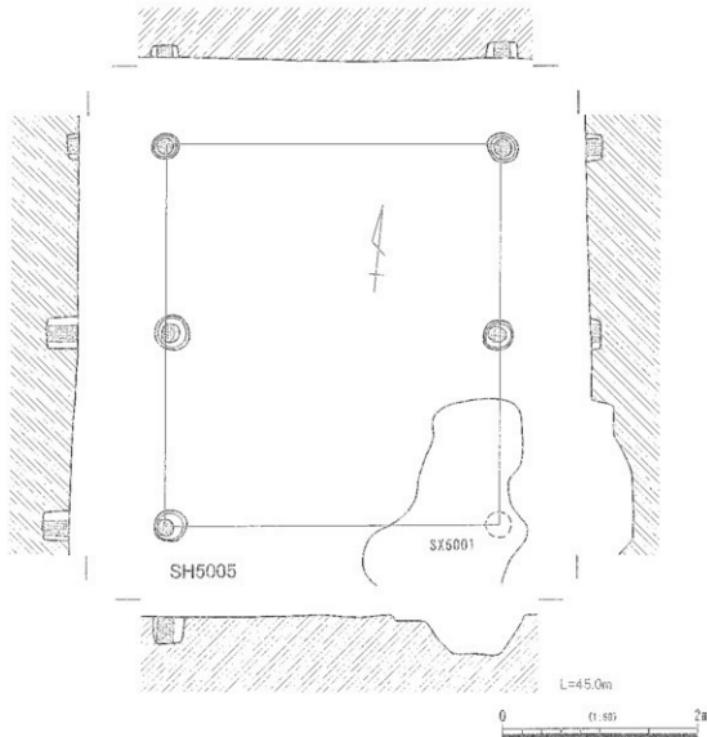
遺物が一切出土していないため、時期については明らかでない。

## SH 5005 (第 115 図)

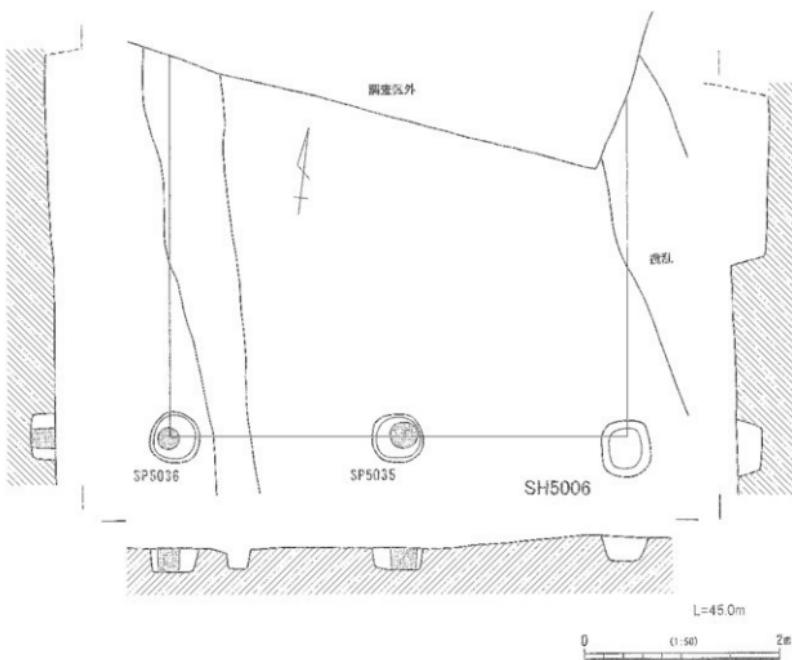
中世の獨立柱建物 SH 5002 の南西側に位置する。南京の隅柱は、SX 5001 によって失われている。 $1 \times 2$  間の南北棟である。建物規模は梁間 3.4 m・桁行 3.9 m で、桁行の柱間は 1.95 m の等間。南北軸は、北側で  $5.5^\circ$  西に振る。

全ての柱穴で、柱痕跡が検出されている。柱痕跡の大きさは、直径 16 ~ 20 cm。掘方の平面形状は、直径 26 ~ 34 cm の円形。深さは 12 ~ 33 cm と、ややばらつきがみられる。

遺物は出土していない。SH 5005 が SX 5001 以前の遺構であることは間違いないが、詳細な年代については不明である。



第 115 図 SH 5005 実測図



第116図 SH 5006 寶鏡図

## SH 5006（第116図）

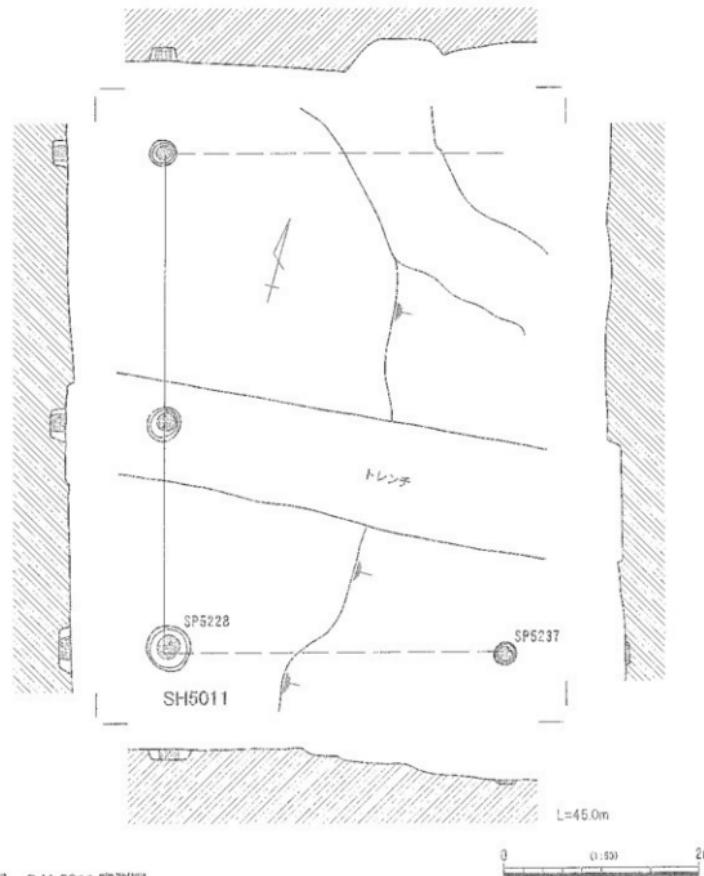
中世の獨立柱建物SH 5007の東側に位置する。東西に柱列が検出されている。南側に対応する柱穴がみられないことから、擾乱によって削平されている北側へ建物が展開するものと推測される。東西の隔柱間の距離は4.66mで、各柱間は2.33mの等間。直角に振って建物の軸を設定すると、南北軸は北側で西に6°振っている。

SP 5035と5036で柱痕跡が確認されている。柱痕跡の大きさは直径22~27cm。塗方の平面形状は円形で、直径52cmと大きい。漂さは24~26cm。

遺物が出土していないため、建物の年代は明らかでない。

## SH 5011 (第117図)

中世の獨立柱建物 SH 5009 の西側に位置する。南北に柱列が検出されている。西側に対応する柱穴が確認されないため、攪乱によって大きく削平されている京側へ、建物が展開していたものと推測される。南西の隅柱と推定される SP 5228 から、東側へ 3.46 m の位置には SP 5237 が検出されている。同一建物の柱穴の可能性もあるが、掘方の底面の高さが大きく異なっているため、別の建物の柱穴とみた方がよいかもしれない。南北の隅柱間の距離は 5.1 m。北側の柱間が 2.74 m、南側が 2.36 m と、間の柱がやや北側に寄った位置にある。南北軸は、北側で 15° 西に振れる。柱痕跡は全ての柱穴で確認されている。柱痕跡の大きさは、直徑 14 ~ 22 cm。掘方の平面形状はほぼ凹形。掘方規模は上面で直徑 23 ~ 46 cm、深さは 12 ~ 16 cm。遺物が出土していないため、建物の年代は明らかでない。



第117図 SH 5011 実測図

第6表 遺物一覧表(1)

登録番号	遺物名	説明	出土地点	形質	材質	特徴	出土状況	参考文献
1 S81565	御環首	刀身	(11.0)			金色	1回鋸切1枚	
2 S81569	直刀柄	所留	(13.0)			銀色	口吹切1枚	
3 S81571	腰袋	舟置	(12.0)			銀色	1回鋸切1枚	白井鉄
4 S81572	刀身	長刀		(5.0)		銀色	口吹切	
5 S81601	腰袋	舟置	(11.0)			銀色	口吹切1枚	
6 S81601	腰袋	刀身	(10.0)			銀色	口吹切1枚	
7 S81601	土師器	舟置	(8.0)			銀色	口吹切1枚	
8 S81601	土器	舟置	(5.0)			銀色	口吹切1枚	
9 S81602	地盤	舟置	(9.0)			銀色	口吹切1枚	
10 S81602	二輪車	舟置	(10.0)	4.0	2.0	銀色	2枚	
11 S81602	三輪車	舟置	(9.0)	4.2		銀色	2枚	
12 S81603	二輪車	舟置	(10.0)	6.0	3.6	銀色	2枚	
13 S81603	三輪車	舟置	(10.0)	4.0	3.0	銀色	2枚	内井義・森形
14 S81602	土師器	舟置	(9.0)			銀色	口吹切	
15 S81602	空頭綱	舟置	(10.0)			銀色	口吹切1枚	
16 S81602	土頭綱	舟置	(9.0)			銀色	口吹切2枚	
17 S81602	七五割	舟置	(8.0)			銀色	口吹切1枚	
18 S81602	平	舟置	(8.0)			銀色	口吹切1枚	
19 S81602	二輪車	舟置	(7.0)			銀色	口吹切1枚	
20 S81602	酒器	舟置	(8.0)	2.7	5.1	銀色	2枚	
21 S81602	土縫筒	舟置	(13.0)			銀色	1回鋸切1枚	
22 S81602	土縫筒	舟置	(13.0)			銀色	二重底・一枚	
23 S81602	土縫筒	舟置	(26.0)			銀色	二重底・一枚	
24 S81602	二輪車	舟置	(17.0)			銀色	二重底・一枚	
25 S81602	圓筒形	舟置	(17.0)			銀色	二重底・一枚	
26 S81602	圓筒形	舟置	(17.0)			銀色	二重底・一枚	
27 S81602	圓筒形	舟置	(17.0)			銀色	二重底・一枚	
28 S81602	土縫筒	舟置	(13.0)			銀色	二重底・一枚	
29 S81602	圓筒形	舟置	(14.0)			銀色	二重底・一枚	
30 S81602	空頭綱	舟置	(9.0)			銀色	二重底・一枚	
31 S81602	地盤	舟置	(21.0)			銀色	二重底・一枚	
32 S81602	土頭綱	舟置	(11.0)			銀色	二重底・一枚	
33 S81602	七五割	舟置	(10.0)			銀色	二重底・一枚	
34 S81602	十輪車	舟置	(13.0)			銀色	二重底・一枚	
35 S81602	七荷物	舟置	(19.0)			銀色	二重底・一枚	
36 S81602	土頭綱	舟置	(17.0)			銀色	二重底・一枚	
37 S81602	土縫筒	舟置	(19.0)			銀色	二重底・一枚	
38 S81602	土頭綱	舟置	(24.0)			銀色	二重底・一枚	
39 S81602	土縫筒	舟置	(27.0)			銀色	二重底・一枚	
40 S81602	二輪車	舟置	(17.0)			銀色	二重底・一枚	
41 S81602	土縫筒	舟置	(6.0)			銀色	二重底・一枚	
42 S81602	土頭綱	舟置	(6.0)			銀色	二重底・一枚	
43 S81602	土縫筒	舟置	(6.0)			銀色	二重底・一枚	
44 S81602	土縫筒	舟置	(6.0)			銀色	二重底・一枚	
45 S81602	土縫筒	舟置	(13.0)			銀色	二重底・一枚	
46 S81602	土頭綱	舟置	(12.0)			銀色	二重底・一枚	
47 S81602	七五割	舟置	(12.0)			銀色	二重底・一枚	
48 S81602	馬頭綱	舟置	(13.0)			銀色	二重底・一枚	
49 S81602	四輪車	舟置	(16.0)	5.6	3.5	銀色	二重底・一枚	
50 S81602	半輪車	舟置	(19.0)			銀色	二重底・一枚	
51 S81602	四輪車	舟置	(16.0)			銀色	二重底・一枚	
52 S81603	「前原	舟置	(22.0)			銀色	口吹切1枚	
53 S81604	寶鏡	舟置	(22.0)			銀色	口吹切1枚	
54 S81604	土頭綱	舟置	(9.0)			銀色	口吹切1枚	
55 S81604	土縫筒	舟置	(11.0)			銀色	口吹切1枚	
56 S81604	土縫筒	舟置	(8.0)			銀色	口吹切1枚	
57 鉈	銘文	舟置	(28.0)			銀色	口吹切1枚	
58 S81604	土縫筒	舟置	(15.0)			銀色	口吹切1枚	
59 S82001	腰袋	舟置	(13.0)			銀色	口吹切1枚	外山・内田
60 S82001	腰袋	舟置	(13.0)			銀色	口吹切1枚	
61 S82001	腰袋	舟置	(13.0)			銀色	口吹切1枚	
62 S82001	土縫筒	舟置	(13.0)			銀色	口吹切1枚	
63 S82001	腰袋	舟置	(15.0)			銀色	口吹切1枚	
64 S82001	腰袋	舟置	(15.0)			銀色	口吹切1枚	
65 S82001	腰袋	舟置	(14.0)			銀色	口吹切1枚	
66 S82002	腰袋	舟置	(14.0)			銀色	口吹切1枚	
67 S82002	二輪車	舟置	(14.0)	(2.0)	(7.0)	銀色	口吹切1枚	
68 S82002	土縫筒	舟置	(16.0)			銀色	口吹切1枚	
69 S82002	二輪車	舟置	(16.0)	(2.0)	(7.0)	銀色	口吹切1枚	
70 S82002	二輪車	舟置	(16.0)	(1.0)	(2.0)	銀色	口吹切1枚	
71 S82002	土縫筒	舟置	(13.0)	(3.0)	(3.4)	銀色	口吹切1枚	
72 S82002	土縫筒	舟置	(22.0)			銀色	口吹切1枚	
73 S82002	土縫筒	舟置	(22.0)			銀色	口吹切1枚	
74 S82002	土縫筒	舟置	(22.0)			銀色	口吹切1枚	
75 S82002	土縫筒	舟置	(21.5)	31.0	6.5	銀色	口吹切1枚	
76 S82002	土縫筒	舟置	(10.0)			銀色	口吹切1枚	
77 S82002	土縫筒	舟置	(15.0)			銀色	口吹切1枚	
78 S82002	土縫筒	舟置	(15.0)			銀色	口吹切1枚	
79 S82002	腰袋	舟置	(12.0)			銀色	口吹切1枚	
80 S82002	腰袋	舟置	(12.0)			銀色	口吹切1枚	
81 S82002	土縫筒	舟置	(15.0)			銀色	口吹切1枚	
82 S82002	土縫筒	舟置	(14.0)			銀色	口吹切1枚	
83 S82002	土縫筒	舟置	(17.0)			銀色	口吹切1枚	
84 S82002	土縫筒	舟置	(17.0)			銀色	口吹切1枚	
85 S82002	土縫筒	舟置	(14.0)			銀色	口吹切1枚	
86 S82002	土縫筒	舟置	(14.0)			銀色	口吹切1枚	
87 S82002	土縫筒	舟置	(14.0)			銀色	口吹切1枚	
88 S82002	土縫筒	舟置	(15.0)			銀色	口吹切1枚	
89 S82002	土縫筒	舟置	(13.0)			銀色	口吹切1枚	
90 S82002	二輪車	舟置	(17.0)			銀色	口吹切1枚	外山・スズキ
91 S82002	土縫筒	舟置	(15.0)			銀色	口吹切1枚	外山・スズキ
92 S82002	土縫筒	舟置	(15.0)			銀色	口吹切1枚	外山・スズキ
93 S81003	土縫筒	舟置	(25.0)			銀色	口吹切1枚	外山・スズキ
94 S81004	腰袋	舟置	(15.0)			銀色	口吹切1枚	外山・スズキ
95 S82003	土縫筒	舟置	(12.0)			銀色	口吹切1枚	外山・スズキ







## 第4節 まとめ

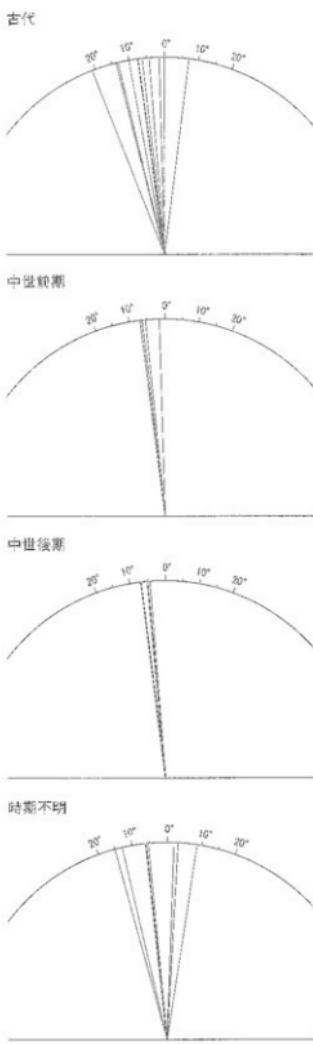
### 掘立柱建物について

大門西遺跡では、古代から中近世までの遺構が、同一の検出面に混在した状態で発見されている。また遺構の埋土についても、基本的には全て暗褐色土であり、埋土の違いによる時期の判別も困難である。そのため、遺物の出土していない遺構については、時期不明とせざるを得ない。

掘立柱建物についても同様の状況であるが、建物方位や位置関係などから、ある程度の時期を推測することは可能である。大門西遺跡で発見された掘立柱建物の主軸の方位を、時期別にして示したのが、第118図である。まず古代についてみてみると、建物の主軸の北側が東偏するものから大きく西偏するものまで、幅広く存在することがわかる。特別一定範囲に集中するわけではないが、仮に $0 \sim 10^\circ$  西偏するものをA類、 $10^\circ$  を越えて西偏するものをB類、東偏するものをC類という3つのグループに分けることにする。次に、中世前期の建物方位をみると、 $0 \sim 10^\circ$  西偏するA類に限られていることが分かる。中世後期でも、同様にA類のものに限られるが、さらに $45 \sim 7^\circ$  までの間に限定されていることが見てとれる。つまり、A類の建物は古代から中世後期までみられるが、B・C類の建物が建設されるのは古代に限られることとなる。

このような観点で時期不明の建物を見ると、B類に該当するSH 2004と5011、そしてC類に該当するSH 2001と2002、2003は、古代の掘立柱建物である蓋然性が高い。残るA類は、いずれの時代とも判別しがたいということになる。ただし、SH 4001は東側に近接するSH 4002とはほぼ同じ方位をとっていることから、SH 4002と同じ中世後期の建物である可能性が高い。また、SH 5006は、西側に隣接するSH 5007とはほぼ同じ軸をとり、南側の建物筋も揃っていることから、SH 5007と同時期または、非常に近接した時期に建てられた建物とみてよいであろう。

A～C類の前後関係については、その推移を知るために資料が乏しく明確でない。ただし、A類に属するSH 1007が、B類に属するSH 1003の柱穴を切っていることからすると、B類→A類といった推移が想定できるかもしれない。



第118図 掘立柱建物の主軸方位

## 竪穴住居出土遺物について

大門西遺跡では、竪穴住居のカマド内から遺物がまとまって出土している。カマド内から出土した遺物としては、S B 1002 では土師器の壺と鉢、壺が出土しており、S B 2002 では土師器の壺が3個体出土している。

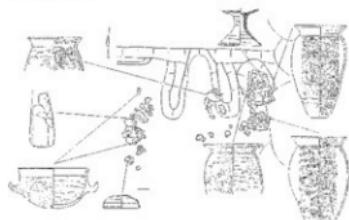
浜松市内で発見されている、古墳時代から奈良時代にかけての竪穴住居を観察すると、19軒の竪穴住居でカマド内からの遺物の出土が確認される（第6表）。出土した遺物をみると、土師器の壺の出土例が17例と最も多く確認される。他は、土師器の壺が3例に、須恵器の壺身が2例、土師器の蓋と高盤、須恵器の壺蓋と皿、蓋、高盤が各1例で、土師器の壺の出土例が圧倒的に多いことがわかる。

カマド内から出土する土師器の壺は、出土する部位にも特徴があり、13例が底部を欠いた状態で出土している。また、下滝遺跡 C 9・S B 06例については、口縁部と底部が別個に倒置した状態で出土している上に、体部上半を欠くため接合しないようである。つまり、口縁部から底部までの部位が確認されるものとなると、下滝遺跡 F 7・S B 01例と笠井若林遺跡の S B 201例のわずか2例のみとなる。このような状況を見る限り、単純にカマドで使用された煮炊き具がそのままカマドに残され、埋没したとは考えにくい。仮に、カマドに据えたままの状態で過棄されたとすれば、遺構の上方が削平される場合が多いことから、むしろ口縁部を欠く事例の方が多くなってしかるべきであろう。

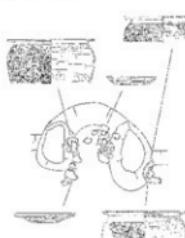
第10表 カマド内からの遺物出土例

No.	遺跡名	遺構名	出土遺物	その他	備考
1	東尾追跡	S B 120	土師器：壺（口縁部）		
2	月島遺跡	S H 012	土師器：壺（口縁部）		
3	飛毛北遺跡	g-S R 12	土師器：壺（口縁～全体）底足部：片舟（はせひ式）、环窓（口縁～底部）	上縁支撑	
4	城山若林	S e 02	土師器：壺（口縁～全体）、環窓器、盖、盤		
5	下滝遺跡	6-14 S B 03	土師器：壺（口縁～体部）、環窓器、蓋（30%）、盤（30%）	川築石	
6	下滝遺跡	C 9・S B 06	土師器：壺（口縁部）、蓋（底部）		体部上に欠損。口縁部と底部倒置。
7	下滝遺跡	C 9・S B 08	土師器：壺（80%）		
8	下滝遺跡	C 8・S B 05	土師器：壺（部分が不明）		
9	下滝遺跡	D 3・S B 01	土師器：壺（口縁部）		
10	下滝遺跡	D 3・S B 06	土師器：壺（口縁～全体）		
11	下滝遺跡	E 8・S B 01	土師器：壺（口縁部）	底部上器	
12	下滝遺跡	F 7・S B 01	土師器：壺（口縁部～底部）		
13	浜上1遺跡	S B 12	須恵器：壺身（はげ式）		
14	浜上1遺跡	S D 12	土師器：壺（口縁部）		
15	笠井若林遺跡	S B 01	土師器：壺（口縁～全体）、蓋（口縁部）、蓋（底部）、盤（完全）		上部記环窓器
16	笠井若林遺跡	S B 03	土師器：壺（口縁～全体）、蓋（口縁部）		
17	茅月若林遺跡	S B 04	土師器：壺（口縁部）、高盤（口縁～底部）		
18	笠井若林遺跡	S B 15	土師器：壺（口縁部）、須恵器：高盤（口縁～脚部）		高盤倒置
19	笠井若林遺跡	S B 20	土師器：壺（口縁～体部）	蓋円	

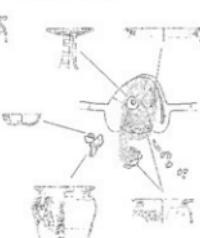
井連遺跡 SB 212



城山遺跡 SD 12



笠井若林遺跡 SB 219



第119図 カマド内の遺物出土状況例

大門西遺跡のSB 1002では、カマド内から土師器壺(16)の口縁部の破片が出土しているが、カマドの脇に欲らばる口縁部および体部の破片と接合関係を有する。また、カマドの脇から出土した把手(18)とも同一個体である可能性が高い。SB 2002においても同様で、土師器壺(75)の破片が、カマドの内部とカマドの脇の破片が接合する。口縁部から体部上半にかけての破片はカマド内を中心に出土しており、体部下半から底部にかけてはカマドの脇から出土している。このように同一の個体がカマドの内外に分かれて出土するという現象は、底部を欠いた土師器の壺が、何らかの意図によってカマド内に納められたことを示すとみてよいであろう。

カマドへの祭祀行為について整理を行った寺沢知子氏は、遺物を設置する行為について、完形の壺を伏せて埋納するa類と、壊された土器を埋納するb類、祭祀遺物を埋納するc類とに分けられるとする。そしてb類の好例としては、カマド内出土土器と同個体の破片が住居内の床面から出土した、塚原遺跡D地点の事例をあげている(寺沢1992)。

大門西遺跡でみられるような、土師器の壺の底部を打ち欠いて、口縁部をカマド内に埋納する行為は、寺沢氏のいうカマド内へ遺物を設置する祭祀行為のb類に相当する。底部を破碎するという、実用性に反した行為を伴っている以上、こういった行為は祭祀行為とみなすのが妥当であろう。そしてそれは、出土状況が示しているように、家屋を廃棄する際にカマドに対して行われた祭祀であると推測される。他の遺跡では、カマド外から同一個体の破片は発見されていないが、土師器壺の口縁部を埋納するという共通性からみて、同様の祭祀行為が行われていた可能性が高い。カマドへの祭祀行為は、遺跡によつて多様な形態をもち類型化しにくくされるが、大門西遺跡において確認された事例は、浜松市域の集落で当時一般的に行われた祭祀行為の一つと捉えてよいであろう。

#### 古代の大門西遺跡

古代の遺構としては、竪穴住居と掘立柱建物、井戸、土坑などが検出された(第120図)。

竪穴住居は7軒発見されているが、同時期に存在したものは少なく、存続期間をある程度考慮しても、1軒ないし数軒程度であろう。カマドが検出されたのはSB 1001・1002・2002の3軒であり、SB 1003も焼土の広がりからカマドの存在が推測される。カマドは東側に設けられるSB 1001以外は、すべて北側に構築されている。同じ浜北区の東原遺跡では、東側にカマドが設けられる傾向にあること

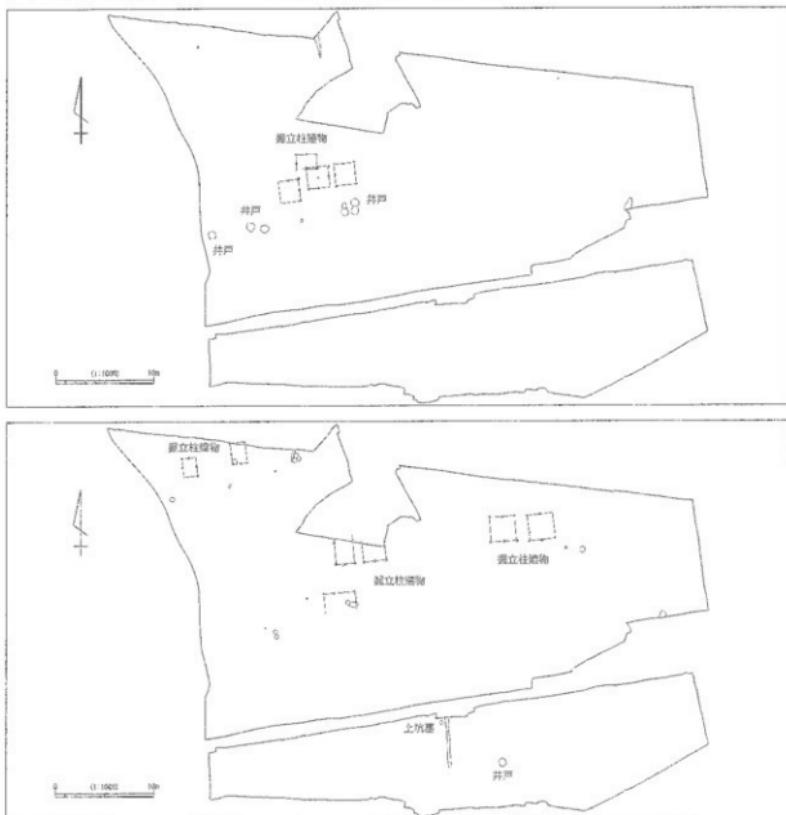


第120図 大門西遺跡遺構配置図(古代)

が確かめられており（静文研 2007a）、この点では異なった様相を呈している。ただし、浜松市内の他の遺跡においては、北側に設けられるものが多數を占めることから、むしろ大門西遺跡におけるカマドの設置位置は、この地域での一般的なあり方とみてよい。

掘立柱建物については、出土遺物や遺構の切り合いなどから古代の建物であることが明確なものが 11 棟、建物跡の検討から古代である可能性が高いとしたものを含めると、合計 16 棟が発見されている。竪穴住居との併存関係については明確でないが、竪穴住居と切り合っているものを除くと、竪穴住居 1 軒に対して掘立柱建物 1 棟から数棟程度と推測される。規模は 2 × 3 間が 7 棟、2 × 2 間が 3 棟、1 × 2 間が 2 棟、2 × 4 間が 1 棟と、2 × 3 間の建物が最も多い。これは、この時期の一般的な集落における掘立柱建物の規模と同様の傾向（丸杉 2006、帝京大 2006）を示しているといえる。

遺構の中心は 1 区であるが、2 区と 5 区にも建物が展開する。しかし、1 区以外においては、遺構・遺物が少なく、包含層出土遺物においてもその大半は 1 区からの出土である。集落の中心は、1 区およびその北側に展開するとみてよい。今回の調査範囲は、集落の縁辺部にあたると考えられる。



第 121 図 大門西遺跡遺構配図（上：中世前期、下：中世後期）

### 中世・近世の大門西遺跡

中世の遺構としては、掘立柱建物や井戸、土坑、溝などが検出された（第121図）。

掘立柱建物は、中世前期のものが4棟、中世後期のものが5棟発見されている。建物の配置などから類推したものを含めると、中世後期のものは7棟となる。建物規模は、中世前期のものはいずれも $2 \times 2$ 間、中世後期のものは $2 \times 2$ 間が2棟、 $1 \times 2$ 間と $2 \times 3$ 間、 $3 \times 3$ 間が各1棟である。建物の方位は、 $4.5 \sim 7^\circ$  西偏する範囲に集中する。現在の周辺の地割りも南北軸が西偏しており、ある程度この傾向が確認されているのかもしれない。

遺物については、青磁の壺形合子の蓋や灑美産の瀬舟文壺など、経塚以外からの出土がまれな遺物も確認されるが、全体的にはごく一般的な消費地遺跡の構成となっている。遺構においても、掘立柱建物を中心として井戸や土坑、溝などがみられる程度であり、ごく一般的な集落遺跡の様相を呈している。遺構としては明確でないが、包含層や撲面からは近世や近代の遺物も比較的多く出土しており、近世以降も継続して集落が営まれたとみてよいであろう。

一方、大門西遺跡では、平安時代の遺構はほとんど確認されていない。遺物に関する限りでも同様であり、灰陶焼器については、包含層や撲面出土遺物を含めても、わずか数点認められるのみである。よって、奈良時代に営まれた集落は平安時代に一端途絶しているとみてよい。そして、再び集落が形成されたのは、井戸S E 4001などの遺構の年代から12世紀後半頃と推測される。ちょうどこの頃、西側に隣接する中屋遺跡では、大規模な溝によって方形に区画された施設が建造されており、これが隣接する大門西遺跡の集落形成と密接な関係を有している可能性が高い。中・近世の大門西遺跡については、中屋遺跡の詳細が報告された後に、あらためて総合的に検討することが必要であろう。

### 引出・参考文献

- 松井一明「宮口古窯跡群と横ヶ谷古窯跡群における須恵器・陶器生産についての一考察」『静岡県の窯業遺跡』1989
- 寺沢加子「カマドへの祭祀行為とカマドの成立」『考古学と生活文化』1992
- 中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』1996
- 鈴木正貢「東海地方の内蔵鉢・羽付鉢・釜」『諸と窓そのデザイン』1996
- 財団法人浜松市文化協会『下瀬遺跡』本文編・実測圖版編『1997』
- 財団法人浜松市文化協会『桃子北遺跡 遺物編（本文）』1998
- 浜松市・浜松市教育委員会・財団法人浜松市文化協会『桃子北地区発掘調査報告書 下巻 本文編』1990
- 財団法人浜松市文化協会『下瀬遺跡』2』1999
- 財団法人浜松市文化協会『城山遺跡 議』2000
- 小森俊児「平安京出土の土器・陶器編」「シンボジウム「蒼宮の土器・みやこの上器」資料」2000
- 鈴木敏郎「瀬戸西古墳時代須恵器牛耳の再構築」『須恵器生産の歴史から消滅・補遺・論考編』2001
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所『恒武西宮遺跡Ⅱ』並井春林追跡』2002
- 浜北市『浜北市史 資料編 原始・古代・中世』2004
- 丸杉俊一郎「遺物からみた古街遺跡・建物遺構との相關関係」『古代の役所と寺院・都構とその周辺』2005
- 財団法人浜松市文化振興財団『桃子北遺跡（三永地区） 古墳・奈良時代編』2006
- 帝京大学山梨文化財研究所『掘立柱・礎石建物遺跡の考古学－都城・官衙・集落・寺院における分析と研究法－』2005
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所『点原遺跡』2007a
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所『井浦遺跡 本文編』、2』2007b

## 第3章 大平遺跡

第二東名No 139 地点

## 第1節 位置と環境

### 1. 位置と地理的環境

大平遺跡は、浜松市フルーツパークから北東へ200mの、浜松市北区都田町に位置する。

三方原台地の最北端にあたり、東側には比較的平坦な土地が広がる。三方原台地は、天竜川の扇状地状の氾濫原が地殻変動などによって隆起した後、再び天竜川の開拓を受けて形成された台地であり、全体的には南西方向へ傾いている。台地の南部は、市街地となっており、北部でも都田テクノポリスなどの開発が進んでいる。

遺跡の南側には、いくつもの浅い谷が掌状に入り込んでいる。谷から派生した小河川は西へ向かい、都田川へと注ぐ。北側は灰ノ木川へ向かって、高低差が50m程になる急斜面地となっている。灰ノ木川は、蛇行しながら西へ向かって流れ、四大地付近で都田川と合流する。灰ノ木川を挟んだ北側には、赤石山系より続く丘陵や山地が連なっている。

遺跡は、南西にある浅い谷に向かって緩やかに傾斜する平坦地に立地する。調査前は山池として利用されていたが、周辺の多くは戦後開墾されて果樹園となっていることから、この場所にも土地の改変が及んでいる可能性が想定された。

### 2. 歴史的環境と調査歴

大平遺跡については、今まがはじめての調査である。東西24m・南北37m程の狭い範囲ではあるが、周辺については確認調査の結果、遺跡の存在が認められていない。したがって、今回の調査によって本遺跡のほぼ全体を調査したことになる。

本遺跡の周辺には、これまでほとんど遺跡の存在は確認されていない。周辺の遺跡としては、大平城址が本遺跡から北東へ750mの場所に所在する程度である（第122図）。大平城址は、灰ノ木川を挟んだ標高100mを測る丘陵上に位置する。南北朝期の山城として知られ、浜松市の指定史跡となっている。発掘調査は行われていないが、採集遺物や文獻資料などから検討が行われており、南北朝期には中世前期の山岳寺院が城として利用され、山城として改修されたのは戦国期であったとする見解も提示されている。



第122図 大平遺跡と周辺の遺跡

## 第2節 調査の方法と経過

### 1. 発掘調査の方法

本調査の区域は、台地縁辺の東西 24 m、南北 37 m を範囲とする。周辺についても確認調査が行われているが、遺跡の存在は認められていない。したがって、本遺跡の範囲は、調査区よりも広がらないものと判断される。

発掘調査は、まず調査区の設定を行った。そして、休憩用テント・簡易トイレなどの設置とともに、重機による表土除去を開始した。その後、重機による表土除去が完了した範囲から、人力による遺構検出面までの掘削作業を開始した。調査区のほとんどの部分で、表土・耕作土除去後、まもなく遺構検出面に達した。なお、表土除去以降の作業を円滑に進めるため、一部重機と人力による作業は並行して行っている。次に遺構検出面に達した場所から、随時、遺構の検出作業を行った。検出された遺構については、まず道溝の半分を掘削し、土層断面によって埋土の状態を観察した上で、全体の掘削を行った。

調査に際しては、基準点測量およびグリッド杭の設置を委託して行った。発見された遺構には、すべて調査中に遺構番号を付した。遺物については、出土地点の三次元座標を計測した上で、取り上げた。ただし、表面採集した遺物や重機掘削時に採取された遺物などについては、一括化・簡略化している場合もある。

現地の記録図面としては、設定したグリッドに沿って、100 分の 1 缶尺の地形測量図を作成した。現地記録写真的撮影においては、景観および調査区全景には 6 × 7 判（モノクロ）と 35 mm 判（カラーリバーサル）を用い、遺構や作業工程の撮影には 35 mm 判（カラーネガ）を使用した。

### 2. 発掘調査の経過

平成 12 年 9 月 27 日に発掘調査を開始した。調査区を設定し、休憩用テントの設営などの準備を行うとともに、重機による表土除去を開始した。28 日には、人力による作業を開始した。その後、表土除去や、遺構の検出・掘削作業を随時行っていた。10 月 12 日には、基準点測量およびグリッド杭の設置を行っている。調査区全体の遺構掘削作業が終了した後、10 月 26 日に調査区全景の写真撮影を行った。その後、実測・測量作業を行うとともに、テントや資材等の撤収作業を行った。11 月上旬には、調査区の埋め戻しも完了し、現地での調査を終了している。

なお、基準点測量およびグリッド杭の設置については、玉野総合コンサルタント（株）に委託した。

### 3. 資料整理の方法と経過

本遺跡に関する資料整理および報告書作成作業は、平成 19 年 4 月に開始した。ただし、出土遺物の洗浄・注記や台帳作成等の基礎整理作業については、現地調査終了後に、隨時行われていた。

作業としては、土器の分類・仕分け、接合、拓本、実測作業や、遺構図面の修正・編集、各図の版組・トレース作業、遺物の写真撮影、原稿執筆などを行った。さらに、これらを収集して報告書を作成した。

なお、金属製品のクリーニングおよび保存処理は、当研究所保存処理室が実施した。

遺物の写真撮影は、4 × 5 判（モノクロネガ・カラーリバーサル）、6 × 7 判（モノクロネガ・カラーリバーサル）を用いて、当研究所写真室で実施した。

## 第3節 調査の成果

### 1. 全体の概要

#### (1) 土層および地形

大半の部分では、表土・耕作土を除くと遺構検出面となる黄褐色土層上面があらわれた。黄褐色土中には、台地が形成される以前に堆積した円礫が含まれる。調査区の南西隅に谷地形が検出されたが、これも表土・耕作土とほぼ同質の土によって覆わっていた。なお、表土・耕作土の厚さは、平均 20 cm 程度であった。

発掘調査によって検出された地形は、現況地形と大きく変わらない。調査区の南西部に谷頭があり、そこへ向けて、全体としては北東から南西に向けて下がる地形である。東半部分は比較的傾斜が緩やかであるが、谷頭にあたる南西隅の部分では傾斜が急になる。

なお、表土・耕作土は、円礫を多く含む暗黄褐色土である。これらの円礫は先述のように、基盤層にあたる黄褐色土に多く含まれるものである。現況は山林として利用されていたが、谷部が表土・耕作土と同質の土で埋め立てられていることからも、開墾によって上層が大きく削平・攪拌されている可能性が高いと推測される。

#### (2) 遺構・遺物の概要

確認された遺構・遺物は極めて少ない。

遺構は小穴が 6 基検出されている。調査区の中央に、やや集中してみられるが、建物として認識できる配置ではない。

遺物は、土師器片が 6 点と灰釉陶器が 1 点出土しているのみである。調査区の中央から北東隅にかけて分布しているが、遺構との直接的な関連性は見受けられない。



写真 8 現地調査

## 2. 遺構と遺物

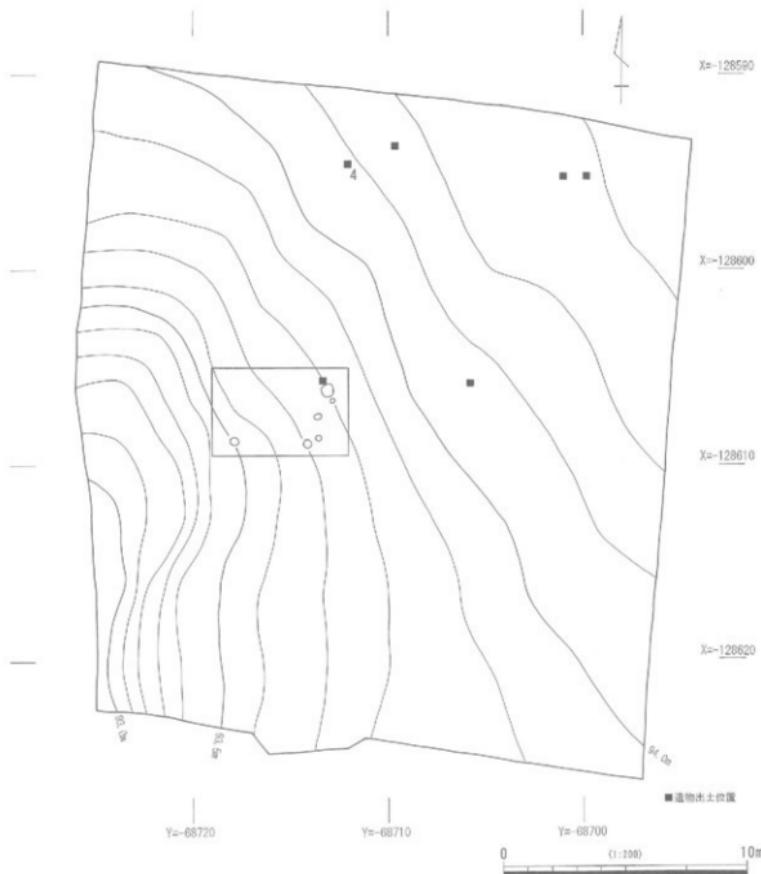
## (1) 小穴

SP 01～06（第123・124図）

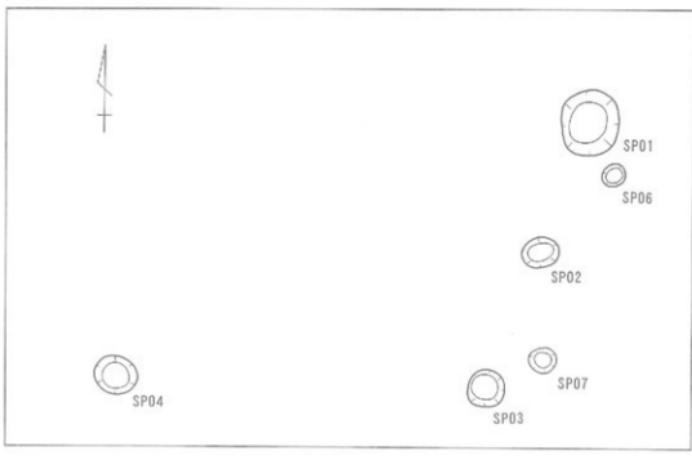
調査区の中央、やや西寄りの場所で確認されている。

SP 01は直径60cmと大形。SP 01～03は、確認調査で検出された遺構である。南北に約1.5m間隔で検出されているが、周辺に対となる柱穴は確認されなかった。

SP 04は西側に3.7m程離れた位置に、単独で発見されている。SP 06と07は直径20cm前後と小形で、



第123図 調査区全体図



第124図 遺構配置図

0 (1:50) 2m

S P 01 と 03 の脇に位置する。深さは、いずれも 20 cm 程度である。掘立柱建物の柱穴もしくは柱抜取り穴である可能性も考えられるが、明確に建物として認識できる配置はみられない。

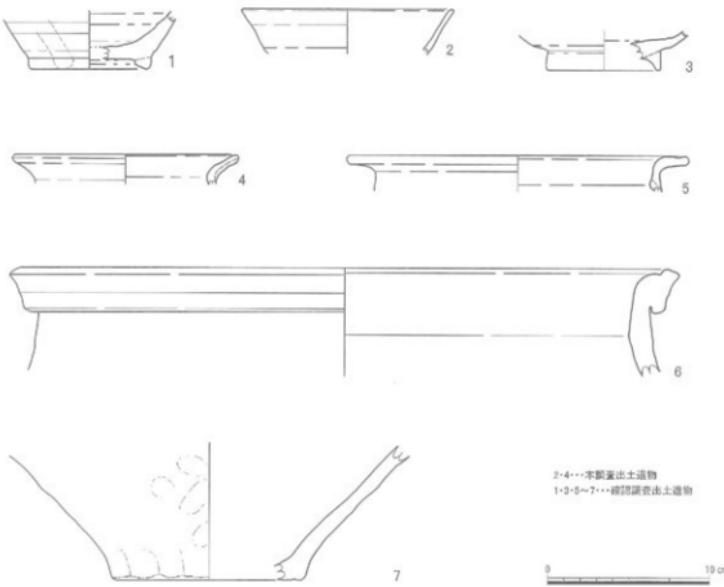
遺物としては、確認調査の際に小穴の埋土から土師器の小片が出土したとされる。記録がないため、遺構の特定は不可能であるが、確認調査の際に発見されている S P 01 ~ 03 のいずれかであろう。

## (2) 出土遺物

### 灰釉陶器・土師器（第123・125図、図版21）

本調査で出土した遺物は、検出面から出土した土師器の壺とみられる破片6点と、灰釉陶器1点のみである。この内、土師器の壺については、出土位置が判明している（第123図）。いずれも、調査区の中央より北の範囲から出土しているが、特に集中して出土するような状況ではない。ほとんどが2cm以下の小破片であるため、図化できたのは2点のみである（第125図-2・4）。

2は灰釉陶器の碗。口縁部の小破片である。胎土はやや粗く、砂粒をわずかに含んでいる。口縁部の外反も弱い。詳細な出土位置は不明であるが、北西部分からの出土とされる。4は土師器の壺。口径13.5cmと小型で、口縁部は斜め上方へ開く。表面の摩滅が著しいが、内外面ともにナデ調整とみられる。調査区北側の中央部（第123図-4）から出土している。



第125図 大平遺跡出土遺物

### 3. 確認調査出土遺物

#### 土器・陶器（第125図、図版21）

確認調査の際にも、いくつかの土器・陶器が採取されている（第125図）。

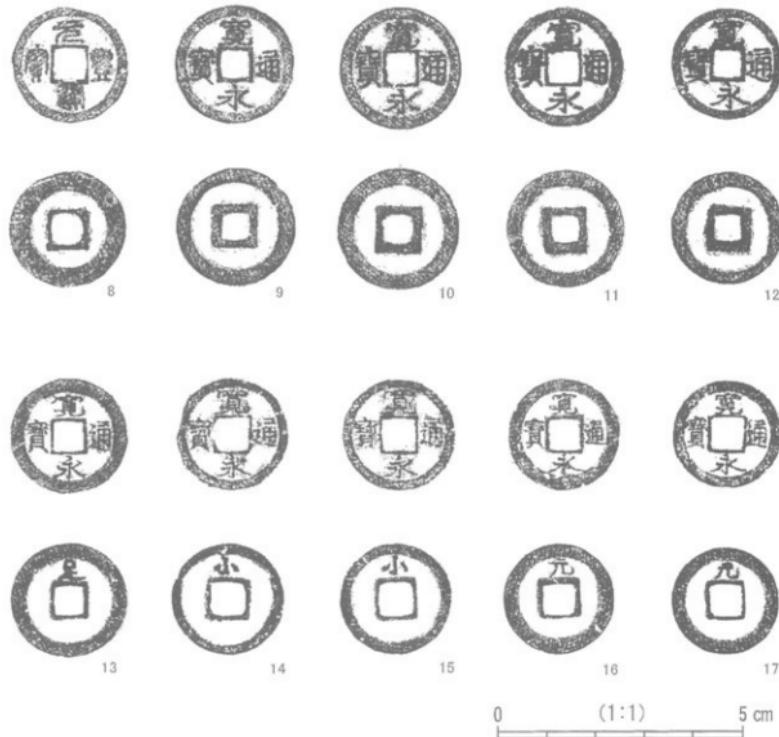
1は灰釉陶器の壺。高台は復元径が7cmと小さく、体部はやや直立気味に斜め上方へ立ち上がる。本調査範囲から、約400m東方のトレチで出土している（第12図）。3は灰釉陶器の碗。高台は比較的高く、断面が三日月状の形態を呈する。体部内面に灰釉が認められる。確認調査の際に表揚されている。5は土師器の壺。頸部は直立し、口縁部は横方向に開く。確認調査の際、本調査区の中央付近にあたる場所に設定されたトレチから出土している。6・7は常滑焼の壺。内外面全面に鉄釉が施されている。6の口縁部はN字状に折り曲げて成形されている。いずれも本調査範囲の100～140m北東の場所に設定された、2つのトレチから出土している。

この他に、小穴の埋土から土師器が2点出土しているが、図化できないほどの細片である。壺または皿の破片とみられるが、細片である上に表面の摩滅が著しいこともあり判断できない。

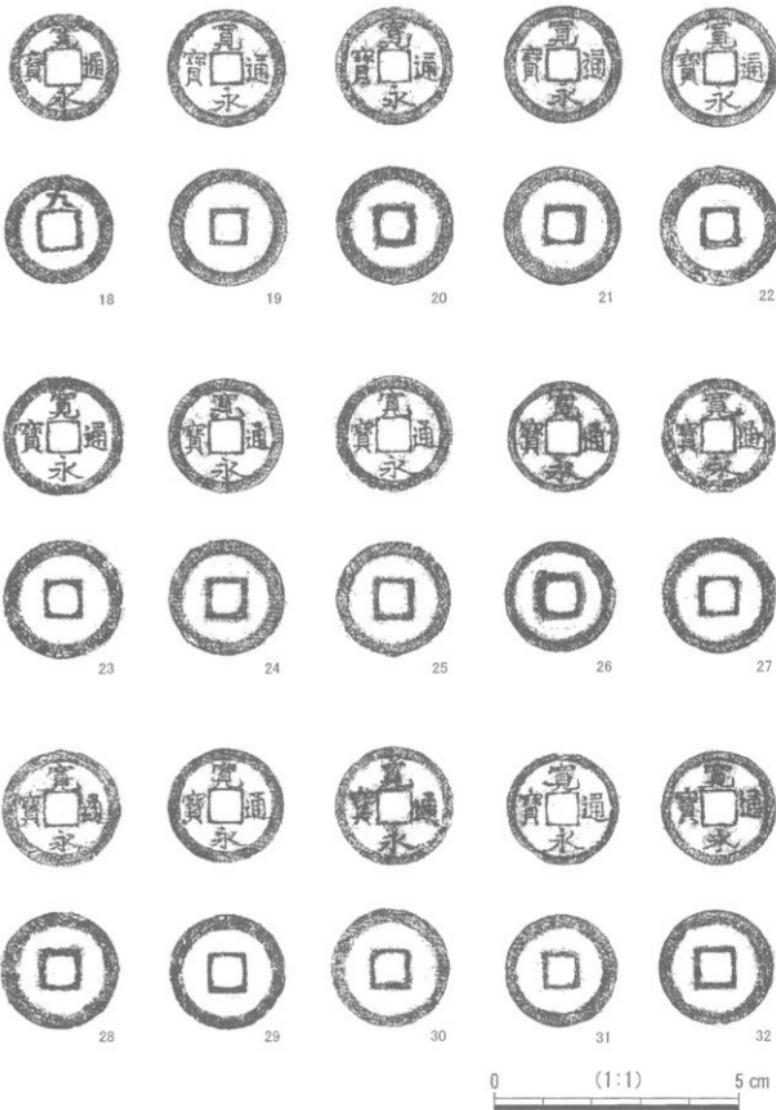
## 銭貨（第126～131図、図版22）

確認調査の際、本調査範囲の約70m南東に設定されたトレンチの付近で採取されている（第12図）。発見時の状況についての詳しい記録はないが、周辺のトレンチの土層は、基盤層にあたる黄褐色土の上に厚さ数cmの腐葉土が堆積しているのみである。おそらく、これらの古銭は地表に露出していたか、少し腐葉土が被る程度の状態であったものと推測される。

古銭は合計84枚採取されている。8は元豊通宝（1078年初鋤）で、他はすべて寛永通宝である。9～12は古寛永、13～56は新寛永で、57～91は鉄錢。新寛永には、鉄錢と錯着したものも多く確認される。13の背上には「足」、14・15の背上には「小」、16～18の背上には「元」の字が確認される。24～30はマ頭通となるものである。57・58・70の背上には「千」、59・60の背上下には「久二」、61～63の背上には「久」の字がみられる。



第126図 出土銭貨拓影（1）



第127図 出土銭貨拓影（2）



33



34



35



36



37



38



39



40



41



42



43



44



45



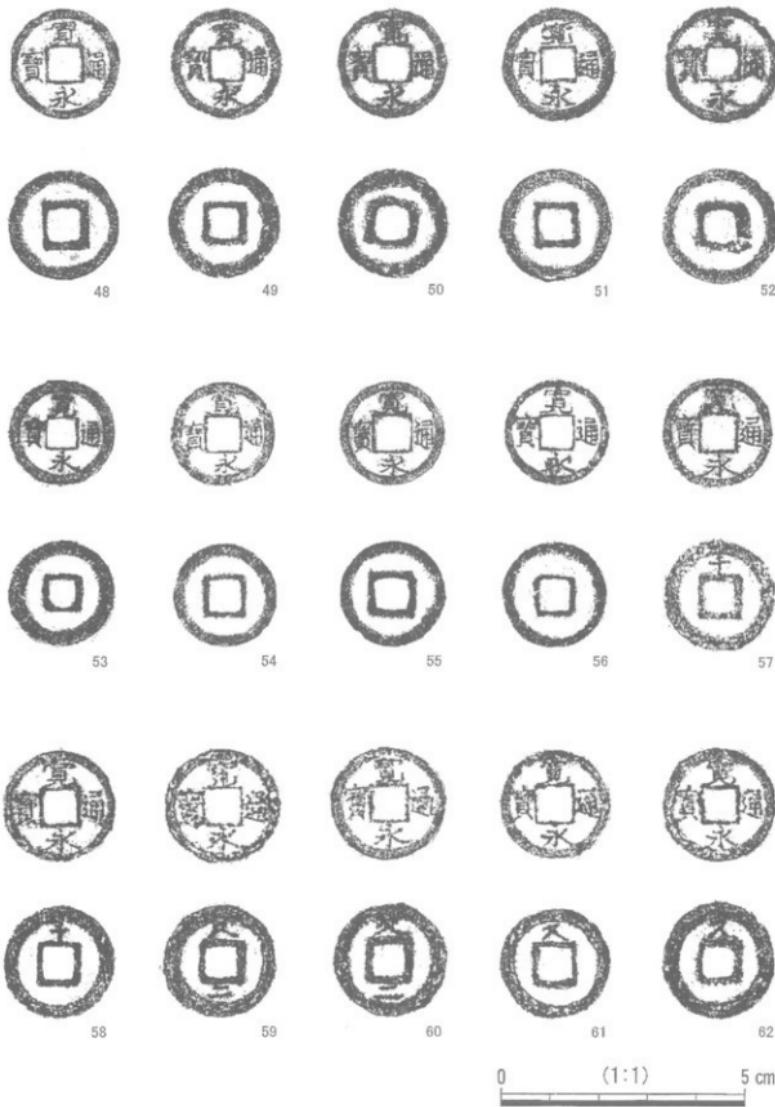
46



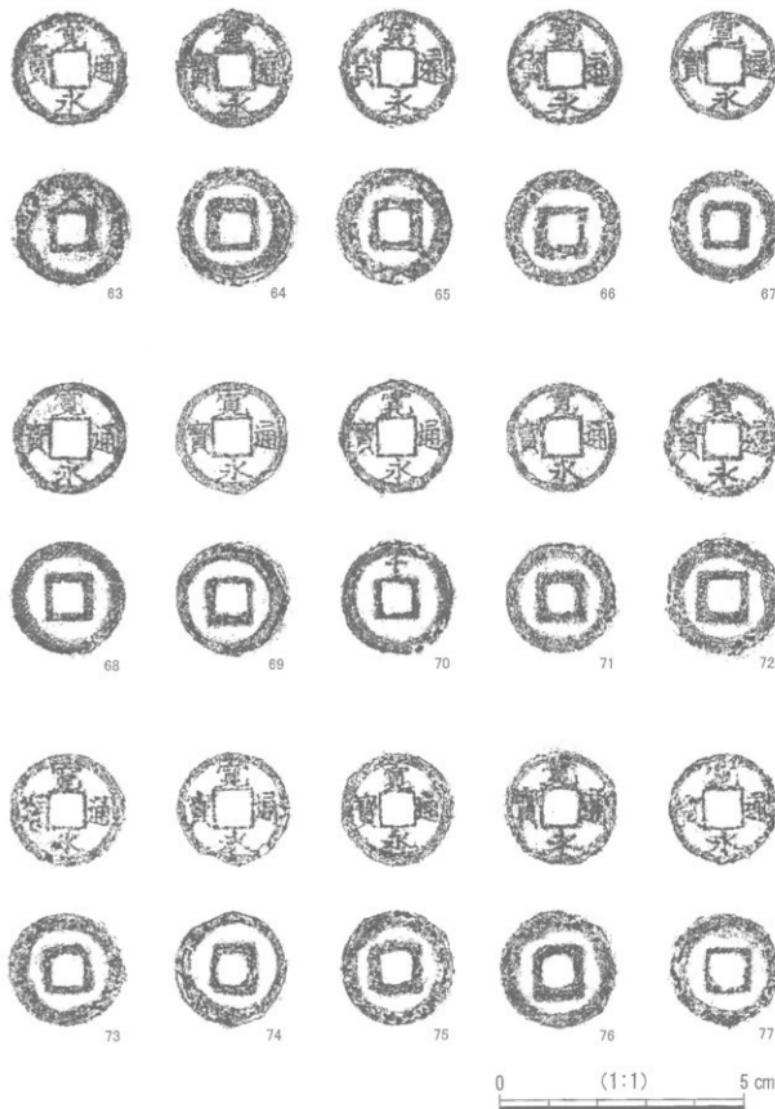
47

0 (1:1) 5 cm

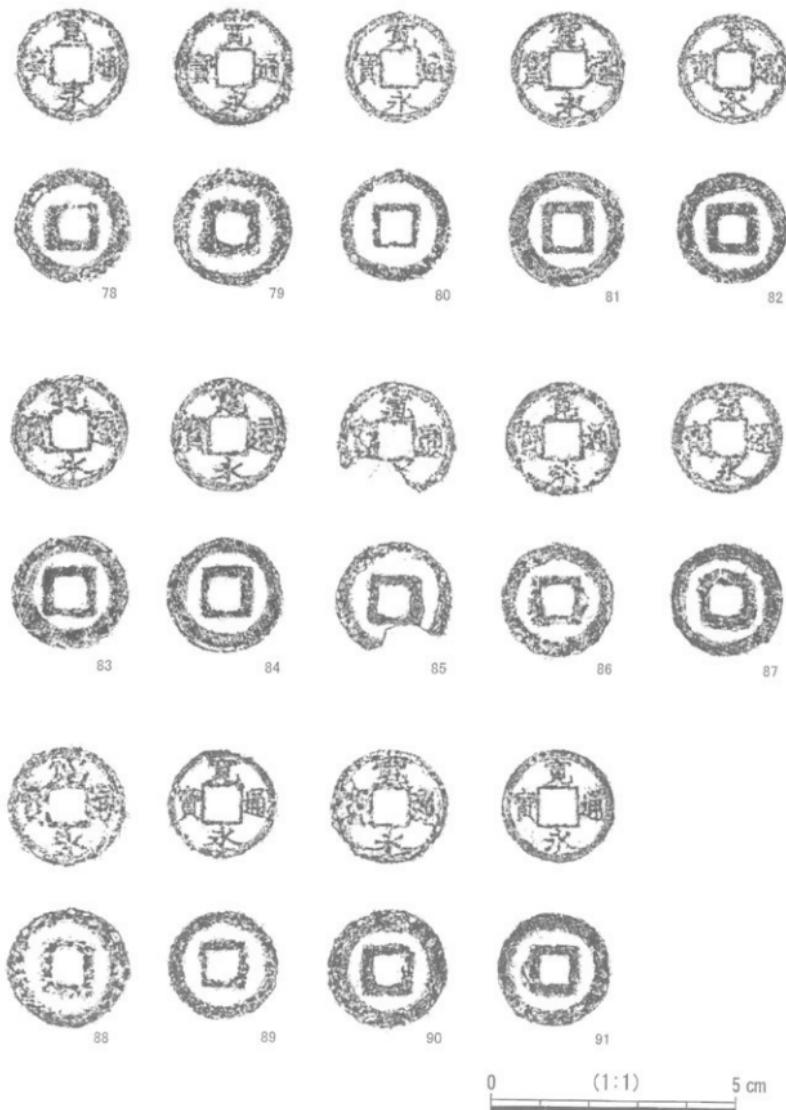
第128図 出土銭貨拓影（3）



第129図 出土錢貨拓影（4）



第130図 出土錢貨拓影（5）



第131図 出土銭貨拓影（6）



## 第4節　まとめ

今回の調査では、6基の小穴と土師器と灰釉陶器の破片が7点確認されたに過ぎない。今回の調査成果からでは、遺跡を評価する材料に欠くため、都田地区周辺の状況を含めて若干の検討を加えるに留めたい。

### 大平遺跡について

都田地区において遺跡が集中するのは、本遺跡より1.5kmほど南西に位置する、都田川流域の地域である。この地域では、都田川が形成した自然堤防状に、椿野遺跡や川の前遺跡、安六遺跡、貴見寺東遺跡など、弥生時代以降に多くの遺跡が展開する。

三方原台地上では、本遺跡から南へ2.5kmほどに位置する「都田テクノポリス」一帯で、遺跡が確認されている。沢上I遺跡や沢上IV遺跡、前平III遺跡などでは、堅穴住居や掘立柱建物を中心とした、古墳時代後期の集落が発見されている。しかし、いずれの遺跡においても、奈良時代以降は遺物の出土量が少なく、土坑や小穴などが散漫に認められる程度となっている。

大平遺跡における遺構のあり方は、三方原台地上における古代の遺跡と共通した様相を呈している。いずれの遺跡でも、検出された小穴はいずれも小規模であり、これらは仮設的な建物の柱穴と推測される。また、遺構の分布も散漫で切り合いもほとんど見られないことから、継続的に営まれた集落とは考え難い。三方原台地上の他の遺跡と同様に、大平遺跡は、拠点となる集落から離れ、仮設的な建物が建てられた場所であったとみてよいであろう。大平遺跡では検出されていないが、三方原台地上の古代以降の多くの遺跡では、炭焼窯と推測される遺構が多数確認されている。仮設的な建物としては、炭焼小屋のような作業施設を想定することも可能であろう。

### 出土銭貨について

大平遺跡で発見された遺物の大半を占めるのは、確認調査の際に採取された銭貨である。銭貨は合計84枚で、元豊通宝1枚を除き、83枚が寛永通宝である。寛永通宝の構成も多様で、古寛永4枚、新寛永44枚、鉄銭35枚となっている。鉄銭のなかには、新寛永と錯着したものも12枚確認されている。多量の鉄銭を含む寛永通宝の一括資料は、周辺地域で出土例がなく、貴重な発見といえる。残念なことに発見時の状況についての詳細な記録がないため、その性格については不明とせざるを得ないが、元豊通宝から鉄銭までと年代の幅が広く、地表面付近で採取されていることからすると、祠などへの奉納銭であった可能性も想定される。

### 参考文献

日本銀行調査局編『国語日本の貨幣』2』1973 東洋経済新報社

浜松市・浜松市教育委員会・(財)浜松市文化協会『都田地区発掘調査報告書 下巻』1990

静岡県教育委員会・(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所『椿野遺跡』1993

(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所『祝田遺跡』1994

龍澤武雄・西脇康嗣『日本史小百科 貨幣』1999 家京堂出版

浜北市『浜北市史 資料編 原始・古代・中世』2004

(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所『井田遺跡 本文編1』2007

# 写真図版

---

# 図版目次

- 卷頭図版 1  
　　縦穴住居 S B 1002 出土上器
- 卷頭図版 2  
　　浜松工区遠景（東から）
- [浜松工区]
- 図版 1 1 浜松工区遠景（南から）  
　　2 浜松工区遠景（東から）
- [大門西遺跡]
- 図版 2 大門西遺跡調査区全景
- 図版 3 1 大門西遺跡遠景  
　　2 1区の縦穴住居と掘立柱建物
- 図版 4 1 縦穴住居 S B 1001  
　　2 縦穴住居 S B 1002
- 図版 5 1 縦穴住居 S B 1003  
　　2 縦穴住居 S B 1004
- 図版 6 1 縦穴住居 S B 1005  
　　2 掘立柱建物 S H 1001・1002
- 図版 7 1 2区の縦穴住居  
　　2 2区の掘立柱建物
- 図版 8 1 縦穴住居 S B 2002  
　　2 S B 2002 カマド内遺物出土状況
- 図版 9 1 土坑 S F 1001 遺物出土状況  
　　2 土坑墓 S X 2014 遺物出土状況
- 図版 10 1 井戸 S E 1001  
　　2 井戸 S E 4001
- 図版 11 1 5区北側の掘立柱建物・小穴  
　　2 5区南側の土坑・小穴
- 図版 12 S B 1002 床面出土遺物
- 図版 13 S B 1002 埋土出土遺物  
　　S B 2002 床面出土遺物
- 図版 14 S B 1001・1003・1004 出土遺物  
　　S B 2001 出土遺物
- 図版 15 S B 1003 出土遺物
- 図版 16 土坑 S F 2020 出土遺物  
　　S X 1001 出土遺物  
　　S X 3001 出土遺物  
　　包含層出土遺物
- 図版 17 小穴 S P 出土遺物  
　　土坑 S F 出土遺物
- 図版 18 井戸 S E 4001 出土遺物
- 図版 19 土坑墓 S X 2014 出土遺物  
　　渥美産蓮弁文壺（搅乱出土）  
　　青磁（包含層・搅乱出土）
- 図版 20 包含層・搅乱出土遺物（古代）  
　　包含層・搅乱出土遺物（中・近世）
- [大平遺跡]
- 図版 21 1 大平遺跡全景  
　　2 大平遺跡出土遺物
- 図版 22 大平遺跡出土錢貨

# 図版 1

第二東名浜松工区



1 浜松工区遠景（南から）



2 浜松工区遠景（東から）

## 図版2

### 大門西遺跡



大門西遺跡 調査区全景（合成写真）

### 図版3

大門西遺跡



1 大門西遺跡遠景（東から）



2 1区の竪穴住居と掘立柱建物（南東から）

## 図版 4

### 大門西遺跡



1 積穴住居 S B 1001 (西から)



2 積穴住居 S B 1002 (南から)

図版 5

大門西遺跡



1 竪穴住居 SB 1003 (南から)



2 竪穴住居 SB 1004 (西から)

## 図版 6

大門西遺跡



1 竪穴住居 S B 1005 (南から)



2 掘立柱建物 S H 1001・1002 (西から)

## 図版 7

大門西遺跡



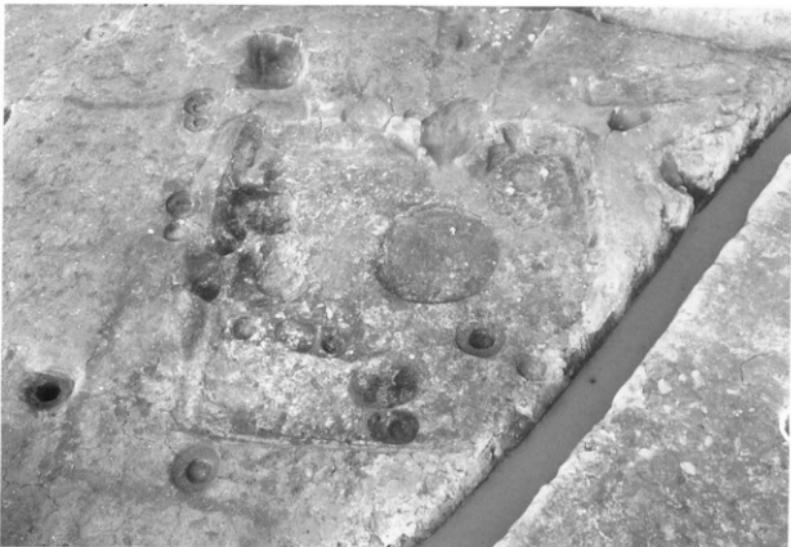
1 2区の堅穴住居（東から）



2 2区の掘立柱建物（南から）

## 図版 8

大門西遺跡



1 積穴住居 S B 2002 〔南から〕



2 S B 2002 カマド内遺物出土状況

図版 9

大門西遺跡



1 土坑S F 1001 遺物出土状況（西から）



2 土坑墓S X 2014 遺物出土状況（東から）

# 図版 10

大門西遺跡



1 井戸 S E 1001 (西から)



2 井戸 S E 4001

(東から)

図版 11

大門西遺跡



1 5区北側の掘立柱建物・小穴（西から）



2 5区南側の土坑（北東から）

## 図版 12

大門西遺跡



9



10



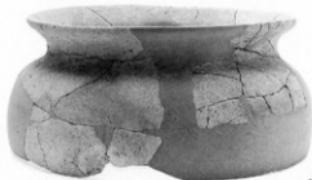
12



15



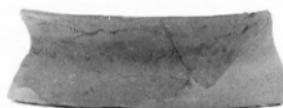
11



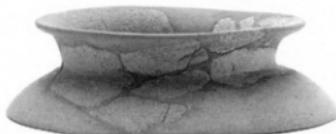
16



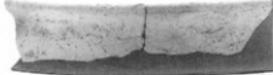
20



23



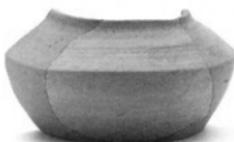
24



38

図版 13

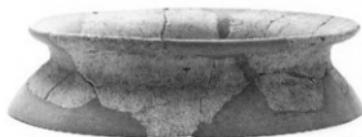
大門西遺跡



30



49



39



35

S B 1002 埋土出土遺物



70



71



69



75

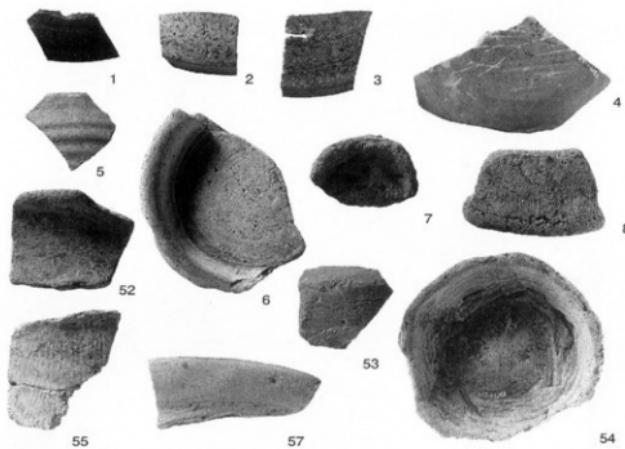


74

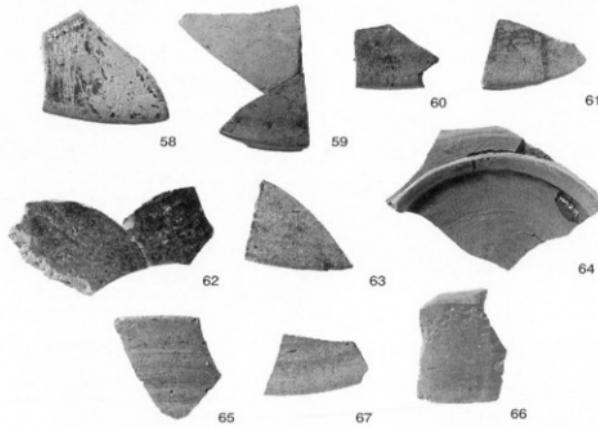
S B 2002 床面出土遺物

# 図版 14

## 大門西遺跡



S B 1001・1003・1004 出土遺物



S B 2001 出土遺物

図版 15  
大門西遺跡



56

S B 1003 出土須恵器



96

S H 2006 出土遺物



101



104

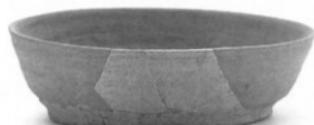


107



108

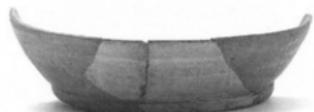
S F 1001 出土遺物



118



113



115

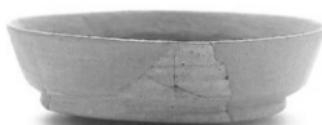
S F 1020 出土遺物

# 図版 16

大門西遺跡



154



137



148



161



151

S X 1001 出土遺物



155

S X 3001 出土遺物



131

S F 2020 出土遺物



183

包含層出土遺物 (古代)



180

図版 17  
大門西遺跡



197



204



211



212

S P 出土遺物



215



228



223



224



225



219

S F 出土遺物

図版 18

大門西遺跡



237



238



233



250

S E 4001 出土遺物

# 図版 19

大門西遺跡



266



267



270



271



272



273

274



275



268



269

S X 2014 出土遺物



331



332



302



304



303



284

渥美産蓮弁文壺（擾乱出土）

青磁（包含層・擾乱出土）

## 図版 20

大門西遺跡



1 包含層・搅乱出土遺物（古代）



2 包含層・搅乱出土遺物（中・近世）

図版 21

大平遺跡



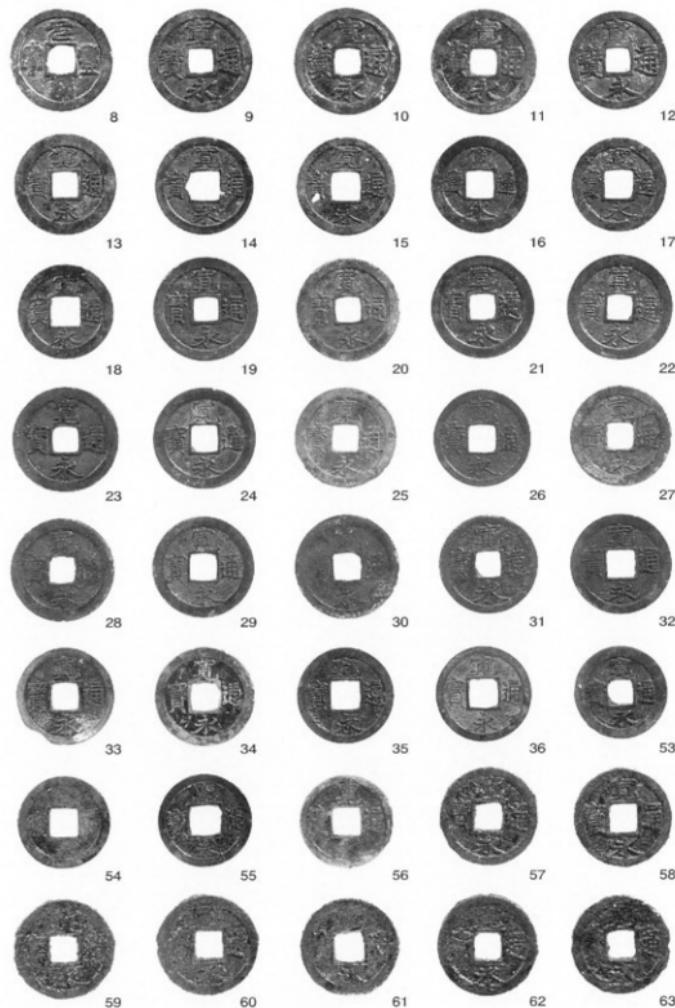
1 大平遺跡遠景（北東から）



2 大平遺跡出土遺物（土器・陶器）

# 図版 22

大平遺跡



大平遺跡出土錢貨

# 報告書抄録

ふりがな	だいもんにしいせき・おいだいらいせき
収名	大門西遺跡・大平遺跡
調査名	第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
卷次	浜松市 - 1
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告
シリーズ番号	第185集
著者名	武田亮生／及川司／足立順司
編集機関	財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
所在地	〒422-8002 静岡県静岡市葵区谷田 23-20 TEL 054-262-4261 (代)
発行年月日	西暦 2008 年 3 月 28 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因			
		市町村	遺跡番号								
せいじんじ 大門西遺跡	しづかわいほんじまつし 静岡県浜松市			世界測地系		20030724 ~ 20040227	8,900 m <sup>2</sup>	第二東名建設事業			
	ひざきく むかた 浜北区根堅			34° 50' 20"	137° 47' 35"	20041102 ~ 20041214					
				日本測地系		20050405 ~ 20050615					
				34° 50' 08"	137° 47' 46"	20051017 ~ 20060313					
せいじんじ 大平遺跡	しづかわいほんじまつし 静岡県浜松市			世界測地系		20000927 ~ 20001110	945 m <sup>2</sup>				
	ひたくみやこだちよう 北区郡田町			34° 50' 29"	137° 44' 43"						
	みぎみやこだちよう 字郡田山			日本測地系							
				34° 50' 17"	137° 44' 54"						
所取遺跡名	種別	主な年代	主な遺構	主な遺物	特記事項						
大門西遺跡	集落	奈良時代	堅穴住居 7 側立柱建物 11 井戸 1 堅穴状造構 1 土坑 滑	土師器 須恵器 ミニチュア土器	段丘上に立地する集落						
		鎌倉～室町時代	掘立柱建物 9 土坑墓 1 井戸 4 土坑 滑	山茶碗 土師質土器 青磁 鋼器 錢貨							
大平遺跡	集落	奈良～平安時代	小穴 6	土師器 瓦和陶器 錢貨	三方原台地上の小規模遺跡						

要約	大門西遺跡は、奈良時代と中世に営まれた条作遺跡である。奈良時代の堅穴住居と掘立柱建物は確て替えを織り返しており、一定期間継続的に営まれた集落の様相がうかがえる。平安時代になると、遺構・遺物とともにごくわずかしか認められず、集落は急進に衰退している。中世には、開拓区の西側を中心に再び集落が形成され、掘立柱建物や井戸、土坑墓などが確認される。遺構としては明確ではないが、包囲層や擾乱等から近世の陶磁器も多数採取されている。大平遺跡は、遺構・遺物ともにわずかしか発見されなかつた。遺跡的に営まれた集落ではなく、古代にいくつかの仮設的な遺物が存在した程度であったと推測される。
----	---

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第185集

## 大門西遺跡・大平遺跡

第二東名Na130・139 地点

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

浜松市 - 1

平成20年3月28日

編集・発行 財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

〒422-8002 静岡県静岡市駿河区谷田23-20

TEL (054) 262-4261 (代)

FAX (054) 262-4266

印刷所

松本印刷株式会社

静岡県榛原郡吉田町片岡2210

TEL (0548) 32-0851

